日當御地參着仕候、此段申上候以上、
大留守居乃美權右衛門持參、
江戸へ贈致幕府へ報告、
大膳大夫嫡子長門守儀、去月二十八日京都着仕、學習院ゟ被二召出一、御用之趣傳奏議奏方ゟ申上候、此段申上候樣大膳大夫より申付越候、以上、
正月
名内
[redacted]
文久三年正月三日

○晉臘二十九日勘修寺家より命を傳るを以て、今巳剋世子參朝あり、先つ勘修寺家に抵り、時期を候して參す、鶴間に候す、至尊小御所へ出御、傳奏の卿誘ふて同所取合、廊下北側へ坐す、世子貫首へ接し禮謝す、而して太刀折紙を持し獻す、之を中段に備へ廟へ進み龍顏を奉レ拜、於二中段一御杯を賜、又取合、廊下に於て、特別の叡旨を以て御衣を拜賜す、畢て麝香の間に於て關白公へ謁し、又鶴の間に於て謝辭を陳て退く、勘修寺家へ至り拜謝し、關白殿及ひ傳議諸卿へ往て謝す、
攘夷勅諚に付、彼是國忠周旋、深御滿足、叡感之御事に候、尚亦爲二國家一盡力之儀、賴被二思召一候、仍以二別段之叡慮一賜二御衣之御古一候、蠻夷等之儀に付、自然出陣等も有レ之節者、直垂陣羽織之類に着用可レ有レ之由、御沙汰候事、
正月
是日德山侯隨從參朝あり、
抄錄（柏村氏之抄錄なり）
◎校者云原本此間前段と全く同文の御沙汰書を載す今省略す
御衣
一綾御下襲、
表白綾、紋小葵、裏附子金板引、
以上
二十六日

○正親町三條卿嫌疑あるを以て辭表を出す、又靑蓮院宮へも、道路之誹議あるを以て朝命あるに至る、暗忌實愛浴二聖恩一、嚴重之御役勤仕候段畏入候處、昨年久我入道以下御咎之節、不束之次第深恐縮、退役相願候得共、以二寬大之御沙汰一被二召留一、恐入候得共勤仕能在候處、去十三日以來所勞籠居、今以出仕之期も難レ計、不二容易一御用怱劇、日參等茂被二仰

出一候御時節、長々引籠居候段恐怖之至に付、辭表可二差出一哉心配罷在候折柄、昨曉門前投書有レ之、則別紙之通に候、右之通失二人望一居候而、此儘勤仕罷在候而者恐入候儀、人心茂不二居合一、遂汚二朝威一候にも到り、此上重疊恐懼之事に候間、辭役願之通、速に被二聞食一候樣仕度、猶又不二心付一賄賂不正に陷候儀茂有レ之候者、嚴科に被レ處候共聊遺念無レ之候、何卒以二御憐愍一願之通速に被二聞食一候樣、宜敷預二御沙汰一候也、
正月二十六日　實愛
坊城大納言殿
野宮宰相中將殿

右は同日彼卿雜掌縣勇記より、佐々木男也へ添書左の如し、

扨寡君事御役方之儀に付御匡輔被レ下、於二賤臣一重疊奉二感謝一候、然處一昨日は門前に投書有レ之、寡君不德之條々書載有レ之、誠に慙愧之外無二他事一候、實に賤臣共も不行屆之儀と、深く愧入候事に御座候、右に付寡君今般辭職之上表、別紙之通差出候事に御座候、兼々御盡力被レ下候御事故、僕より右之次第申入置候樣被レ命候、前後例文略、
正月二十六日　佐々木男也樣　縣勇記

○是時靑蓮院宮への投書、

恐ながら謹而奉二申上一候、近來御役人樣方御不德に因り、萬機の事日々姑息偸安之御處置に涉り、宇和島之邪說に御まとひ、攘夷之事を初め、萬事關東之處置に任せ、滯京之大名等者其國々へ歸候而も宜抔與之說、御唱への御方不レ少、甚敷に至り而者、野史太平記等之如き、大に名分を誤り候事に均しき說を御唱之御方も有レ之よし、不忠不孝無二此上一事、實に國賊と言へし、其上御築地內賄賂橫行等之說も有レ之、有志之士大に望を失ひ候、中山卿正親町三條卿等は先年久我家之反逆に御隨ひ、逆賊酒非若狹守等ゟ御內通被レ成候儀、衣冠之御身として奸賊に使令せられ候事、其本を二ツにするのみならす、不忠不德◎至極、實に御罪科ある御身、今日に至り、いまた御改心無レ之、表には正義を御唱へ、內實は因循之說御主張、賄賂等茂數多御受納相成候由、凡世に反覆程罪大なる者無レ之候、如レ此御方々廟

堂に被レ爲レ在候而者決而難二相成一、不日に屹度御退け可レ被レ遊、全體御新政之初に付、殿下樣はしめ、御役人樣方不レ及二申上一、御堂上方御一體、遠大之御志、深遠之御策略なく而者、決而一新難二相成一候、たとへ衣冠之御方といへとも、奸賊に使令せられ候而者、實に國家之蠹賊と云へし、就而者反覆之御方は、二公に限らす、速に御遠け、第一忠良之御方を御用ひ、言語を御開き、朝廷を御淸め被レ遊、今日より斷然果敢之御處置、非常之御新政、朝議確乎として御動なく、千載之御はかりこと屹度御定め可レ被レ遊候、申上候迄茂無レ之、幕威におそれ候ものの說に、決而御惑ひ無レ之樣伏而奉二願上一候、誠恐誠惶頓首敬白、

上包進藤豐後守殿

諸大夫中封之儘御披露

二十七日

○京都翠紅館東山本願寺別莊なり、會集人員、

肥後藩

住江甚兵衛　宮部鼎藏　佐々淳一郎

山田十郎　河上彦齋

土州藩

武市半平太　平井修次郎

對馬藩

多田莊藏　青木達右衛門

津和野藩

福羽文三郎

水戸藩

梶清次右衛門　下野隼次郎　金子勇次郎

山口德之進　住谷七之允　大胡聿藏

高畠孝藏　林五郎三郎　岡部藤助

大野謙助　西宮和三郎　川又才助

林長左衛門　赤須銀三

長藩

中村九郎　佐々木男也　久坂玄瑞

松島剛藏　寺島忠三郎

世子從士中より

神村齋宮　大和彌八郎　長嶺內藏太

志道聞多

此日世子郊遊、翠紅館近側を回歩ありし、俄然此席へ臨せられたり、

二月朔日

左之朝令下る、

近頃、無名之投書者、元來從二國忠正議(◎國忠義肝之イ)心底一相起候儀に候得共、却而人心可レ至二騷擾一候、殊に去月二十四日夜、關白殿、靑蓮院宮、前關白殿、其外兩役家に投書有レ之候、昨年十一月薩長士之三藩申立之(◎候儀も有レ之候次第に付、諸藩士に者右樣之儀致候者は、尤有レ之間敷候得共、何人之所作に候哉、收調有レ之度、關白殿被レ命候事、

但被レ塞二言路一候には無レ之候、以來致二告訴一度儀も有レ之候は丶、書二姓名一其筋へ可二申出一候、其上御採用有無者、朝廷之御處置に可レ在レ之候事、

重役一人を學習院へ召す、今日辰の刻毛利登人出仕し、此令書を下授す、

二十日

○世子建言書を關白殿へ持し上る、

今般非常之宸斷を以て、倒海の大寇を摧攘(◎除イ)し、皇國之武威を八蠻に御輝し被レ爲レ遊度思召に付ては、必竟御親征をも不レ被レ爲(◎なしイ)レ遊ては不二相叶一御時勢と奉二恐察一候、癸丑以來度々伊勢、加茂、石淸水へ、攘夷安民之御祈願被レ爲レ遊候事に候得者、(◎共イ)此度攘夷期限御決定に相成候上は、(◎期限御決謀に付イ)早早奉幣使御發遣有二御座一度、(◎有レ之度イ)就中加茂神社は、御間近き所柄に候得者、非常之御破格を以て御社參被レ爲レ遊、且泉涌寺へも御參詣(◎泉涌寺之御參詣をもイ)被レ爲レ遊、御代々樣之叡靈に御報告無二御座一(◎無レ之イ)ては不二相濟一(◎叶イ)儀と奉レ存候、是儀は大堰、嵐山等之行幸之類にも無二御座一、(◎無レ之イ)未曾有之大恥辱を被レ爲レ雪、皇國を堅磐に被レ爲レ固度、御孝敬之御至誠、四海に顯赫被レ爲レ在度、所謂天行健と申儀と奉レ存候、加茂泉涌寺之御參詣は、即御親征御巡狩之御基本(◎なしイにも可レ有二御座一、(◎可レ有レ之イ)草莽之者共、鳳輦翠華之御餘光を奉レ仰候得は、いか計か感激奮興可レ仕、攘夷之御大業自レ是して相立可レ申哉と、不レ堪二嘆(◎嗟イ)願之至一奉レ存候、

廿七日

○學習院に於て、姉小路等諸卿、一橋卿越老侯へ接し、御親兵處置し難き理由ありやと詰問す、一橋以下答ふ、列藩にて彌情願に出る事なれは障りあるへか

らすと、因て之を關白殿に告く、殿下謂、如レ是答辭あらは、卿等より重て督責して可レ然とのことなれは、明朝に至りて尚ほ責問すへしと退く由聞ゆ、京邸日記

三月朔日

○伊藤俊輔、吉村虎太郎、江戸浪士嶌首清川八郎へ往き談す、御親兵の周旋を依頼す、八郎諾レ之、一橋卿へ建白して成否を報道すへしと約レ之、

五日

○夕、將軍之命を以て、一橋卿參朝して拜謁を奏請、先年來違勅之條件、且和宮降嫁處置の不條理、掃部頭若狹守等か奉職の無狀にて譴責せし事陳上し、其他種種前罪を謝し、因て攘夷之事は將軍へ委任あらせられたく哀奏せられけれは、漸く叡慮も釋し允許ありて、橋卿は翌朝退朝あり、是時中川宮、關白殿、及諸卿陪列ありと聞ゆ、京邸日記

○伊藤俊輔水藩人二十九人を伴ひ上着し、豐後屋へ駐す、

水戸侯今日着あれとも、◎水戸侯著云々は誤右人員か願請するは、いまた許允あらすと聞く、

吉成恒次郎　林忠左衛門　鳥居幾之助

芹澤又右衛門　服部悌三郎　根本新平
芹澤助次郎　同龜三郎　榊幾次郎
金子芳四郎　黒澤忠之進　菅谷八次郎
小河吉三郎

以上士

宮本主馬之介此人横濱にて夷人を斬殺す

鯉淵右京　栗田源左衛門　海老澤孫次郎
和智惣次郎　大越忠之進　小林幸八
下野清助　鯉淵直右衛門　大森丑之介
岩谷敬一郎　中野仲加固次郎八
同庄介經助理介

十三日

○過日朝廷へ窺書を上りしに、付箋を以て勅答あり、今日一藩◎般へ頒告す、

舊冬勅諚を以被二仰出一候攘夷之趣、將軍家最早御請に相成候處、追々御衰內も有レ之、期限何月と御一決に相成候儀に御座候哉、奉レ伺候、付箋に四月中旬御決定之事

十八日

○星野久民より小幡彦七に報し道ふ、明十九日の將軍參朝は止みたり、事情は知らされとも、昨夜十七日、一橋以下閣老等參朝し、退て又二條城に往き、紀水兩侯も俄に上城し論議あり、九ツ時比退去、閣老之退きしは今曉に到りし由、而して今日又一橋を始め閣老參朝ありたれは、此後の參朝、賜暇之事も決すへしやと思はる、又小笠原侯は、昨夜大坂より俄に還り登營あり、平常ならさる事ならんかと思はるゝと、

○京都曙亭にて列藩會議人員、

此會は對人會主にて、各員意見書を來る二十三日に持し集るとの約なりと、乃美織江か書翰に見ゆ、

加州　福岡　文平　小川　幸三　高木　守衛
備後福山大森權兵衛　岡田　求人　近藤　求馬
濱野　章吉　田邊昌六郎
津　深井半右衛門　戸波明次郎　茨木武次郎
藤井　鼎助
尾州　蒲　五兵衛　久野　良藏
犬山　本多彦三郎　八木銀次郎
筑前　喜多岡勇平　帆足彌次兵衛　待井治郎兵衛
桑名　三宅彌次衛門　岩尾　忠治　堀江庸右衛門
松平登岐守內　兒玉儀左衛門　多故武五郎
備前　江見陽之進　成田太郎兵衛　河合源太夫
水戸　原　市之進
津和野　神野　務
丸龜　土肥　七介
因州　河毛　文藏　山部　隼太　安達清一郎
土肥　謙藏　伊王野平六　沖　探三
對州　原田寬一郎　安達土肥之助　多田　莊藏
平田　大江　樋口鐵四郎

十九日

○尾州水戸より、將軍滯京の事を頻りに周旋する由を聞く、

二十二日

○攝海戰守御備

一大坂御城外曲輪御舊復、淀川筋を御城內に取込み、豐公之規模、一陪豁大に相成候樣に被二仰付一、四面共砲臺築造、大砲數十門御備置之事、

一近江、美濃、丹波、其外海岸無レ之國々之人數、不レ殘大坂に出張可レ被二仰付一候事、

一尼ヶ崎、岸和田兩城は坂城羽翼に付、有掛之城より外に押廻し、新規に壕をほり、礮臺を築き、都合

坂城之規制にならひ、攝州之人數は尼ケ崎、泉州之人數は岸和田ゟ籠城之事、

一八幡山崎ゟ堡塞御取建之事、

一堺ゟ大砲二三百門掛りの砲臺急に御築かせ、和州之人數出張可レ被二仰付一事、

一和田岬ゟ八稜城を築かせ、海岸無レ之國より人數出張可レ被二仰付一候事、

一安治川木津川筋川口より、山崎八幡之堡塞まで、砲臺連續に築造可レ被二仰付一候事、

一兵庫、堺之町人共、急に京都ゟ妻子引連立退候樣御沙汰之事、

一紀州、阿州、淡路、三ケ所ゟ、堂上方御一人宛御下向、右家々之守備御見分、委細圖面を以可レ被レ達二叡聞一候事、

一沿海之國々、土着之士民を以、其地利に據り戰守之策を建候て、奔命に勞れさる樣可レ被二仰付一候事、

一兵庫、堺、其外船掛り之宜き湊にも、軍艦を繫置候樣可レ被二仰付一候事、

一將軍御歸府候而は、神州腹心之京都空虛に相成、御備は決而相立不レ申候、是誠神州妥急存亡之境に付、今一應朝議被レ爲レ在候樣、志士一統奉二懇願一候、尾紀水三家之內滯京候共、萬端之號令、將軍家御同樣には決而行屆兼可レ申と奉レ考、神州之御爲獻言仕儀に御座候付、何卒被二聞食分一可レ被レ下候、以上、

癸亥三月二十二日

前書建白して直に桂小五郎兵庫の牙營に馳せ往き、世子に報申す如レ左、世子の覽を經て國へ贈り、公へ上申す、

右將軍急に御歸府之沙汰有レ之候付、不レ得レ止兼々御持論之旨、私共申談し書付相調、學習院へ淸太郎、關白殿ゟ小五郎、中川宮へ男也、三條殿へ忠三郎、姉小路殿ゟ德輔持參、今日者總御參內に付、右五通共直に御銘々より、御所ゟ御差出に相成候間、此段被レ及二御聞一可レ被レ下候、

靱負
淸太郎
彥七
政之助
次郎三郎

又兵衛
小五郎
德輔
宗右衛門
男也
忠三郎
直八
彌次郎

二十四日

○昨夜高杉晉作へ姉小路卿より、縞に處置の條件を謀らる、今朝逐件へ意見を注上す、其深意は亦口演に付す、

一夷狄擾攘之期限之事、

四月中旬と申事に付、其通にて可レ然候、

一攝海防禦之事、

一昨二十二日建言之通、

一內衞外衞之事、

外は大內裏の時の通り、鈴鹿其外之關と攝海なり、內は京の七口なり、又內は親兵ならん歟、

一御親兵之事、

但食祿高之事、

一人別五人扶持宛、一ケ月金五兩宛、

我長藩にては三十七人分

左之通

一米三百三十三石、

但一人扶持一石八斗宛にして、百八十五人扶持分、一ッ書之通、

一金貳千貳百貳兩、

右之通年々朝廷ゟ獻上、從二朝廷一選士銘々ゟ可レ被二立下一候樣にと可レ被二仰立一哉、

一諸侯交代之事、

沿海列侯は歸國、京都者親兵幷五畿之兵を以守レ之、

一孤島防禦之事、

對州、壹岐、其外は捨レ之、

隱岐、佐渡ゟは戍兵を置へし、

一若丹防禦之事、

勢の鈴鹿、濃の不破、越の愛發、之に準する所若丹にあるへし、

二十七日

○於二學習院一、坊城大納言、長谷三位兩卿より、一橋卿へ勅書を授く、

先年來攘夷之儀被二仰出一、於二幕府一茂奉命有レ之候得共、今以實備難二相立一、追々時勢切迫之折柄故、隔意有レ之候而者、至要之御基本難二相立一、深被レ惱二宸襟一候間、實備相立、人心一和、奉レ安二叡慮一候樣、可レ有二周旋一被二仰出一候事、

武田耕雲齋におゐても、前書之御趣意致二貫徹一候樣、精々扶助可二申付一御沙汰候事、

四月十七日

世子周旋を以て、一條寺村曼珠院の宮の別殿を借りて閑宴を開き、宗對州侯、水戸徐四麻呂君、山内兵之介君、及ひ水戸老臣武田耕雲齋を招かる、徐四麻呂兵之介二君は、事故ありて謝レ之、朝飯後筵を開き、閑談夜に及ひ、世子五時に河原街へ歸る、

此宴を開かるゝは、世子の徹意あらせらるゝ事なり、一條寺村は地勢高陽爽塏にて、四明の嶽を負ひ、洛の中外、大坂地方までも一見瞭然たれは、建言ありし大學校適當の地形と、且萬一も都下不虞の事あらん時は、學校は即ち鳳輦駐留の設にも成せらるへしと諭認ありて、有名侯伯及ひ國老の意見を請ひ玉はん爲なり、

五月二十九日

○兩傳奏より布令あり、

松平修理大夫殿、先日來乾御門御守衛被二仰付置一候處、今日より御守衛被レ免候旨相達候、就而者御守衛人數之詰所、假固屋、無レ程取拂可レ有レ之候間、右取拂候者、薩州人九口御門內往返無レ之樣可レ被レ致候、

又令す、

松平出羽守殿、今日より乾御門御守衛被レ蒙レ仰候、

七月十四日

○薩藩上京の事、水戸、肥後、其他の諸藩士二十八人、轟木武兵衛か居所に集り、いつれも上京は不服にて、持論一定して獻言すへしと決す、我よりは佐々木男也出る、

十八日

○巳刻、監物君及ひ彈正、上總、清太郎、關白殿へ參す、議奏德大寺中納言、長谷三位、傳奏野宮宰相中將、參政烏丸侍從參集あり、公の建言中御親征の一事を、

監物君開口し、彈正、上總、清太郎、細かに之を陳述す、關白殿告て曰く、此年來の叡旨もあらせられ、方今朝議もあらせらるゝ事條適當は不レ待レ言れとも、因州建議の趣もあり、實に重大之舉なれは、容易に決論に及ひ難しと、野宮卿も同し論旨を示さる、於レ是彈正等論述す、宰相父子の深意にては、此盛典擧らされは、皇道の興隆も成し難からんと、微誠の忠策此外に出すと建白し奉るなれは、若し徹上あらせられすは、忠志も空しく爲りて、恐懼迷錯仕るへし、斯意を亮察あらせられ、一旦叡聞に達し玉、さらは何とか宸斷も在らせらるへし、賤臣等謹て御告諭を待ち奉ると、因て關白殿、四卿と共に直に參內ありて、暮六時に及ひ退朝あらせられ、長谷卿出座、監物君以下を召させられて、宰相父子忠言之旨趣は、御滿悅被二思召一る、然るに此事重大之舉なれは、諸臣集議の後ならては宸斷に及せられ難し、監物以下へ密に諭すへしとの懇諭あり、監物君退出、參朝の諸卿へ謁、勞を謝す、

八月二日

○因侯今日監物君右衞門介を引見あるへしと、昨日彼臣安達清一郎より達しけれは、右衞門介、九郎、義助、先つ小松谷へ聚り擬議して、四半時本國寺の越館に往く、因侯へ備、阿二侯も列して、監物、右衞門介へ接見す、監物唱へて右衞門介綴て詳說す、阿侯問ふ、遷幸行幸いつれなりやと、因侯問ふ、八幡にて軍議は如何なる事やと、其他種々論駁あり、終に三侯は御親征の事異論ありと察す、議半はにして、水戸徐四郎麻呂公子は病を稱して引去る、又、九郎、義助陪席を願ひしに、他日に付すへしとて、家老荒尾千葉之助を以て謝拒す、

五日

○德田隼人、昨夜三條家に於て、水戸以下の三藩士と、小倉の事を大議論に及ひしと來話す、

六日

○九郎、義助、男也水藩の原市之進を訪ふ、談數時に及ふ、再會を約して歸る、

十二日

○右衞門介、上總、關白殿へ出て、建言の行否如何を候す、公私かに諭す、公建言の旨徹上し、石清水出御の聖旨を伺ひしに、格外の宸斷を以て、大和行幸、神武の御陵、春日社を拜せられ、暫く駐輦あらせられ、

御親征の軍議を爲せられ、又神宮の拜をも爲せらるゝへしとの聖旨決定したり、長州父子建白の忠誠貫徹し、欣喜の狀を想像す、明日は吉川以下を召して告諭すへし、親戚の藩なれは密に報知すとなり、

京都諸事控學習院一件拔萃兼重慎一筆記

文久三年六月

攘夷拒絕之期限於二一定一者、闔國之人民戮力可レ勵二忠誠一者勿論之儀候、先年來有志之輩、以二誠忠報國之純忠一致二周旋一候儀、叡感不レ斜候、依レ之猶又被レ仰二開言路一、雖二草莽微賤之言一達二叡聞一、忠告至當之論、不二論沒塞一樣與之深重之思召候間、各不レ憚二忠言一、學習院ゟ參上、御用掛之人々ゟ可二揚言一被二仰出一候間、亂雜之儀無レ之樣相心得、可二申出一候事、

一連日從二巳刻一限二申刻一、於二九之日二十六日一者、自二午刻一限二申刻一

同日殿下より御演達之分御書取、御筆頭ゟ御渡被レ成御順達相成候分同斷、

二十三日の條

一中川宮樣御家來山田勘解由、伊丹藏人事、湊川楠公墓ゟ御代參與申唱に而、實者薩州ゟ罷下、既に今晚發足致候と申巷說起り、姉小路樣一條に付而者、薩藩兩人御不審懸り、御召捕に茂相成居候事、旁右兩人之儀、於二朝廷一も甚御不審被二思召一、肥後藩、其外姉小路樣一條御調之一件、御用懸り之面々も御不審御尤に相考、宮部鼎藏、轟木武兵衛能越申談候趣有レ之、早速爲二探索一浮田八郎宮樣御殿ゟ差出見候處、山田事馬上にて出立致候に、二條殿見出逢候由、乍レ爾右御代參之唱にて、外に不審之廉も無レ之、彼是評論仕候得共、既夕景にも及ひ、右發足之樣子に相知れ、肝要之御代參御用、夜中出立も如何敷、旁肥後藩首議にて召捕に一決致し、山田宅ゟ押懸、伊丹も居合候付、御不審有レ之候趣申聞、兩人共召捕、家內書類等不レ殘封緘致し、本能寺迄連歸、此御方よりは佐々木男也一人立會、本能寺嚴重番致候事、

二十四日

一山田勘解由、伊丹藏人事、町奉行ゟ引渡被二仰付一候付、左之通御沙汰成る、

青門家來山田勘解由、伊丹藏人兩人ゟ御尋之趣有レ之候付、昨夜段々及二御懸合一、其後町奉行組之者差出、若他國にて途中にても、差留可レ申旨被二申聞一致二承知一候、然處其間合無レ之發足仕懸候付、兼て被二仰付置一候御守衛諸藩之輩被二差出一差留、今曉本能寺中へ引取、右兩人共嚴敷御守手當罷在候に付、町奉行へ右兩人引渡、御預可レ被二仰付一候、尤此一條に限り御守衛之藩士、

次第不レ同

水府家來

肥後同

長州同

土州同

久留米同

姬路同

右之輩より御請取、早々召連被レ歸候樣、尤切棒懸二挺用意可レ有レ之、且又此度に限り御守衛人數も、町奉行並組與力等申談、可レ被二取計一候、猶追々御沙汰之次第可レ有レ之、此段相達置候事、

六月二十四日

追而今日申剋迄に右兩人被二引取一候樣、御取計可レ有レ之候事、

右之趣町奉行ゟ、附武家を以御達に相成候間、可レ被レ得二其意一候事、

水戶、肥後、長州、土州、久留米、姬路、御守衛中

右野宮殿より被二相渡一、

右之通御沙汰相成候處、兩人御不審之趣、確證有レ之事にても無レ之、第一宮樣御家來之儀に候得は、自然と御身上へも、世間の疑を御受被レ成候樣にも可二立至一哉、彌慥成御不審筋にも候得は、少も不レ及二御遠慮一、乱方被二仰付一候て可レ然之處、不レ慥事とは御先方彼是用捨仕度義と、段々詳論仕候得共、既に前段之通、御沙汰も相發し候事に、今晚町奉行所ゟ之御引渡なけは、此御方よりも守護人被二差出一候ても可レ然と評議相決、佐々木、寺島ゟ、浪士久保無二三一其外差添被二差出一候事、

一右兩人御調らへ之儀、前後評議之趣も有レ之、久留米藩同樣に付、眞木和泉守、桂小五郎同道、轉法輪樣ゟ能出、御斷申上置候事、

亥十月十五日

今度被二尋仰一度義有レ之、大樹上洛被二仰出一、留守中自然横濱鎖港談判相弛候而者不レ宜被二思食一候間、可レ然者ゟ致二委任一、鎖港之成功有レ之様被二仰出一候事、

十月◎校者云北原雅長手記には十三日の事と爲す。

過日横濱鎖港取懸之旨言上に付、委曲被二聞食一度之間、一橋中納言可レ有二登京一被二仰出一有レ之候得とも、猶又大樹にも被二尋仰一度思食候に付、引續早早上洛有レ之様被レ遊度旨、御沙汰候事、

十月◎校者云京都守護職始末には十一日の事と爲す

最過日御沙汰之通、一橋中納言にも可レ有二上京一事、

慶應三年丁卯冬、老公御在國中、京師之形勢兎角不レ穩風聞に付、十月十三◎二カ日、御老中板倉伊賀守殿へ被レ遣御内書之要文如レ左、

一翰啓上仕候、寒冷之節御座候處、公方様益御機嫌能云々、中略然は風聞に而不レ慥義かは不レ存候へ共、大久保一藏歸京、土州後藤象二郎、神山左太衛等上京之由、留守居より申越候、私考候處に而は、象二郎被レ論之議事院を開き候を、朝幕へ醵士宇和島三藩より、厳敷建白仕候義歟と存候、私先達而上京中、伊達豫州より咄承り申候、大隅、伊豫共甚以不服に而、迚も方今不レ被レ行事と申聞候、私考は如何哉と伊豫申聞候故、論もなき事と答置申候、其後隅豫兩州より容堂へ書翰差遣し、元々象二郎論に而尤之事に候故、容堂之如き英敏、象二郎之如き才略、君臣合一に候はゝ格別、迚も豫隅等之力には不レ及と申遣候、尚容堂同意候はゝ、容堂自ら上京盡力可レ致事と被レ存候、と文面艸稿、則私一覽申候、象二郎は御承知之通西洋法を信し、議事院申立、是は忠直可レ咸候得共、象二郎忠直西洋法之論を借て、私説を恣にせんか爲、議事院を開かんとする覺も随分可レ有レ之哉候へは、若々其向々より朝廷へ議事院建白出候而も、輕率御採用被レ爲レ在候而は、天下之一大變動眼前に生し可レ申は勿論と、深く心痛仕候、象二郎は幸玄蕃頭殿懇意之事ゆへ、能々所存、玄蕃頭殿象二郎を被レ呼、詳悉尋問有レ之、右等之邊何となく教示有レ之候而は如何哉と心付申候、下略

陽月十二日　越前老逸拜

奉呈板相公玉几下

右之御次第有レ之處、翌十三日板倉殿より御内書御到來、如レ左、

一翰拜啓仕候、霜氣相增候處、公方様益御機嫌能云々、然は松平容堂より、家來後藤象二郎出京爲レ致、去る四日別紙寫之通建白書差出、即今切迫之形勢故、寸刻も早ふ御採用之有無相伺度と、切迫に申聞候へ共、當今御國内人氣形勢をも熟考致候得は、當節之御成行に而、必定平穩との見据も無レ之、容堂之論至當にも可レ有レ之、乍レ去只々御實行之所如何之ものか、御國體一變とは、重大之事件此上もなき義、何◎分脱カ御實行之利害得失如何と、深焦心苦慮之至に御座候、素◎より脱カ天朝御尊崇、皇國を御維持被レ遊候思召に而、御相續以來も、日々夜々御苦心被レ遊候御儀に御座候、然處一朝王政に被レ復、皇國必平穩、上は被レ安二宸襟一、下萬民安堵、萬歳を唱候様相成義等に候はゝ、上には御職掌は如何相成候とも、王政復古も御本意との、公明正大之尊慮に被レ爲レ在候、何分先之見据無レ之、容易に御決着も被レ遊兼、衆議を被レ盡候思召に御座候、依而貴君之御見込も十分御承知被レ遊度、從二拙子一申上候様被二仰付一候、篤と御熟考、御實慮之程無二御復藏一、早々可レ被二仰上一候、何れ容堂も上京被二仰付一候運ひにも可二相成一候、其節は貴君にも早々御上京可レ被レ成候、先は不二取敢一御家臣之内、早々上京候様可レ被レ成候、何分事情紙表には盡兼候、此段早々申上候、頓首、

十月十日　伊賀守

大藏大輔様

再白云々、御差出之御家臣は、雪江十之丞之内に候

得は別而宜敷、其邊も申上候樣御噂も被レ爲レ在候、不レ遠長州家老も上坂、三條始五人も上坂、其中へ英公使も上坂なとの薄々噂も有レ之、百事輻湊、殆困難を極、痛心之至御座候、出殿中別而亂亳、御判談可レ被レ下候、早々拜、

私云、別紙土州君臣建白、世間に流布する所ゆへ略レ之、

右に付即日急飛脚を被二差立一、御返書如レ左、

御密翰再三敬讀云々、陳者松平容堂より、家來後藤象二郎出京爲レ致、去る四日別紙之通建白書差出候義に付、御細書之趣逐一謹承仕候、右之次第は、傳聞以來甚懸念仕候義に付、默止兼、則昨日之鴻信に不レ料晤合仕候、扨上には、王政に被レ復、皇國必平穩、上は被レ安二宸襟一下萬民安堵、萬歲を唱候樣相成候得は、御職掌は如何相成候とも、王政復古も御本意との、公明正大之尊慮に被レ爲レ在候得共、先々之御見据無レ之而は、容易に御決着も被レ遊兼、衆議を被レ盡候思召之程、乍レ恐難レ有奉二感佩一候、右に付鄙意言上候樣被二仰下一奉レ畏候、此件に付而は、昨日之呈書にも粗陳述仕候通に而、私に於而は更に見込も付兼候事に御座候、畢竟王政復古と申儀、近年通議に而、尤之樣には相聞候得共、數百年前之舊制に而、御體裁之所も一向に相心得不レ申候、郡縣封建之差別を始、國體時勢之變遷も亦容壞之繇隔に相成候事故、二百餘年來、開闢以後地球上無比之太平を唱候御盛業、實近之輓跡を履ますして、泛乎たる王家之舊制に相復候義は、局量淺識之私輩に而は、更に根底も相立不レ申、不レ及二了見一義と素より相決候事候得は、容堂之書面、一應二應に而中中淵底致兼候得は、御採用相成候而も可レ然儀とは難二申上一候、議論之正大は如何にも如レ被二仰越一、御實踐に於て 睚と御手覺不レ被レ爲レ在義は、御採用難二相成一は御當然之御義と、御同意至極奉レ存候、乍レ併是は王政之御制度不案內に而、目途付兼候固陋寡力之偏見上より申上候事に而、決而完全具備之定見には無レ之候へは、申上候迄も無二御座一候得共、如レ此斷然として及二建議一候程之容堂之見込通り、朝野之人心にも、時運之體態にも、至當之事理にさへ有レ之候得は、速に御信聽御採用之思召を

以、懇々篤々御垂問御座候而、申上候次第實に至當至善之全策に而、御信用に相成候得は、急度治平之御見込御一定にも被レ爲レ在候はゝ、御公平に其儀に御從ひ、御變革可レ被レ遊は勿論之義と奉レ存候、其節に方り、固執之私議申立候所存は元より無レ之候、此上は何卒容堂使節之情意貫徹、遺憾無レ之處まて、御處懷を以御下問に相成候樣窃に奉二仰望一候、自然御扱振り之模樣により、事情を盡し不レ申以前に不滿を抱き、容堂始一藩之人心を御失ひ被レ遊候樣之事に相成候而は、此節柄御大事至極之御義と奉レ存候、象二郎一己丈け之建言は、則在京中薩宇より承知仕候而、其節は兩人とも申合候趣意は、昨便粗申上候通之事に而、庸劣之思慮には及なき事に相決候事にて、隅豫より容堂迄申越候次第、昨日は書狀寫見當り兼候故、主意而已及二拜啓一候得共、猶又搜索書面を得候故、是亦呈覽仕候、唯々恐案に而は、可レ言して不レ可レ行と申事に落申間敷歟と按勞仕候、何れ容堂上京被二仰付一候運ひにも相成候節は、私にも早々上京仕候樣拜承仕候、右は御下問に任せ有之儘及二言上一候、猶存寄候義も御座候はゝ、不日雪江十之丞兩人之內差上候間、其節可レ奉二申上一と奉レ存候、先は右急飛脚を以申上度、如レ此御座候、恐惶謹言、

十月十三日第五字　　御名

板倉伊賀守樣

二白、御端書云々、扨又差出候家來、雪江十之丞に候へは宜との御內諭拜承仕候、兩人之內不日登上申付候事に御座候、方今色々御多事、不二容易一御配慮之程、萬々恐察致候、書餘期二後日一候、早々、

右に付、何分不二容易一御次第共に候へは、委細之御樣子も御伺被レ成度、伊賀殿より御申越之義も有レ之、旁酒井十之丞へ上京之義被レ命レ之、

○同月十六日、去る十四日京都出立之早飛脚着、御用狀之內、

一昨十二日◎後文日付の週狀には十一日とあり大小御目付中より御廻狀到來に付、昨十二日◎三日朝、伊藤友四郎御城へ罷出候處、大廣間二之間へ諸藩士一同列座之上、板倉伊賀守殿、大目付戶川伊豆守殿、御目付設樂岩次郎殿御出席、別紙御書付拜見被二仰付一、銘々見込之義

も有レ之候はゝ、御直に御尋可レ被レ遊候間、無二腹藏一申上候樣被二仰聞一に付、何も奉レ畏段御請申上、畢而御老中代り伊豆守殿、再御同間へ御出席、友四郎御呼出、別紙御兩君樣へ之御封書一通御渡有レ之、御演說に而、當今不二容易一御時態、御直に御相談不レ被レ爲レ在候半而は難二相叶一儀有レ之候間、御兩君樣にも早々御上京被レ遊候樣、御封書之御請も、早速可レ被二仰上一旨被二仰聞一候、依レ之今晝立大早駈飛脚差立、右御封書幷拜見之御書付寫廻狀等差越候、此段御聽に御達、宜御取計可レ被レ成候、恐惶謹言、

十月十四日　　島津十大夫
　　伊藤友四郎

宇都宮勘解由殿
秋田長之丞殿

大小御目付御廻狀、

國家之大事見込御尋之義有レ之候間、詰合之重役、明後十三日四時二條御城へ可二罷出一候、尤重役詰合無レ之向は、國事に携候者可二罷出一候、此段申達候以上、

十月十一日　　設樂岩次郎
　　戸川伊豆守

御書付寫、

我皇國時運之沿革を觀るに、昔王綱紐を解て相家權を執り、保平之亂、政刑武門に移りてより、我祖宗に至り、更に寵眷を蒙り、二百餘年子孫相受、我其職を奉すといへとも、政刑當を失ふ不レ少、今日之形勢に至候も、畢竟薄德之所レ致、不レ堪二慚懼一候、況や當今外國之交際日に盛なるにより、愈朝權一途に不レ出候而は網紀難レ立候間、從來之蔀習を改め、權を朝廷に歸し、廣く天下之公議を盡し、聖斷を仰き、同心協力、共に皇國を保護せは、必す萬國と可二並立一、我か國家に所レ盡不レ過レ之候、乍レ去猶見込之義も候はゝ、聊不レ憚二忌諱一可二申聞一候、

十月

朝廷へ公方樣より之御建言書、

臣慶喜謹而皇國時運之沿革を考ふるに、昔王綱紐を解て（以下如レ前）云々、臣慶喜國家に所レ盡是に不レ過と奉レ存候、乍レ去見込之儀も有レ之候得は可二申聞一旨、諸侯へ相達置候、依レ之此段謹而奏聞仕候、以上、

十月十四日　　御實名

一、昨日布衣以上へ左之通御達有レ之、

今般上意之趣は、當今宇內之形勢を御洞察被レ遊候處、外國交通之道盛に開に至り、御政權二途に相分候而は、皇國之御紀綱難二相立一に付、永久之治安を被レ爲レ計候、遠大之御深慮より被二仰出一候御義に而、誠以奉二感佩一候、殊に從前之御過失を御一身に御引受、御溥德を被レ表、御政權朝廷へ御歸し被レ遊候御文言等、臣子之身分より奉レ窺候へは、何共以奉二恐入一涕泣之至候、就而は此上愈以御武備御充實に相成不レ申候而は、決而不二相成一義に付、各に於て聊氣弛み無レ之、前文之御趣意相貫、御武備相張候樣、一際奮發忠勤精々可レ被二申合一候、

十月

一、同時相廻る風聞書、

薩州小松帶刀、土州後藤象二郎、福岡藤次、藝州辻將曹等之藩士十人計居殘り相願ひ、上樣御上段に而御逢有レ之、言上之趣も被二聞召一、御英斷之御旨も被二仰聞一由、小松後藤等は格別之思召を感戴し、退座之上、猶御實効御貫徹之御次第相伺度と板倉殿へ申立、兎角之御樣子拜承仕候迄は、御城に相待居候との事の由、此節會藩野村左兵衛、秋月悌次郎等詰合、御政權御返上之御趣意、彼是及二論談一候得共、遂々小松後藤に說倒せられし由に候得共、其委細之主意は不レ詳候由、

○同月十八日、酒井十之丞京都表へ出立、

私云、京地不二容易一形勢に付而は、御定見無レ之御上京被レ遊候迚、御所詮も無レ之に付、其邊日々夜々御評議有レ之處、何分一應御實際御伺取之上ならては、御決評にも難レ被レ及に付、今日十之丞出立相成、十三日より今日迄延引せしは、右の次第によつてなり、

○同月十九日、今早朝、去る十七日京都出立之大早駈飛脚着、御用狀、

一昨十五日夕、傳奏日野大納言殿より御呼出に付、友四郎罷出候處、別紙御書付二通御渡有レ之、且雜掌演說を以、右御上京御書付之義は、宰相樣へ被二仰出一候、自然御指支も被レ爲レ在候はゝ、殿樣御上京可レ被レ遊旨被二仰出一候、

御書付左之通、

祖宗以來御委任、厚御依頼被レ爲レ在候得共、方今宇内之形勢を考察し建白之旨趣、尤に被二思召一候間被二聞召一候、尚天下と共に同心盡力致し、皇國を維持し、可レ奉レ安二宸襟一御沙汰候事、

〆

別紙之通被二仰出一候に付而は、被レ爲レ在二御用一候間、早々上京可レ有旨御沙汰候事、

十月

一、同十六日夕、日野殿より御呼出に付、服部寅之助罷出候處、別紙御書付壹通御渡有レ之、

大事件、外夷一條は盡二衆議一、其外諸大名被二仰出一伺等は、朝廷於二兩役一取扱、自餘之義は、召之諸矦上京之上御決定可レ有レ之、夫迄之所、德川支配地市中取締り等は、先是迄之通に而、追而可レ被レ及二御沙汰一候事、

右之節、昨日宰相樣御上京之儀被二仰出一候通、吳々早々可レ被レ遊二御上京一旨、御差支被レ爲レ在候はゝ、殿樣御上京可レ被レ遊旨、尚又雜掌を以被二仰聞一候、

一、右同日、大小御目付中より、御廻狀に而御呼出に付、十大夫御城へ罷出候處、大廣間二之間へ諸藩士一同列席、御老中板倉伊賀守殿、所司代松平越中守殿、大目付戸川伊豆守殿御出席、別紙御書付拜見被二仰付一、其節別紙御封書御渡、早々御國表へ可二差越一旨被二仰聞一候、

御書付、

去る十三日相渡候御書付之趣、御奏聞相成候處、昨十五日、別紙之通御所より被二仰出一候間、此段相達候、

御別紙、

祖宗以來云々、

私云、昨日傳奏衆より御渡御書付と御同文故略レ之、御封書も御同文なり、

○同日巳半刻頃、永田儀平、去る十七日京都表出立大早駈に而到着、板倉殿御内書持參差二上之一、於二御同所一宰相樣御上京有レ之候樣、御嚴重之御催促有レ之段申二達之一、御内書如レ左、

一翰拜啓仕候云々、然は今般之御二條、實に御誠意之程は恐入奉二感佩一候得共、誠に以恐入、只々涕泣之至に御座候、就而は此上御規則相立候迄は、實に薄氷を踏候心持候間、一刻も早ふ御上京被レ成候樣、上樣にも御待被レ遊候、此段申上候樣御沙汰に御座候、出殿中いそき亂筆、御判讀可レ被レ下候、匆々頓首、

十月十七日　　伊賀守

大藏大輔樣

再白云々、吳々も寸時も早く御上京候樣、一日千秋奉レ待候、早々再拜、

右御返書如レ左、夜六半時急飛脚を以被二差立一、右便宜に付、昨日出立之酒井十之丞御呼戻しに相成、

十七日附之御飛札、十九日朝第十字相達拜見仕候云々、然は今般之御一條追々相伺、御同意實に御公平御誠意之程恐入奉二感佩一候、只々此末之處不二容易一御大事と、心緒迷亂之仕合に御座候、右に付而は一刻も早ふ登京仕候樣、上樣にも御待被レ遊候御樣子、委曲被二仰下一、謹而奉レ畏候、何れ登京之上に萬々可二相伺一と奉レ存候、依レ之先日被二仰下一候義も有レ之候故、酒井十之丞差出候間、委曲之口上は同人へ申含候、御多忙中恐入候得共、拜謁被二仰付一、御聞取奉レ希候、彼是心中恐入當惑、別而亂揮、御海恕可レ被レ下候、恐惶謹言、

十月十九日夜第九字

二白、御端書忝奉レ畏候云々、先日被二仰下一候に付、昨日十之丞差立候處、今日之華翰に而、又々呼戻し口上申含候事故、差出及二運引一候、此段も申上候、以上、

伊賀守樣　　御名

私云、御上京御催促、御書面之通候へ共、猶又一日も早くと申義、公用人より入念口達之義も有レ之、且彼地之時勢旁、早々御上京相成候樣申上として、儀兵衞參着せしなり、

○同月廿三日、尾州老矦よりの御使者林左門來着、毛受鹿之介應對之所、此度御宗家之御大變に付、老矦今廿三日御國許御發駕に而御上京之由、仍レ之宰相樣にも早々御上京、萬端被二仰談一相成候樣、御賴被レ成候との御口上也、其段申上候處、いつれ不レ遠御上京之思召之段御返答有レ之、二日御發駕御内定之趣も申二聞之一、鹿之介より尾矦御上京之御見込を承候處、御宗家如レ形御次第に而、於二尾矦一も御官位御辭退に而、罪を闕下に謝せられ候御趣意之由、

○同月廿八日、去る廿五日京發之飛脚着、御用狀之

内、

去る廿五日朝、傳奏日野大納言殿より御呼出に而、御渡之御書附左之通、

御用之儀有レ之被レ召候、期限來月中、必可レ有二上着一候事、

但用意出來有レ之向は、不レ拘二期限一早々上京可レ有レ之事、

一、同日土州藩才谷梅太郎、岡本健次郎來着、老侯之御直書差二出之一、

私云、此御直書、八月念五之御日付に而、緊要之事件無レ之故略レ之、右才谷梅太郎といへるは、坂本龍馬之更名也、此度御直書持參、且は京師之近況爲二申上一、後藤象二郎より爲二名代一差出せしにて、内府公絶倫之御英斷に而、皇國之紀綱作振之時機到來致候得は、一日も早御上京被レ下候樣相願ひ、且今後目的之次第を詳述せり、村田巳三郎應接に而、其段御前へ申二上之一、此頃に而は既に御發程之義も御治定之事故、何事も御上京之上可レ被二仰合一と御挨拶之趣申聞、御返書も御渡に相成、

一、前記朝廷之御沙汰は勿論、板倉殿之御内實、逐々京都知邸より之申上、且永田儀平口上と申、事機殊之外切迫に及ひ、朝幕之召命旁、早々御上京無レ之而は不二相適一御運ひには候得共、是迄度々之御上京、いつ迄も始之程は、幕府より御依賴之趣に而御都合宜候得共、次第に事之艱難葛藤を生し候に隨ひ、御論も合兼、遂には御物別れにて、御歸國に相成候樣之御姿に而有レ之、其上此度は、□□以來未曾有之御大事之時勢に候へは、一旦之御盛意に御感激御上京に相成候而も、萬々一政權を、御不案内之朝廷へ御投懸け、朝廷にて御もてあくみに相成、再ひ御委任之時を御待被レ遊而、遂々御輕淺に相成候幕府之御威權を、御恢復可レ被レ爲レ在抔と申御權略等に被レ爲レ出候御儀等にも候はゝ、以之外成御次第に而、夫に御同心被レ爲レ成候而は、皇國之御罪人と可レ被レ爲レ成、されはとて其期に御臨み御引別れも、又不二容易一御困難に可レ被レ爲レ及、御進止之御目的相立兼候に付、何分十之丞被二差上一、幕府之淵底、十之丞より板倉殿迄、反覆相伺候上之御決議可レ然との御評定に而、去る廿日十之丞御差立に相成處、同人義廿一日夜京着、翌廿二日板倉

殿參邸拜謁之上申上候は、度々之御召に付而は、不二取敢一上京勿論之義に御座候得共、是迄度々上京は仕被レ遊候處、此度時勢に乘し土州之建白、好機會到來に付、日比持滿之強弩を御切發ち被レ遊候御義に而、實に公平正大、只管天下之安全を被レ爲レ量候台慮に而、一毫御鄙吝之御念頭は不レ被レ成二御座一候、然る處老公御賢察之通り、朝廷に而は是迄更に御手覺不レ被レ爲レ在御義故、一小事之御裁決も御六ヶ敷候故、矢張是迄之如く御相談之御模樣に有レ之、此處甚御困窮之御場合に而、其御相談に御乘り被レ遊、御差支無レ之樣御取計らひ有レ之候へは、御奉還は虛名に而、其實は御威權を御手離し無レ之と申輿論も可二差起一勢も有レ之、又截然と御振離れ、一切御取合無レ之候得は、御立派之樣には候得共、朝廷に而今日之御差支と相成候得は、又奉還を名として結局は朝廷之御迷惑を御引出被レ遊、朝廷御窘窮之所より、再ひ御依賴御委任之時を御待被レ遊候と申嫌疑なきにしもあらす、御進退に御谷り被レ成候御運ひに付、朝廷之御樣子も御功者之御義と申、幕府は申迄も無レ之候得は、此中間之御扱を御賴み被レ成、御私なく御奉還之御盛意も相譯には無レ之、政權一途に歸せすしては、御國内治り兼候と申は、前日よりの御着眼に而、時機を御見合せ

立、朝野之嫌疑消除いたし、諸侯會同之御待付け公議に付せられ候樣被レ成度との御趣意之由、悃々御物語有レ之に付、十之丞も上樣御公正之御誠意に奉二感服一候は元よりにて、一々至當之御主意に而、其上可レ奉二申上一廉も無レ之に付、罷歸り仰之趣申聞、早々致二上京一候樣可レ仕と及二御請一候事之由、廿五日夜歸着、翌廿六日朝御前へ申二上之一に付、猶又右御趣意を以御評議に相成處、板倉殿御申聞之御次第は御尤至極之義にも候得共、其中間之御扱ひ中々以不二容易一、朝に御付き被レ成候ても、幕へ御付被レ成候ても、いつれか偏倚之御困難に可レ被レ爲レ至、且は世態も如何成變動を生候半も難レ計勢ひと申、薄氷を踏む如き危地へ、唯御一人御上京被レ遊候は御危殆之至りと、御家來共一同甚御案事申上、御上京可レ然と及二御請一候者更に無レ之、いつれに土州老侯御上京に可二相成一候へは、其御折を御待被レ遊可レ然、或は諸侯會集之節迄、何とか御申延へ可レ然抔、衆議紛々難二相決一候得とも、何分にも一度ゝ御上京と相成候へは夫か御最期にて、御取返し無レ之事と可二相成一候へは、此節御不幸之御折柄と申、私云、十八日夜靜姬樣御早世、御遣例にも被レ爲レ在候得は、旁一應御斷被二仰上置一、時變御觀察之方、當今之御長策たるへく、且傳奏中よりは、宰相樣御差支候はゝ殿樣御上京と申御沙汰も有レ之候得は、御代りに殿樣御上京之方可レ然と、漸く御決評相成候處、又一正論起り、皇國之大變、朝廷宗家御危難之秋に當り、朝廷之御沙汰と申、上樣之正大公義之御所置、事理至當之召命に被レ爲レ應、速に御上京、宗家と共に御休戚を被レ爲レ共候大義名節も御擲却、曖昧模糊之御辭令を以御斷り被二仰上一候而は、朝廷は元より、上樣を奉レ初朝野之有志へ被レ爲レ對、數十年之御信義御忠實之御令名も御虛名に屬し、是迄御立派之御持論も、御大事に被レ爲レ當御腰を拔され、御渡り込み被レ遊候御姿に而は、天下共に或は謗り或は怒り或は笑ひ或は怨み可レ申候へは、最早世界へ御顏出しも難レ被レ遊、乍レ恐是限りにて御身も御名も御棄り被レ遊候而、不義之君、不義之臣、不義之邦國と相成、人界之御交り難レ被レ遊御義と相成候得は、君臣共に頭髮を拂ひ遁世之外は無レ之、左もなき事を有事ケ間敷、饒舌間語を以て被二仰立一候而は、御恥辱之上之御恥辱に被レ爲レ成候得は、如かし唯速に朝幕之危難に不レ被レ爲レ趨候而

は、御大義におゐて御濟被レ成間敷と、剴切激勵之立論、大に老公之尊慮に適合し、又是よりして御再評に相成、御上京可レ被レ遊と御決定に相成しは、實に廿八日なりき、

○同月廿九日、急飛脚を以板倉殿へ被レ遣二御內書一、如レ左、

以二急脚一二筆致二啓上一候云々、扨は先般家來酒井十之丞差出候處、段々御懇切之御垂示、御誠意之程も爲二御聞一被レ下、十之丞早速罷歸一々申聞、誠以感泣恐入候外無二御座一奉レ存候、唯々乍レ恐正大公明之尊慮、銘レ肝難レ有仕合奉レ存候、其節老拙再上之義も被二仰下一、是又一々拜承仕候、依レ之支度相整、來月二日弊邑發足仕候而、八日京着之含に御座候、此段急脚及二拜啓一候、御序之節御前へも宜被二仰上一被レ下候樣奉レ賴候、先は右之所用申上度如レ此御座候、頓首拜、

十月廿九日第十二字

一、右に付尾州老侯へも、御案內旁被レ進二御內書一、如レ左、

謹而奉二啓上一翰一候云々、抑先般は態々弊邑へ御使价被レ投、委細御口上之趣拜承仕候、此度御同事に、宗家之築辱安危此秋と奉レ存候、何分にも今後皇國之御挽回、千祈萬禱之至奉レ存候、僕儀も來月二日彌弊邑發程、八日著京之心積に御座候、衆而御承知之通、庸愚不才之僕、其上今般之一件は、先年來之儀とは大に相違仕候故、更に見据相立兼、殆當惑罷在、只登京之命を奉候而已に御座候故、出京之上は何れ登館、萬々拜晤を期し申候、何卒萬端御敎諭奉レ希候、別而尊藩之義は、宗家第一之貴賓にも被レ爲レ在候故、此度赴は最以爲二皇國一御盡忠奉レ希候、僕輩は附二驥尾一、乍二駑馬一骨折心配も仕度奉レ存候、書は不レ盡レ言、先右出京之上、諸事御懇示御引廻し御依賴迄及二拜啓一候、恐惶謹言、

十月廿九日　　御實名

尾張大納言樣玉机下

一、一昨廿七日京發之飛脚着、御用狀之內、

十月廿七日、御城大廣間二の間におゐて、大目付松平大隅守殿御渡有レ之御書付二通、如レ左、

松平大藏大輔

松平越前守

臣慶喜昨秋相續仕候節、將軍職之義固く御辭退申上、其後厚蒙二御沙汰一候に付、御請仕奉職罷在候處、今般奏聞仕候次第も有レ之候間、將軍職御辭退申上度、此段奏聞仕候以上、

十月廿四日

諸藩上京之上、追而可レ有二御沙汰一、夫迄之處、是迄之通相心得候樣御沙汰候事、

○同月晦日、於二御用部屋一御家老中より諸向へ申渡左之通、

今般將軍家御政權朝廷へ御歸し被レ遊候に付、朝幕より御達之御旨趣に付而は、今後御懸裁如何可二相成一哉、實に不二容易一御場合と申、且は御宗家之御成行に付而も、深く御案勞思召、御召旁先つ宰相樣御上京被レ遊事に候、右樣變態之御時勢に付而は、尙追々御模樣により、御國表之義も如何可二相運一哉難レ計、銘々におゐても厚相心得、御差圖相待可レ申候、尤心附之義も候はゝ、御直にも御聽可レ被レ遊旨候間、無二遠慮一可二申出一旨被二仰出一候、

十月

御直書寫、

今般上京に付而は、我等留守中之義は、諸事越前守へ申談置候間、當春滯京中之通り相心得、越前守存寄相伺取計可レ申候、大事件之義は、人差出我等存寄承り可レ申候、役替其外等之儀は、此表に而存寄相伺可二取計一、事柄により京都へも可二相伺一事、我等滯留中盡力筋に付而は、形勢も有レ之事故、京都之儀は任せ可レ申候、乍レ去心付幷國許確定之義は無二遠慮一、大事件之儀は、家老より在京家老へ可二申遣一、又人差出候而も宜候、尙從二越前守一も我等迄、心付候義無二遠慮一以二密啓一被二申越一候樣可二申上一事、此表政事向之義は、越前守諸事心配可レ致は勿論に候、尙家老始一際擔當、贊翼專一之事に候、東西隔絕、在京之我等始、一切掣肘可レ致事は無レ之、國議に任せ可レ申事、乍レ去心付確定いたし不レ得二已事一義は、無二遠慮一我等より越前守へ以二直書一可二申越一、在京家老よりも、國許家老へも可二申越一義も可レ有レ之事、東西隔絕致候へは、事情自ら疎濶相成候故、其彼是之情相通候樣致度候間、折々有司上京可レ有レ之事、

右之通に候以上、

慶應三年十月晦日　大藏

酒井外記
松平備後
荻野小四郎
中老
側用人
中老見習
田內源介

慶應三年丁卯十一月二日、辰刻御供揃に而、三の丸御座所より御發駕御上京被レ遊、

○同月七日、江州草津驛へ御投宿之處、尾州老侯より林左門、田中國之輔、御使者として被レ遣、御供酒井十之丞旅宿へ來着、御口上之趣は、方今之御時態に押移に付、老侯御見込之趣御建白被レ成度に付、御相談之旨に而差出御草按如レ左、

今日之世態を以は、皇統皇國を保つを以第一之先務とし、時機に隨ひ宗家を維持するを旨とすへし、一是迄過去候儀は今更是非も無レ之、乍二殘念一口を鉗申候、是より先之御辨別、奉二仰願一候は左之通、

俗論之御爲は忠に似て不忠、眞實之御爲は不忠に似て忠、

愚見之極意爰に止り申候、何卒芹志御採用之程、泣血奉二懇願一候、此二句さへ徹底仕候得は、千條萬緒は隨而其中より發生仕候筋に付、態と絕筆仕候、幽折之議論は、徒に紛亂を招候基、其害不レ少候に付、吳々此義は斷然闕如仕候事、

右之趣、早速入二御聽一候處、御趣意柄御同意には思召候得共、何分御旅中之儀にも被レ成二御座一候へは、猶御熟考、御京着之上御返答可レ被レ遊被二仰出一、兩人罷歸、

○同月八日、未刻過京都岡崎へ御着、

○同月九日、御上京爲二御案內一、攝政殿下御兩役、並御老中所司代御廻勤有レ之、

一、同日夕、土州藩士福岡藤治參邸、御側御用人對接之處、內々申出候趣意は、此度內府公御反正之思召立、稀世之御英斷に而、方今之御美事に相運ひ候處、御三家幷御親藩之內に而も、今一度幕威を被レ復度抔之議論も有レ之哉に而、種々之浮說流言も有レ之に付、夫等之先入、御當方樣御聞込無レ之已前に、實際達二御

聽、御疑惑不二相生一樣相願度と、同志一同申談罷出候由に而、頃日來之事情申立候件々、最初土州老侯後藤象二郎初より內府公へ之建白、事機今少早く有レ之候歟と存込候得共、過激輩之討幕論尤熾盛に相成、已に事を擧んとする勢に立上り候故、討幕之名義も不レ正、且陛下に事を生候而は不二相濟一次第等、百方說得に及候得共、中々行屆兼、殊之外骨折れ候事に有レ之候、其內漸間隙を得候故、直樣及二建白一候事に付、無レ據御用捨之義も、極而切迫に相伺候運之由、建白以前、永井玄蕃頭殿大盡力に而、此場に及候事に而、此度永井殿之功力多分之由を稱贊し、甚依賴之趣に有レ之、○建白板倉伊賀守殿へ持出候處、趣意は至極尤候得共、重大之事件故、急に御採用と申義は、左樣に速に御決評は六ヶ敷との答に有レ之に付、猶迫て相伺候處、御採用にも可二相成一御模樣なから、曖昧に有レ之內、卒然と諸藩士を被レ召、御英斷之被二仰出一に而、土州抔に而も意表に出、致二愕然一候事之由、扨御直聞も可レ被二成下一との御事故、薩藩小松帶刀、藝藩辻將曹、土藩後藤象二郎、福岡藤治等同志之事故、一所に拜謁相願ひ候而及二言上一候は、如レ斯御盛意、片時も早く朝

野に貫徹不レ仕候半而は不二相濟一事候へは、明日は早早御參內に而御奏聞に相成、又御英斷に而諸藩士之建議も御聽上け、共に御奏聞に相成候樣仰望仕候段申上候處、奏聞は奏聞、御下問は御下問に而別段之事也、參內早速之義も御承知には候得共、明後日ならては御手順御出來難二相成一との上意候得共、唯一刻も早く御實跡に被レ施候樣仕度と斷而言上候處、明後日之處は急度無二相違一候間、其處は致二安心一候樣との御意に而、退座之上猶又伊賀守殿へ同樣申立、明日御參內之義相願候處、諸藩士へ御下問之義は子細も無レ之事候得共、明日之御參內と申而は、御所へ之御伺等之御手續相濟不レ申、別而此度之事抔は、朝廷に而御聞恐ち方被レ遊、容易に御運ひ付申間敷候得は、明日は扨置、明後日も無二覺束一、先達而開港之義さへも、御迫り被レ成候と申世評も有レ之次第、況て此度は御身上之御義にも候へは、朝廷へ御迫り被レ成候樣に而は不二相濟一、夫故中々御聽入も六ヶ敷との御應對故、左候はゝ、先つ攝政樣之御手元を何茂より內諾可レ仕哉と申試候得共、左樣にも御決し無レ之、猶再三之御應接に而、漸く約る處、明後日御參內との被二仰出一に相

成候、夫より殿下御手元之義も、永井殿內意に而致二周旋一候樣申來に付、何も殿下へ伺上之處、中々御聽受無レ之候得共、如レ此一大機會得失之境と相成候事故、犯上之罪責は何もへ引受、大亂目前之趣を以御迫り申上、漸く御聞入に相成事之由、右樣之御次第、一一御英斷に發候事に而、如何樣之事に而も御動轉これなき御淵底は、御直に相覘候者は安心罷在候得とも、夫を不レ好向にては種々妄說を附會し、疑惑を起させ候樣之義も不レ少、已に尾藩へも御右筆邊之者私云、遠澤成罷越、入說等も有レ之由、尾は動き申間敷候得共、右樣甚奇怪之次第も有レ之故、其邊之事情先以入二御聽一置度由、○紀州抔は甚見込違ひに而、先達而朝廷より諸藩へ御尋之節之御答書にも、此體に而は迚も治り不レ申問、御義理合にも御元返しに可二相成一義、畢竟ヶ樣相運ひ候も、覬覦之藩有レ之候より起り候と申義有レ之、覬覦之二字、於二弊藩一耳に懸りは候得共、役向之懸合に致候而は、結局爭端に相成候而は無益故、背生輩へ申聞爲レ及二議論一候處、朝廷へ差出候本書には左樣之義は無レ之抔、不分明之應對に而、今以決着不レ致由、○會藩は其砌及二一論一候處、外島

機兵衞手代木直右衞門之兩人は尤と存候得共、猶衆議之上可レ及二返答一との事に而、三日之後、議論兩端に分れ候間、今暫待呉候樣との事に而、第八日之後、君前に而定論、御同意之段及二御挨拶一候樣、會侯被レ命候由に而返答有レ之、表向同心候得共、油斷は出來不レ申候由、○津藩は一議論に而同意に相成由、○會藩大野英馬尹宮へ參上、不當之事共御議論申上候得共、象二郎、尹宮へ伺候、夫々及二論辯一、尹宮も土老侯御同意と申事に被レ爲レ成由、○兎角內府公之御善端を開導は不レ致、中途に而壅蔽に及候は、何共慨歎至極之由、○扨今後之見込は、何れに議事院を開らき、上院下院を分ち、上は攝政公初內府公御主宰に而、明侯御加り、下は諸藩士より草莽蹉迄も出役に相成、何分皇國之國體如レ斯と御決定有レ之迄之事に而、大體之處は程も可レ有レ之事候へは、有名諸侯さへ御會同に相成候はゝ、其處に而篤と御決議有レ之、御簾前に而御誓約有レ之、御確定之上、外諸侯へは如何と御垂問、缺席諸侯へは朝廷より御通達位之事に而相濟、違背之者は御追討と申程成 正大公明之御基本 相立不レ申候半而は相成申間敷との義は、內府公へも申上、至極尤

に思召候との御沙汰候へは、此方様にも、猶御參考被二成下置一候様相願候との趣なり、○問云、越前裘抔へ相聞候は、討幕論盛に相成、幕に而も敵對之聲息有レ之との實否如何と承るに、其通り相違無レ之、實に危殆之形勢に相迫候事候得共、御反正之御英斷に而一時に消沮に及ひ、實は浮浪之徒過激輩は失望之由、乍レ併唯今之浮說旺盛相成候へは、暴黨又々時を得、屯集之場へ可二相運一歟と甚心痛之由、又今更幕威を御持被レ成候而は、實に夫限之事に可二相成一由等物語れり、

一、同日藝藩辻將曹參邸、藤治同樣、浮說御聞込に不二相成一樣致度、既に尾越は不同意故上京無レ之との流言も有レ之處、此度御上京有レ之、同志大に副望之趣申二達之一、

○同月十日、今朝永井玄蕃頭殿へ中根雪江被二差出一、過日來之御樣子同人より相伺處、別段相變義迚も無レ之、先達而被二仰出一之御趣意遵奉之外無二他事一は、在京之向何も一意候得共、關東に而は一時異論も生し、彼是同樣之姿に而、政權奉還之上は、上樣も御東下に可二相成一筈との議論盛に相成、將に老中初夫々上京致候得共、此表へ上り段々之御盛意も相伺ひ、待時勢觀察致候而は、如何樣御東下難レ被レ成も御尤之御義と會得致候事に相成候由、

○會藩抔は如何之景況と承る處、是も當時之樣子は不レ致二承知一候得共、其砌は、何分正大公明之御所置候へは、此上申上方も無レ之との藩議之由に申に付、何歟御三家親藩力を戮せ、今一度政權復古と申目論見も有之樣にも風說有レ之候は如何と申候へは、左樣之義有かは不レ存候得共、今更左樣之事と相成候而は、是迄之御所置、惟御術計に落、決而相濟不レ申、當節朝廷に而御不慣之御事に付、御迷惑被レ遊候御樣子候得共、御迷惑不レ被レ遊樣に、又御手出しにも相成兼候處之御意味合、甚御心配之譯に有レ之、先つ何事も御同と申姿候得共、朝廷に而御決しに相成候御廉は少く、矢張攝政殿下より御相談に而、御見込被二仰上一候樣之御振合に相成候得共、夫は唯差向き候細事に而、事立候件々は、惣而諸侯之會議を御待被レ成候御次第之由被レ申に付、其會集も容易之事には有レ之間敷と申候へは、召之期限は當月一杯と申事候へは、大抵當月中御揃之處に而、御談にも可二相成一との御

見込之由、○又被レ申候は、大藏大輔樣御上京は、殊之外御待兼之御義に而、いつれに何角も御談可レ被レ遊、就而は今後之御見込も可レ被レ爲レ在、何分早速之御上京御滿足之由、○尾老京も先達而より御上京有レ之候得共、御不快に而何方へも御出向無レ之、則御着之砌、尾之御近親旁、御直書を爲二御持一、所司代被レ遣候處、御斷りと行違ひに相成候由に而御對面も無レ之、空敷罷歸候次第、五六日前にも、拙者罷越候樣との御沙汰に付、其段申入候處、御不快故御斷り、近日彼御方より御案內可レ有レ之との事に而、其後は依然たる事共、上には折角御催し有レ之候得共、何か釣り合ひ付不レ申段說話有レ之、

一、同日、昨日御老中より御達有レ之、午刻御供揃に而御登城有レ之、御本丸御居間に而御逢有レ之、每々之御上京御滿足之段御慰勞有レ之、夫より當御時態に付、御見込通り如何との御尋に付、不二取敢一徵命に應候迄にて、定見と申は更に無レ之、何分相伺候上に而、又存寄も御座候はゝ可二申上一、第一尊慮如何と被二仰上一處、此度之儀は土の建白に發候には相違無レ之候得共、其節之景況左樣無レ之而は眼前に四分八裂之勢ひに相迫り候故、事爰に及ひたれとも、其所置に至つては別に所見有レ之事に而、其譯は、是迄之御政體に而は、種々苦惱致候得共、如何にしても政法兩途に相成候、惣而朝廷に而御裁決相成候へは論も無レ之候得共、夫は御六ヶ敷、幕に而決候へは、朝に迫り或は朝を凌くの說を免れす、政兩途に而治るへき所以無レ之事故、是非一途に相成候樣有レ之度と申は、御承知之通宿昔之定見故、彼建白と時勢切迫との機會に、予か彙而之所見を投せし也、皇國如レ此ならすして決而治りかたきと申見込を立、治否如何之大體を體認して所置に及ひしに、朝廷にても被二聞食一大に宜く、此上は會同之公議に附し、何とか治體相立度と思召由に付、仰之次第實に非常之御英斷、奉二感服一候より外は無二御座一候、此末之御事業、御見据之如何と御伺被レ成候處、夫は第一議事院等之事に而、滯刀象二郎抔も夫々存寄も有レ之、可二申出一との事候へは、申談、兎も角も國是を決候心算にて、當時は唯差當る事共を、伺之上取計居候迄之事也、容堂も是非上京可レ有レ之候へは、厚申談度抔上意之由、

一、御控處に而伊賀守殿に御逢之處、御同人は何分口

惜事に相成候と、各惜之語氣甚敷、公には如何と御申に付、公も、神祖之御盛業御持張被レ成候處は御殘念思召候得共、如レ此相成候上は何と可二相成一哉、此上は斷然として諸客之心を撤却し、内府公之、皇國之爲に御家之御政權を御抛被レ遊候御盛意を遵奉し、益以治安之策を建候より外は無レ之と御申候處、兎角餘りに惜き事故、玄蕃抔とも色々申見候得共、更に良策無レ之、何とか致方は有レ之間敷哉と被レ申候に付、夫は死したる子の齡を數へ候譬の如く、迚も返らぬ而已ならす、却而御盛德を損するに至候へは、各にも其御心得有レ之、上樣之御諸客或は御計策之樣に、世上之誹有レ之候而は、御大切至極之事に候へは、決而左樣之義御口外は有レ之間敷と御申之處、是迄我輩におゐては、幕府を主位として、公論正義の賓客を請待之心算之處、此度其邊御超越に而、惣而朝廷へ御還し相成候事に候へは、御正理は無二間然一候得共、今後之見込は立兼候、何分一度御投出し之上候得は、此度之被二仰出一を、とこ迄も御食言に不レ被レ爲レ成樣仕度とは存候得共、今日上におゐて何をする事も無レ之、誠に茫然たる者にて、殆當惑罷在候と被二申上一由、

私云、公御歸殿之上の御說に、内府公皇國之治否を御洞見、此他に處置無レ之と御英斷有レ之候御深意を、伊賀始十分徹底無レ之、唯止む事を得さる時勢に出候樣に心得たるは、何とも慨歎至極せり、伊賀始如レ此卑見を匡正せん事、余か當然の任なりと御談論被レ爲レ在たり、

○◎十一日脫カ尾州犬山之藩老小池奥左衞門參邸、御側御用人逢對之處、申出候は、過日奥御右筆澁澤成一郎、成瀨隼人正方へ參り、永井殿内旨之由に而、神祖二百年來之御鴻業之傳說長々敷申陳、約る處御三家幷親藩之兵力たにあらは、政權之取戻方も可レ有レ之ものとの趣にて、諷諫らしき口氣に付、隼人は唯々諾々に而不レ及二返答一相濟由、此兵力たにあらは政權を復さんとの意味、如何樣之事に可レ有レ之哉、御當家樣へ右樣之說は相聞へ不レ申哉との事に付、唯今迄は曾而相聞へ不レ申、畢竟討幕之論盛んに、時機殆切迫に至り候も、政權を御歸朝ありしかば、群議喧囂寂然と相成候に而も可レ知事に而、今更政權御手に復候はゝ、討幕論も再興可レ致は必然なるへしと相答候處、御尤至極に而、私共方に而も一同左樣存候事候處、右等之說を

唱候は、更に難レ解次第に付、則昨朝永井殿へ相伺候處、彼御方にも決而右樣之語氣は無レ之、何分内府公之御誠意奉戴之外は無レ之との事に有レ之由に付、澁澤は永井殿之内旨と申たるは如何と承候處、是は尾老侯へ拜謁之義を内調被二申付一候にて、右等之趣意には無レ之由、奥左衞門又薩士之疑を說出に付、土藩之事情如レ此と、福岡之申せし事を申聞せしに、大に疑念を散し、何分當時と成而は會藩邪魔に可二相成一候へは、品能歸東之手段有レ之度抔申候、○尾老侯何方へも御手出し無レ之、御病氣如何と承候處、御病氣に無二御相違一候得共、實は御一人に而被レ成方も無レ之に付、此方樣御上京を御見合せの樣子候へは、是より御運ひも付可レ申段答へたり、

○同月十二日、山階宮御内衆より伊藤友四郎へ内話之次第は、尾老侯之一件、宮へも御賴有レ之、御周旋に而夫々御取調に相成候處、けしからぬ事に有レ之、新選組より御取立に相成し近藤勇始四五輩、此度之一條は、尾越抔之持論に而此場へ相運ひたる抔、殊之外尾越をあしさまに官家へ及二議論一たる由、仍レ之尾侯抔之事を御所に而御引立あらは、又彼輩之切迫暴論を來し可レ申歟との恐怖よりして、外諸侯之來集迄は御憚りにて、越侯共御參内等も不レ被二仰出一御内定之由、朝廷は何事も諸侯參集迄は御投け遣りに而、此節は局達之落飾有無之御評議而已之由也とそ、

○同月十四日、此頃之風說、薩州より人數二千人着坂、八千人と唱る由、内六百人は、十二日淀川を上り上京の由、長人も相交り居可レ申との聞へ有レ之に付、昨日青山小三郎を探索に被レ遣、薩藩吉井幸助と對談之次第、内府公一時之御英斷に而激徒屏息致候得共、散走致たるには無レ之、會議之上 御實行之見はれ候を伺居候形勢故、唯案勞致候は、内府公之御腹心にて、實に政權に執着無レ之は永井計にて、松山以下には必復古之臆念有レ之歟との嫌疑有レ之、萬一左樣之事と相成時は忽地再亂に而、譯もなき事に可二相成一勢なれは、早速大綱領を御議定有レ之、夫に背く者は討つて取る外には無レ之見込之由、○小松帶刀も薩侯に先立、土州へ立寄後藤同伴に而、十五日には到著之約束に相成有レ之、薩國に異議無レ之候へは、何も不二申越一との申爲レ替之處、今日迄消息無レ之に付、異變無レ之と相心得居候由、○多人數登京之由、御先供勢

にも有レ之哉と小三郎相尋處、如何にも先勢に而追々參着せり、實は途中に居たるも有レ之との事之由、

一、右等之事情に付御邸議之趣は、外藩之形勢、內府公には疑念無レ之候得共、中間に疑ひ有レ之、夫よりして前途曖昧の事と相成候而は、內府公之御反正も徒善と相成、忽討幕之義にも至り可レ申、其節に及んでは、御處置甚御困難之事に可二相成一候へは、唯今之內板倉殿始反正、動搖無レ之樣御取固め置無レ之而は難二相成一義と、於二御前一御評論有レ之、猶尾老侯へも可レ被二仰合一と被レ決、

○同月十五日、昨日傳奏衆より御達に付、今朝本多修理御假建へ參上之處、御兩役御列座に而、別紙御書付御渡有レ之、

御書付寫

德川內大臣方今宇內之形勢を考察し建白之旨趣、殊外國交際日に盛んなるにより、愈朝權一途に於レ不レ出者綱紀難レ立、舊習を改、政權を朝廷に奉レ歸之趣、時勢難二默止一旨を以て言上有レ之、則被二聞食一候、然る上者、自王制一途之綱紀可二相立一時勢に候、然るに王制復古之儀に至候ては、諸事班々曖昧之儀にては綱紀も難二相立一、假令者當今諸藩封建之義抔、迚も往古郡縣之儀にも難二相成一哉にも被二思召一候、然る時は朝廷之綱紀、何邊一途に奉レ置候見込に有レ之候哉、右封郡一事に不レ限、諸事見込之處被二尋下一候間、朝權一途之見込可レ有二言上一候事、

一、同日、昨日永井殿より被二申上一由にて、雪江罷越候樣被レ命、永井殿へ罷出候處、來客有レ之に付晚景參候樣との事也、此節會藩小野權之丞居合せ、當御時態浩歎之上に而申出候は、方今政事上に統攝なくしては、亂階眼前なれは、何とか不二相成一しては不二相適一、此時に當りて、親藩同士一層懇談に不レ及しては難二相成一、兎角內府公之御盛意を壅蔽之說有レ之不レ堪二大息一、とこ迄も貫徹不レ致しては不二相濟一、別而肥後守は御用部屋へも立入候役柄候得は、御未發之所に而は、彼是申上候次第も有レ之趣候得共、如レ此被二仰出一と相成候上は、御趣意徹底不レ致候而は不二相濟一義と心配之由申に付、何か再ひ政權を復せんとの議論も有レ之由承り及ひたり、左樣之事柄有レ之候而は、以之外成事と申聞候處、其說も有レ之哉候へ共、御英斷に而

被二仰出一候上は、朝廷より御返却に相成候迚、御受可レ被レ成所レ謂無レ之、夫よりは會議公論之上、是非共と申時に相成候はゝ不レ存、只今左樣之義は必有レ之間敷と相心得候へ共、唯幕を倒さんと企候向、如何成事を仕出候半も難レ計、其邊懸念之由物二語之一、

一、右歸路澁澤成一郎寓を訪ふ、（但此頃中每々逢對之義申入有レ之故なり）同氏之立說は、御三家御家門大憤發して兵威を盛んにし、抵抗力を以御盛意之貫徹すへき樣に御手傳申上る事、此節之急務なれは、先つ尾越におゐて人數引寄せ、味方を鼓舞する時は、御普代之面々も大に力を得、同心戮力御盛業を輔贊奉るに至り候はゝ、外諸侯は恐るゝに足らす、往日は已に兵力を以迫り奉り私說を遂る末故、此後も同轍ならん事は、追々人數繰入之手段にても現然たり、畢竟幕を初親藩之威力衰弱より、如レ此體態にも立至りたる事なれは、此度奮激せすして何時をか期すへきと、切迫激勵之說得甚敷、紀藩等は既に今日迄に二大隊上著之報告有レ之由等を申し、越老公には如何程御人數御引率に相成候哉との尋に付、此度は兵馬に付而之徵命にも無レ之、殊に隱居之身分候へは、日用之家來共之外、兵備は一人も無レ之段相答候處、以之外不滿之顏色なりき、津藩之知邸深井半左衞門も來會し、是も澁澤同論に而、弊藩日頃因循といはれたる恥辱を雪くは此時なるへし、戰て後信を諸侯に示さん事を欲する由、當時京地に二十小隊あり、近々若侯兵備を引て上京、末家佐渡守も同樣なり、何分兵力なくして三寸許にては、道理も立難き由を强辯し、十九日二十日頃には必事あるへしといへり、

一、薄暮より永井殿へ罷出、對話之次第は、此度上樣之御盛意如レ此候處、兎角貫徹致兼候處苦心之由、幕中に而も御策略之由を誤唱致候者十に八九、急度せし御役人迄も疑念有レ之、夫を辯論に及ひ候へは、其節之議論と相成のみにて益なく、いつれに御實跡に不二相顯一候而は信服は不レ致譯故、夫迄之處は先つ其申に任せ置候へは、夫を又同論之樣に心得候向抔も不レ少、誠困却至極之由、○上樣には大方之御見込も有レ之、吾輩へ御相談之節は、心腹を啓らき吐露いたし、其上之御用舍は御任せ申上候は勿論にて、先つ大體之處は、粒立候諸侯會集之上に而、上樣之御見込書を御奏聞に而、夫を衆議に被レ懸候樣被二仰上一、扨衆議

之上、彼之善は無二御固執一御隨順に相成候へは、夫に而大略相決し可レ申、天下之見る處、其樣に變りたる事可レ有レ之樣も無レ之候得は、大同小異に而相定り可レ申と存候、夫か大綱に而、已下之細目は追々之事に可レ有レ之、何卒當年中に其邊之埒明候樣致度心算之由、夫より枝葉之事は追々之事なるへく、先大綱領さへ相定候へは一と安心と申もの也、とふか仕寄に相成へくと被二心得一候由、○象二郎人物如何と承候處、彼者先年長崎より土船に乘り歸坂之節より懇意に而、其比より申合候事も有レ之、確實正直之人物に而、決而私說更張等之義は有レ之間敷被レ考候由、坂本龍馬も參り候事に相成候得共、每々は嫌疑も有レ之に付、夜中に出懸候事にて、則昨夜も參り申候、象二郎とは又一層高大に而、說も面白く有レ之、彼か申處至極尤候得共、未た時機不レ至と申聞候處、夫は薩士に任せ候へは必行はれ可レ申との事故、例之兵威を以て事を成候而は、朝廷へ對し相濟不レ申候、夫故に時至らすと考ると申譯なりと申候へは、決して兵力によらすして可レ被レ行條理ありと申候故、左樣なれは兎も角もと申置候との物語なり、（私云、坂に按するに、龍馬の秘策持論は◎（誤脫あらん）內府公淵白職の事か、）藤次も參候か、是は異似なる人物なりとの評あり、○又被レ申候は、處々より色々の事可レ入二御聽一、就レ中公邊よりも聞へ可レ申、其說も異同可レ有レ之候間、一偏に御聽泥み無レ之樣致度、兎角眞之御主意を不二相心得一、中邊より說を立候故、御盛意々々と申なから、少々つゝ意氣違ひ有レ之、夫を一筋にせんとすれは、辨論而已にて却而手戻りに相成候故、先つ大違ひ無レ之事は其儘に而任せて、夫々に引立置候事故、無二是非一少しつゝ齟齬に相成候而被レ困候由、○澁澤之說及二物語一候處、彼輩に有レ之むやみに氣張候故、其處は常々誡め置候事、已に今日も、御藩に兵備一人も無レ之と御咄之事を彼是論し居候、畢竟薩兵を千人繰込めは、此方にも千人之心當可レ致と申は甚敗小見、薩も味方なり、少しにても多人數引入候事は歎ふへき事なるを、其處は如何に申聞せ候ても、中々合點行き不レ申候、夫故二等之論に致候へは、何方も兵備あつて惡敷事も無レ之故、先つ夫に爲レ任置候、薩士に而も何方に而も、此度は敵味方無レ之と見すしては相成不レ申候との事故、紀は如何と問ふ、是も甚卑く困り申候、乍レ併是もあれ程に思ひ込候は、あしき

事には無レ之故、相應に養ひ置候事に而、腰を折候而は相成不レ申、夫故何方にても、伊賀殿或は拙者の意抔と申、主張之向も可レ有レ之哉と致二心配一候、夫には大に意味有レ之寬宥致置候を、信隨之樣に取違へ候事に而候、薩之帶刀抔安心難レ致と申者へ、強て異心なしと辨候而も無益故、夫に任せ置候へは、是以拙も同論之樣に心得候姿、象二郎も同樣之事、兎角御實跡に發見無レ之內は、如何とも難レ致候、彼兩人抔も過激浮浪之制馭には、中々苦心之事共も可レ有レ之と體察致候へは、定而今以討幕論を唱居候事抔も可レ有レ之と思はれ候、是は時勢無レ據次第にて、拙者抔も幕軍へは其通にて、何時にても不逞之徒は討たねはならぬ事に勵し置候、左なくして、干戈を動してならぬ抔と申本意を申聞候へは、よき事にいたし忽ち懈惰に安んし候勢故、無二是非一其邊之釣り合を付置候事に而、當路之苦心は何方も同等と被レ察候由、○會津は如何、專ら復權之主張と承候處、今朝小野權之丞に逢候處、云々之口氣と申候へは、永井殿、權之丞も左樣に申居候か、彼藩に而も能分り居候は、直右衞門機兵衞之兩人成、乍レ併是も右之按梅に而、兼而之藩風、中々一意に同論屈服は六ヶ敷事候へは、彼等へも時宜により、遺憾之歎を發し候事も可レ有レ之候へは、夫を以一藩復權論とするも亦違へりと被レ申、○扨老公時々御登城有レ之樣致度、御用無レ之とも大に御益は可レ有レ之、三度に一度は御逢も可レ有レ之候へは、段々御懇話も重り可レ申、御登城被レ成候樣御沙汰なくては、御六ヶ敷振合候得共、御機嫌伺としての御趣意候へは、折々御登城願はしくとの事に付、不レ及レ伺候ても可レ宜哉と申候處、卒然に而何も御指支は無レ之候間、其段相心得申上候樣致度との事なりき、

○同月十六日、福岡藤次被二召呼一御逢之上、過日來之事情御直に御尋有レ之、修理、十之丞侍座、藤次より過日之趣逐一申上、惣而御會得被レ爲レ在、侍座も大に安心之趣也、右申上候內之異條、昨夜坂本龍馬被二及殺一候由、相手は恐らくは新選組中ならんとの事之由、先日來問者浮浪輩中に入込居たる由、旅宿は河原町土邸隣之町家なり、夜中一人あつて手紙を持來り、僕を呼出し屆呉候樣申に付、僕二階へ上候後より、兩人之刺客附上り、直樣龍馬眉間へ切込候由、龍馬は側に置たる脇差を拔き合せんとせしかと、深手にて不レ及二

其儀ニ最期之由、外一人と對話中之事に而、此一人も深手負候由、僕も同斷也、二客は辿去り不レ知ニ行衛ニ由、夫か爲に種々嫌疑を起し大に心痛之由、〇二條關白公へ王制復古之說申上候節、此方家も其昔は五ヶ國を領し居候との御噺に而、舊穢之御樣子、不レ堪ニ抱腹ニ次第之由、〇中山侍從殿は、何分尹宮を燒討せでは不ニ相適ニ何時にても火を放ち候間、機會及ニ案內ニ吳候樣との事にて、途方もなき暴論之由申ニ上之ニ、

〇同月十七日、今朝雪江尾藩田宮如雲を訪ひ及ニ論談ニ候處、所見如レ合ニ符節ニ、御盛意を貫通する盡力之外に道なきに決す、俗論遊說被ニ停止ニ一度抔之議有レ之、尾も兵備更に無レ之由なり、

一、此夕御家老中始御前へ被レ召、今後之御目途も組御瞭然にて、爲ニ朝幕ニ御盛意御貫徹相成候樣、御盡力可レ被レ爲レ在儀に御決談有レ之、今一應御登城御伺之上、御家老中御國表へ可レ被レ遣と御評定なり、

〇同月十九日、土藩寺村左膳參邸拜謁之上、土州老侯廿三日御國許御出帆、廿六日頃御上京之御積之由申ニ上之ニ、先達而中國論分裂、信疑相半之困難之處、象二郎罷越漸く御上京之御運ひに相成由、〇最初薩と議論合衆、建白も三十日計延引之由、薩論は、筆紙舌頭を待に不レ及、兵威に而押詰んとの事なりしを、帶刀一人にて鎭定、漸く上書之運ひに相成事之由、

一、此夕御目付梅澤孫太郎殿來邸、雪江へ逢對被ニ申出ニ候は、當御時態恐入候次第、夫に就き大藏大輔樣早速之御上京、定而夫々御見込も可レ有レ之、上樣にも殊之外御依賴思召候御義に有レ之、隨而先生達にも、多年天下之爲御盡力之事候へは、此節柄御高論も可レ有レ之、一體此度之御趣意筈と御承知候哉、猶又御物語にも及度、御近所迄罷越候故及ニ推參ニ候との事に付、雪江相答候には、誠に難レ有恐入候御時態、右に付大藏大輔も、宗家之御大事、天下之大變、不ニ取敢ニ命に走り候迄に而、中々定見と申も無レ之、御趣意柄之義は、被ニ仰出ニ之御書面、且此頃登城御直に相伺候義共に而、誠に以公明正大之思召候へは、當時におゐては何卒右御盛意を、とこ迄も貫徹仕候樣盡力仕度と申より外、君臣共に別段之見込は無レ之段相答候處、夫は御同意千萬之事に而重疊之義、元來如レ此御運ひに相成候に付而も、其以前大に監察初諸有司を御前に被レ召、御書付御開示にて、我等最早是より外に見

込は無レ之、其方共は如何おもふ、神祖以來之鴻業一朝に廢候處は、奉レ對ニ御先靈ニ恐入候姿候得共、畢竟天下を治め奉レ安ニ宸襟ニ候は、即神祖之御盛業繼述と申もの也、方今德川氏武備衰弱して、天下諸侯を制馭するの威力無レ之而已ならす、廿年來之非政を數へ立られ候へは、一言の申譯無レ之次第、此時に當つて、空敷神祖覇圖之形迹計を執着し、此儘に持堪へんとすれは、無理計多くなり、罪責は益增加、遂には奪はるゝにも至るへきは必然と見切り申候、依レ之今政權を朝廷に還し奉り、政令を一途にし、德川氏之有ん限り、力の及はん丈けは、天下諸侯と共に朝廷を輔け奉り、日本全國の力を戮せ、外夷之侮りを禦き候事に相成候はゝ、皇國今後之目的も定り可レ申、乍レ併是迄も見越の事に而、急度見居へ通りに行くか行かぬか、其邊迄は見貫き難く候へとも、先つ治るへき條理丈けは如レ此と存候、又是迄通りと申事も、出來さへすれは致間敷にも無レ之候得共、是は決して出來ぬ事と慥に致ニ覺悟ニ候、何も存寄あらは申せとの御意故、一同感服之姿には候得共、矢張幕權執着之向も多く、彼是と咄き合候迄に而、上意を返し奉り候程成明辨も無レ之、咄々喃々罷在候處、又上意に、此節潛伏之徒事を謀り候趣相聞へ、夫か爲に恐怖して俄に大權を擲ち候樣に存候向も可レ有レ之、潛伏之徒如何程ありとも、多寡之知れたる事に而、討は討つへく□□□へく候得共、此處を能思慮すへし、我等如レ此在京せるは何の爲そや、かゝる時勢故、螭下之驟擾を鎭定し、叡慮を安んし奉らんか爲めなり、然るに非德の我等罷在候故、右等之禍根を釀し來りしなるを、又干戈を動し是を討に至つては、宸衷を煩動し奉り、生靈を困苦せしむ、其罪重大にして、一つとして義理に當らす、忠貞之素志も空敷事に相成候、從來我等非才不德にして、大統を繼くに堪へさるを知る故に、昨年も相續を辭したる事は、何も承知之通候得共、不レ得ニ已事ニ繼きたるも亦承知之譯にて候、其節も我等相續におゐては、迚も此體にては難ニ差置ニ大變革をやらねはならぬ、夫てもよいかと申候處、伊賀初承知之事故、其以來端々取懸り、旗本抔之事も、當時之處まてやり候へとも、中々是式の事にて行くものにも無レ之、何分非常之事業に無レ之ては不ニ相適ニと存込候は、決して昨今の事にては無レ之、根底深く有レ之候、

又將軍職之義も固辭候へとも、是以先朝之叡慮も有レ之、不レ及二是非一事候處、果して不レ堪二其任一事々此に及ひたる事候へは、憤然自ら反して、己を責め私を去り、從前之非政を悔革し、至忠至公之誠心を以て、天下と共に朝廷を奉二輔翼一候義、乍レ恐神祖之神慮にも適ひ可レ申、神祖は天下の安からんか爲に政權を被レ爲レ執たるにて、天下之政權を以德川氏に私しせられたるには無レ之候得共、我等は又天下の安からんか爲に、德川氏之政權を朝廷に還し奉る也、取捨異なりといへとも、天下を始め朝廷に奉するの意は一なり、汝等も亦能此主意を體認すへしと、又上意に、神祖之御時代と違ひ、外國之交際如レ形事と相成候へは、是迄之體に而交りを全ふしかたし、外國も次第に日本之事情を詳にすれは、今日と相成候而は、外國へ遣す處之使節は、德川氏之臣僕にして陪臣なり、陪臣をして帝或は王に使す口口外國にても既に其說あり、然れとも政令一途に出れは、假令陪臣たり共、朝命を奉して使すれは即ち朝使なり、禮典におゐて缺る所なし、已に當夏、外國公使華城櫻門內まて乘馬せしめしを、彼是批判すると聞けり、外國の情に通せすして、皇國の尊をのみ知るものは、左も有へきなれとも、日本使外國に到れは、陪臣にても玄關前まて騎付る事也、然るを彼を下馬にて下馬せしむる時は、此方の使節も、和蘭如き小國に至つても、外郭より下馬せすしては不二相適一、其國辱を外國に曝すなり、大小輕重いつれそや、又往復書翰之書法文例に至るまて、一つとして禮に當らす、自ら尊大にして傲慢甚し、彼もし儼然として其失禮を責問するに至らは、一言の返すへきなし、今兵庫開港一新之時に當つて、政令を一にし、此等之非禮を改革し、信義禮讓を以て交らされは、いかてか其誼を全ふすへき、此開港之事も、朝廷にても開くへし、諸侯も開くへし、幕よりも開かんと乞ひ、一の異議なき事なりしに、勅許之際に當つて、不レ被レ爲レ得二已事一之文段あり、是か爲に大に物議を起し、迫つて許されたりと云、是等皆二途に出るの大弊にして、交際を全くしかたき所以なり、又諸侯割據之說を唱ふる者あり、今已に割據に非すや、德川幕府之威令行はれす、召せとも事を左右に托して不レ來、是幕府而已ならす、朝命といへとも亦爾り、割據ならすして何そや、此時に當りて朝威を翼け奉り、諸侯と

共に王命を奉戴して、全國侮禦に力を盡さすんは有へからす等、逐一之御明辨によつて、何も一言の異議なく敬服に及ひたる事の由を、堂々として談說有レ之に付、御趣意一々感服之至に而、可レ奉二問然樣は無二御座一候、扨夫を眞成之御事業に施され候御手下しは如何候哉と問ふに、何分朝廷は勿論、諸侯以上、唯私を去り候へは夫にて治る事故、上樣之大公至誠之御誠意を御打出し、其上は衆議に爲二御任一之御積に而候、夫より上下院大學校等之施設にも可レ被レ及歟、（私云、此に至つて分明之定說なし、）神祖は撥亂反正之機運に乘せられ、如レ此至治之御開業、御盛德は申も恐なる御事にて、其節は士庶共に亂世の習俗を忘れしめんとの、御遠略被レ爲レ在候御貽謀によつて、漸次に數百年之太平と相成、其レ習弊又亂を忘るゝに過き、德川氏も驕惰に流れ、武勇衰へ、今日之禍根を生し候事故、此時に當つても亦一轉して政權を一途に歸せられ、墜を千仞に救ふて、再ひ太平の天に回され候へは、當上樣之御盛業神祖にも劣らせられす、畢竟天下を泰平にし、宸襟を被レ爲レ安候儀、神祖之思召に而、又天下之至善も此に止る事候へは、其地位にさへ御恢復被レ爲レ在候へは、別に期すへき事も無レ之、孫太郎輩臣子之分として、此度之御盛意を乍レ不レ及贊成擴充仕候義、今日之忠勤と存詰候事候へは、大藏大輔樣にも御輔佐被二成上一、御盛業之御成功を奉二企望一候、次て先生達にも亦大藏大輔樣を御輔佐被二成上一被レ下度と、忠憤面に溢れて演說せられたり、〇別話に、先達而佛公使大坂へ參り候節之會話に、面白き事を申候、佛之公使を日本に沿くは、日本をして富强ならしめんか爲なり、日本之富强を謀るは則公使之任なり、日本は人物土地東方無比之國體にて、產業を開かは富强日を數へて待へく、東海之一强國となる也、其强國と同盟なれは則佛國之强なり、弱國との同盟は世話計りにて益なし、東海に强國あつて夫と同盟なれは、佛國之便宜莫大なり、夫故に一日も早く日本の富强を欲するなり、就ては日本の事情を知らん爲に、先つ御當代之歷史を翻譯せしめて一覽せしに、權現樣之御盛德は如何にも可レ仰事にて、被二建置一たる御制度も實に無二間然一候、夫故二百餘年之太平も御保ち之事候へは、是を容易に御指揮ひは決して不レ宜、外國は多く郡縣候へは、其國々との交際、封建に而は不釣合なと、、其處へ

御手を入られ候而は、以之外騒動を引起し可レ申候、外國にも封建を郡縣に改め、都合宜處も有レ之候得共、日本之風、必左樣には參るまし〳〵候、只政令の一途になり、全國之力合ひ候樣の御取計肝要なり、夫は此通りと、其處なる箸を取り、一本つゝなれは折れ安く、二本を一處にすれは折れ難きを譬喩にせり、扨又權現樣御制度、殘る處無レ之とは乍レ申、海陸軍之御備へ無レ之、是は時代にもより可レ申候得共、當時となりては御缺典なり、何分盛んに海陸軍を御起し無レ之而は、強國には至り難く、夫も富か第一に而、富されは強からす、富をなすは物産を開くか先務なり、此日本富饒の國を以て、物産如何計も開かるへけれは、此處へ御力を竭され度と申せし由、

○同月廿日、午半刻御供揃に而御登城有レ之、伊賀殿へ御逢に而、即今御事業御手下し之處御口問之處、當惑のみにて疑としたる了見は無レ之、何分上樣御逢可レ有レ之候間、御直に御伺被レ成候樣にと被レ申由、右之次に、已來は何時に而も御都合次第御登城被レ成候樣、其節は御用部屋へ御通りに相成候へは、手間取も無レ之、公私之御都合宜と御申之由、公御用部屋は御斷り之旨御答おかれし由、

一、内府公へ御對顏有レ之、猶又今後御事業之御見込御伺之處、方今之形勢、箇樣無レ之而は不二相副一と御定見被レ爲レ立事候へは、政權を御還し、政令を一にして皇威を復せられ、天下之心を合せ、諸侯を會同し、公議を興し、天下之疑を去り、皇國之維持に御一世之御力を被レ爲レ盡、御紀綱御振起被レ遊、神祖之尊王至治之御鴻業を御繼述被レ遊度之外、御餘念不レ被レ爲レ在趣、不動泰山之尊慮確乎たる御義に付、公も無二御間然一御同意被二仰上一、何分被レ爲レ在限之御心力を被レ盡、御盛意御奉戴御輔贊、可レ被レ及二御忠勤一と、御契合之御咄話に被レ爲レ在由、御退出之上、御家老初へも台慮之趣被二仰聞一、一同奉二拜承一、臣子之御奉公は此秋にありと感激せり、

一、今日御登城、内府公へ御直御伺之處、彌御盛意御更張に付而は、猶以御同意御盡力可レ被レ遊に付、其段御國表へ爲レ被二仰遣一、本多修理立歸り被二仰付一、翌廿二日被二仰進一之御趣意御書取持參(◎誤脫あらん)、夜寅半刻早馳之積に而出立せり、

御趣意御書取

上樣御英斷之次第は、過日登城之節相伺候而、略及二陳啓一候通候得共、猶又昨日登城、段々相伺處、大權を朝廷へ被レ還、皇威を被レ復、政令を一途にし、天下之公議によつて、御家の有ん限りは朝家へ御力を被レ盡、神祖之御盛業を御繼述被レ爲レ在度との思召、誠以感泣敬服之至に付、我等義も乍レ不レ及身命を拋、休戚成敗を不レ顧、只管御盛意に御同意可二申上一と令二決心一候、依レ之委細之情實は修理へ申含差越候間、於二其表一も夫々其覺悟有レ之樣にと存候也、

十一月

私云、於二御國表一此段之京狀に狐疑有レ之、方向不一致之情態も有レ之故、御一定之御直書持參に而、御家老中を被レ遣候なり、

○同月廿二日、藝州より傳奏衆へ屆達之由如レ左、

毛利家より別紙之通使者を以申越候、尤此儀に付而は從二朝廷一御沙汰有レ之候迄、上坂可二見合一旨申達候樣、從二朝廷一被二仰出一候に付、其段毛利家幷吉川監物へ相達候樣、去る十日從二幕府一達有レ之に付、早速以二使者一申達候得共、全行違に而差越申候間、一應御屆仕候、此段可レ然御執奏被二成下一候樣奉レ願候、以上、

十一月廿一日　安藝少將

別紙

朝廷御召之段御達有レ之砌、末家中氣分相罷在、重大之御沙汰筋等閑打過候義奉二恐入一候に付、不二取敢一家老中計發途爲レ仕候段及二御達一置候處、末家之内少に而も病氣快候は丶、一同大坂表へ可二罷出一との御事に付、種々保養相加候得共、今以綻々無レ之、追日遲延仕候而は重々恐入候義に付、淡路名代毛利平六郎、幷家老毛利内匠、監物名代宮庄主水、一同爲レ致二上坂一候間、旁之趣朝廷向宜御取計致二御願一候、

○同月廿二日、去る八日宇和島老侯より御來書之内、此地之形勢御關心にて、事情御承知被レ成度段被二仰越一に付、今日右御報被レ遣、御書中摘二要論一、

一、十月十三日曉雷閣より一書來り、後藤象二郎之建白にして、容堂より之書付も相廻し相談有レ之、僕心底直に返二報之一、兼而之心緒故不レ贅候、十五日京報あり、幕公政權朝廷へ御歸被レ遊候書付、諸藩臣

條城集會發令之趣、帶象將を初數人謁見等之事、御承知と存候故不二申上一候、此時幕命あり、僕父子之登京也、尤諸藩同樣之由、十七日京報に而、朝廷御許容、僕上京之降命あり、僕不快に而越上京を命せり、依レ之酒井十之丞早打に而上京せしめ、雷閣に謁し內府公之深意を伺ふ、雷閣辨レ之、僕何分登京せよとの事、越上京候共僕罷出候樣、僕上京なれは越は夫に不レ及との事也、僕の不才、再上實に難レ堪、且苦勞存候得共、名義難レ辭、遂に以二十月二日一發越、八日入京仕候、十日入二條城一內府公謁見、段々深意拜聽候處、反正之卓識確乎たる事に而、幕私渾而拋却、幕權を歸二する朝家一決而哀惜之念一塞拂地、公明正大之尊慮、先日御書付之通り、在國中聊疑念も有レ之候得共、氷解之事と相成、實に當夏謁見之時とは、御見識如レ洗、爲二天下一榮幸雀躍之至、僕輩不肖庸愚といへとも、輔賛口口翼二戴朝廷一せすんは、生甲斐も無レ之事、即此度は乍レ不レ及盡力可レ仕と、一心決定罷在候、修理大夫も明日入京ときく、蠹世子も不日入京、容堂も近日火船を馳せ登上之趣に御座候、兼而御相談之上、幕私幕權之頑固なるを歎息して、當秋傾二離杯一候處、此度は盟臺僕等之素懷大願暢達之世に逢ひ、內府公之反正無レ疑事と相成、薩土藝も敬服、輔二賛內府公一せんとの趣也、盟兄素情相達、大願成就之世に當つては、實に歡天喜地之至と可レ被二思召一、左すれは早速に御上京御盡力、御適當と奉レ存候、方二此時一不才也と被レ稱候而は、天下之志士、盟兄を依賴する事拂レ地に必可レ至、是辱弟爲二盟兄一所二以泣血一也、一昨日も僕入城謁見之節も、內府公、盟兄何卒出京、共に相談致度との御咄も有レ之候間、旁以一日も早ふ御入京奉二渴望一候、爲二天下一爲二知己一爲二國家一にも、御勉强被レ爲レ在御上京に候へは、不才之僕も亦萬事附二驥尾一御熟談申上候へは、盡力の大たすかり、私事之爲にも偏に御登上奉二希上一候、下略

○同月廿三日、宇和島藩須藤但馬、西園寺雪江參邸、豫州出帆後海上に而手間取、一昨日大坂着、後藤象二郎へ逢ひ、此地之事情承候處、國許へ相聞候とは大相違に而、國論に而は、當主之方登京可レ然と二途之說も有レ之、且疲弊も甚敷候得は、遲引之策可レ宜抔との事に而、段々出立も遷延之處、此表之形勢に而は、

早速之上京ならては不二相適一事候へは、爲二御迎一兩人罷越度候得共、國論之次第も有レ之候へは、老公樣御直書頂戴被レ下度段申レ之、持參致候豫州老公御直書指二出之一、如レ左、

一束呈二研北一候云々、然は追々御承知之通、容堂兄大事件建白之處、存外速に御悔悟御反正相成、誠以恭賀之至奉二感泣一候、就而は大變革に付、萬石已上被レ爲レ召、本月中到着可レ仕旨、盟臺迅速御上京可レ被レ爲レ在、隨而容堂兄發程候半、過日臥內臣武市八十衞被二差越一、相談も有レ之候得共、右は上京御沙汰以前に付不二相分一、尙出立時合尋道御さ候、吳々皇國挽回維持、五大洲へ獨立之大事業、基本網目被二相定決一候秋、此度社御盡力之時と、伏而奉レ仰二鼎力一候、忽僕蒙レ召候に付、早々出立可レ仕筈之處、折柄所勞に付、少々御猶豫奉二願上一候處、重臣上京申付候に付、心緒閣下へ申上度、家僕須藤但馬、西園寺雪江、口頭托置候條、御聞啓被レ下候樣、御敎示乍レ憚奉二希上一候、依而文略仕候、何れ不レ遠面盡と奉レ存候、早々頓首、

仲冬初五日

越前宰相樣　　伊豫守

○同月廿四日、須藤但馬、西園寺雪江、拜謁之上相願候は、此表之時勢、國許に而承及とは相違いたし、於二此地一國論之次第、土薩等へは不レ堪二羞慚一、難二申出一程之仕合に而、何分一日も早く伊豫守樣御上京之運ひに致度候得共、兩人限之存寄にては、國議を排斥之儀難レ仕候得は、御催促之御直書頂戴、夫を力に御迎罷出度、土州之火船も、何時に而も御用立可レ被レ成との事之由申上候に付、公被二仰聞一候は、御上京御勸誘之御直書は、則昨日も被二指出一、嚴敷被二仰遣一候事候得は、此上は此頃御登城に而、內府公御沙汰も被レ爲レ在候事候へは、其邊を以板倉伊賀守殿より直書被レ遣候而は如何との御義候處、兩人、左候得は猶更難レ有、早速御國許へ罷越、是非御供上京可レ仕と申上候に付、左候はゝ伊賀殿直書之義は、此方樣より御申越に而、御渡可レ被レ成との御約束に而退去、○右之次第伊賀殿へ以二御直書一被二仰遣一候處、伊賀殿より上樣へ御伺之處、至極可レ然候間早々書面遣候樣との御沙汰之由御返書に而、伊豫侯への御直書添御遣しに付、兩人御呼出御渡有レ之、

一、此日板倉殿より御直書に而、島津修理大夫昨日上京之處、小松帶刀不ニ罷上一、右等に付御承知は無ニ御座一候哉、御心付も有レ之候はゝ、御登城之上被ニ仰上一候樣御申越有レ之、〇右に付知邸より承調候處、足痛に而上京不レ仕、右代として岩下佐次右衞門致ニ御供一候由返報有レ之、事情不分明に付、猶又青山小三郎へ被レ命、吉井幸助方へ罷越承候處、帶刀儀先達而着薩之砌より、持病之足痛發動、人手に掛り漸く致ニ歩行一候仕合候得は、是非御供と乍レ存難ニ相適一、無レ據相殘候而溫泉へ罷越、快氣次第馳上り候積りに而、質病相違無レ之、夫故土州へは、無レ據大久保一藏罷出候由申出候段、小三郎罷歸申上候に付、其段伊賀守殿へ御直書を以被レ仰ニ遣之一、

一、右之節幸助云、追々諸侯御上京に付而は、何卒少も早く公議之御運ひ付き不レ申候而は、遷延之內如何成事變も難レ計、別而近來暴逆之徒橫行、坂本龍馬を始不レ盡之事有レ之、七條に而石川甲子太郎暗殺抔も可レ惜事に而、彼は頗有志に而、先達而之建白抔は、一々尤至極同論之事共之由、〇追々之御手順御見込、大藏大輔樣には如何と申に付、御盛意御擴充より外に御見込無レ之、公明正大之御雄圖、御直にも再度御伺ひ、御感服御安心之旨相答候處、如何にも上樣には可レ奉レ疑樣は無レ之、永井殿抔も御同樣之由候得共、唯板倉侯等には、矢張奴懸之心底有レ之哉にも疑ふ者有レ之、修理大夫樣にも、いつれに御相談も被レ成度、兎角御手後れに不ニ相成一樣、來月十四五日頃迄には、大綱丈けは御居りに不ニ相成一候而は不ニ相適一、いつれ之道にも此度之機會を失ふ時は、土崩瓦解と焦思候段論談之由、〇又云、此間下坂、サトウ英國通辯官、日本語に能す、に逢ひ候處、追々開港期限にも相成候故、各國來舶之運ひ候由申候、孰れ其節は何の彼のと申出候義も可レ有レ之、御手前も其頃は御多事に可ニ相成一、自然可レ及ニ混雜一と被レ存候由、乍レ併其機會に、却而朝廷に而も御手數も被レ爲ニ出來一、御都合に可ニ相成一との見込之由、此度抔、大久保、勝之兩先生御用ひ無レ之而は不ニ相成一、大は御左右御輔佐、勝は海軍惣督、兩先生に限候抔申候由、

一、今朝十之丞土邸へ罷越、象二郎明日參邸候樣申傳候處、此間龍馬暗殺人も露顯に付、一同に氣立、甚心配之由、何分今明日に歷付け御◎仕カ廻候積之由、先達

而中象二郎御國へ參上、此度之始末委曲老公へ奉ニ言上一度心算之處、手透無レ之故、無レ據龍馬指出候事之由、願ふても參上仕度折柄候得は、明日參上委細可ニ申上一段及ニ御請一、

一、右歸途尾老侯御旅館へ罷出、田宮如雲逢對、昨日御登城被レ爲レ在由、御都合如何候哉、御承知被レ成度との趣及ニ對談一處、至極之御都合に而、御直に思召入御伺ひ、是迄之疑滯惣而氷解之次第之由、

〇同月廿五日夕、土藩後藤象二郎、福岡藤次、神山左太衞參邸、拜謁被レ命、是迄之次第、且今後之見込等申上候樣被ニ仰聞一候處、象二郎より是迄之手續申上候所は、粗先日藤次より申上候と同趣に而、扨今後之儀は、小松帶刀と深く申合せ候義有レ之、象二郎國許へ罷越、帶刀も歸國之上、國許同論と相成、修理大夫樣も御上京に相決候得は、帶刀は直樣出帆、土州へ立寄、尙又象二郎申談、同船に而上京之契約に付、於ニ國許一屈指相待居候處、帶刀は足痛に而旅行難ニ相成一に付、湯治罷越、御跡より罷上り候由に候、併帶刀之足痛、甚失望而已ならす且は異敷、自然於ニ國元一帶刀之說不ニ相立一事と相成候へは、帶刀は乍レ恐內府公を奉レ初、私其迄へも面目無レ之、迚も難ニ罷出一筋に候由、就而は一日も早く、御上京之各侯丈け御會議相始り、至公至中之大本相立候へは、其上誰彼物數寄を出し候とて、之出來候ものにも無レ之、もし物數寄を出し候とて、立行ものにも無レ之、自然と公論ならては不ニ相適一事と相成候樣に押寄せ度、夫も此度之御盛意奉戴、公明正大之同論藩、堂々と旗を立候へは、夫に而勝算は相定り候と申もの、其上に而公卿方と申中にも、正三卿は御格別候得は、此卿へ熟く入說いたし、先つ上京諸侯を被レ召、意見御尋に相成、其御答之御次第、御簾前之御評ひに相成候はゝ、夫に而大本相定可レ申候、夫より議事院等之事に相成、種々條目に亘り、公議可ニ相立一儀と被レ存候由、乍レ併公卿方と申は、外より入說に動搖之癖有レ之、箇樣之折柄、必定所々へ煽惑之說も可レ入候得は、其豫防には同盟藩多勢之力を以、正說を先入固結するに如く事無レ之、一藩に而も同論多き方、力も強く說も立可レ申との定見、詳達レ之、〇於ニ控所一、猶又雪江十之丞小三郎等、前文之次第反覆討論、此方樣よりは尾肥へ可ニ申談一、土藩よりは薩へ可ニ申談一、因備へは薩より可レ爲レ談、薩は素々同論

に而、聊嫌疑無レ之由、薩へは明日にも可二申談一、愈小松と約定之通に運ひ候へは、何之子細も無レ之、同志藩丈けは、整々堂々之正論を立候而可レ然、何分明朝は永井殿へ参上、猶御内意之處も相伺ひ、其模様可レ及二案内一、其上に而同論藩樞要之向會合、篤と手續迄も及二示談一、夫より公卿方へ手を入候様可レ致と申談す、從レ是は明朝早々尾肥へ打合可レ申と談したり、

○同月廿六日、今朝雪江田宮如雲旅寓を訪ひ、昨夕之次第、土藩見込之趣、逐一及二物語一候處、都而同論に而聊も異議無レ之、何分正大之御盛意貫徹すへき爲に御上京之事に而、是等之次第素より所レ願候へは、尾侯にも決而御同意無論之由、此時と成ては、同志へは同志丈け之正論主張之外は無レ之、及二反覆談論一たり、

一、同日肥後邸へ酒井十之丞罷越、津田山三郎へ逢對、青地源右衛門も來會、夫より申談之次第一々徹底、第一内府公御英斷御特立、老公御直に御伺之御模様等拜承、何も新聞之由に而、群疑氷解感泣、奉戴は勿論に而、同志之一致、公大正明之立論等悉〳〵同意、夫より藩老溝口孤雲宅へ會し示談之處、是以異議無レ之、早速兩公子之内御上京之儀、明日飛脚指立可レ申、惣而同意同論候得共、猶及二衆評一、明日孤雲參邸、十之丞より傳命之趣、一藩悉御同意之趣申上、仍レ之肥後表へも、越中守様良之助様被二仰合一、御上京に相成候様爲二申上一、昨日飛脚差立、猶淺井新九郎爲二御迎一指上候積之由申二上之一、

○同月廿七日、今朝雪江後藤象二郎を訪ひ、永井殿消息承候處、則今朝參謁陳啓之處、同氏も尤同論に而、當時勢に付、往々之見込は夫々有レ之候得共、手初之處、幕より端を開き候而は嫌疑にも亘り候へは、此處外藩にて緒を引出し候へは、大に都合宜候間、一日も早ふ取懸りに相成候様致度と、殊之外大悦に而有レ之由、此運ひ候へは、彌以成丈け手を廣け、同論多く相成候様致度との事故、尾肥兩藩へ示談同論之趣及二物語一處、大に安悦せり、○容堂様廿三日御出帆、來月二日三日には御上京可二相成一候へは、夫迄に精々同志之藩語ひ置、猶御談申上公卿方へ出懸候積之由、○今朝永井殿之咄に、日本紛には郡縣に可二相成一との上様御見込之由、是は英國往古封建なりしか、公議の

上、郡縣ならては强國とは難二相成一と決し、郡縣と相成候事故、日本も夫に類し可レ申との御説之由、

一、今夕薩藩大久保一藏被二召呼一、拜謁被レ命、此度有志輩盡力によつて、内府公御反正被レ爲レ在候御挨拶一應被二仰聞一、夫に付き今後之見込御尋に相成候處、此時朝廷之御基本不二相立一しては不二相適一事候處、兎角朝廷に御人材乏敷、其處甚苦心之由、會議公論之義も、孰れに正大に歸すへき事なから、御手下し之次第如何相成可レ然哉、邸議一定不レ仕、決定之上は、いつれに相伺候心得之由申二上之一、○内府公へ御直に御伺、御英斷之御様子等被二仰聞一候處、今一層御實行に不二相顯一候而は疑惑難レ晴、紀會桑等之雜説も有レ之候へは、何卒一日も早く御實跡相顯はれ候様願はしくと、反覆申二上之一、帶刀足痛、持病に難澁相違無レ之、療養之上、來月中旬頃迄には上京可レ仕哉と申二上之一、

○同月廿八日朝、會藩手代木直右衛門を被二召呼一、拜謁被レ命、此度之御一件御英斷之御次第、逐々御承知に相成候處、御盛意無二御間然一御同意に付、何分とこ迄も御隨順御奉戴被レ成度、夫に付肥後守殿御見込等如何有レ之哉、御家來共に於ては、今後之處如何相心得候哉と御尋之處、直右衛門申上候は、御盛意貫徹希望仕候は、肥後守は元より、家來共も一同御同然之義に御座候得共、唯々今後之見込に於ては甚心配仕候、畢竟肥後守在職已前より存込居候は、徳川家之政權は朝廷へ被レ歸、幕府に而は王命を奉し、順正之御政道に相成候はゝ可レ然と存居候處、此度之御一擧に而、年來之誠心も違却仕、失望之極地に御座候、政權を一途に被レ歸候は、乍レ恐御尤至極之御儀奉レ存候得共、幕府迄御捨被レ成候而は、治り方附き申間敷、公議と申も如何之運ひに可二相成一哉、更に見詰無レ之、議事院と申ても、外國之制度通りには、中々急に可二相運一とも不レ被レ存、人材御擧用も御美事には候得共、如何程之人材出候而も、何事も取扱ひ馴れ不レ申候半而は、今日之御用には立不レ申候、是も舊幕府之御役人ならては迚も行き不レ申、又朝廷とても、乍レ恐御人材無レ之、中々王政復古抔思ひも寄不レ申候、彼を思ひ是を思ひ候而も、舊幕之御制度より外に治平之見込は無レ之、過日御所に而、太政官初、八省御取建之御見込之日則御垂問之御書付、尾越へ出候との事に而、致二拜見一候得共、是等も盡併同様之御義たるへく抔、

唯舊幕制ならては難二相適一意味、反覆懇々申上之一に付、公には、何分上樣御盛意行違無レ之致二徹底一候樣有レ之度、外藩より見入れ候而も、親藩中上旨を取違候而は、貫通は不レ致、却而致二妨害一候樣に被レ思候而は相濟不レ申、此處一藩之示談、十分行屆候樣被レ成度と御申聞に而退座せり、○控所にて御勤役共出會、申談候趣意は、上樣如レ形御立派之御英斷に而御打出し、大公至正之尊王族を被レ建候事候へは、親藩一同一心同力、整々堂々英章之旗を建連らね、尊王之御味方申上候はゝ、今後誰あつて抵抗する者有レ之間敷、國初之形勢に而も可二想像一事に而、其時に當り彼是と私說を主張致候向は、異論之徒候へは、夫は討つても天下の許す處なり、然れは當時之見込は、公議之時を待て可二申出一儀に而、方今は閑是非之論は鉗口して、唯只管に御公正之御趣意を、何處迄も押通す同一體に相成度と及二議論一處、一心同力異論を討つ之議に至つては、其大體を了解し得たれは、猶熟考之上追々及二示談一度由、最初後藤とも及二談論一、正大丈けは無論候得共、公議之末見込無レ之、其節頻に同意可否之返答を被レ責候得共、幕府之御都合難レ計に付、一

藩限之挨拶にも及兼、暫時甚困窮之次第に有レ之由、一、今日午後御登城、伊賀殿へ御逢、兎角薩藩之嫌疑氷解せすしては、今後之御手順不二恰好一、昨日も一藏御呼出、御直に御談之處、疑念深く有レ之哉候間、吉之助一藏等被二召呼一、御直に御說得有レ之候はゝ、夫々安着にも可レ至歟と、御存寄之處御申入之處、可レ達二上聽一との事に而、申上に相成處、至極御尤に思召候旨、被二召出一候儀は尙御考可レ被レ成との御義之由、○伊賀殿より、此節英船渡來、上樣へ拜謁相願候得共、當御時態御下坂も難レ被レ成に付、永井被レ遣候、英入京申立候はゝ如何致候半、心痛之由御談に付、公、當時と相成候而は何之御苦勞も無レ之、其段朝廷へ御伺可レ然と被レ及二御挨拶一由、

一、今日御退出より尾老侯御旅館へ被レ爲レ入、頃日之御次第共御物語、爾來之御見込、御周旋可レ被レ成御手續御談に相成候所、惣而御同論御同意に而、御都合尤よし、御家老渡邊對馬守、田宮如雲陪侍之由、成瀨隼人正は齒痛に而不參せしとの御沙汰なりき、

○同月廿九日、藝州より朝廷へ御屆之由如レ左、

先達而長州より以二使者一申越候書面へ、以二添書一申上候通、板倉伊賀守より之達書行違に相成、毛利淡路名代等一同、領內御手洗へ着仕候間、右達之旨趣委細申聞候處、兼而必至之國情、一旦出帆、中途より引返候而は、大に國藩人心に關係仕候義に付、其儘登坂、何分之御沙汰相待度旨申聞候趣に付、任二其意一家來指添、於二西宮一停泊仕候に付、家來之者昨夜着坂仕候旨、只今申越候間、此段不二取敢一申上候、可レ然御執奏被二成下一度奉レ願候、以上、

十一月廿九日　松平紀伊守

○同月晦日、荒川順助爲二探索一津藩に至り、□逢對藩狀承調處、此度は十分盡力之勢に而、六大隊を出す沙汰之由、藩論二分之一は御盛意奉戴之論、一は兵威を盛んにし、外藩を壓倒し、復權之論之由、先ば兵力論之方多分之由、○長州藩二千人昨日着坂によつて、入京せる時は抑留すへき論有レ之由、○又大聖寺藩に至り、金澤之藩狀を問ふに、此度十分肌を脫き盡力すへきの論に而、周旋家も數人上京、いつになき奮發之由に付、肌をいつれの方にぬき候哉と問ふに、夫は不分明との答なるよし、

一、此日藝州より密使を以、攝政殿下へ言上に相成書付之由如レ左、

此度長州家老幷末家名代監物名代共、一同上坂爲レ致候而、御沙汰相待候樣之次第、表向御達申上候得共、極內實は、兵庫開港之期も最早差迫り候に付、此度幕府政權を朝廷へ復歸候に付而は、外夷御取扱之義も、何れ朝廷より可レ被二仰出一御義に御座候得共、兵庫開港之義は、先帝へ被レ爲レ對候而も、一先御延引可レ被二仰出一儀歟に奉二恐察一候、然る節、外夷共いつれ朝廷へ相迫り、御應接振によつては、自然暴擧の儀無レ之とも難レ申、幕府には征夷之職掌を被レ蒙候得共、從來外夷と親◎和イ睦被二相結一候上は、爭か干戈を被レ爲レ交可レ申哉、左候はゝ後日萬一國體御動被レ爲レ在候而は、誠以驚愕至極之次第に御座候、大膳父子未御沙汰之通、實は承知不レ仕候得共◎而もイ右樣之節に相臨み、誓て傍觀仕間敷、粉骨碎身仕候而微忠を盡し、一方之御防は仕度と之寸志、則紀伊守におゐても難二默止一、此段極內々歷二尊聽一申置候事、

十一月晦日　松平紀伊守

尼ケ崎屋敬爲レ知扱書

一、昨廿九日西宮打出濱より長州人上陸、夫より尼ケ崎領分上ケ原村へ入込候人數凡千人計、同處に而下宿借用致度旨押而願出候に付、村役人代官所へ訴出候に付、即日同所城より早打を以、京都屋敷へ飛脚到來、昨日又右に付遠江守御暇願濟に而早々出立、在所表へ取締旁歸邑相成候事、

○慶應三年丁卯十二月朔日、此頃長州人多勢上坂、遂に入京も可レ致趣風聞有レ之、朝野之人心不レ穩に付、今朝被レ命雪江梅澤殿を訪ひ、長人上坂之虛實承調候處、大分之人數攝州西宮邊迄罷越候由、右は御指留之朝命と行違ひに相成り、上り來る由なり、蠖より奏聞も有レ之、猶歸國之上諸侯會議之評決を待候樣降命之處、國情無レ據譯合有レ之に付、其儘滯坂之義を願出たる趣、蠖より再達有レ之、元來長州は、近來自ら正義之國と誇稱致しながら、如レ此の朝命を拒み、國情申立候義、第一之不義なり、蠖は左樣之不義を隣國之好みに說得は不レ致、其願書取次たるも亦不屆なり、諭告の上にも歸らす、願書指出候とも不二受取一候へは事濟べきを、不義之取次は相聞へす、其儀及二詰問一度、辻將曹呼出候得共、不快之由にていまた出不レ申との事故、押て上京せは是非とも抑留せんとの風說は、實事に候やと問ふに、畢竟夫は朝廷之御取計ひに有事なり、急度歸國候樣被レ命候而可二相濟一事なるを、御捨置被レ成候はゝ、如何成不法を働き候半も難レ計、素々謀反之國なる事は、先年堺町之一亂將に發せんとする際、於二伏見表一福原越後之反狀を推究し、嚴敷及二詰問一、陰謀無二相違一趣を吐かせたる事あり、此度も其節の轍跡なれは、不法は元よりの事なり、押登るに當て、過路關門守衞に手向なと致候はゝ、指留るは勿論にて、時宜により騷動にも可二相成一と被レ申に付、夫は守衞之向なれは不レ及二是非一候へ共、自然會等出懸候勢には相成間敷歟と申候へは、長人洛中へ入れ不レ申樣、兼而命令も有レ之事候へは、會迚も相手になり申間敷とも難レ計、元來押登るといふか長之不義候へは、法之通りに取扱ふか公正之道にて、更に指支無レ之、勿論幕府に而は進退共に聊關係無レ之、傍觀する迄、總而朝廷之思召次第なりとの事に付、幕に而も彼是御指綺ひ之事に候はゝ、一言可レ獻と存候得共、朝廷へ御任せと拜承候而は、安心之至に而、別に可レ申條無レ之と答へなり」問、紀州水野安藤上京の沙

汰あり、如何成譯に候哉、答、夫は原因ありし事なれとも、事已に成候き、水野も昨日京着せり、當時水野全權に而、昨年之戰爭、且今度は紀伊殿京都に腰を被レ居候積故、入費莫大に付、士民より餘程之收斂有レ之、且楮幣を制し融通候處、澁滯難レ被レ行、不益之譯等出來候由、安藤之黨是を好機として、安藤なれは左樣には致間敷と說を唱へ、怨嗟之衆心を執り、水野の權柄を奪んとの計略にて、一時は餘程之騷擾之由、乍レ併楮幣懸り之役人五六輩貶斥せられ、夫にて靜謐に及ひ、安藤之隱謀は空敷事と相成、紀侯も近々御上京之趣なり、素々佐幕之忠實は有レ之候得共、一等卑き處遣慨之由」雪江云、兎角御盛意之妨障に相成候說共相聞へ、殘念成よしを申に、眞に然り、尾も先日成瀨に說き、是は會得、會の手代木も說得、是も可也に合點行しとの事に付、手代木は此間弊邸へも相招き、直問も有レ之、吾輩も及二示談一候得共、今一層行屆不レ申、心外之由を申せしかは、梅澤云、さらは其見込違ひ藩々を御會集有レ之、十分徹底迄極論に及ひ候而は如何、左候はゝ拙者設樂備中と兩人、事に托し其席に臨み、存分一杯に說き付候はゝ、大體行ぬ事は有レ之間敷、何卒左樣に御取計ひ有レ之樣、御申上有レ之度と被レ申に付、何分申聞候上可レ及二返辭一と相答」此次手に內府公之御美事稱述せられし趣は、先日關東より御勸定奉行上着、御勝手向必至御逼迫之次第を申上しに、成程心配は察し入たり、我等も精々心を付るとの御意に而、去月の御手元御入用帳を御取寄せ、爲二御見一なされしに、御食服其外御物數寄等一切に而、二十二兩之御出方なる故、司農も感涙を流し敬服し、誠一言可二申上一條無レ之、何卒暫御東下被二成下一、如レ此御取締りを御示しに相成候はゝ、御取直しも遠からすと申上し由」又英國公使パアクスは傲慢不遜之者に而、兵力を憑み妄言を吐き、粗暴不レ少か、先達於二兵庫一御直談之節、先以儼然たる御威風に大に敬屈、夫より御側へ召され、是迄は貴國へ對し種々不都合之次第も有レ之、何共氣之毒に存んする、今日より以來は最早其樣成義は不レ致候間、左樣相心得候樣との御意によつて、一言の申分にも無レ之御請申上候は、難レ有御意にて候、如何樣是迄之儀は申上度條々も御座候へ共、今日より心腹を御改正と伺候上は、過去之

義は今更申上間敷、我よりも今日より以來、日本國へ對して之信義は、言語にて申上候よりは、實跡に顯し而入二御覽一と申上候由、開港之事も申出候處、決して違約は無レ之、一日も違へ申間敷との御意にて、大に悅服之樣子に有レ之、御前を下り御噂申上候は、御眼中と申、御頰肥之邊、豪雄之相を被レ備候と、大に感服せし由を被レ話たり、

一、永田儀平藝藩三宅萬大夫に長人之事を承りしに、長人藝の御手洗といへる港迄着船し、初而朝命と行違ひたる事を承知せしかとも、一段君命を受て出立たるに、空敷は歸りかたし、國許よりの一左右を待たしと、藝の護送を賴みし故、藝にも西宮迄送着、彼地に相殘りたる由、いつれ國便を待にて可レ有レ之、其段朝廷幕府へも申上たるとの事なる由、

一、此夜二更後、板倉殿より御直書に而、長人追々入京之御沙汰聞へ、此節不二容易一次第に付、御相談之義有レ之候間、明日四時頃御登城相成候樣御申越に付、邸議之趣は、何分此度幕府之動靜は、天下之動靜に拘る處之二大事なれは、一點御動搖之聲息無レ之、寂然正を踏んて御進止可レ然と相決し、其段明早朝梅澤殿へ申入候樣、雪江へ被レ命レ之、

私云、此夕於二大坂表一御城代より、今般毛利大膳京都より御召に而兇山へ屯集、凡人數一萬五千人程に付、心得迄に御達に相成候段御布達有レ之由、此浮說京地へも波及せしなり、

○二日早朝、雪江梅澤殿を訪ひ、長人入京一件に付、公旨幷邸議之次第申入候處、梅澤殿も同論に而、長之擧動は、幕之動靜を試るの施策たる事を推察せし故、不虞之備へは手當せしかと、形迹におゐては曾て動轉せさるを示すなり、津藩より山崎關門固めの伺も打へきなれとも、朝廷へ伺之上可レ然と指圖せしと答へられたり、

一、四時御供揃に而御登城之處、長人一件之御評議種種之內、先つ諸侯會集迄大坂に罷在候樣、朝命に相成可レ然とは被レ決候得共、右を朝へ被二仰上一方之御意味、色々御斟酌有レ之、眞に御心付之樣に無レ之而は、矢張幕意に歸する故、板倉殿考按に而、戶田大和守殿より正三卿へ入說之御手續に相成由」津藩より山崎關門警固に付而之伺、津に而は幕命に任せ度趣に相聞候へ共、幕に而は朝命に付せらるへき筋故、傳奏へ

伺之上に可二相成一事と被レ決由、但し此儀は公之御心付に而、長人入京指留候事は、兼而朝命有レ之事故、關門にて其次第申聞指二留之一、其上にも是非上京之願候はゝ、其段朝廷へ相願ひ、朝廷より津藩へ通行いたさせ候樣降命ならては難二相成一段、とこ迄も申聞せ、其上にも押而通行せは、不レ得レ止打拂可レ申と、名義を立申聞候方可レ然と被レ決事之由」會は在京諸侯參內被レ命朝議に相成候樣尹宮へ入說、宮も御同意歟候得共、左樣之事に而は、却而動搖之姿に付、此事は御取消に相成候樣、會侯も承引に而不レ被レ行相濟由、兎角行違ひ出來に付、明日は板倉殿へ手代木呼出、諭告に相成候樣御談之由」辻將曹より三宅萬大夫を以、板倉殿へ申出候は、長人之義御指留之朝命不レ得レ止罷出候事候へは、改而朝命如レ此と申聞せ候方至當なるへく、幾度も同樣申聞候而、其上にも抗命之節は、夫は其時之事といたし、是非承服致候處まて申聞度、藝へ被レ命候而十分盡力可レ仕との事、至當之正論、上樣始甚感服には候得共、期後れ、最早大坂迄との儀、夫々御達にも可二相成一刻限に付、難レ被レ行して相濟由、

私云、此夕大坂にて朝裁相待候樣、朝廷より被二仰出一たり、

一、今夕御同國◎論諸藩重役を會合し、即今之時勢に付夫々之見込、且我公之、上之御盛意御遵奉之御趣意等申聞、今後猶以懇厚申談度、方今之議論等も有レ之候はゝ、無二腹藏一承度段及二相談一處、一同一言之異議無レ之、御指揮次第に奉レ任趣申出たり、

一、此日薩州より幕府へ左之通屆有レ之由、

別紙之通、西宮碇泊罷在候長藩之者共より、松平修理大夫樣へ差出候趣、御同方樣より被二指越一候間、不二取敢一其儘差出申候、此段奉二申上一候以上、

安藝少將內

十二月二日　　熊谷兵衛

先達而從二朝廷一御召出之段御達有レ之砌、末家中氣分相罷在、重大之御沙汰等閑に打過候義奉二恐入一候に付、不二取敢一家老中計發途爲レ仕候段、及二御達一置候處、末家之內病氣少に而も快候はゝ、一同大坂表へ可二罷出一との御事に付、種々保養相加候得共、はきと無レ之、餘り遷延仕候而は幾重にも奉二恐入一候に付、淡路名代毛利平六郎、家老毛利內匠、監物名代宮庄主水、一同上坂爲レ致度、兼而藝州樣

御誘引之御約束に而罷居候處、御手洗に於て、重而朝廷より御沙汰被レ爲レ在候迄之間、上坂被レ止候段承り候得共、今般於二朝廷一王政被二聞召一、猶列藩公議を被レ盡、御基本可レ被レ爲レ建被二仰出一候旨傳承仕、皇國大慶不レ過レ之奉レ存候、然る處是迄弊邑之義、奉レ蒙二典憲一、意外之干戈に相及ひ候次第、毫末奉レ對二天朝一異心無二御座一、大膳父子に於ては恐縮に不レ奉レ堪候得共、武門不レ可レ止之場合と相成、右及二事宜一申候、父子勤王之至誠不レ恥二天地一、四民一途に思込候情義難二默止一、屢御取持を以幕府へ及二言上一候得共、徹夏徹上仕衆、必定中間壅閉、暗雲掩二天日一候義と、晝夜泣血罷在候處、豈計今日之御機會と轉變仕、實に大旱之雲霓を望し思をなし、西ノ宮迄到着仕、御沙汰相待罷在候間、此上幾重にも宿志貫徹仕候樣相願候、旁之趣朝廷向宜御取計御願致候、已上、

丁卯十二月　　長藩　楫取素彦

同　國永正人

薩州御藩京詰　御當役中樣

藝州御藩京詰　御當役中樣

○三日午後、近衞前殿下之櫻木亭へ被レ爲レ入たり、左府公も御同席、廣幡內府公御來會なり、御談話之次第は長人所置如何可レ有レ之哉、此儀に付而も、會より尙宮へ幕意之由に而諸侯參內之入說有レ之、內府公も、政權を歸したりとは乍レ申、猶執意有レ之歟之御疑念有レ之御口氣に而、◎付カ公、御登城御評席之御模樣、親敷御見聞之趣被二仰上一、決而左樣なる未練は無レ之、臣として心付たる事を申上さるは不忠なから、又當時と成御指圖申上候樣にては不義なりと、其邊之名分反覆及二討論一位之事と御噺之處、左樣之思召候へは誠に安心せりと、眞說を御聽なされしを誠に御歡に有レ之由、長州を唯今之處に而、寬大に被レ處候而は如何あらんとの御談、廣幡公は、朝廷御處置、決して彼是は申間敷と御申に付、公は、天下之大事を議せられんと被二召寄一し諸大名如何可レ存哉、是程之大事と相成有レ之儀を、朝廷計に而御決に相成候程之事候は

は、諸侯之會議も無用、上京にも及はさりしと申事には相成申間敷かと被二仰上一よし、此件も諸卿大抵御同論候得共、殿下尹宮御不承知之由、會津兩藩より、御同意無レ之樣迫つて入說有レ之故之事に而、外之公卿方も迫りに來らんかと御恐怖甚敷由、此節津藩より山崎關門固之義、嚴敷伺方に而御當惑之由、津は頻に幕へ可レ附之勢之由、

○四日、先達來、紀會桑津等之諸藩を會し、幕府兩監察も同席に而時務論定之儀、邸議も相決に付、今午後雪江登營、梅澤殿に對接申談候處、一日も早く願はしき事候へ共、當時永井板倉も下坂、板本對州も不快、設樂と唯兩人故、如何にも難二罷出一、臨時御用有レ之節御指支に相成候間、今暫之處見合せ度、諸藩へも、兩人可二罷出一段御申入置之方可レ然歟と被レ存候、紀は水野も好人物と承候得共、三浦抔と兩人可レ然、尾は紀と不和故、却而不レ會方宜しかるへしとの事也、昨日櫻亭に而御談論之次第、公之被二仰付一に而及二詳達一、逐條會得有レ之、其上に而申されしは、會之入說も、松山之內意を伺たる樣にも聞たる故、夫は其座より取返して、梅澤殿殿下へ出られたる由、唯今も殿下より召に而致二參上一候か、定而藤堂伺之一件なるへく候得共、決して一己之見込等も申上間敷旨、上樣にも殿敷被レ命候と物語なり、

一、此日板倉殿へ被レ遣二御內書一、櫻亭之御次第御細記之末に如レ左、

扨又今日長州より薩藝へ差出候書付、以二所司代一攝政殿へ御差出に相成候由、寫前殿下◎にて脫カ小生窃に拜見仕候、乍二極密一前左府公へ藤堂留守居より御內々申上、右書付出に付而は、上御始在京之諸侯朝廷へ被レ爲レ召衆議有レ之樣、御盡力可レ被レ成旨申上候由御座候、且又會藤萬一事を誤候而、長を防禦する等之一戰、會藤より相始候而は不二相濟一と、甚御懸念之由御座候、不二取留一風聞之事候得共、今日承込候儘有體及二陳啓一候、御心得之御一端にも可レ然と心附候故申上候、◎御脫カ覽後投火希上候、早々以上、

五月四日　　越前宰相

伊賀守樣

○五日午後、雪江彥藩岡本半介を訪ひ、時務及二談論一しに、惣而同論に而、驥尾に附て周旋すへしとの事に

而、隣藩の交誼を厚ふせん事を約す、松山藩も彦藩同論、高松藩も異論有間敷との事なりき、

一、今日九時御供揃に而御登城有レ之、御談之次第は、會藩之妄動鎮撫一條之由、會藩より通達之御書面出來、會藩へ御渡相成、如レ左、

長防御所置之義に付而は、妄に堂上へ立入周旋ケ間敷事有レ之候而は、此後御所置之品從二朝廷一出候共、御眞意に無レ之樣相當、恐入候儀に付、朝廷之聖斷を可レ奉レ仰事、

右會より紀藩御親藩御譜代申通之事、會は平山圖書頭殿より手代木說得有レ之、

一、今日櫻木御殿より御呼出に付、雪江參上之處、長人頻に迫り入る風說有レ之、山崎關門に而抑留之儀、津藩より伺書出、時機甚御懸念之次第に付、三公之御方々御内談、唯今之内寬大之御所置被二仰出一候はゝ、鎭靜可二相成一との御評議候得共、攝政尹宮御承引無レ之、會よりも專ら致二入說一候故、今日三公より御發しに而、俄に攝政家へ御會集、御席に而御決評、入說之間隙無レ之樣に御發評之御積り、右御決議之上に而、戶田和州を以幕へ御相談相成筈に付、其節幕に而異議無レ之樣、公に而御周旋有レ之樣被レ成度候へは、其段可二申上一との仰なりし故、幸ひ登城致居候へは、從レ是直樣可二申聞一と及二御請一、登營之上申二上之一、

一、此夜二更頃、櫻木御殿より雪江御呼出に而參上之處、今朝被二仰聞一たる、長州一件に付而之御會集之御觸出、兩役に而彼是申出、明日に相成に付、此段早早大藏大輔へ申聞度、もしや城中に而大和守を待ては居ぬかと懸念故、夜中なから呼出申聞候との仰なり、藤堂伺之義御廻しに相成候得共、今日之御會集に而寬大に決し候へは、伺も最早無用之事に可二相成一御積に而、御異存無レ之と御連名下へ御認之處、御會集は延引に付、御本殿に御留置、深夜に御廻達に相成候御窮策之由も仰ありき、

○六日、土藩神山左太衞來邸、十之丞逢對之處、今朝象二郎岩倉卿へ參殿之處、御内話有レ之間、臨時越前中根酒井同道罷出候樣御沙汰有レ之由、猶時日相伺候而可レ及二案内一と申聞候由、

○七日、神山左太衞より十之丞へ來書、容堂君明朝御京着之由報知有レ之、

一、夜に入神山より、明日巳刻中山殿迄、越藩同道罷出候樣申達有レ之間、可レ致二同道一旨文通有レ之、

○八日、雪江、十之丞同行土邸に到り、神山へ逢對、福岡藤治も來會談論中、薩邸より、中山、正三、中御門三卿、昨日より長州御所置一件に付在朝、御手透無レ之、仍レ之岩倉卿へ罷出樣、中山殿より之書簡を以通◎逢脫カ有レ之、仍レ之神山同道岩倉卿へ罷出、薩は尾藩尾崎八左衞門、丹羽淳太郎同道す、岩下佐次右衞門、大久保一藏は、先達而罷出居る、夫より無レ程、卿御對面有レ之、尾藩と一扱演說有レ之大旨は、近年幕府之政治威權次第に萎弱に就き、萬民困窮に落入、殊に外國之取計等、以之外成體態に付、王政復古之叡慮御確定に而、我々へ御内勅有レ之、一點無私之御體裁を以、王政之御基本被二相建一事に候、就而は尾越薩土四藩之儀は、多年勤王之志深厚に付、誠に御依賴思召事に付、未發之御密旨御打明し、此度之御大策、事故なく行はれ候樣被レ遊度との叡旨之旨、其次第はと被レ申候而、御書付御一紙御渡有レ之、

應レ召早速登京御滿足候、隨而不二容易一大事御評決之儀有レ之、唯今參朝可レ有レ之旨、御沙汰候事、

十二月九日

明九日卯一點御參内有レ之候へは、夫より逐々御所置被二仰出一事に候、尾越兩家は德川之親族故、德川家へ之御使御賴被レ成度、且會津桑名之職掌も御廢止に相成に付、此御使は尾之臣下へ御賴被レ成度、尤會は思召有レ之、所司代被レ廢旨被二仰出一事に候、其餘之儀は、右件相濟候上、追々被二仰出一候御手順之由、仍レ之寅の一點假建へ重役呼出、右御書付兩卿より被二相渡一筈候得共、左候而は手後れも難レ計に付、其趣を以、爲二心得一今日兩卿代り岩倉卿より被二相渡一事之由、外に被二相渡一二紙、

一御座所檜下詰任撰十人之事、

一御拜道廊下檜下詰從僕之事、

一九門内堂上裏門通行被レ止候に付、家々へ右之趣相傳へ、直に三人或は四五人つゝ詰取締之事、

四北花園家　八條家　賀陽宮
石山家明地　庭田家明地　勸修寺家
烏丸家　穗波家　一條家
近衞家　閑院宮　藤波家
竹屋家　毘沙門堂里坊

主政復古大變革に付而は、何時非常之儀出來も難レ計、依レ之右場所、藩兵を以て嚴重警衛可レ有レ之旨、御沙汰候事、

但九門內に至り、兵士戎服之儘可レ爲二參朝一事、

右御書面拜受、次之席へ取下り熟見之處、御主意解兼候處々有レ之に付、今一應御達相願伺度と尾へ申談處、尾は不レ及二其儀一との事に付、兩人再會相願ひ、尙又伺取候趣如レ左、

一右ケ條之內、十人詰之什長名元書付、早速指出候樣、

一九門內、堂上方裏門は通行止レ之、番人に而警衛には不レ及、自然曩客有レ之候はゝ、最寄警衛所へ注進候樣との事、

一右兵を被レ集候へ共、決而兵を被レ動候には無レ之、唯萬一之妄動に被レ備候迄之由、

右御達之趣、公御參內中故、直に御所へ參上申二上之一、

一尾薩士藝へ被二相渡一候御書附も右同斷なり、警衛場所如レ左、

東南萬里小路家　甘露寺家　櫛笥家

柳原家　園家　富小路家

御下り御厩　桂御所　高丘家

外山家　唐橋家　廣司家

九條家

右尾州

一日の御門幷穴門四ケ所內外、

一御臺所御門幷北の方穴門二ケ處內外、

一參內殿幷奏者所等之前、

一神仙門往返人數改取締所、

一公家門前桑名固め被レ免跡引替、

外に御座所檜下詰任撰十人之事、

御拜道廊下檜下詰從僕之事、

右薩州

一公家御門幷南北穴門二ケ所內外、

一南門幷東の方穴門二ケ所內外、

一局口中門之前、

一御池庭四枚戶門、御文庫前切戶、

一蛤御門會津固め被レ免跡引替、

外に御座所檜下詰任撰十人之事、

御拜道廊下檜下詰從僕之事、

右土州

一准后御門內外、

一准后局口中門、

一朔平御門幷東西穴門二ケ所內外、

外に御座所檜下詰任撰十人之事、

御拜道廊下檜下詰從僕之事、

右藝州

右之節、內々被レ爲レ見候書面如レ左、

當日覺悟之事

一卯一點必參朝之事、

一同刻兵士繰込之事、

一御門惣而大門を閉、穴門より通行之事、

一公家門御臺所門之外は、准后雖二御門一悉閉切之事、

但守衞兵士通行之儀は格段之事、

一被レ止二參朝一候宮、公卿、見誤無レ之樣心得之事、

一宮公卿參朝之輩、主人之外、家來向惣而御門外限不レ許レ入事、

但隨身物或は文通之類は、使番仕丁にて非藏人口へ傳送之事、

一三職家來、鑑札を以て通行之事、

一御門々々出入人體見定め之爲め、非藏人二人出張之事、

外に使番二人仕丁五人、

一會津、桑名、藤堂、大垣、見廻、新撰、其外斥候之事、

一非常之儀有レ之、注進之儀出來之節は、四方共非藏人口へ可二申出一事、

但非藏人口南談之間、堂上非藏人詰可レ有レ之事、

一各藩屯所幷從者休息等之事、

日華門外廊下、

月華門外同斷、

承明門外同斷、

一、今日午刻御供揃に而御參內有レ之、長防御所置件之朝議被レ爲レ在故なり、其次第、御所より爲二御談一夜亥刻比御登城有レ之御示談之處、內府公には、官位如レ元被二仰付一候義、御所存御尋と有レ之候得は、被レ盡二公議一之上に而可レ然歟と思召候由、乍レ併御英斷に而被二仰出一儀に候へは、勿論御存寄無レ之趣、御請之御

大略之由、夫是に而亟刻後御退出より直に御參朝、又候手間取に而徹夜之御在朝なり、

一、今夜於二宮中一被二仰出一如レ左、

頃年天下紊亂、人心不和を生し、況外國之交際日に隆して、國家安危々急之秋に候、然に今後朝政一新、追々舊典復古、且明春御大禮被レ爲レ行候御時節候間、人心一和を先務と被レ爲レ遊、近來幽閉之輩を被レ解、往々無二怨志一、人和一齊、沿革大成、整レ內制レ外之次第可二相立一と被二思召一候間、奉二戴御趣意一、上下和親し、皇國之情態可レ存事、

○九日、公昨夕御參內より、御城御往復等に而不レ被レ及二御歸邸一、其儘御在朝之處、今朝に至り長防御所置之儀漸〳〵御決議に相成、被二仰出一趣如レ左、

今度大樹奉レ歸二政權一、朝政一新之折柄、彌以天下之人心居合不二相附一に於ては、追々復古之典も難レ被レ行、深被レ惱二宸襟一候、且來春御元服幷立太后、追追御大禮被レ行、且又先帝御一周に相成候に付、所謂既往不レ咎之御時節故、人心一和專要に被二思召一候間、先年長防之事件彼是混雜有レ之候得共、寬大之御所置被レ爲レ有、大膳父子末家等被レ免二入洛一、官位如レ元被レ復候旨被二仰出一候事、

右相濟後、追々大御變革御發表之御模樣に而、御用無レ之候間、諸官散朝可レ致旨被二仰出一、各退朝後、攝政殿已下宮方公卿之出仕を被レ止之事如レ左、

攝政前左大臣　左大臣　右大臣　彈正尹宮
前關白左大臣　前關白右大臣
前左大臣　前右大臣
一條前右大臣　內大臣
日野大納言　飛鳥井大納言
柳原大納言　葉室大納言
廣橋大納言　六條中納言
久世前宰相中將　豐岡大藏卿
伏原三位　裏辻中將

夫より諸藩之兵隊を以宮垣之內外を警固し、中山殿、中御門殿、正親町正三條殿御居殘り、岩倉殿、大原殿、急參內に而萬機御取計有レ之、諸侯は在京之分即刻參內を被レ命、其中尾越藝之三侯は昨夕より在朝、土州老侯は今日御上着、御旅裝之儘御參內、薩侯は午後に至り御參有レ之、夫より暮時前に至り、於二小御所一會議相始る、帥宮、山階宮、仁和寺宮、中山殿初、公卿方左方に御列席、尾越土藝薩之諸侯は宮方に御列座、諸藩臣は御三の間御敷居際迄相詰たり、于レ時中山殿より、今般德川氏より政權奉還に付、大政御一新之御基本被レ爲レ建度叡慮之趣御發言有レ之、公卿諸侯取り取り御評議有レ之、又夫より德川內府公御辭官、幷御領地御獻納可レ有レ之儀之御僉議有レ之、結局尾越兩老侯御引受に而、明日條城へ御出、御辭職被二聞召一旨は公より御傳達、御官祿之御兩條は二侯御含に而、德川內府公より御內願之筋に相成候樣、御周旋可レ有レ之との御決議なり、會桑二藩も、朝廷より免職之御沙汰に可二相成一御評議有レ之處、幕府に而罷免之取計有レ之に付、不レ被レ及二御沙汰一相濟たり、彼是に而子刻後散朝有レ之、此夜三職之降命有レ之、公議定職被二仰蒙一、如レ左、

議定職被二仰付一候事、

越前宰相

口宣追而下賜候事、

其藩中可レ然仁兩三輩、爲二參與一即時可二差出一旨御沙汰候事、

總裁　有栖川宮

議定　山階宮
仁和寺宮
中山前大納言
正親町三條前大納言
尾張大納言
中御門中納言
越前宰相
土佐少將
薩摩少將
安藝少將
大原宰相
萬里小路右大辨宰相
長谷三位
岩倉前中將
橋本少將

參與　尾藩　荒川甚作
丹羽淳太郎
田中邦之助
越藩　中根雪江

酒井十之丞　毛受鹿之助
土藩　後藤象次郎　神山左太衛　福岡藤次
薩藩　岩下佐次右衛門　西郷吉之助　大久保一藏
藝藩　辻將曹　櫻井又四郎　久保田平司

一、爰に再ひ小御所議事之次第を詳說せんとす、如二前說一上下已に班列に着くの後、中山殿より先一點無私之公平を以、王政之御基本被レ爲レ建度叡旨之趣御發言に而、夫より德川氏之弊政、殆違勅ともいふへき條々不レ少、今內府政權を還し奉るといへとも、其出る處之正邪を辨し難けれは、實蹟を以之を責讓すへしなと、縉紳諸卿論議あるに、土老侯大聲を發して、此度之變革一舉、陰險之所爲多きのみならす、王政復古の初に當つて兇器を弄する、甚不祥にして亂階を倡ふに似たり、二百餘年天下太平を致せし盛業ある德川氏を、一朝に厭棄して疎外に附し、幕府衆心之不平を誘ひ、又人材を擧る時に當つて、斯の政令一途に出、王業復古之大策を建、政權を還し奉りたる如き大英斷之內府公をして、此大議之席に加へ給はさるは、甚公議之意を失せり、速に參內を命せらるへし、擧竟如レ此暴擧企られし三四卿、何等之定見あつて、幼主を擁して權柄を窃取せられたるや抔と、したゝかに中山殿を挫折し、諸卿を辨駁せられ、公も亦諄々として、王政之初に刑律を先にし、德誼を後にせられ候事不レ可レ然、德川氏數百年隆治輔賛之功業、今日之罪責を掩ふに足る事を辨論し給ひ、諸卿之說漸く屈せんとする時、大久保一藏席を進んて申陳しは、幕府近年悖逆之重罪而已ならす、此度內府之所置におゐて其正姦を辨するに、強ち尾越土侯之立說を信受すへきにあらす、是を實事上に見るに加かす、先其官位を貶し其所領を收めん事を命して、一毫不平の辭色なくんは、其眞實を見るに足れは、速に參內を命し朝堂に立しめらるへし、もし之に反し一點扞拒の氣色あらは、是譎詐なり、實に其官を貶し其地を削り、其罪責を天下に示すへしとの議論を發す、岩倉卿是に附尾して其說を慫慂し、正邪の分、空論を以辨析せんより、形迹の實を見て知るへしと論辨を極められ、二侯亦正論を持して相決せす、三宮尾侯は默然たれは、中山殿、尾侯は如何と詰らるゝに、容堂の說のことしと答へらる、薩侯は如何と問はるゝに、一藏言ふ處のことしと答へられ、藝侯は土老に同す、岩大二氏猶正邪を實行に證せん事を强辨して屈せす、諸藩士に議せらるゝに、尾に而は田宮如雲、丹羽淳太郎、田中邦之輔、越は中根雪江、酒井十之丞、土は後藤象次郎、神山左太衛、薩は岩下佐次右衛門、大久保一藏、藝は辻將曹、久保田平司にして、薩を除くの外は、悉越土二侯と同論なりといへとも、共に是を主張せは、君臣合議害同之嫌疑を生し、却而事を害せん事を恐るゝの意衷、期せすして同一なれは、各顏を見合せて抗せす、唯々諾々たり、象次郎は吾公之說を推して、陰險を排して公正に出ん事を論して止ます、二侯も餘りに極論し給はゝ、實事を見ん事を厭ふて、內府公に姦あるを掩はんとし給ふに似たれは、止事を得られすして尾越擔當あつて、明日御登城之上、將軍職御辭退を被二聞召一之條は如レ左、

辭二將軍職一之事被二聞召一候事、

右は吾公より御達有レ之、官祿之二條は二侯御含を以、內府公より御內願之筋に御周旋あるへきに決せり、又會桑二藩の職を解かれすして不二相適一故、其事を幕府へ降命あらは、二藩忿怒して如何成暴擧安動あらんも難レ計、此條如何すへきと、朝議殊之外困難窘窮に及ひたり、折柄兩藩は幕府におゐて職務罷免せられし由、戶田大和守を以奏上あり、於レ是難議一頻◎頓カに解釋して、會は歸國して御沙汰を待ち、桑は速に歸國すへき由を命せらるへきに決して、議果たるは已に三更を過き、四更前散朝となれり、

一、今日より御所御檐下御警衛任撰十人つゝ、幷其他之警固兵、昨日內達之通尾越薩土藝之五藩より指二出之一、

但十四日に至つて解嚴なり、

一、此日堺町御門御警衛場へ、御所より之御使持參相達書付左之通、

大政御一新に付、守衛之輩自今朝命を奉し可レ致二進退一、諸事心得違無レ之樣御沙汰候事、

但今日召之列藩兵士、戎服之儘參朝候得共、非常御手當而已、必動搖無レ之樣爲二心得一申渡候、尤御守衛之義は一際嚴重に取締可レ致候事、

一、此日公家門警衛桑名被レ免、長州と入替り、始御門會津被レ免、土州と代れり、

私云、櫻木御殿へ參上せし節、此日公卿方見聞之形勢を伺ひ奉りしに、堂上何も八日より徹夜、當朝長防之御所置御決議相成、無レ程散朝之運ひ之處、宮中之模樣何となく物騷か敷、不審之狀情も有レ之に付、議奏は居殘りたる方可レ然歟、折御談之處、間もなく御用相濟たる間、何も及二退朝一候樣降命に而御退散之處、引續參內御指止之儀被二仰出一、申刻過勅使を以、擯關之號を被レ廢、門流を被レ止候段被二仰出一たりとの仰なりき、

一、此日夕申刻前、岩倉殿、大原殿、尾越之重役に御逢被レ成度との事に付、尾之田宮如雲、越之毛受鹿之介兩人罷出處、兩卿被二申出一候は、何か傳聞之趣に而は、旗下及會桑幷譜代之諸侯二條城へ馳集たる由、畢竟今般御所へ兵を被レ集候は、全く他之盜之爲にする警備に而、承知之通決而討幕等之義には無レ之事なるに、萬一旗下を始め諸藩心得違出來、不慮之動亂を生而は不二容易一次第候へは、何卒條城鎭靜相成候樣、尾越に而厚心配之義御賴被レ成旨に付、其段兩公へ申上、尾之吉部小五郎、田中邦之輔同道、鹿之介登城、板倉殿へ請謁、右御口上之趣申上、且宮中之形勢及二詳達一候處、板老にも此件に付殊更御按勞之由、何分內府公へも委細及二言上一、指向候處は、精々可レ致二鎭撫一候へは、其段御所へ御答可二申上一、併此上朝廷より御無體成被二仰出一等有レ之候ては、其上之事情は如何可二相運一哉、何共難レ計候間、此邊は尾越に而御配慮被二成下一候樣、兩公へも宜二申上一旨御申聞有レ之、夜六時過退城、直に參朝して、板老被二申聞一候趣兩卿迄申上たり、此節條城之形勢、旗下幷諸藩之兵士竹葦之如く、各戎裝に而兵器を携へ、營中草鞋はきにて往來し、唯今にも討て可レ出氣色に而、控所にも御譜代藩藩重役、井伊、藤堂を初多勢相詰、隊長等同伴せるも有レ之、御一塵之御指揮次第、二百餘年之洪恩を可レ奉レ報との義勢決然たる有樣なりき、

○十日、巳刻御供揃に而御登城有レ之、尾侯も御同樣也、然る處昨日來朝廷御變革一件に付、幕下之人心大

に動搖し、旗下之面々何も兵器を携へ甲冑に而登城、御譜代衆は各兵を率ひて御城下へ相詰、鼎沸之勢ひに而、城中之人心折合兼、洶々たる有樣故、內府公も御誠意を以御自身御說得等有レ之、聊鎭定之姿には有レ之候へ共、御持參之筋抔御披露に相成候へは、一時に暴發之機現然に而、尾越之二侯を嫌惡する事聲敵之如き次第に付、先つ內府公へのみ御密談有レ之處、內府公には聊御異心無レ之、惣而被レ任二朝命一候御心得なから、前書之運ひに而、更に御發表難二相成一に付、其段藝州知邸三宅萬大夫詰合に付、是を以御在朝之藝世子迄、其筋へ右等之趣御內達に相成候樣御申越有レ之、尙尾侯幷成溜隼人等と種々御談判有レ之候へ共、御辭職被二聞召一之勅詔被レ爲レ受候に付而は、御衣冠に無レ之而は不二相適一、夫等之邊、外見にも相觸候事故、猶更御手間取にも相成に付、暮時頃田中邦之輔を以、先つ無レ程御復命可レ有レ之段被二仰上一置、夫より漸にして勅諚御請も相濟、其他之御談は迚も御整ひ被レ成かたくに付、御辭職被二聞召一、其他も於二內府公一は聊御異心不レ被レ成二御座一候得共、旗下之人心如何にも御收斂難レ被レ成に付、御請言上之儀は、暫御延引

に相成候段御聞濟可二相成一、御取計に相成候樣との御談濟に而御退出、夫より直に御參內有レ之、猶又下參與之面々へも御談之上、御復命之儀被二仰込一、御衆議席相立候而、被二指上一候公之御復命如レ左、

奉レ歸二政權一、將軍職辭退之儀被二聞召一候上は、官位も一等を奉レ辭、且御政府御入費も差上度段申上候心底には候へ共、即今手元人心居合兼、痛心之譯柄も御座候に付、鎭定次第奉二願上一度候間、此段相含、於二兩人一可レ然樣及二執奏一呉候樣申聞候事も御座候間、於二慶永一天地へ誓つて御請合申上候間、德川內府內願之筋、御聞屆被レ下候樣奉二願上一候、

慶永

右御書面之趣、御惣督御始御廻覽之上御聞濟相成に付、尙又必近日奏上之運ひに相成候樣御受合之上◎旨カ被二仰上一、尾侯御復命は、何分爲二御任一被レ下候樣被二仰上一、御復命之一段相濟、夫より餘事之御衆議有レ之、亥刻比御散朝なり、

私云、今日御城中之形勢、旗本幷會桑之諸士、多くは甲冑を帶し拔身の鎗を立、草鞋を穿なから御座敷處々に充滿して、强暴之聲焰尤甚し、二侯

御平服に而、其中を御押分け被レ成候而之御往來甚危殆に而、御供せし吾輩に於て懸念を極めたり、殊に尾越薩士に通し大變革を謀り、幕府を陷るといふ説、紛々として不レ堪レ聞、萬一暴客あつて君侯頭上に一擧を加へは、臣子必死之時なる事を覺悟せり、如レ此景況に而、御談之次第も中中御行屆難二相成一、時刻のみ押移に付、尾之成瀨隼人抔と種々談判に及へとも好算無レ之、兎角して申刻を過る故、三宅萬大夫に傳託して、妄動難レ支、不レ得二止事一遲延之由を蚤若侯へ通して、可レ然奏上あらん事を計れり、暮時尾之尾崎八右衞門、御所より御請御催促として來り、殆困窮、仍レ之是々行違ひたる趣を以田中邦之輔を遣し、追追其運ひには相成れとも、御奉詔に付而は、御衣冠御着用に相成に付、傍觀之嫌疑を御憚り等に而、無レ據御遲引に及候へ共、無レ程御復命可二相成一段申遣す、爾後內議漸く御決に相成次第は、內府公は御承知相成候へ共、旗下之居合六ヶ敷に付、人心鎭定迄御猶豫御願、二侯御引受御取計ひ之御談濟に而、戌刻頃退出也、夫より直に尾侯

御一所に御參內に相成、御復命之御書面、不二廉立一樣之御文段に被二仰上一度と、下參與之向へ御談相成處、西鄕大久保之兩人、何分御領地御返上之一條不レ慥に而は、實跡不二相顯一候得は、此處碇と被二仰上一候半而は、其詮無レ之との激論も有レ之候へ共、左候而は條城之沸騰を增長し、暴發難レ計、難陳如何にも不レ可レ爲之勢に立至候に付、公大に御奮激に而、百方御辨駁有レ之、漸くにして如レ前御請に及はれたり、尾侯は事之難に付、唯尾越へ爲二御任一に相成候樣被二仰上一度御論に而、御合一に相成兼、彌御手間取にも相成に付、御銘々御存分之御願に可二相成一と御引分れに而、如二本文二侯兩端之御達しと相成し也、

一、此夜板倉殿より諸家へ御達如レ左、

朝廷より別紙之通被二仰出一候、

辭二將軍職一之事被二聞召一候事、

○十一日、今日巳刻御供揃に而御登城相成處、昨日之御次第何となく漏泄し、旗下之人心益猜激を增進し、一段引取たる御譜代衆も又々登城、幕處に屯集して、各大聲暴論を發し、就レ中講武所劍槍隊抔は、今にも討て出へき勢に付、內府公夫々頭領御呼出しに而被二仰聞一しは、我等割腹すと聞かは汝等如何樣ともすへし、我等かくて在らん限りは決して妄動すへからすと、嚴重之御諭告有レ之、閣老初要路之面々も鎭撫心力を盡す折柄故、御請之御談等は先つ被二指置一、共に鎭定之御談に御加はり被レ成候得共、可レ然御好手段も不レ被レ成二御座一、兎角して夜に入るへき運ひに付、過激輩幷會桑等、御城外に在つて暴發氣遣はしき向へは、夜中御用之程も難レ計候間登城候樣被レ命、幕兵五千計、會兵三千計、桑兵千五百計、御城內に被二藏置一候事と相成、今夜之處は先つ危亂暴動には及間敷候得共、明日と相成候而は如何可レ有レ之哉、此混雜中關東より兵隊抔押出來候而は、實に至難之事と相成候へは、須臾聲焰を被レ避、御下坂被レ成候而は如何あらん、坂地候へは少し遠隔致居候へは、御鎭撫も被レ成安き事情も可レ有レ之候得は、左樣には相成間敷哉等之御談に相成、亥刻比御退出なり、

私云、此夜薩兵御城下に迫るの浮說盛んになり、誰人の指圖ともなく、大手廻りの土屏に矢狹間を切り開くの騷動あり、監察衆是を聞て吃驚して速に制止あり、御門々々之通行、入る者より出る者之檢查殊に嚴密なるは、暴擧を恐れてなり、城內之混亂、是等を以て想察すへし、

一、會藩手代木直右衞門、雪江十之丞へ對して云、薩兵既に城へ迫るの報知あり、先きんする時は人を制す、今討すんは戰機を失して敗を取らんとす、如何思ふと血眼になつて詰問す、兩人萬犬之吠聲決して實事ある事なき所以を說て、稍靜定して退きたるに、暫くして又走り來つて、薩兵今已に竹屋町通より押來ると、斥候之者より申出たり、如何あらんと騷動する故、前說を反覆して、閣下に亂階を引出しては、朝敵も同然たらん事を辨論して、又漸く點頭せり、惣而城中之變動不則にして、狂人之如くなる者多かりき、

○十二日、今日公御所勞に付、御參內御登城共に無レ之、尾侯御登城之處、愈御下坂に被レ決に付、其段朝廷へ被二仰上一之儀、老侯へ御賴托し之由に而、御屆書御持參御參朝に付、尙又參與に而評議之處、御屆捨に而は名義も不レ穩に付、御談之上尾越二侯に而、御下坂相成樣人心鎭定之爲御勸めに而、其御運ひに相成候趣に御書取被レ指二上之一、別に官位幷貢獻之義、人心

居合次第、早速可レ被二仰上一御約定に而御下坂之旨御書取、何も二候御連名に而、左之通御達相成、内府公には暮時過御出城、會桑も一所に被二召連一、淀堤通り御下坂相成、

今度内府政權奉レ歸候義に付、旗下輕輩に至り心得違之者有レ之、自然輩穀之下紛擾相成候而は、御幼帝にも被レ爲レ在候折柄、別而奉二恐入一候間、人心居合迄暫時下坂、精々鎮靜行屆候上、速に上京、御沙汰奉レ待候方可レ然歟に奉レ存候、會桑二藩之儀も召連、一と先下坂、海程歸藩爲レ仕候筈に御座候、右は伺濟之上發程可レ仕候得共、彼是と機會を失し、萬一不慮之儀出來候而は皇國之大害に付、不レ得二止事一即今發程爲レ仕申候、内府におゐても伺之上取計候心得候處、兩人に而機會熟察相勸申候、右之義全く臣等兩人之取計候間、御諶責も御座候はゝ、謹而奉二甘受一候心得候事、

十二月十二日　尾張大納言
越前宰相

別紙

官位貢獻二事件は、下坂鎮靜次第、迅速申上候約定に御座候、

十二月十二日　御兩名

一、此日公更に議定職被レ蒙レ仰、雪江、十之丞、鹿之介、被レ補二參與一、

一、此日左の十藩申合せ、藩臣連名之建白有レ之、如レ左、

先般大非常之御變革被二仰出一候義は、既往事柄一切被二捨置一、萬事公平正大、衆議之所歸を以一途之御政道相立、速に神州治安之御鴻基を被レ爲レ開叡慮之旨奉二拜承一、實に雀躍に堪へ不レ申、上下目を刮て御沙汰を相窺候内、去る九日に至、俄に召之列藩兵士戎裝之儘參朝、就而は何となく闕下騷々敷何方も慥愕罷在候處、先帝已來御當職之二條殿下を始、官家數十人除職之上、御門出入迄も被二指止一、且將軍家も、頓而御除職解官削封も可レ被二仰出一趣に相聞、右は必定御諶責之御譯にも可レ有二御座一哉、其儀は得と相辨不レ申候得共、將軍家祖宗以來世襲之大權被二指上一、只管御自責を以聖業を被レ奉レ輔度との御趣意は、末々迄も感賞仕候折柄、左樣之御所置被レ爲レ在候而は、更始御一新之御手始め、他日如何樣之御都合に成行可レ申哉、實に杞憂之至奉レ存候、依レ之仰願くは、差寄御所内外戎服等之義至急に被レ止、一刻も早く人心鎮定之御沙汰に相成、隨而攝政殿下を始御取扱之義も、公平正大、衆議之所レ歸を以御施行有レ之、往々彌以御改革之趣意屹度相貫候樣被レ爲レ在度、幾重にも奉二懇願一候、昨今形勢、所謂百尺竿頭一步を進之御時節と奉レ存候間、重疊恐多奉レ存候得共、寸衷奉二言上一候、誠恐誠惶頓首百拜、

十二月十二日

松平阿波守内　十時攝津
蜂須賀信濃　丹羽左京大夫内
松平美濃守内　田邊市左衛門
久野四郎兵衛　松平肥前守内
細川越中守内　酒村小兵衛
溝口孤雲　宗對馬守内
松平中務大輔内　扇源左衛門
山村源太郎　溝口喊之進内
南部美濃守内　窪田平兵衛
西村久次郎
立花飛驒守内

○十三日、内府公より御請書被二差出一候義、御遲滯不二相成一樣御催促旁、尾侯より遠山彦四郎、角田久次郎、坂地へ可二指出一旨に而御誘引有レ之に付、伊藤友四郎被二指出之一、

一、今日三職已の刻之參集なりしか、諸務多端にして、夜三更に及んて漸議事始まれり、是は專ら此度御變革御基本御趣意可レ被二仰出一儀に付、御布告御文面之評論なり、紛々擾々、五更に近くして稍相定り、明日之御發表に相決せり、

私云、當時廟廷之體態、官家之議定參與は奥向に參集、武家之議定參與は表之方に參集、各別に

庶務を談論し、大凡談寄に相成たる時、官武一席に會合して評議するを議事と唱へたり、

一、此日於二宮中一內府公御東下之事可レ有レ之哉と、永井殿物語之由流傳に付、雪江十之丞退朝之上及二言上一處、公大に御驚愕に而、夜中早々永井殿へ被レ遣二御內書一如レ左、

大急一筆陳啓、中略陳は今日雪江十之丞宮中へ參出候處、熊藩津田山三郎と申者罷出、同人今朝盟臺へ罷出候處、盟臺之語氣中、自ら御下坂之上は御東下にも可二相成一趣を承候者有レ之由、即雪江十之丞罷歸相達申候、誠以驚愕◎之脫カ至、英明之上樣、右樣之思召被レ爲レ在候儀とは曾而不レ奉レ存候へ共、甚以不レ堪二案勞一、恐悚罷在候、只今萬一御東下等被レ爲レ在候義抔有レ之候而は、天下之侯伯離叛は勿論之儀、上奉レ欺二天子一、下萬民を欺かせられ、天地の中に御立難レ被レ遊、外國之信義を被レ爲レ失候は素より、德川御家も是限りに而、第一皇國瓦解土崩、不レ可レ爲に立至り申候、誠以痛心至極、何卒々々兼而御盛德にも被レ爲レ在候へは、泣血御滯坂御鎭撫伏而奉二祈上一候、彌御東下之御事にも候はゝ、何卒今晚此使之者へ御一筆御返辭可レ被レ下候、右之御樣樣によりて、尾へも申聞、兩人下坂之上御止め申上度奉レ存候、先は右早々用事如レ此候、頓首、

十二月十三日夜　　御名

永井玄蕃頭樣

尙々、呉々本文之趣御太切至極、扨々恐入、是迄御盛德水之泡と相成候のみならす、天下萬民被レ爲レ欺候上樣には無レ之、何分御滯坂奉二伏願一候、以上、

○十四日、巳の半刻揃にて、在京諸侯幷諸藩被二召集一、御布告左之通り、公幷土老侯も御參內あり、

德川內府從前御委任之大政返上、將軍職辭退之兩條、今般被二聞召一候、抑癸丑以來未曾有之國難、先帝頻年被レ惱二宸襟一候御次第、衆庶之所レ知候、依レ之被レ決二叡慮一、王政復古國威挽回之御基被レ爲レ立候間、不レ論二既往一、更始一新、自今攝關幕府等廢絕、即今先つ假りに總裁、議定、參與之三職を置れ、萬機可レ被レ行、諸事神武創業の始に原き、摺紳武辨堂上地下之別なく、至當公議を竭し、天下と休戚を同くす可レ被レ遊叡念に付、各勉勵舊來驕惰之汚習を洗ひ、皇國の爲忠誠を可レ盡候事、

一內覽、勅問御人數、國事掛、議奏、武家傳奏、守護職、所司代、惣而被レ廢候事、

一太政官始追々可レ被レ興候間、其旨可二心得居一候事、

一朝廷禮式追々御改正被レ爲レ在候得共、先攝籙門流之儀被レ止候事、

一舊弊御一洗に付、言路被二洞開一候間、見込有レ之向は、不レ拘二貴賤一、無二忌憚一可レ致二獻言一、且人材登庸第一の御急務候故、心當り之仁有レ之候は丶、早々可レ有二言上一候事、

一近年物價格別騰貴、如何ともすへからさる勢、富者は益富を累ね、貧者は益窘急に至り候趣、畢竟政令不レ正より所レ致、民者王者の大寶、百事御一新之折柄、旁被レ惱二宸衷一候、智謀遠識救弊之策有レ之候は、無二誰彼一可二申出一事、

右之通御確定被二仰付一候に付而は、六十餘州之大小藩は不レ及レ申、陪臣吏事之末々に至迄、御趣意厚相心得候樣御沙汰候事、

別紙之布告相成候御趣意は、全〳〵皇國御維持被レ遊候譯に而、朝廷德川家之御中、少しも異事被レ爲レ在候義には無レ之候間、其段可二相心得一候事、

但人材撰擧之儀は急務に付、早々可二申出一事、

一、內府公御下坂之上は、無レ程御請書可レ被二指上一之處、方今舊幕之人心如レ形御折柄故、容易に其之運ひにも成兼可レ申、將御請之御次第も、成丈け德川氏臣子之情懷に怫戾不レ致樣之御振合不二相成一候而は、是より又大患を引起し可レ申勢に付、御官位之儀も、何程之御辭退に而朝意に御相當に可レ有レ之哉、又御領地御獻納之儀、是も御含可レ有レ之儀故、夫等之邊朝廷御內意之處御垂示に相成り、夫を以坂地之內情も御內調被レ成度と、土老侯と相談之上、戶田大和守殿も相加はりに而、岩倉殿へ御逢對、前段之趣御申入、德川氏與慶之境御汲察に而、品能く御評議相成候樣之懇談に被レ及候處、卿にも二侯之御情實篤と御洞底に而、何分御內評之上御書面御出來、尙又御相談可レ被レ成との御挨拶に有レ之由、御官位之義は御辭官に而可レ然、是は當官御辭退之義に而、類例も旣々有レ之、別に御下降之譯には無レ之、只前之一字を被レ添、前內府と被レ稱候而已之事なる由、御物語有レ之と也、

○十五日、今日之布令如レ左、

一總裁以下巳刻參集、午刻評議之事、
一參與之義、自今堂上向、上の參與と稱し、諸藩士、下の參與と稱候事、
一、今日公御參內無レ之故、昨日岩倉殿へ御內談之末、象次郎申談及二內伺一候樣被レ命に付、同人へ申談、被二仰出一に可二相成一御書面、內々拜見之義申達候處、御內々御出來之御書面爲二御見一有レ之、私云、此書面散逸不知二所在一、眞に可レ惜、然る處右之內、領地も指上之文字、甚坂地之人心に關係之筋に而、何とか引直しに相成樣申談試候得共、肝要之字面改刪は難二相調一、且此書面、今夕にも尾越重役呼出被二相渡一候積之由相聞に付、左樣に表面之事と相成、萬一於二彼地一彼是有レ之候而は不二容易一次第と相成候間、一應坂地之方內調之上相願度と申入候處、此儀は承知有レ之、時宜により御請書之方に相成候而も宜趣に付、尾藩田中邦之輔へも申談、右書面本紙相下り候は丶、明朝より下坂いたし周旋可二取計一と申合、罷歸候上右等之次第逐二上聽一候處、昨日之御約束に而は、土老侯と御兩人へは、御草稿に而御內談可レ有レ之筈之處、無二其儀一而已ならす、御沙汰之御請無レ之樣之認方に而は、尾越兩藩之周旋に而、內府公之御內存承り可レ申との御趣意に相背候故、此處認直可二相成一廉と申、領地之文字も不レ穩候得は、いつれに明日は御參內之上、猶又御直談可レ被レ成候間、土老侯にも御參に相成候樣、明朝青山小三郎被レ遣、後藤象次郎、辻將曹へ一應談之上に而、土老侯へ申上候樣被レ命、

○十六日、於二宮中一被二仰出一、左之通

議定之輩不レ及二日參一、御用被レ爲レ在候節は可レ被レ召候間、必參勤可レ有レ之、且臨時御用有レ之被レ召候節は、速に可レ有二參朝一候、尤非常之節は早速可二馳參一候事、

右總裁宮御沙汰候事、

一、今朝青山小三郎後藤象次郎寓居を訪ひ、昨夜被レ命候次第を以及二內談一候處、象二郎申候は、此件はいつ迄も密談之筋に而貫度事に付、御參內抔有レ之而は却而不レ可レ然候、老公思召之御文意は、如何にも御尤に拜承仕候へは、御引直し之義は何樣にも可レ致二心配一候間、今日之處は、雪江十之丞兩人參與に而申談候方可レ然との見込に而候、此儀御同論候はゝ、容堂樣へは御參之御沙汰無レ之樣仕度との談に相成由、

夫より辻將曹方へ罷越申談候處、象二郎同按に而、御參無レ之方可レ然、素々此件之當否抔は、御定之御職掌に而、公議に御打出し、惣參內之公論可レ然と申居候由、此等之趣歸邸申上候處、公にも御參內は御延引相成、思召相含雪江十之丞參朝之上、象二郎申談書面相認、象二郎を以岩倉殿へ內調之處、難問反諄及二數度一に付、殊之外手間取、點燈之頃漸くに相決し、左之書面御渡有レ之、

今般辭職被二聞召一候に付而は、辭官仕度、且王政復古に付、政府御用途之儀も、天下之公論を以所領より差出候樣仕度奉レ存候事、

一、前條御渡之御書面、先つ永井殿へ內談可レ仕と象二郎等申談候處、永井殿より雪江被二差出一度段被二申上一候由、公より御沙汰に付、得二便宜一候事故、暮時過散朝より、直に永井殿へ罷越候處逢對之上、先つ宮中之形勢如何との尋に付、近況荒增物語候處、何にしても恐入候事共、先刻も其筋之者來り、御膳米竭んとす、如何可レ仕哉と申に付、夫は誠に恐入たる儀なり、何分御指支無レ之樣、是迄之手續に而可二取計一旨申聞候事候へは、二十日三十日は御支へも有レ之間敷、御貯金大分有レ之所、何地へか散逸し、寡少之事に相成たる由、第一指當りたる御一周之御法會等御出來被レ成間敷、如何相レ成候之事哉覺、京市中之混雜、伏見大津之廢驛、行旅之難澁、イヤハヤ王政ところにも無レ之、此邊如何との事に付、則種々心配而已に而手廻り不レ申、頗當惑之次第に有レ之候と相答候處、左も可レ有レ之、決而行く事には無レ之と冷笑被二致居一候に付、坂地之模樣は如何候哉と承候處、中々六ヶ敷勢に而、一統心配而已、此體に而はとこ迄と云事もなく、激家も愈盛りに相成事との答故、朝命之書面指出、ケ樣之被二仰出一にも可二相成一哉之內議に而も◎は如何可レ有レ之哉と申談候處、一覽之上、ドウデモ可レ然、事を御好被レ成候と申物なれは、彼是申も無レ詮事との答に付、全く左樣之儀可レ有レ之樣も無レ之、精々平穩を存し、漸く此處まて談付け候事に候と申處、左樣かも不レ存候得共、元來此書面抔も更に道理無レ之、將軍に付きたる御官位にも無レ之處、御職を辭せられたりとて、御辭官と申も一向に當らす、又御領地之儀も、今更不レ被二仰出一共、御指支を御傍觀可レ被レ成樣も無レ之、精々御盡し被レ成候思召は、則政權

御歸し被レ成候節も、朝廷より諸侯と共に同心協力皇國維持之詔命、萬々御奉戴之思召候得共、如レ此疎外之御取扱ひに而は、如何とも被レ成方無レ之、畢竟降官削地之儀を品能書取たる迄之事に而、有罪之姿は免れ不レ申、長州さへも入洛御免之折柄、上には何之御罪有レ之哉、尤上様には、何様之儀に而も御違背無レ之思召候得共、先第一に伊賀、拙者初不承知に而候、ケ様之書面を相當と思召候事にや、大藏大輔容堂何をして居る抔、坂地之風説も紛々有レ之候と、いつに替りて以之外之放言に付、さらは如何いたし坂地之人心に適し可レ申哉と申處、朝廷過ちを悔ひ、九日已前へ被レ返候はゝ、夫より又仕方も可レ有レ之、ケ様成不都合を工み出し候根元は、二賊之所爲候へは、彼二賊を除候事方今之急務、大藏大輔様にも此處を御心配被レ下度、薩邸へ打込む勢ひは十分に有レ之、少しにても激候へは直様襲發可レ致と、殊之外切迫之論に付、今日之御用何事に候や、二賊を除き候御相談に候哉と申候處、如何にも其儀なり、宜申上候様にとの事に付、罷歸右之次第申上候處、玄蕃迄か左様之心得にてはと御大息被レ遊レ候、

一、右之次第、以二手簡一象二郎迄概略申遣し、明朝永井殿へ罷越及二一議論一候様頼托す、田中邦之輔へも申越、明朝之下坂延引、

○十七日、今朝永井殿ゟ御直書を以、御國許之鴨御賄相成處、右之答書之内、

拜讀仕候、申略昨夜は雪江被レ遣、近日之宮中御模様委細承奉二多謝一候、今朝象二郎も罷越、昨今人心之向背、侯公様幷容堂抔大御盡力之程も申聞、内府公至急御上京之儀相促候旨に付、從レ是又候下坂、右之段建言仕候心得御座候、就而は昨今宮中之形勢幷人心之歸嚮等、伊賀始へ親敷爲二乗込一度候間、雪江にも下坂被レ命、彼地にて内府公へも直々にも演説有レ之候様、尤侯公より御使命之趣を以、同人よりも御上京之儀建言有レ之度奉レ存候、右之趣可二申上一存候處、御使故、貴答旁申上候、下略、

十二月十七日　尚志拜復

福井賢臺

一、今日參朝之上、象二郎逢對、今朝永井殿之様子

承候處、則罷越段々及二議論一候處、大に落意有レ之、何分下坂一と周旋可レ致、夫に付越侯へ罷出御相談申上度との事に候間、早々歸邸可レ然、象二郎も追付可二罷出一との事に付、詰合之田中邦之輔へも參邸候様申聞、早々歸邸之處、今朝永井殿へ御贈物之返書如レ前候へは、最早來邸は有レ之間敷と申合候内、象二郎參上に付、直に被二召出一、今朝之様子相尋之處、申上候は、永井殿之暴論之如くにては、干戈闕下に動き亂階と可二相成一事にて、御大事至極候へは、此時に當りては、先つ人心鎮定之段被二仰上一候趣に而御上京有レ之、尾越兩侯を以過日之御請被二仰上一候へは、夫を聞召と一處に御參内被二仰出一、速に御參朝に相成候へは、夫より後は思召次第と申者に有レ之段、反覆辨論仕候處、永井殿も大に會得に而、其筋なれは一と盡力致し可レ申、越公へも相談申、下坂可レ致と被レ申由、逐一申二上之一、其内永井殿尾館へ被二罷出一由之聞に付、即刻御供揃に而尾館へ御出有レ之、雪江象二郎も參上、於二御前一永井殿も陪席に而御談論有レ之、約る處、内府公御上京之上、御辭官幷御領地之義共、内府公御口上に而兩侯へ御演達に相成候を、兩侯御書取御奏達に相成、夫を聞召、直に參内被二仰出一と申御手順に決し、御請書之御草稿等御出來なり、今朝岩倉殿象二郎へ被レ申候は、何分内府公御上京なくては不二相適一事に候得は、是非共其運ひ之周旋致呉候様懇懇被二申聞一候付、右之御手順申談候處、其儀は何様にも心配可レ致、唯八方より迫られ候には、甚迷惑被レ致候との事之由申出に付、前段之御談と相成、且御參内御當日は、尾越土三侯も御參内に而、三宮、中山、正三等之御談に而速に御取極め、岩倉卿之を周旋し、即時之御取扱ひに相成候積に御内談濟、永井殿明日下坂被レ致候間、雪江邦之輔にも下坂可レ致と申談す、

○十八日、今朝御所より御達如レ左、

御用之儀候間、今十八日午刻參朝可レ有レ之事、

十二月十八日　參與

越前大藏大輔殿

追而今日參朝之上御許定之義に而は候へ共、外國事件急務に付、旁先爲二參考一、御用向廉々荒增書取、別紙一帖爲レ見被レ下候事、

別紙
外國事件
外國掛
一外國掛
三條前中納言
松平大藏大輔　井家來之內一人
土藩　後藤象二郎
薩藩　岩下佐次右衛門
即今之處右之通被二仰出一候思召に付、先御內意御下問候間、見込之趣早々可レ有二言上一候事、

海外各國へ御變革布告一紙、薩藩より差出分、
朕は大日本天皇にして、同盟列藩の主たり、此誥を承くへき諸外國帝王と、其臣民に對し祝辭を宣ふ、朕將軍の權を朕に歸さんことを許可し、列藩會議を興し、汝に告ること左の如し、
第一、朕國政を委任せる將軍職を廢するなり、
第二、大日本の總政治は、內外の事共に皆同盟列藩の會議を經て後、有司の奏する所を以て、朕之を決すへし、
第三、條約は大君の名を以て結ふと雖も、以後朕か名に換ふへし、是か爲に朕か有司に命し、外國の有司と應接せしめん、其未定の間は舊との條約に從ふへし、
右薩州布告一紙に付、朝議の一紙、
大日本國太政官、海外各國の公使等に移す、天子諸外國帝王と其臣民に對し祝辭を宣ふ、天子會帥有司と詢り汝に告ること如レ左、
第一、往年國政を委任せる將軍職を廢するなり、
第二、大日本の總政治は、內外の事共に皆會帥有司の會議を盡し、奏する處を以て、天子之を決すへし、
第三、條約は大君の名を以て結ふと雖も、以後太政官に換ふへし、是か爲に有司に命し、外國の有司と應接せしめん、其未定の間は舊の條約に從ふへし、
右從二朝廷一外夷御應接初之義、實以不二容易一大事件に付、宜く熟考を被レ遂、參朝之上見込之旨言上可レ有レ之事、
右之外數件有レ之、條目而已左に略二記之一、
一御任選御沙汰に付、言上に相成人體之御下問、

二革政御取建之事、
二市中取締方之事、
二太政官代之事、
二、今夕於二御所一御達如レ左、

尾越へ

德川內府下坂後、鎭撫方之儀被レ命候處、會桑于レ今滯坂、此比山崎邊人數繰出候哉之聞有レ之、人心動搖、萬一年若之徒無レ故發レ事候而は甚不レ宜候間、會桑二藩早々歸國可二取計一、急度可レ有二盡力一、更に御沙汰候事、
右に付、尾之田宮如雲へ鹿之介より、明日罷越可レ及二相談一旨申遣置、
一、今日於二宮中一、外國へ御告諭應接之議事有レ之、勅書御渡、御璽及詔議定加判、勅使可レ被二發遣一と被レ決由、
一、今朝より永井玄蕃頭殿、雪江、田中邦之輔下坂、雪江夕七半時前着坂、永井殿田中相伺處未た着無レ之由、夜二更比田中氏より唯今着坂之由申來る、
○十九日、今朝鹿之介尾侯御旅館へ罷越、田宮如雲、丹羽淳太郎申談處、會桑共に尾侯骨肉之御間柄に付、尾侯御一と手に而御引受、御配慮有レ之度との談に而、今日尾侯より被二指上一御請書如レ左、

德川內府旗下之者鎭撫方、幷會桑二藩蒙二嚴命一、早早歸國可二取計一旨更に御沙汰之趣、謹而奉二拜承一候、右は兼而御沙汰之趣も御座候に付、精々周旋仕候處、何分遲延相成候より、奉レ惱二聖慮一、蒙二再度之命一候段、恐惶之至奉レ存候、猶更精々盡力、早々歸國爲レ仕候樣可レ仕候、依レ之御請奉二申上一候、

十二月十九日

一、今日外國御諭告應接として、勅使發遣之旨被二仰出一、於二御所一御家來御呼出、御達之趣如レ左、
一今日之御沙汰之趣、各其主人へ申入、否明朝可二申出一事、
一右承知之上は、加判之爲に、明日午刻何れも參朝之事、
一越土藩家來一人つゝ、公卿同伴應接之事、
一公卿に而勅使二人之事、
一、今朝內府公より御奏聞狀、大監察戶川伊豆守殿持參に而參邸、拜謁之上呈覽有レ之、如レ左、
臣慶喜　不肖の身を以て、從來奉レ蒙二無レ渝之寵恩一、

恐威悚戴之至に不レ奉レ堪、乍レ不レ及レ夙夜不レ安二寢食一苦心焦慮、宇内之形勢を熟察仕、政權一に出て、萬國並立の御國威相輝候爲、廣く天下の公議を盡し、不朽の御基本を相立度との徴衷より、祖宗繼承の政權を奉レ歸、同心協力、政律御確定有レ之度、普く列藩の見込可二相尋一旨建言仕、猶將軍職辭退も申上候處、召之諸侯上京、衆議相決候迄、是迄之通可二相心得一旨御沙汰に付、右參着の上、同心戮力、天下之公議輿論を採、大公至平之御規則相立度奉レ存候の外他念無レ之、鄙衷不レ空と感戴仕、日夕企望罷在候處、豈料や今度臣慶喜頓末の御沙汰無レ之而已ならす、詰合の列藩衆議たにも無レ之、俄に一兩藩戎裝を以宮闕に立入、未曾有の大御變革被二仰出一候由にて、先帝より御遺托被レ爲レ在候攝政殿下を停職し、舊眷の宮堂上方を無レ故擯斥せられ、遽に先朝譴斥の公卿數名を拔擢し、陪臣の輩猥に玉座近く徘徊致し、數千年來の朝典を汚し、其餘の御旨意柄、兼而被二仰出一候御沙汰之趣とは悉く帶壞相反し、實以驚愕の至に奉レ存候、假令聖斷より被レ爲レ出候儀候共、可レ奉二忠諫一筈、況や當今幼冲之君に被レ爲レ在候折柄、右樣の次第に立至り候而は、天下の亂階、萬民の塗炭眼前へ迫り、兼々獻言仕候素願も不二相立一、金甌無缺之皇統も如何被レ爲レ在候哉と奉二恐痛一、臣慶喜目下の深憂此事に此座候、殊更外國交際の儀は、皇國一體に關係仕候不二容易一事件に付、前件の如き聖斷を矯候輩、一時之所見を以て御處置相成候而は、御信義を被レ爲レ失、後來皇國の大害を釀候儀必然と、別して深憂仕候間、最前眞の聖意より被二仰出一候御沙汰に隨ひ、天下之公論相決候迄は、是迄之通り取扱罷在候、鄙言の趣御聞請被二成下一、兼而申上候通り、公明正大、速に天下列藩の衆議を被レ爲レ盡、正を擧け奸を退け、萬世不朽の御規則相立、上は奉レ寧二宸襟一、下は萬民を安し候樣仕度、臣慶喜千萬懇願之至奉レ存候、此段謹而奏聞仕候、

十二月　日

伊豆殿昨夜上京、永井殿へ可レ被レ談積之處、御同人は下坂不在に付、戸田大和守殿へ被二申談一候處、不二容易一大事件故、明朝迄熟考可レ被レ致との事に而、今朝迄延引候得共、豆州は是非可二指出一と被二申立一故、和州より岩倉殿へ被レ及二内談一由、何卒公にも御周旋を以、御趣意御貫徹相成候樣との御沙汰も有レ之趣被二申上一候へ共、公は此頃中必至之御盡力に而、漸已に成功にも可二相成一眞際に及ひ、於二坂地一ク樣之御運ひにては、甚以御當惑御殘念にも思召候故、猶御熟考可レ被レ成候間、表向御奏聞之儀は暫御見合候樣御挨拶に而、退去に相成、

一、豆州吾藩邸（◎より脱カ）土老侯へ被二罷出一、御同樣御周旋之儀被二相願一に付、容堂君も御當惑に而、象二郎へ被二仰聞一、岩倉殿へ御内談之處、奏聞狀は今朝戸田和州より被レ致二承知一候へ共、彼書面披露相成候而は、自分迄も最早夫切之事と相成候故、和州へ申談、中山、正三之兩卿へは内々被レ入二一見一候へ共、其餘は決而他見無レ之、岩倉殿に而掌握被二致置一候積之由、何分唯今之内、内府公御參内之運ひに不二相成一候而は不二相適一候へは、象二郎等も十分盡力致候樣、永井に而心配不二行屆一候はゝ、尾越へ土侯指添下坂候而、御迎取と申儀は相成間敷哉抔と被二申聞一候程之儀に有レ之候、

一、豆州退邸之後、公尚再三御熟思之處、兎も角も、いまた表向奏聞に不二相成一内取消し、事故なく御上京之御都合に被レ遊度に付、則戸川殿へ被レ遣二御直書一、如レ左、

（上略）扨過刻は御入來御苦勞存候、尚爾後愚考之處、上より御奏聞之御書付寫、明後尾張大納言殿へ御持參之儀は御見合せ被レ下度、何分御相談申儀も有レ之候間、第九字より十字迄之間に、乍二御苦勞一御枉駕被レ下度、其節萬緒可二申入一候、（下略）

十二月十九日　　松平大藏大輔

戸川伊豆守殿

右之通被二仰聞一候處、未刻に至り參邸有レ之、土老侯、大和守殿も御會集に而、坂地積鬱排泄の餘りに出候除姦之拙策よりは、岩倉殿迄も如レ形御上京翹望之機會と申、朝意御奉戴之御誠意を以、速に御參内に相成候へは、天下之安堵、朝廷之御安心、此上之御長策は有レ之間敷と、代る〳〵御說得相成候處、豆州も大に落意感服に而、如何にも御同意奉レ存候間、御奏聞之使命は是切に仕、此表御盡力之御趣意を以、坂地之方精々周旋可レ仕との事に而、即刻下坂有レ之、

一、德川家之周旋方穗積亮之助、荒井健次、拜謁相願

ひ、内府公御上京之儀、御盡力被レ爲レ在候樣懇願に付、公も素より御同論に而、列之御含も被レ成二御座一義を被二仰聞一候處、兩人雀躍悦服、健次は直樣戸川殿と一所に下坂可レ及二周旋一と申上て退去せり、

一、御奏聞狀之儀は、戸川殿御談之上、今夕尾越兩侯へ御預け之事に相成、

一、右之次第に而、御奏聞之儀は相止に付、猶又可レ及二盡力一段、鹿之助より雪江へ以二急飛一申越す處、於二坂地一は雪江、御奏聞狀御差出に付、周旋不レ及レ力して歸京せると行違ひになれり、

一、此日於二坂地一辰半刻比、田中邦之輔、雪江旅宿へ來訪、永井殿も昨夜着坂相成由、右に付猶又相談之上、巳刻比登城、邦之輔と一處に永井殿へ逢對申入相待居候處、御目付榎本對馬守殿雪江へ逢度旨に而、於二御目付部屋前一、今度御奏聞に相成候御書付之由に而、一通被二相渡一、右は昨日戸川伊豆守殿を以御奏聞に相成候、拜見之上、猶見込有レ之候は、申達候樣、拜見且寫取候事にも候はゝ、大廣間御下段邊可レ然との事故、落手之上於二御下段一拜見之處、但し御奏聞狀は如二前記一外に別紙右之通之如レ左、

御奏聞狀此度御差出相成候に付而は、思召之程奉二感激一候面々は人數召連早々上坂候樣可レ被レ致候、右之通萬石以上之面々へ相達候間、此段可二申上一候、

私云、追而江戸表より御用狀之内、

十二月廿二日、重役之者明廿三日西九へ罷出候樣、松平阿波守樣、松平美濃守樣兼より廻狀來る、翌廿三日、御家老代り飯田主稅西九へ罷出候處、大廣間へ御老中列座、大廣間御同席之重役一同罷出候處、美濃守殿御老中淀侯、被二申聞一候は、今般京師之御模樣に付、別紙之通御建白に相成候に付而は、此末如何相運可レ申哉難レ計、此上は銘々致二奮發一三百年來之恩誼を思詰、人數召連大坂表へ罷出、厚忠意を被レ盡候樣、何も君上へ申上、尚盡力可レ致旨御演達之上、御書付御渡有レ之、右寫指越候、御書付は即御奏狀也、

御書面之御趣意、誠以不二容易一御次第柄に付、一應寫取候上、猶又榎本殿へ逢對、御書面返上之上申達候は、御趣意之趣一々無二御據一御次第に而、可二申上一樣

も無レ之候へ共、朝廷におゐて御採用之處は、何共至難之儀と奉レ存候、是は何方へ御指出に相成候哉と申候處、帥宮へ戸田和州を以被二指出一候御積之由被レ申に付、宮又は其餘に、兼而御差含之御方に而も有レ之事に候哉と申候處、夫は何も無レ之との事故、夫に而は無策と申物に而、御仕遂け難レ被レ成而已ならす、朝廷之御爲、御家之御爲にも不二相成一事と奉レ存候、右故京地之御評議に而は、何分御平穩に御上京奉レ願候積に候ひしかと、此御書面出候而は最早十日之菊と相成、何共當惑至極之段申述處、何とか此上は御奏聞之趣御採用之手段は有レ之間敷哉との尋に付、此上は此御書面を公議に被レ附候樣被レ遊候より外は無之、左候はゝ御後難も被レ爲レ在間敷歟と申候得は、如何にも夫より外は有レ之間敷候得共、其處を公にも御盡力被レ下候樣可レ被二申上一、此御書面は大藏大輔樣容堂へは、一通つゝ差上候筈に申談置候と申事に付、尾州へも申談候而不レ苦候哉と申候處、諸藩之内拜見被二仰付一候向も有レ之候へは、聊不レ苦との事なり、扨何分鎭定難レ叶事と相成候と被レ申に付、伏見其外へ御人數被二指出一候は、如何之譯に候哉、如レ斯御書面被二指出一候へは、猶以御恭順に不レ被レ爲レ在候而は相濟不レ申、諸藩之人心も、其御恭順之御美德に服從致居候事に有レ之段申候處、朝議之次第被レ尋に付、近況之形勢夫々申達す、又被レ申候は、伏水は宿驛被レ廢に付、人馬幷船賃等妄に高價を貪候に付、爲二取締一御人數被二差出置一、兵庫西宮等は外國人も致二徘徊一に付、御固之姿に而、實は兵力を所々へ分ち持口を與へ、妄動を禁候策之由、二條に而も、二條通りへ廿人計、竹屋町通りへ七十人計脫走に付、其隊之頭々馳付立塞り、先つ我を殺せと申遮り止候程之事と相成、最早被レ成方無くと御下坂に被レ決候、會三千、桑千五百、幕五千計を、條城へ籠居させよとの仰にて、一點之御動搖無レ之故、已に死を以諫め奉らんとせし者も有レ之程に及ひ候へ共、猶御動き不レ被レ遊候ひしは、今日と相成致二感服一候、御出城之砌も、此處を御明退きにては最早戰期無レ之と、御玄關前を立塞き御抑留申上候勢故、無二御據一御後門より御出に相成候、今にも聊たり共激候へは、直樣破裂、拙者共も難レ制候か、江戸より三兵押來候はゝ嘸々と、唯今より心配之義等物語有レ之、退座之上右御書面邦之輔へ開示、此

趣に而は持參之策は迚も行はれ不レ申、永井殿も周旋處には有レ之間敷と申合候内、永井殿逢對に而、右御書面戸川豆州殿持參に而上京之上、永井殿へ申談指出候樣との 御仕向に有レ之處、行違ひに 相成候事に而、此處へ餘事申出候而も詮なき事故、彼一策は主張無レ之由、扨御書面は如何可二相成一哉との尋に付、公議に附する見込申達候處、如何にも左樣に有レ之度、其處折角御周旋相願度との事に付、一通は正面に而諸侯議定之方へも御指出に相成候樣致度、夫を以周旋之致方も可レ有レ之と申談候處、其運ひに相成歟不レ存候得共、今一通寫可レ被二相渡一との事なり、物語之次手に、高野山へ鷲尾殿屯兵、御代官所へ通達、幷村人注進等之書面被レ示、ケ樣之義有レ之故、彌沸騰難レ制候、是等は致二如何一可レ然哉との事に付、是も議定へ御指出御伺之方可レ然と申談、寫一通被二相渡一候事に決す、從レ是は御書面御指出に付而は、益御恭順被レ爲レ在度と申儀を、懇々相願ひ退座、永井殿は今暫滯坂之由、平山殿逢對に而、御奏聞狀寫一通被二相渡一、見込被二相尋一候に付、公議之外見込無レ之、今四五日御見合せ被レ下候へはよろしかりしをと申達候處、好機會を失ひ殘念之由に而、種々議論有レ之、兎角降官削地之不當を被二申立一に付、今日と相成候而は決して夫等之儀は無レ之と論辨を盡し、稍點頭に及ひしかとも、猶被レ申候は、右之義は跡にいたし、先つ特命を以被レ爲レ召候而は如何との說有レ之に付、京地之事情一々申遂退座、右等之次第に而、於二此表一周旋之致方も無レ之、且京都之樣子も懸念に付、邦之輔申談、夜船に而歸京す、十二字後解纜、

○廿日、昨日御家來御呼出に而御達之通り、今朝爲二御加判一御參朝可レ有レ之處、御所勞之趣を以御斷り被二仰上一しに、調印御違背におゐては勅使可レ被二指向一候抔、橋本殿被二申出一に付、十之丞、鹿之介を以被レ及二御建議一候處、趣意書取指上候樣御差圖に付、兩人より指上候書面如レ左、

演說之概略、書取を以申上候樣被二仰付一に付申上候、

昨日被二仰出一候趣、大藏大輔奉二諜承一候、外夷を見る尙古の漢土の如しとの叡慮、乍レ恐奉二感佩一候、不肖之大藏大輔、職を議定に承に付、外夷へ御布告に、御諱御璽を被レ爲レ載候末へ加判仕候儀蒙レ命、

恐汗之至奉レ存候、萬世皇國之基礎を被レ爲レ建候御大事に而、愚衷可二默止一儀無二御座一候に付、差向可二申上一候、今般御大政更始之折柄、外夷も刮目罷在候處、諸藩列侯僅に五藩而已にて、夫も多くは隱居又は 世子等に候へは、即今之不束、外夷國情通知之事故、◎此邊恐らく誤脫あらん全く天下の會議を聞召ての御所置とは不レ奉レ存、御手薄に可レ奉レ存哉、深憂に不レ堪奉レ存候、御告文之內に、列侯會議之上と被レ爲レ在候通り、段々列藩も上京可レ仕候間、仰願くは會議を被レ爲レ待、篤と公議之上御布告に相成候共、敢而不二伺出一樣には、如何樣被レ成方も可レ有二御座一候哉、何分勅使御下向、一度降命有レ之候上は、直に世界之通法を以、都下にミニストル指置候儀可レ奉レ願、且是より誰人か應接可レ仕哉、參朝も仕度、其儀も奉レ願候なと申出候はゝ、甚御煩は敬義と奉レ存候、吳々當分之處は兎も角も御論置に相成、尙天下之議を被レ爲レ盡候樣、幾重にも奉レ願度、今日此處之退慼無レ之樣御盡し無二御座一而は、後日之大害難レ測、至重至大之儀、恐懼之餘り不レ憚二忌諱一、議定之廉を以、右之趣發臣兩人を以奉二申上一候、

酒井十之丞
毛受鹿之介

私云、此御調印之義、尾侯は御斷り被二仰上一、土老侯は御熟考之上ならてはと被二仰立一、相調ひ難く、勅使指添被レ命候後藤象二郎、三岡八郎も御斷り申上に付、此一件は遂に御遷延に相成たり、

一、此夜雪江西半刻頃上着之處、亥刻後邦之輔より書簡に而、御奏聞狀二候へ御預に付而は、前議之通り今一應申上度に付、明朝より下坂之積相談に付、其段申上相伺ふ所、雪江も下坂候樣被レ命に付、其段及二返報一、

○廿一日、今朝より雪江、田中邦之輔下坂、

一、今夜永井玄蕃頭殿坂地より上京有レ之、

○廿二日、今朝毛受鹿之介永井殿へ罷出、雪江昨朝より下坂、亦復行違に相成趣、且京情申達候而、坂地之模樣承候處、於二彼地一は過日來已に御奏聞一條に有レ之處、戸川殿歸坂に而、京地之次第申上に相成に付、御再評之上御奏狀御差控に相成候上は、京地之形勢に被レ任、御上京も可レ被レ遊との御儀に相成、其件爲二

取調ニ永井殿歸京に相成事之由、坂地之人心は今以困難之趣等物語有レ之、

一、此夕五字後、後藤象二郎參邸拜謁相願ひ、永井殿歸京、今夕容堂樣御旅館へ被ニ罷出居一候間、乍ニ御勞公も御來臨被レ下候樣との御使之旨申上に付、即刻御供揃に而、要路之面々被ニ召連一、土老侯大佛之御旅館へ被レ爲レ入、御同所に而二公幷永井殿、象二郎、福岡藤次、被ニ召出一候、修理、十之丞、鹿之介も御一席に而、種々御相談有レ之候へ共、何分差當り御官祿之御一件形付不レ申內は、御上京相成候而も却而御不都合に付、先つ此件之御目的相立候樣被レ成度、就而は京坂隔地之往復、日間も相懸り、段々遲引にも相成候へは、結局朝廷より之御沙汰に相成、夫を御持參、尾公と御一處に御下坂に而被ニ仰上一、御請之御模樣次第、御上京之義も其節之御談に相成候方可レ然候へは、明日は三職惣參內之義御申立、尾侯と御一處に可レ被ニ仰立一との御談濟に相成、即席より十之丞、鹿之介被レ遣、尾侯御旅館におゐて、小瀨新太郎、靑部小五郎、中村修之進等對接、夫より申上に相成處、尾侯御尤に思召御同意之旨御返答有レ之、十二字前御歸邸被レ遊、

二、尾老侯、乘而御沙汰も有レ之御周旋之會桑歸國之件、今以御遷延相成候に付、御下坂御盡力被レ成度段、今日より御暇之義御願に相成處、別紙之通御指圖濟に相成趣に而、明日にも御下坂可レ被レ成御樣子有レ之候へ共、前條之御次第相成に付、御下坂御見合せ之義、靑山小三郎を以被ニ仰入一處、御承知之段中村修之進より御返答申來る、

尾張大納言へ

頃日被ニ仰含一候筋に付、段々盡力之處、華城往反彼是難レ屆次第も有レ之、自身下坂、死生之間に立候而も、御趣意御徹底に可レ致樣志願之趣に而、今日より御暇願度旨、始終出格之心得神妙に思召候間、願之通被ニ仰付一候、但去る九日以來日々物議を生候事、偏に尾越周旋之厚不レ與之故に付、此上は來る廿五日中三日を限り成功可レ有レ之候、右期日に至り尙是迄之如く遷延之義被ニ申出一候而も、於ニ朝廷一決而不レ行件にも有レ之候間、前件之通、彌以精精盡力可レ致被ニ仰出一候事、◎原本誤脫あり今三世紀事略を以て補正す、

願之趣も有レ之、別紙之通被ニ仰出一候、隨而復古之初より被レ爲ニ的目一候御義は、尾越周旋、德川內府

より言上之廉成否に候間、各其分可ニ心得一候、尙又各國御布令之事におゐては、迅速御所置可レ然御確定之上段々言上之向も有レ之、旁昨今之御運ひに至候得共、越土藝初、下參與輩被レ出ニ建言一之次第、其情實も亦難ニ默止一被ニ思召一候間、急端右期日を限とし御所置可レ被レ遊候、此段爲ニ心得一被ニ仰下一候事、

一、今朝六時過、雪江大坂着船、四半時比邦之輔同伴登城候處、永井殿戶川殿上京不在に付、平山殿へ逢對、御上京無レ之而は不ニ相適一次第、邦之輔より逐一申述、夫より京地之形勢等及ニ詳說一、漸く聞込に相成、雪江儀は、拜謁之上見込之次第及ニ言上一度申ニ達之一、平山殿には、朝廷より御上京被ニ仰出一候樣被レ致度趣に付、其儀は隨分周旋可レ申段申談退座、午後、伊賀殿豐前殿平山殿、雪江へ逢對、見込之趣被レ尋に付、朝廷諸卿幷諸藩士之事情形勢等委曲詳辨、何分好機會候へは、此時御上京にて、大勢御挽回御靜定無レ之而は不ニ相適一趣、反復申陳候處、何れも大に落意に而、朝廷より之御沙汰次第、御上京に可ニ相成一との談判決意に付、御官稱御一條も御決談被レ下候樣にと

申述候處、夫に而は六ケ敷、其儀も共にと申事に而は、此方より之被ニ仰上一は速に聞召に相成、彼方より之御沙汰は無レ之と申樣之事に相成時は、其場に及ひ何共被レ成方無レ之事と可ニ相成一候、欺を受ては後悔詮なし坏の疑念論に相成難ニ相決一に付、朝命之下書指出し、

今般辭職被ニ聞召一候に付而は、辭官仕度、且王政復古に付、政府御用途之儀は、天下之公論を以、所領より指出候樣仕度奉レ存候事、

ケ樣之御次第を以、尾越迄御請に相成候へは、尾越にて又夫を品能書取、指出候樣之御都合に相成候而は如何と申談候處、さらは是を以談見可レ申との事に而引入、良久有レ之、豐前殿平山殿逢對にて、二侯へ御談に可ニ相成一書面、十分之幕意を以認たるを被レ示、ケ樣に而は如何と被レ申に付、邦之輔と共に種々辯論、文面之圭角悉く減削致ニ加筆一候處、夫に而談見可レ被レ申との事に而被ニ引入一、又良久有レ之、伊賀殿豐前殿平山殿逢對に而、先頃官位一等を降し、領地二百萬石被レ削候段、降勅之風聞書致ニ流布一、夫より猶更氣立居候處故、先刻之書面、筆削之通相成候而は、迚も落合

難ニ出來一、原文之通りならては鎭撫に難レ及と被ニ申出一に付、全國高割云々之文段、尾越に而ケ樣之趣之書取に相成候而は如何と、猶又潤色致し申遂、其談に而被ニ引入一」又良久有レ之、伊賀殿豐前殿逢對にて被レ申候は、種々申談見候得共、一字之增減も不ニ相適一、原文之儘ならては落付不レ申事に相成候間、何分此通りに而御盡力相成候樣致度と及レ談候處、◎此邊恐くは誤脫あらん伊賀殿矢立を取出され加筆之上被ニ引入一、右原文加筆如レ左、

辭官之儀は朝廷之御沙汰次第に可レ仕、且政府御用迭之儀は「全國之高割を以相供し至當之義に付」

全國之高割に而相供候樣

◎原本朱枠、追而以ニ天下之公論一御決定相成可レ然事、（◎原本朱書、公論の字の下より朱線を加へて添加の意を示したり）

私云、朱書は伊賀守殿加筆之趣を寫す、

良久有レ之、書面文段申立候通前後に引直したるを、御目付設樂備中守殿を以被ニ相渡一、亥刻過退出す、

但戶川殿上京、朝命に出候樣との周旋之爲に被レ上候事に候へ共、段々兩人申立候趣に而は、御官祿一件未定之內朝命候而は、甚御不都合大難を來候に付、兩人上京まて戶川殿滯京、示談相成候樣、急使被ニ申越一由、伊賀殿物語有レ之、

○廿三日、今朝永井殿より呈書如レ左、

一翰奉呈上候、然は唯今坂地急騎便を以、兼而御內諭御座候二ケ條之儀に付申越候趣は、雪江邦之輔再下坂に而、創地辭官之儀に付云々被ニ申聞一に付、別紙之通り御內答書出來、兩人も一覽致し、加筆通り取直相成候樣致度との旨に付、其通り取直しに相成申候、右加筆通之書面に而宜候はゝ、早速御差出に可ニ相成一候へ共、左も無レ之而は、所詮御上京之運ひに相成兼候、尤公然御旗本之士へも相示候樣不ニ相成一候而は、必大沸騰、不レ可ニ鎭撫一勢に立至候段申越候、昨夜御內談之趣も御座候間、不ニ取敢一別紙相添此段申上候、何れ小生も跡より罷出、尊慮をも相伺可レ申候、早々頓首、

十二月廿三日　尙志

福井賢老公

一、今朝戶川殿幷御目付保田鉾太郎殿來邸、戶川殿より內府公御直書呈進有レ之、如レ左、

一翰呈進、扨は戶川伊豆下坂、御地之御模樣委細致ニ承知一候、何分にも早々上京致候樣にとの趣云

云致ニ承知一候、素より誠意を以皇國之御爲に致度微衷は、迫々建言も致候義に付、此度之義迚も、皇國之御爲に相成儀候はゝ、速に上京、協力同心、正議を盡度素志情願候得共、先頃既に大變革之節、家來共鎭撫之爲大坂へ引取候次第に而、漸く說諭をも相加へ鎭定には相成候得共、此度爲ニ天下一上京致候共、家來共承候はゝ、一向に危地に臨み候樣存取、又々沸騰難レ留に可レ到と熟知致候間、此上之御盡力に而、可ニ相成一は、御所より御用有レ之に付被レ爲レ召候樣相成間敷哉、左候はゝ家來にも如何樣とも鎭撫說諭いたし、早々上京候樣可レ致、委細は伊豆申含、亥蒂打合せ可レ及ニ御細話一候間、深く御諒察可レ給候、右上京之節は人數も召連候事故、兼而宮殿は勿論、市中末々迄誤解いたし、猥に騷動不レ致樣、鎭撫方御心付可レ有レ之候、餘は兩人之口吻に托し草々閣筆不悉、

十二月廿一日夜認　　內府

大藏大輔殿

容堂殿

無レ程永井殿も御來會、象二郎も被ニ仰遣一、御書中之趣

反覆御討論之上、坂地より相廻候御書取猶又御添削に而、御書面御出來相成、御所へは、今日尾越被ニ仰合一御申立有レ之之間、三職惣參內相成候樣、御家來共を以御達有レ之、未半刻過御廉上下に而御參內被レ遊、尾侯土老侯藪若侯も御參內、薩侯は御斷り也、於ニ小御所一惣裁始御揃之御席に而、尾侯と御一所に、德川氏官祿之義、朝廷より之御沙汰に相成、夫を御持參に而御下坂、德川氏へ御達有レ之、御請濟に而御上京相成候樣、御周旋被レ成度趣、今日は德川氏支族之御場合は御離れ、議定御職掌之上に而、皇國萬安之爲被ニ仰上一候段御申立に而、御相談之御書面御指出に相成候處、政府御用途として領地返上之文段に不ニ相成一候而は、御奉還之實効難ニ相立一との事候へ共、御領地返上抔との趣意相成候而は、坂地之鎭撫難ニ出來一譯に而、延議殊之外困難に而、中々御一席之御評決には難レ至、再三御休席に而之御論談なり、是は政權奉還候上は、領地共に返上無レ之而は、御誠意も不ニ相顯一、御名分も難ニ相立一との論上院に盛んに、文字上において義理之當否を爭ひ、眼前闕下に動亂を發するを顧みさるを非とするの議、下院に專ら也、二侯は朝野

之安危、時憂之緩急を御辯析あつて、頻りに成敗之所決を御催促ありといへとも、兎角之御挨拶無レ之、難二陳百回一、夜將に明なんとするに及んて、いつの間か、宮始上院之御方々御退朝となりけれは、二侯も無二御據一、廿四日朝卯半刻比御退散なり、

一、此日雪江坂地早朝發之積之處、寅半刻頃、司計小栗五郎大夫着船に而申出候は、昨夕申刻比伏見出船に而及二下坂一たる由、右は公御下坂之御沙汰に付、御宿割御用として罷下候由、御下坂之事情は更に不二相辨一趣に付當惑候折柄、又々京便有レ之、廿三日御參內、廿四日御下坂相成段申來候趣、同人より申出、於二雪江一も進退難レ決に付、今一度御城中之樣子幷京報之次第も承調、行止取極可レ申と、平山殿旅宿へ推參承候處、和州より之來帖に、尾越下坂之模樣、形勢至難と唯一筆申來候迄に而、事情不分明之由、兎角御官祿二件不二形付一候而は、御上京には難二相運一事候へは、兩侯御下坂に而も御無益に可二相成一候間、其段早早歸京申二上之一、右件御事濟之上、御上京御促に相成可レ然と、平山殿との相談相決、直樣歸寓、巳刻發船、夜亥刻過京着、直に參朝、平明御供に而罷歸る、

一、去る九日變革已來、伏水廢驛に相成候へ共、奉行屋敷には餘程之人數詰在、加レ之新撰隊幷會兵等坂地より被二指出一候處、近々朝廷より薩長二藩へ巡邏被レ命故、嚴重之警衛に而、兵隊戎裝に而辻々相固め、唯今にも事之起るへき形勢故、市中老若離散、器財取片付、砲聲一響に及候はゝ、立地に戰場と可二相成一有樣なりき、

○廿四日、今日巳刻御參內之御調候處、御所より御使を以、御用之儀候間唯今參朝有レ之樣御達候付、尙御所向御取調之上、午刻御供揃に而御參內被レ遊、今日尾侯土老侯薩侯御斷りに而、藝若侯と御兩人なり、於二宮中一廷議內景御探索有レ之處、昨日來徹夜故、宮始寶に御草臥に而、御評議御出來兼、今朝之處御散朝相成事故、今日は是非御決評と申御運ひ、畢竟之處、官武內外之落合、疑懼を懷いて決兼候次第に付、下參與周旋之向より、夫等之儀は尾越へさへ御委任相成候へは、坂地之儀は急度御安心之旨に而致二慫慂一、先つ夫なれはと申趣にて漸く決しかけ、頓て事定り可レ申勢之由なりしか、無レ程下參與不レ殘呼出に而、御書面御決定候間、拜見之上存寄有レ之候はゝ、猶又申上候

樣との事に而、御書面御渡に相成處、右御文段之內、矢張領地返上之文字有レ之候付、參與之內、尾越之面面より、於二尾越一は尙相願度儀有レ之段申達候、諸藩は默々として退座す、是より禁句は引直しに相成樣、公にも御沙汰有レ之、參與等頻に裏面周旋、邦之輔雪江は岩倉卿へ申立候處、內狀殊之外險急之趣被二申聞一候に付、當時之議論家、中御門、正親町、長谷、萬里小路等之諸卿へ、御逢對之義申入候處、良久して四卿御揃御出會に付、邦之輔より、返上之二字有レ之而は、坂地輕輩之人心に關係、如何にも落合兼、鎭撫難儀之趣、諄々申述候處、諸卿被レ申候は、一應は尤に相聞候得共、御決定之上之事候へは、最早動しかたき趣等談之由、或卿より、政權返上之上は領地も返上無レ之而は、名分名義難二相立一、內府誠意之發見も無レ之との論を被レ發に付、雪江十之丞申陳候は、其仰せこそ名分不レ明と奉レ存候へ、德川氏之關八州は、豐臣氏之頃三遠駿甲と振替に相成事に而、武功を以伐り取候も同然、其外之土地迚も、其頃之世態に而、朝廷より賜はり候と申事も無レ之、夫々之由緒有て領し來候事に而、政權にも將軍職にも附き不レ申、又祖先之世には、天下之人心盡く德川氏に歸服致候故、政權も自ら手に落候事に而、誰のを奪しにもなく、何方より讓られたるにも無レ之候、又將軍職之義は、再應御辭退申上しかと、强而被レ命候事に而、願ひたる事には無レ之、夫より已來は代々右之振合を以、二百餘年相承致候事に而、官位に付而之譯も更に無レ之、然るに唯今と相成、右政權を返上奉り候德川氏は、領し居候土地迄も返上致候半而は不レ適次第と相成、又政權に關らぬ諸侯は、依然として舊封を領し居候而は、德川氏は代々政權御預り申上、心を勞し力を費候丈け之不幸と相成候道理に當りて、素々政權と領地と、將軍職と官位とは各自別段に而更に名義に相拘係すへき物には有レ之間敷歟と申上處、夫故昨日も、諸侯一同領地返上すへきかとの論も起候へ共、夫は不レ宜との事にて相止たりと被レ申に付、御尤之次第に候、諸侯一同領地返上と相成候はゝ、天下之惑亂と相成可レ申、今德川一家たりとも、人心は同し事候へは、いかてか故なく承伏仕るへきと申候へは、例之普天率土を被二申出一候に付、如何にも一天下王土には相違無レ之候得共、王土なれはとて、王之御勝手次第、御私に御引

上け被レ成候譯の物には無レ之、土地人民程大切成動かし難き物は無レ之、如何に叡慮にても、御無理は決して行はれ不レ申筈に候を、ヶ樣に名分名義も立さる事を被二仰出一、末の詰りを如何被レ成候哉、舊幕の長州再討を御覽なさるへし、名義不二相立一候故、結局致し方も無レ之事と相成候、此度も德川氏へ御仕向けの次第により、朝命といへとも如何可二相成一哉難レ計レ之哉、夫れとも「ヨリ」にて無レ之而は不二相適一儀候哉と推問に付、兩藩にては是非とも「ヨリ」と相成候樣にと及二懇願一處、左候はゝ其通りに相決、其上に而御書面改而御渡可レ被レ成旨に而、追而小御所に於て三職御列座、朝廷より內府へ御沙汰之旨に而、總裁宮より別紙公へ御渡有レ之、御拜見之上、早速下坂德川內府へ可二申聞一と御請被二仰上一、其席へ尾侯御名代成瀨隼人正御呼出、右同樣御演達、大納言へ可二相渡一旨に而、宮より隼人正へ御渡有レ之相濟、御退散は亥刻を過きたり、御別紙如レ左、

一今般辭職被二聞召一候に付而は、朝廷辭官之例に倣ひ、前內大臣と被二仰出一候事、

一政權返上被二聞召一候上者、御政務用度之分、領地之內より取調之上、天下之公論を以御確定可レ被レ遊と改り、長谷卿より尾越之兩人へ被レ示に付、確定之字面は奉レ畏候へ共、領地之內の內の字之下へ、「ヨリ」之二字を被レ加度と申達候處、是亦評議難澁し、更に承引無レ之、尾よりは橋本卿迄嚴達す、內外之勢ひ頗及二切迫一候得共、尾越愈以前說持重之處、遂に岩倉殿は、「ヨリ」之字の事を申達候得共、此處を「ヲ以テ」と相成候ては如何可レ有レ之哉、夫れとも「ヨリ」にて無レ之而は不二相適一儀候哉と推問に付、兩藩にては是非とも「ヨリ」と相成候樣にと及二懇願一處、左候はゝ其通りに相決、其上に而御書面改而御渡可レ被レ成旨に而、追而小御所に於て三職御列座、朝廷より內府へ御沙汰之旨に而、總裁宮より別紙公へ御渡有レ之、御拜見之上、早速下坂德川內府へ可二申聞一と御請被二仰上一、其席へ尾侯御名代成瀨隼人正御呼出、右同樣御演達、大納言へ可二相渡一旨に而、宮より隼人正へ御渡有レ之相濟、御退散は亥刻を過きたり、御別紙如レ左、

一今般辭職被二聞召一候に付而は、朝廷辭官之例に倣ひ、前內大臣と被二仰出一候事、

一政權返上被二聞召一候上者、御政務用度之分、領地之內より取調之上、天下之公論を以御確定可レ被レ遊と改り、長谷卿より尾越之

レ遊候事

右兩件心得迄御沙汰候事、

一、此頃中、政府之御用途は、德川氏返上之領地を以御取賄に可二相成一といへるは上院之建議、又日本全國之惣高割に而可二供給一といへるは下院之建議に而、兩端未決に有レ之候處、今日土老侯より、天下總高割に相成候樣との御建白、侯御所勞にて御參內無レ之に付、御名代後藤象二郎を以被レ指二上之一、且象二郎自分口上にて、何分坂地之御請濟次第、總高割之地に可レ被二仰出一と御內定之御書付頂戴、容堂にも安心爲レ仕度段、嚴重及二演說一に付、御建白之通り御內定之段、御附紙に而被二仰出一由に而、右寫相廻る、左之通、

政府御用途之儀は、御新政之御急務に付、德川內府より差上候段御請申上候はゝ、列藩諸侯へは、天下之公議を以貢獻之次第相立候樣被二仰出一可レ然と奉レ存候、

右は容堂職分を以申上候儀、如何御決定可レ被二仰付一哉奉レ伺候、以上、

十二月廿四日

御附紙

右書面之趣御內定候、

右は御領地之內より被二指出一候儀、坂地之人心怫戾之廉故、右樣之御建白有レ之しは、專ら坂地鎭定之筋御周旋之御廉なり、

○廿五日、今日巳刻御供揃に而御下坂有レ之、

一、右御下坂御治定に付、御先へ雪江を板倉伊賀守殿迄被レ遣レ之、朝卯刻發、陸行に而夜酉半刻着坂、直に登城之處、已に御退出に而、玉造口之御旅館へ罷出、拜謁之上京狀委曲申述、御渡御書附、幷土老侯御建白、御指圖之寫共差出、事情御考察之上、前途之御運ひ御盡力有レ之候樣可二申上一旨、奉命之趣及二演達一處、惣而御落意相成、夫々御申談之上、精々御周旋可レ被レ成との御答なり、

○廿六日、今曉丑半刻御着坂也、巳刻御供揃に而、尾侯御着坂御見合せの處御延着に付、午半刻頃御登城相成、尾侯は御船中より御發痘に而御手間取有レ之、暮時前御着船なり、公御登城之上、先つ伊賀殿永井殿へ御逢、京師之事情夫々御物語有レ之處、不二一方一尊勞之御義、此上は是非御手筈通り相運ひ候樣盡力可

ゝ仕と、被ゝ及ニ感謝一候由、夫より内府公へ御對面、朝廷より御渡之御書面御直に被ニ指上一、伊賀殿豐前殿玄蕃殿侍座有ゝ之、相濟候而、廷議以之外艱難に運ひ候故、土侯幷下院之有志周旋盡力之次第、逐條被ニ仰上一候得は、内府公にも殊に御感激に而、夫程之時機到來之事候得は、坂地之義は如何樣にも被ゝ成、御請も品能可ゝ被ニ仰上一、御上京も可ゝ被ゝ成哉と、御内談は粗御取極に相成候へ共、餘り速に御發表相成候而は、却而御輕易之姿に而、人心如何と御掛酌にて、明日なと御請可ゝ被ゝ遊歟之御談之由、尾侯は御所勢に付、爲ニ御名代一成瀨隼人正登城、御目見被ニ仰付一、從ニ朝廷一御沙汰之御書面御直に指ニ上之一候、

一、永井殿戸川殿、雪江へ逢對京狀被ニ相認一に付、廿三日廿四日之廷議、幷結局迄之次第、逐一委曲に及ニ物語一候處、如何にも危急千萬之形勢なりきと慨歎せられ、其模樣に而は是非共御上京無ゝ之而は難ニ相濟一との示談なり、

一、今朝田中邦之輔御旅館へ罷出、尾侯伏水御着之折柄、坂地より被ニ差出置一候新撰隊之内、無賴之徒有ゝ之致ニ横行一に付、薩長之巡邏より嚴制之模樣、動もすれは爭端可ニ惹出一勢ひ甚危急に付、坂兵一日も早く引取候へは、巡邏之方は、尾藩田宮如雲當時京尹之勤方に而、伏水も管内に付、如雲より朝廷へ申上、尾越の兵と引替候樣被ゝ成度と、尾侯御旅館へ新撰隊之頭被ニ召呼一、早々引取候樣、御直談に而御垂諭有ゝ之候得共、坂命に而罷出候事候へは、坂命さへ有ゝ之候へは引取可ゝ申、左樣無ゝ之而は引取兼候趣及ニ御答一候に付、被ゝ成方無ゝ之、御捨置被ゝ成候へは、大事之前に而蟻穴之妨害眼前之勢に付、尾侯御登城被ゝ成候はは、御談之上御取計可ゝ被ゝ成御含之處、御登城難ゝ被ゝ成に付、御家來共を以御逢に相成候間、公御登城之上、猶又御助勢被ゝ成ニ御座一候樣御賴談之旨に付、則於ニ營中一永井殿へ御談之處、隊兵何も恭順に而、聊妄動無ゝ之筈候へ共、猶嚴重可ニ申越一、無賴之徒は、先日隊中脱走之者二三十人有ゝ之、其者共之横行は、於ニ隊長一も如何共取計方無ゝ之次第之由、此輩之爲に、不律も無ゝ之兵隊、今更引取候樣申越候而は、何か不首尾之姿にも相當候故、決而引取申間敷抔申上、御談整兼候由、

一、夜子刻比、尾藩荒川甚作御旅館へ罷出、十之丞逢

對之處、伏水一條、今朝より唯今迄監察三位と及ニ議論一候得共、監察衆之方に而は、更に可ゝ爲ニ引取一謂れ無ゝ之と、水掛論か一向に不ニ相決一、三人共被ニ引入一仕舞に付、無ゝ據退出致候次第候間、何卒明日御登城之上、精々御助勢被ニ成下一候樣相願候旨申達候由、

○廿七日、今日巳刻御供揃に而、西本願寺之掛所尾侯御旅館へ被ゝ爲ゝ入、昨日營中に而内府公と御直談之御次第御物語に而、二侯迄之御書面御差出に相成候はゝ、夫を二侯にて御引直し御書取、御奏聞に相成可ゝ然との御談に相成、夫より直に御登城に而、伊賀守殿初へ御逢御談之處、唯今於ニ御前一永井平山兩參政執筆に而、御書面御取掛りに相成居、未定之事に御座候間、今日は御退出、明日御登城之上との御談に相成、扨歷下も大半鎭定にも相運ひ候間、御上京も御都合次第、緩急共御請可ゝ被ゝ成御模樣之由なり、

一、今日於ニ營中一御約束に而、夜に入御側衆室賀甲斐守殿御旅館へ入來有ゝ之、御對談之處、今般之御一條に付議論之次第、正大公明、御藩論と如ゝ合ゝ符、兎角御恭順第一に而、歷下之鎭撫專要之急務故、御上京之處一日も早く被ニ仰出一に相成候樣致度、左候へは滿城之人心、いつれに御吉左右にも可ゝ有ゝ之と相心得、自ら居合も宜、又來月四日迄には江戸御役人共上り來候へは、其已前に降命と相成候へは、口舌を費さすして、鎭撫之都合も甚可ゝ宜との見込なる由を被ニ申上一たり、

○廿八日、今朝外御用有ゝ之、永井殿へ毛受鹿之介被ニ指出一候處、御用談之末被ゝ申候は、御上京之儀被ニ仰出一候はゝ、直樣其運ひ付候樣致度、其間に隙取れ候へは又異議も難ゝ計候得共、朝廷より之御仕向、區々之日間取候事は、何も差支有ゝ之間敷と見込候間、其處御掛酌に而御熟調被ゝ下度由に付、罷歸其段申上候處、昨夜室賀殿は、降命一日も早き方宜との事、今永井殿は、遲くても御差支無ゝ之との見込、要路に而齟齬有ゝ之、御不審思召候得共、猶又御登城之上、いつれとか御談極可ゝ被ゝ遊との御内評なり、

○今日午刻御登城之處、内府公御所勞に付、御請書之儀は伊賀殿を以御差出有ゝ之、如ゝ左、

辭官之儀者前内大臣と可ゝ稱、御政務御川途之儀は、天下之公論を以御確定可ゝ被ゝ遊と之御沙汰之趣、謹承仕候段可ゝ被ニ申上一候事、

御政務御用途之儀は、天下之公論を以御決定、皇國高割を以相供候樣不二相成一候而は、臣子之鎭撫行屆不レ申、容易に御請も難二申上一候間、其段厚御心得、御盡力有レ之樣致度候事。

尾侯之御請は成瀨隼人正へ御渡に相成由、相濟於二御床一御對面有レ之、右御請書は兩侯へ之御書面故、尾侯と御相談、御引直御書取に相成候上、御奏聞可レ被レ成と被二仰上一由、此節御上京之御程合御伺之處、如レ此相成候上は、京地之御都合御安心之段、兩侯御請合に而御申越被レ成候へは、何時に而も御上京可レ被レ成旨、御上京之上御參內迄之處、等閑に御日間取れ候樣に而は、又人心に關係致候間、其御程合御見据へにて、雪江を以被二仰越一候樣と御直約被レ爲レ在、御退出相成、右之次第尾侯へ被二仰入一、御請書も御廻に相成候處、大に御安悅之趣に而、明朝御發船御歸京之御積之由被二仰越一、〇夜半頃、尾侯より中村修之進被レ遣に付、鹿之介逢二對之一、過刻御廻に相成候御請書は、公御持參に而御上京相成候樣御賴に而、御返却に相成、

〇廿九日、今巳刻爲二御暇乞一御登城之處、今日亞米利迦國公使アルビワン、ワルグンボルグ登城拜謁被レ命に付、公にも御出席被レ成候樣御沙汰に付、御白書院御上段に而、內府公と御一處に公使へ御對話被レ遊、右相濟於二御休息所一御對面有レ之、猶又御用之次第御談有レ之、申刻前御退出、暮時御乘船に而御歸京被レ遊、尾侯は今曉丑刻比大坂御出船之由なり、

一、御歸京爲二御案內一、雪江昨廿八日暮時過大坂出船、此日午刻比上京、御復命之儀爲二申上一參朝之上、岩倉殿幷謁、內府公無二異議一、御請書も尾越兩人迄被二指出一候付、今夕乘船明日上京、午後參內可レ及二復命一に付、右爲二御案內一雪江差出候段申達候處、不二容易一御盡力に而御請之場へ相運ひ、卿におゐても御安心御大慶之旨、早速可二申上一と御申聞有レ之、又內府公御上京之義如何と被二相尋一に付、鎭撫出來次第上京之儀は、兼而申上置候事に而、即今御請も相濟候事候へは、何時にても上京之心組之樣子に候へ共、又朝廷之御都合も可レ被レ爲レ在に付、其儀は大藏大輔相含、いつれに明夕御談可二申上一と申述、退出す、

一、此夜戌刻後、上院參與より、明日御復命に付而は、宮始被二召集一候御都合も有レ之候付、御參內御刻限申上候樣、雪江迄御達に付、尾藩へ打合せ之廉も有レ之候間、差急候而も未刻前後に可二相成一と、雪江より御答書指出候處、押返し御直に被二仰上一に相成候樣御達に付、其段急便を以、伏水御旅館十之丞、鹿之介迄申二達之一、

〇晦日、巳半刻過毛受鹿之介御先へ着邸申聞候は、夜半逆風に而御船進み兼、今朝辰半刻過伏見へ御着船相成候へ共、御供船は多分著不レ致由、依レ之いつれに御入京御延刻に可二相成一候へは、申半刻迄には御參內可レ被レ遊、萬一夫より後れ夜に入候而も、是非御參內は可レ被レ遊旨を相含罷越候由に付、昨夜之爲二御答一、永田儀平を以上院參與迄御屆指二出之一、尾侯へは伊藤友四郎を以前之次第被二仰入一、御參內難レ被レ成候はゝ、御請書御文段筆削之全權を爲二御持一、隼人正御指出に相成候樣被レ仰二遣之一、午後尾侯より、御參內難レ被レ成に付隼人正被二指出一候段、田中邦之輔を以被二仰越之一、

一、今申刻頃、公御歸邸、再御供揃に而、申半刻過御參內有レ之、然る處總裁宮御始已に御退散、中山卿御殘之由に而、御壹人之御請に而も可レ然哉、又御評議之筋にても有レ之事候はゝ、宮始可レ被二召集一哉と雪江迄御尋に付、今日は復命迄之儀に而、別段御評議相願候筋は有レ之間敷と及二御答一候處、無レ程於二小御所一、中山殿幷御居殘之議定參與御列席、公成瀨隼人正と御一處に御出席、中山殿迄御差出に相成御復命御書面如レ左、

今般御沙汰御座候兩事件之趣、慶喜へ申聞候處、謹承仕候旨申出候、此段申上候

十二月　尾張大納言

越前宰相

中山殿御落手之上、御列座之御方々へ御廻し有レ之、中山殿より、德川內府より之御請書、明元日總裁宮始御申談可レ被レ及二御奏聞一、段々御周旋御行屆之旨御挨拶有レ之由、公より內府公御辭官御手續御伺之處、追而從二朝廷一可レ被二仰出一歟、又は此御請書付に而相濟可レ申哉、尙又御評議可レ被レ成との御答之由、右相濟、於二御別席一中山殿、萬里小路殿へ、坂地之御次第御物語有レ之、亥半刻過御退朝被レ遊、

一、右御復命之儀、御口上に而御濟し可レ被レ成歟之御內評も有レ之候へ共、御書面御好は必定候へは、御書

付之方可レ然と隼人正心付に而御書面に相成、

一、右御復命濟爲レ被二仰上一、尾侯よりは遠山彦四郎坂地へ被二差出一、公は板倉殿迄御直書を以左之通被二仰遣之一、

一筆致二啓上一候、飛雪別而冱寒難レ堪御座候處、先以上にも益御機嫌能被レ爲レ入奉二恐悦一候、隨而貴所樣愈御清全被レ成二御奉務一致二抃賀一候、扨滯坂中每每登城拜謁、不二相替一奉レ蒙二御懇命一、難レ有仕合奉レ存候、御禮之儀宜被二仰上一可レ被レ下候、將又從二朝廷一御沙汰書之儀御請、今晦日夕京著、直に參內仕候、尾張殿御不參、隼人正申談、中山前大納言迄、於二御所一諸卿列座、◎於以下七字或は分註ならん、兩人より上御請之儀申上候處、明元日惣裁宮始御參朝、被二仰談一可レ及二奏聞一旨、中山殿被二申聞一候、此段奉二言上一候間、御前儀可レ然被二仰上一可レ被レ下候、右得二貴意一度如レ此御座候、恐惶謹言、

十二月晦日　　御名

板倉伊賀守樣

松平豐前守樣

一、此日暮時過、肥後藩參與津田山三郎、下院へ出勤申談候次第は、去る廿五日江戸表薩邸出火有レ之處、其節庄內之人數薄暮之命を受、薩人と砲戰有レ之由之風聞甚、過刻東報有て到來候由、頓而處々より當地へ可二相聞一處、此節坂薩氣立居候折柄故、如何成事變可二相發一も難レ計、即今之內、未然を防くへき所置有レ之度との事に而、尤之心付に付、下院より公へ申上候處、公より中山殿へ東都之概略被二仰述一、不二取留一風說とは乍レ申、自然一大之吠レ虛より平地に風波を起候而は、不二容易一事に可二立至一も難レ計候へは、未發之處に而、双方心得違妄動無レ之樣御內諭可レ然歟と被二仰達一、於二下院一も同議に而、不二事立一內双方へ急度御沙汰有レ之度と上院へ申達處、上院參與衆何も退散、數二居殘一候は西園寺殿、五條殿計に付、屹度致候被二仰出一は、御評議之上ならては御取計に難レ被レ及との御相談に而、是以無レ據次第に付、猶下院商議之上無二急度一御口達に而、薩は薩之參與岩下佐次右衛門、坂地之方は尾之參與田中邦之輔御呼出に而、五條殿より云々御內諭有レ之散朝に相成、夫より邦之輔義、毛受鹿之介同道、戶田殿へ右之趣申入候處、御同人も風聞承知に而懸念之折柄故、早便も有レ之旁早々坂地へ可二申達一との事なり、

私云、後に聽く、此日大目付瀧川播磨守殿其外、江戶表より兵隊と共に濱船に而着坂有レ之、東地薩藩之惡說、且廿五日薩邸攻擊之始末等敷演有レ之、此表之奸狀を合せて伐薩之議を主張し、下地除姦之說も起りたるを、內府公御恭順之御誠意を以、無理々々なから御鎭壓被二成置一たる坂地麾下之人心、一擧に煽動誑惑せられしかは、滿城立地に鼎沸之勢となり、憤慨激烈之黨奮興して、板閣其他を壓迫說倒し、事遂に敗れに歸し、形勢一變、專ら伐薩除姦之兵事に及ひ、內府公といへとも如何とも爲し給ふへからさるに至りしなりとそ、天德川氏に祚せす、嗚呼、

一、江戶表より相廻る風聞書、

一去日薩浮浪輩三十人計甲府へ罷越、彼地之鄉士博徒共を籠絡せんと、八王子邊迄差向候處、江川太郎左衛門之手に牴牾せられ、是か爲に進退窮候處へ、江川勢より逆に及二發砲一、巨魁たる者兩人へ重手を爲レ負召捕候由、是によつて其餘之者共は散亂致したりと、是よりして大久保加賀守殿には、去る十七日甲府へ之御暇被二仰出一、十九日當地御發途、小田原に御一泊、廿四日小田原御出立、甲州へ御越之由、小田原藩人之說、

一大久保出雲守殿御陣屋相州荻野山中放火、大久保勢に少々怪我人有レ之趣、兵器も被レ奪たる趣、小田原藩人より承る、

但奪取候兵器、有馬中務大輔と曾認候繪符を建、三十〆目以上之長持、赤羽根迄繼立來り、爰におゐて才領體之者拔刀、人足共を追散し、後薩邸へ持込たりと、尤夜中之由、會藩人より承レ之、

一去る廿三日拂曉、三田邊に庄內家巡邏屯所有レ之、右へ何者か多人數、三十人計罷越頻に發砲、庄內勢にも不意に襲撃せられし事故、狼狽なからに漸く兩人程召捕候說之趣、尤庄內家にも手疵負候者も有レ之趣、右全薩藩のよし、

一一昨曉薩邸浪士召捕之儀は、是迄市中豪家へ押入、金銀兵器等奪取、且三田屯所へ發砲等證跡も有レ之、并野州に而被二追拂一散亂之浮浪、廿三日夜千住宿より御府內へ多人數入込候事故、遠隱

れに跡を付候處、頃日薩邸へ入込たりと、依て夜中庄内始、鯖江、上の山等へ、薩邸内に罷在候浮浪召捕方之命、近傍之諸藩へは、薩邸内に怪敷もの有レ之に付、召捕之兵差向候ゆへ、自然發砲に可レ及も難レ計に付、其旨相心得候樣御達有レ之、右之勢幷幕之砲兵撒兵歩兵等追々出張、一昨明け方、薩上邸、三田小山邸、夫々四方取圍み、小山邸へ酒井の手井陸軍方、上邸へは酒井の手井陸軍方、上の山、鯖江勢等差向ふたりと、庄内家より薩邸の留守居へ及二應接一、上意之趣申聞候哉之處、決答も不レ致、稍一小時之間論談有レ之、其内邸内には一同接戰之覺悟に而、馬裝迄相整へ、却而邸内より大小砲打出し、寄手大に苦戰、乍レ去盛んに大小砲打込候處、既に三田邊角物見より出火、（自燒とも申、又破裂彈とも申、）線而邸内二三ヶ所より出火、（時刻朝五時過、）烈敷事に有レ之候趣、且馬場邊に而は、少しく刀槍之戰闘も有レ之趣、双方死亡怪我等も有レ之候へ共、庄内手に而（新徵組二三四之組等なり）三十五人召捕に相成候趣、（本藩之者共は、無二異義一降伏いたしたりとも申、）右生捕之者共評定所へ渡相成趣、

一浮浪三十人計隣家より（阿州家なり、）逆去しとの趣、是等之者共歟、高輪邊を四人連にて白采配を振り、疾く婦人共逃去るへしと呼はり馳行たる由、田町五町六町（五丁目より六丁目にて止る、）之火は、跡より落行きし者共火を放ちし由、

一小山之出火は、館中臺所より出火とも申、長屋向とも燒失、他へは不レ及、

一上邸之火は金杉濱迄延燒、爰に而止る、

一高輪薩邸へ、庄内勢幷陸軍之勢相向ひ發砲に及ひし由、内よりさして答砲も無レ之由、勿論此邸には人數多分は不二罷在一、精々十人位も居合せし由、此邸出火は、午後八時頃内長屋一棟、夜同刻比、表長屋幷向ふ町家一町計に而止る、

一品川橋向ふ之出火、是も薩人より火を放ちし趣、

一上の山勢討死七人計、怪我人餘程有レ之由、極々苦戰之由、

一鯖江も餘程之怪我人等有レ之趣、隨分に骨折候趣、

右之趣前後乍二恐文一、見分之儘書綴及二言上一候、

十二月廿六日

戊辰日記

○慶應四年 戊辰正月 元日、公（松平春嶽）今日御參朝御斷り、御名代御家老本多修理を以、御祝詞被レ仰二上之一、

一、今夕御所より御達御書付左之通、

御用之儀有レ之候間、明二日巳刻一、九條家へ參集可レ有レ之事、

但四脚門往返之事、

追而總裁宮依二服中一、宮中御神事中、御參朝難レ被レ成に付、被レ用二九條家一候事、

正月一日

越前大藏大輔殿

一、今日下院之面々も、拜賀被二仰出一に付、三岡八郎も參朝之處、容堂殿御逢對有レ之、坂地之形勢巨細心得居候者は、誰なるやとの御尋に付、中根雪江義は、毎々往返致候へは承知仕居可レ申と及二御答一候處、左候はゝ、彼地之事情委敷承度候間、今宵岩倉殿御宅へ罷出候樣被レ致度と御申之由、八郎罷歸申上候に付、罷出候樣雪江へ被レ命、暮時過參殿之處、卿御對面之上、坂地之模樣一と通り御尋に付、概略之處申上處、卿御申には、當時之形勢、薩は干戈を以御奉公之積に而出京之所、左樣之運ひにも無レ之故、過激輩以之外憤怒之樣子に有レ之、長も是非干戈を用ひすしては舊弊難レ除と、夫々手配も致置候次第に口、長之幕を怨む事眞に骨髓に入、仇讐並ひ立さるの勢ひ、夫と云も、長は始終攘夷を奉行し、幕は最初より交際を專らにせし行違ひより、近年之騷動にも相成候次第に候か、幕の長を視る事如何有へき、何分此邊解け合ひ、和熟不レ致しては、今後迚も御安心は難二相成一、尾越之周旋も此處迄行屆候義、今更手離も殘念故、余はとこ迄も前議を執り、押通し候之積候得共、頗る暴論も有レ之、余か説行はれ難きも多々なる故、三條東久世に及二議論一之處、是迄長州より、一方ならさる援助を受けられたる譯も有レ之候處、幸ひに余と同論と相成、大に力を得、何分干戈に不レ及樣致度と、折角内談致居候事也、幕之方にてさへ、遺恨無レ之候得は、此處は土豫に周旋させ、解き方も有レ之、已に今朝豫州に談見候處、同意之趣也、薩之方も、又何とか手段可レ有レ之候得共、第一の幕之方、程合知れ兼候而、手下

し致し悪く候、其邊如何之見込なるへき、雪江限り申試候樣との事に付、雪江申候は、幕は元より正大公明之題號に候得は、長薩に對し、何之私怨を挾み可ㇾ申哉、彼藩に而異議無ㇾ之候得は、幕之方に何事之候へきと及ニ御答一候處、長はしらす、薩は幕の目當たるは、先日坂地より出たる書面に而相分り有ㇾ之、彼書面も大坂に而肥後藩へ爲ㇾ見候由、此表にても端々致ニ流布一候得共、余はとこ迄もしらぬ振りにて通し居候か、あれか再發致候時は、大變至極候へは、急度祕物に致し仕舞度候、乍ㇾ併薩の方は、兎も角も取計方可ㇾ有ㇾ之、何分熟れも居り合、同心戮力之場へ不ニ相運一しては、皇國之見込付き不ㇾ申、如何して其處へ運ひ可ㇾ申哉、今と成ては、内府參内無ㇾ之ては不ニ相適一候間、ケ樣相成候はゝ可ㇾ然と申、存分一杯の處可ニ申聞一、上京之運ひ等は如何と御尋に付、此義は坂地之衆議、種々相分れ候へ共、約る處、内府手前錻撫出來故、上京と申一筋に相決し申候、乍ㇾ然上京致候而、空敷日を經候樣にては、又々人心動搖に及候故、其處深く心配之模樣候得は、上京直に參内と申都合候はゝ、何時にても子細は有ㇾ之間敷と申上處、其儀は其手續に相成に相違無ㇾ之と御申故、議定職にも可ㇾ被ニ仰付一哉と相伺候へは、夫は勿論之事と之御事に付、左候はゝ、政府御用途全國割之義は、如何可ニ相成一哉、是も早速に被ニ仰出一度と申上處、夫は内府參内に付、直に辭官幷領地之義申上に相成候へは、夫を聞食、夫より直に議定にも可ㇾ被ㇾ命、全國割も可ㇾ被ニ仰出一と御申に付、其御次第に候はゝ、御沙汰之趣、此間之御請書指上候に而、相濟可ㇾ申譯には無ㇾ之哉と申候へは、アレハ屋越へ之御沙汰に而、上より直に之御沙汰に相成候而は、罪ある姿と相成候故、下より申出候樣に、周旋可ㇾ致との趣意書に而、内府に罪なき事に相成申候へ、内府之方より、癸丑已來幕府前代之不體裁を、現今之一身に引受け、辭官之運ひに相成、且五藏内指上度とか、幾大隊又は軍艦幾艘指上度と、申樣なる事に相成候へは、誠意も十分に相貫き候事に相成、諸侯も夫に准し、一段は領地指出、兵隊も指上、九門之警固に充候樣と、申樣に有ㇾ之度との御旨趣之由御申に付、夫等之處は、追々之御手續にも可ㇾ有ㇾ之、指向き内府公之上京、御參内も相濟、御役ても可ㇾ被ニ仰付一候と申處か、治り口にも可ㇾ有ニ御座一哉と申候處、

何分雪江之見込十分之通及ニ熟考一、明朝可ニ申聞一、及はぬ事なれは、夫迄にて退くより外無ㇾ之、出來る事なれは、早きか宜候間、早速申聞候樣御申に付、重大之事件、中々一存には及兼候へ共、精々愚考を盡し、明朝御答可ニ申上一と申て退出せり、右談判之次手に被ㇾ申候は、當時干戈之世となり、其極縱令外國之有に相成にもせよ、德川氏如ニ從前一候へは、余輩も討幕之持場押通し候得共、政權返上は實に愕然に而、内府之人材なるを感悟せし故、其已來は、余輩而已ならす、即今彼人を擧すしてはと申論に變し、左樣なくては何事も行はれ難きに決せし故、皇國の爲に、形之如く盡力致す事なるかと御物語有ㇾ之、雪江罷歸、右之次第共申上、參政へも御内評に相成候處、公仰には、何分夫程之實事に相運ひ候は、重畳可ㇾ賀之至り、夫に付而は、指當り雪江見込は如何と御尋に付、雪江申上候は、別に良考も無ニ御座一候か、當前之御上京より、御參内等之御手續を、ケ條書にいたし、卿へ相伺ひ、ケ條毎に許可之御附紙を願ひ、夫を以て證據とし、坂地へ被ニ仰上一候はゝ、諸有司始、陛下之疑惑も釋け、逐々之御運ひも付き可ㇾ申歟、御參内之上、表向御辭官云々等之義は、内府公之御心服に被ニ居置一候而、於ニ坂地一は、御相談不ㇾ被ㇾ爲ㇾ在方可ㇾ然哉と有候段申上、猶種々御評議に成上、如何にも證據之書付を取り爲ㇾ見候はゝ、必行屆可ㇾ申、外に奇特之良計も有ㇾ之間敷との仰にて、御決評に相成、明朝迄に、ケ條書認試候樣、雪江へ被ㇾ命也、

○同月二日、此頃總裁宮御服穢に而、御參内難ㇾ被ㇾ成故、今日差留り德川氏之議事御指支に付、俄に九條殿御借上げ、假議事院と相成、宮初、官武議定、上下參與、巳刻より會集に相成、内府公近々御上京可ㇾ有ㇾ之に付、其節御取計振之御集議なり、其内會桑歸國之上に而、御上京可ㇾ然との議起り候得共、是は難事なるへしとの論有ㇾ之、不ニ相決一に付、右件坂地へ降命に可ニ相成一御誓面、下院へ御下け衆議之處、會桑朝廷へ對し何等之罪有て、如ㇾ此御譴有ㇾ之哉、可ㇾ斥罪惡無ㇾ之上は、公論を以、會桑も共に被ニ召上一可ㇾ然との建議に相成、愈不ニ相決一、又外國へ御布告御書面御出來、左の議案御下け、

大政御執行に付而は、外夷事件、於ニ朝廷一御所置被ㇾ遊候は勿論、且重大急務之筋に付、此間中段々御

沙汰も有レ之候得共、其廉も未レ行、實に一日不レ可レ忽之次第に付、別紙之通、德川内府へ被二仰下一候義に御確定候、此段御沙汰候、乍レ併所存之趣も候はゝ、言上可レ有レ之事、

但外國事務掛初、夫々其人體、不日可レ被レ置候間、是又心得迄に申入候事、

別紙

政權返上被二聞召一候上は、外國交際之義、於二朝廷一條約取結可レ被レ爲レ在義、當然に候間、百事御治定之上、猶御談判之品も可レ有レ之、差當り王政に被レ爲レ復候御廉、御布告被レ遊度思召候に付、兵庫滯留各國公使、京地へ御呼登に相成候間、是迄之手續も有レ之事候へは、各國公使上京候樣可二申達一御沙汰候事、

但來十日迄上京候樣被二仰出一候間、御受之御届、早々可二申出一候、

右は御至當之御儀なるへしと、下院同論に決し、其段上院へ申達、此餘種々之議事有レ之、七時頃にも可レ有レ之、伊藤友四郎參殿、密々申達候は、唯今小原仁兵衛方へ罷越及二一酌一候處、同人申聞候は、一昨晦日夜、於二華城一御達有レ之候は、上樣近々御上京之御運ひに付、御先勢追々御繰出に相成候間、在坂諸藩之人數も指出候樣との儀に而、事の爲體、以之外切迫危險に而、專ら伐薩之御模樣に有レ之、昨朔日より逐々御出勢に相成との事、坂地へ指出置候兵隊之向より報知有レ之に付、此節左樣之御事柄、極而御失策と存し、則徹意爲二建白一井田五藏指出候へ共、迚も行届申間敷、何分御不束千萬と存候間、其段老公へも申上呉候樣との事に付、不二取敢一參殿候由也、仍レ之下院之面面申談候は、此節ヶ樣之御妄動無レ之樣、御抑止可レ被レ成は勿論候へ共、事爰に及ひ切迫之次第に付、其段申上、公は御所勢之趣被二仰立一御歸邸に相成、戸田殿へ、下坂之支度候而藩邸へ被二罷出一候樣、爲二御使一雪江被レ遣、肥後藩老溝口孤雲、津藩老藤堂歸雲も參邸候樣被二仰遣一、雪江は暮時過戸田殿へ罷出、大略及二談判一處、戸田殿は、於二舊幕一兼々御前嶽負と申唱へ嫌疑有レ之、下坂致候而も行届不レ申、夫よりは有力之藩老を被レ遣方可レ然、何勢爲二御相談一直樣參邸可レ有レ之との事也、夫より公も御歸殿、兩藩老も參上、宇和島老侯、戸田殿も御來邸、尾侯へも被二仰越一處、

爲二御名代一成瀬隼人正罷出、後藤象二郎も參上に而、種々御評議有レ之候得共、兢れ之道にも、御失體無レ之樣、御諫諍之外無レ之に付、孤雲歸雲は唯今罷歸り、支度次第下坂可レ仕、象二郎も同樣可二罷越一處、下院御用有レ之に付、土藩老深尾鼎御指出に可二相成一、尾州よりは、即今隼人正同道、參邸罷在候田中邦之輔、中村修之進下坂可レ然との御談に相成候得共、兩人罷下り而も、非力之及ふ處に無レ之趣に而、固辭不レ及二御受一、尚老侯思召相伺候上と申事に相成退出せり、明日は公、土豫兩老侯と御一處に、御願ひ可レ被レ成との御談極に而、何れも御退散に相成しは、曉寅刻計り也、雪江も早々下坂、諸藩老申談候樣被レ命レ之、柳川藩老十時攝津は、下院より直に下坂之心得に而退出せし由、

一、右坂地一件爲二承調一、青山小三郎を穗積亮之助へ被レ遣處、亮之助云、坂地より監察妻木多宮、御上京之御都合取調、且伐薩一條相含上京に付、先刻より大議論に及ひ、遂に輕舉暴發は、當今之大失策なる事に論決し、唯今引取たる由に付、小三郎より郎議之趣及二論談一處、惣て同意に而、伏水邊之義は、猶多宮へ

も可二申談一との事之由、小三郎罷歸申上處、多宮同道、亮之助參邸候樣、再小三郎を以被二仰遣一處、妻木殿は不快之由に而、亮之助計罷出、戸田殿へ、妻木殿被二含越一候密謀之不策なる由を物語、何分穩便之所置に相成候樣盡力有レ之度と、必至及二賴談一たり、

一、昨夜岩倉より御内談有レ之、雪江見込ヶ條書、

一午刻上京相成候はゝ、直に參内、午刻後上着相成候はゝ、翌朝直に參内致候樣可二相成一哉、

一參内之上表向辭官之御手續相濟候上は、政府御用途全國高割之儀も、即日列藩へ御布告に可二相成一哉、

一參内之即日、職掌可レ被二仰付一哉、

但一上京之節、相應之人數引率之事、

一參内之節、九門外迄、是迄之通兵隊引率之事、

一九門内へ、是迄よりは人數多く召連可レ申事、尤上下著之向に而、兵火は無レ之、

右之通相認、巳刻前假議院へ參殿之處、岩倉殿御所に而御用有レ之、御遲參に而、午後御出勤有レ之に付、於二別席一右書面指出、御附紙を以、御指圖相願ふ處、昨夜

も如ニ申談一、書面之通可ニ相伺一事候得共、一應評議之上、可レ及ニ挨拶一と御申聞、御落手有レ之、

○同月三日、今朝雪江下坂前、今一應岩倉殿へ罷出、公御下坂之御都合も、相伺候樣被ニ仰付一候に付、五時前參殿之處、長人へ逢對中に付控居候處、無レ程長人退座、引續薩知邸內田仲之助拜謁、暫くして退座之上、雪江へ對面あり、卿被レ申候は、今朝より坂兵幷會桑兵甲冑を帶し、伏見より次第に亂入之趣に付、打驚け、可レ申哉と、兩藩より三通伺出候得共、及ニ指圖一迄は、決而手出し致間敷と、嚴敷指押置候、伏見邊之形勢如何哉覺、雪江斥候致し、三條殿迄申達候樣と御申聞に付、雪江は下坂被レ命、唯今罷下り候積り、大藏大輔も相願ひ、尾土豫之三侯同道下坂、此上にも鎭撫方取計度積に御座候間、斥候之儀は御免相願候段申達候處、夫なれは不レ及ニ是非一候得共、何分干戈に相成候而は不ニ相濟一と、三條も同論に而、大に力を得たる事也、唯今總參內被ニ仰出一、大藏大輔殿初參集、總評定に相成事候間、其段御主人へも申上、早々參內相成候樣致度と御申に付、其儀は委細承知仕、可ニ申聞一候か、此體に相成候而も、內府上京と相成候はゝ、此頃中御內談之御手續に可ニ相成一哉と相伺處、夫は勿論之事、何卒上京有レ之度、左候へは、事速に治り可レ申と御申に付、左候はゝと、

一午刻前上京相成候はゝ、午刻後直に參內可レ被ニ仰付一哉、

一午刻後上着相成候はゝ、翌朝直に參內可レ被ニ仰付一哉、

一參內之上、表向手續相濟候はゝ、即日職掌可レ被ニ仰付一哉、

右三ヶ條之書面指出、此通り御受合被レ下候かと、迫つて相伺候處、熟覽之上、初二ヶ條は此通り萬々受合申候、職掌之儀は、昨日も議論有レ之、長と同時に致度、片落に相成候而は、不レ可レ然と申事に相成、是も內府へ即日に下命、長へも同日に被ニ仰出一こに可ニ相成一哉、又長之上京を待つて之事と可ニ相成一哉、其處未レ決故、何とも難レ申と御申に付、其儀は不レ及ニ是非一、何分是より下坂、上京之處を周旋仕見可レ申と申候へは、卿御申には、是迄尾越之盡力、無ニ殘處一候ひしに、ケ樣相成しは無ニ是非一事に而、決而尾越之不行屆には無レ之、御主人此節下坂にては、品により上京

難ニ相成一場へ相運ひ候半も難レ計候へは、下坂は決而不レ可レ然、且兩家之儀は、德川氏に於て一と通りならさる親族候へは、德川を討てとも難レ被レ命、左候へは、先つ卽今卿の御見込に而は、兩家へは玉體之御守護を被レ命度、左すれは德川氏に取り、申分レは無レ之、且は是迄盡力之功勞を慰し候姿にも有レ之、旁左樣相成候而、先つ雪江之存寄如何と被レ尋に付、段々御手厚之御沙汰と申、別而玉體之御守護と御座候而は、誠以冥加至極之仕合候へは、誰あつて異議を可ニ申上一哉と、及ニ御受一處、夫なれは大に宜敷、決而大藏大輔殿下坂は不レ宜、何分早々參內之義、申上候樣にと御申聞に付、奉レ畏段及ニ御請一、早々退出、歸邸之上、前條之始末申上度、指當り伏水之形勢危急に迫り居、此處に而事破れ候而は、是迄朝廷宗家之爲に被レ爲レ盡候千辛萬苦之御忠義も、一掃水泡に歸候而已ならす、天下大亂之端とも可ニ相成一事故、此時に當つて御所置如何と、種々被レ盡ニ評議一候へ共、一向に全策無レ之故、先つ梅澤殿◎へ被ニ仰遣一、指向き坂兵之鎭撫を被レ命可レ然、又尾藩へ申合せ、兩家之兵隊を、坂薩之中間に並列して垣となし、是非を不レ論、双方へ引分け

可レ然と被レ決候へ共、倉卒之間、事遂に不レ被レ行、

私云、此時之評議に、朝廷に而は、薩長を御抑置候事故、坂兵より手出し不レ致候はゝ、異變には相成間敷、又朝命さへ無レ之候へは、假令事に及ひたり共、坂薩兩兵之私鬪とも可レ申物故、何とか所置方も可レ有レ之、兎角討伐之朝命降り候而は、夫切之事と相成義故、御參內之上、其邊御盡力可レ被レ爲レ在となり、

一今日午刻比、從ニ御所一御使に而、左之御書付御達有レ之、

自ニ昨日一至ニ今曉一、坂兵遂に伏見表へ出張、其實如何難レ計候得共、何分不ニ容易一形勢に付、早々參朝可レ有レ之、總裁宮御沙汰候事、

正月三日

越前大藏大輔殿

追而參與召連、早々參朝可レ有レ之事、

一同斷御所より御達如レ左、

尾張大納言

越前大藏大輔

昨日より今曉に至り、坂兵戎服、大砲等携、追々伏

見表出張之趣、如何之義に有レ之候哉、不二容易一進退、其儘難二差置一は勿論候得共、尚前々周旋之筋も有レ之、旁右人數早々引拂候樣、取計可レ致候、若不レ奉レ命候へは、不レ被レ得レ止之場合に付、爲二朝敵一を以、御所置可レ被レ爲レ在候事、

正月三日

一夜に入、於二宮中一御達如レ左、

尾張大納言
越前大藏大輔

大政復古に付而は、御沙汰之趣も有レ之、去月來出格盡力之次第、神妙之至に被二思食一候、然る處今曉來伏見表之事件、不二容易一模樣に押移、最早萬不レ得レ已形勢に付、此上は多年勤王之旨趣彌勉勵、禁闕警衛可レ有レ之被二仰出一候事、

正月

追而思召之義も有レ之候間、若人數不足候はゝ、早々國元より繰出候樣、御沙汰候事、

一同斷御布告如レ左、

於二江戸表一、酒井左衛門尉人數押出、松平修理大夫屋敷收圍砲擊致候趣相聞へ、是全私鬪之儀候間、追而取糺之上、急度御沙汰之筋可レ有レ之候得共、右形勢に付、方向相惑、擾亂無レ之樣、孰れも鎭靜に可二罷在一、萬一暴擧有レ之輩は、可レ爲二朝敵一事、

一、御參朝之儀被二仰出一に付、御相談被レ爲レ在候間、御參內掛け御來邸御座候樣、土豫兩老侯へ、早乘御使者被レ遣レ之、豫侯は午後御出有レ之、土侯は御持病之由、御使を以御斷に付、猶又御直書を以、至急之御困難、梅澤殿は追付御出、豫侯は已に御入來有レ之候間、御勉強御枉駕之儀被二仰遣一處、頓而御出被レ成候段、御使者に而御返答有レ之處、又々御使者を以、御參內被レ成候間、御來邸は無レ之段被二仰越一、象二郎被二仰遣一處、參朝に付、御用濟次第可二罷出一旨、神山左兵◎ノ誤衛參上、辻將曹も罷出、種々御談有レ之候へ共、緊要之梅澤殿、漸夕七時比參邸に付、早速御評席に御加へ、公より伏水之形勢、危急切迫之趣候間、早々坂兵鎭撫、引取方取計之義御申談之處、梅澤殿被二申上一候は、伏見之儀は、坂地より嚴敷御下知有レ之事候へは、決而兵端には及ひ申間敷との事に付、公又被二仰聞一候は、事之爲體、中々不二容易一運ひに御聞及被レ成候へは、坂兵より萬々一、一發に而も致候樣之事に相成候而は、御名儀に於而、內府公も御濟不レ被レ成候間、何とか盡力之方法も有レ之間敷歟と、諄々御說得被レ爲レ在候處、御答被レ申候は、凡そ名義は旣往に於て相立候事に而、畢竟內府公御入京、奸賊を御芟除と相成候へは、名義は自ら相定る道理候へ共、即今之如く、內に奸黨あつて、外に名義之立へき所レ謂無レ之候間、何分早々內府公御上京に相成候樣、御配慮可レ被二成下一、已に舊藩水戸表之事に而も、經歷之手覺へ有レ之、いつとても正議之黨は、名義に拘候故機に後れ、奸黨之爲に被二壓倒一候は、每々之事候へは、兎角機變に應し、大勢を會得候事專要に而、名義は跡より如何樣とも相立候抔、座上之議論、迂闊不通之有樣故、將曹初、侍坐之十之丞、鹿之介等迄堪らへ兼、種々嚴敷及二論談一候へ共、時を移して更に落意にも相成兼、暮近く相成處、伏見に當り出火之注進有レ之、公にも事已に去れりと御大息、一同も慙歎之處、梅澤猶り頑然として、兵火には有レ之間敷、必定尋常之火事なるへしと強辨せる故、公二階に御登り御遠望之處、伏見邊炎烟衝レ天、砲聲轟動、兵燹に相決處、梅澤は江乎漠然、呆痴之如き爲體故、最早御相談之所詮も無レ之

時態と相成候付、公は暮時頃より御參朝に相成、梅澤始も、快々として退出なり、豫老侯は七半時比、御相談之御席より御參朝なされたり、

一、公御參朝之處、尾老侯、土老侯、豫老侯、藝若侯、先き立て御參有レ之、尾侯は御所勢中押而御參內故、御假建所へ御病床を補理、御平臥也、帥宮、山階宮、仁和寺宮、中山前大納言殿御初、要路之諸卿虎之間に御列參、議定諸侯も御出席に而、方今之形勢御評有レ之、公御列座之前へ御進み、是迄精々御盡力御座候へ共、遂に今日之御次第に立至り候義、被レ對二朝廷一被二仰譯一も無レ之、全く御微力御不行屆故之御義候へは、唯今議定之御職掌御取揚け、斧鉞之御嚴譴被レ爲レ蒙度と、中山殿迄愷々切々御申立有レ之、御退席之上、猶又中山殿迄、御嚴達之御旨有レ之、御指出に相成御書取如レ左、

只今伏見表及二兵事一候趣承候、兼而私共へ盡力之儀被二仰付置一候處、無二其詮一、今日之場合に至候儀、全盡力不行屆故と、重々奉二恐入一候、此上は、早速御役御免被二成下一候樣奉二歎願一候、然る上は、如何樣之御譴責被二仰付一候共、謹而奉二甘受一候、

正月　　越前宰相

尾侯、御名代成瀬隼人正を以、御同樣被二仰立一、土豫藝之三侯も、兼而議定之御職掌被レ蒙候事候へは、御不肖なから、御同樣にも御盡力可レ被レ成は勿論候へ共、是迄從二朝廷一追々之被二仰出一等、一切御沙汰無レ之、今日之事件に相成候而も御同然に候は、全く御不才御不堪故、御談も不レ被レ加御義と御推量被レ成候、朝廷之御爲にも不レ被レ爲レ成候へは、今日より御職掌被レ免候樣、御一同御嚴達有レ之由、

私云、右之御次第には有レ之候へ共、追而議定職御免御願之義、不レ被二聞召一段、被レ仰二出之一、

一、宮中戒嚴被二仰出一、諸藩之兵隊禁闕之內外を警衛し、紛擾尤甚し、伏見鳥羽之兩路共、追々劇戰に相成趣相聞へ、火光天を焦し、砲聲地を動す勢に付、宮中大に動搖を生し、公卿方之慌忙不二一方一、桂內親王も禁裡へ可レ被レ爲レ成、段々之御運ひによつて、鳳輦叡岳へ遷幸可レ被レ爲レ在との御義に而、其節之御守衛、尾越へ御內意も有レ之、堂上方縱橫奔走、御支度被二取急一、已に御板輿も庭上へ昇居へ、以之外成騷動に付、公豫老侯と御談し、山階宮へ、決して御安動被レ遊間敷、表より申上無レ之內は、遷幸等之御儀は勿論、敏宮之御動座も無レ之樣御切諫に而、宮より公卿達へも被二仰出一、御鎭撫有レ之、公は猶又岩倉殿へも、御鎭靜之義被二仰談一、下院よりも申立候樣、八方御周旋有レ之、已に叡岳遷幸之御沙汰も出つへかりしも、御取消になされたり、

一、薩侯は夜半に及ひ御參內あり、其他在京小諸侯、各思ひ〳〵之戎裝に而參趨之有樣、延元已來之大變に而、恐歎驚愕に不レ堪時態に及ひたり、

一、此夜仁和寺宮へ、軍事總裁を被レ命、東久世少將殿、烏丸侍從殿へ、參謀たるへき旨被二仰下一たり、宮虎の間へ御出席に而、公、豫老侯、藪若侯を被レ召、被二仰蒙一候趣御吹聽に而、是より宮之御里坊へ御出有レ之候樣被二仰聞一たり、此頃夜已に更闌たる故、土老侯は疾〳〵三條殿へ御退出に而、御休息あり、公も一條殿へ御休息として御退出之處、丑半刻頃、宮より御使によつて、御里坊へ御出之處、土豫兩老侯、藪若侯も御同參なり、尾の小瀨新太郎、田中邦之輔、越の酒井十之丞、三岡八郎、土の後藤象二郎、藪の辻將曹等も相詰たり、宮は御鎭直垂に而、東久世殿と御一所に御對面あつて、土老侯へ軍事副將、公、豫藪兩侯へは參謀之義御賴あり、就れも御辭退有レ之之內、公は御辭職御歎願中之故を以御固辭有レ之、御退出に而、一條殿へ被レ爲レ入、

一、右に付御達如レ左、

仁和寺宮へ、軍事總裁被二仰出一候付、御守衛兵士奉二御指揮一進退可レ致事、

一、此日雪江は午後逆レ邸、伏見舟行指支候由に付、竹田街道より陸行す、七條邊より辻々に、薩兵七八人或は十餘人計つゝ屯集せり、未刻前四ツ塚に至るに、市橋下總守殿持之關門、菱垣結廻し、木戶を打ち、戎裝執銃之兵士守レ之、薩兵も將卒共に多勢整屯す、是より南行する處に、撒兵を布き、伏兵を設け、殺氣隱々たり、此日肥後侯上京に而、此邊より以南、從兵絡繹として來れり、此處を過て、數丁にして薩兵三人あり、南より來つて、行き違ひさまに、二大隊計あるへしと呼き合て通れり、是薩兵之斥候なりしを、後に思ひ當れり、是より烏羽村に入るに、村裡に坂兵之第一大隊之印ある步兵整列して、勢揃へ之體なり、十四大隊之印も見受たり、此人數を押分け〳〵通行す、坂兵に續きて、桑名松山兩藩之兵隊各甲冑し、銃を先とし槍を後として、村內に充滿し、夫より以南坂兵之押來る事引きも切らす、行路甚困難なり、淀小橋より八丁畷之堤上を經て伏見に赴く、坂兵又陸續として壞行之如く、兩路之大兵目を驚かし、心を寒からしむ、景況如レ斯、闃靜將に起らんとする勢現然にして、吾事の成り難からんを恐懼せり、淀之城下は、坂兵北に向ふて去り、寂然として唯大垣藩之兵隊而已屯集せり、橋本驛に而日暮れ、驛南之辻場なる關門を過き、數丁にして從者砲聲之聞ゆるを告るによつて、一驚回顧するに、男山を隔てゝ火光之天を衝くを見る、於レ是覺已に伏水に啓たるを知り、大息一聲、心胆消阻して、進退爰に谷り、下坂無益に屬すといへとも、宗家之御安否、且華城之形勢をも可二相窺一と、强忍氣を勵して前進し、戌刻比枚方驛に至る、此時いまた晚食せされは、與夫不レ堪レ勞、仍レ之舟を買はんとするに、此邊之民屋、惣而頃日坂兵之休憩所となせし故、酒食竭乏、土人も多く離散せり、辛くして一店を求め得て吃飯し、漸に坂兵之乘り棄たる一船を買得て、亥刻過纜を解きたり、船中より回視するに、火光熾んにし

て、大坂に至る迄炎々たり、

○同月四日、今朝御布令如レ左、

不二容易一御時節に立至り候儀に而は候得共、此上如何共難レ計、依レ之宜敷氣力を養ひ、緩急奉公可レ有レ之候間、今日は退出、明日より各已刻參朝、御用有レ之節は別段、伏見表事件同樣之事に候得は、伺之上退出可レ致候事、

正月四日

但下參與之輩にも、同樣日々已刻一應相揃、本文之通之退出可レ有レ之、乍レ去一藩一人つゝ、晝夜必相詰居候樣可レ致事、

右之御次第に付、公五半時比、一條殿より御歸邸被レ遊、

一、今朝左之通、御所より御使を以御達有レ之、

黒谷邊、會兵潛匿之趣、不二容易一儀に候、早々可二打拂一御沙汰候事、

右之通、薩藩へ御沙汰相成候間、此段相達候事、

右御達に付、薩兵大砲を以黒谷を攻撃せし故、災燄墻之中に發せし歟と、洛中一時騒擾を起せり、

一、此日仁和寺宮に錦旗を賜はり、東寺迄御進發之義被二仰出一、未刻過宮中より御出陣有レ之、薩長土藝之兵隊率レ整二護之一、

一、右御出陣後は、宮中御用閑に相成に付、後藤、福岡、神山、辻、毛受、三岡等之諸參與と、願之上戰地を斥候す、各騎馬にて、伏見街道より堤通り、鳥羽畷より淀近く迄相進み、砲戰之模樣見分、竹田街道を經て、夜戌刻前御所へ歸參、官軍追々御勝利之趣申二上之一、

一、此日紀侯へ、左之通被二仰出一由、

紀伊中納言

兼而鎭靜御沙汰之趣も候處、坂兵伏見表出張、叛逆之色顯れ候に付、官軍相募り、同心戮力、王事に勤勞可レ致御沙汰候事、

正月

追而別紙之通、高野山屯集之官軍へ御沙汰候間、心得之爲申達候事、

鷲尾侍從

兼而御沙汰之趣も候處、坂兵伏見表出張、叛逆之色顯然、不レ得レ止之情態に付、高野山屯集之官軍、同心戮力、速に籠城を可二乘落一旨御沙汰候事、

正月

一、此曉寅刻過、雪江大坂中島邸へ着船、探索方荒川順之助、知邸代岡本晋太郎在邸に而、晋太郎申達候は、過刻東町奉行小笠原伊勢守殿より御呼出に而罷出候處、兩町奉行出座、諸藩士列座に而、左之御書付、明日御奏聞相成旨に而、拜見被二仰付一、但於二營中一、大目付衆より御達可二相成一處、夜中御城内出入も混雜に付、右之通、於二御役宅一御達に相成候間、左樣可二相心得一旨、伊勢守殿御演達有レ之由、

御書付、

先般獻言之次第も有レ之處、豈料や松平修理大夫、要二幼帝一不レ盡二公議一、矯二叡慮一、天下之亂階を醸し候件々不レ暇二枚擧一、依レ之別紙兩通之奏聞を遂け、大義に依て、君側之惡を拂候に付、速に馳參、軍列に可二相加一者なり、

臣慶喜謹て去月九日以來之御事體を奉二恐察一候得は、一々朝廷之御眞意に無レ之、全く松平修理大夫奸臣共、陰謀より出候は、天下之共に所レ知、殊に江戸、長崎、野州、相州、處々亂妨及二刼盜一候も、同家家來之唱導により、東西響應し、皇國を亂り候所業、別紙之通に而、天人共に所レ憎に御座候間、前文之奸臣共、御渡御座候樣御沙汰被レ下度、尚一御探用不二相成一候はゝ、不レ得レ止誅戮を加へ可レ申、此段謹而奉二奏聞一候、

正月　　御諱

薩藩奸黨之者罪狀之事、

一大事件盡二衆議一と被二仰出一處、去月九日突然非常御改革を口實とし、奉レ侮二幼帝一御所置、私論を主張候事、

一主上御幼冲之折柄、先帝御依托被レ爲レ在候攝政殿下を廢、止二參內一候事、

一私意を以、宮堂上方を、恣に黜陟せしむる事、

一九門其外御警衛と唱へ、他藩之者を煽動し、兵仗を以宮闕に迫候條、不レ憚二朝廷一大不敬之事、

一家來共浮浪之徒を語合、屋敷屯集、江戸市中押込強盜致し、酒井左衛門尉人數屯所へ砲發、其他野州相州處々燒討、刼盜に及候は、證迹分明に有レ之候事、

外に舊臘之御建白之奏聞狀拜見被二仰付一由、右御書面之御趣意に而、天下之公道におゐて、御名義

更に不二相立一事と相成、窃に浩歎之外無レ之、加レ之此地之近況を聞くに、専ら伐薩之御催に而、朔日已來、御人數も逐々御繰出に相成、市中居民家財取片付、老幼所縁之田舍へ指遣し、丁壯計居留之由、又昨夜より薩邸火攻之聞へ有レ之、嚴重之御手配に而、彼方角殊之外騒ヶ敷抔物語罷在候内、忽然として地雷二發、中の島邊口口口衆人慌愕色を失す、是必す薩邸なるへしと、樓上より望むに、果して薩邸に當り失火せり、後に聞くに、薩邸に而は、勢ひ遁れ難きを知り、昨日來老幼を爲二立退一、諸具を他所へ搬ひたる後、火藥を以て自燒せりとす、如レ斯形勢に而、人心之惘々たる事、譬るに物なし、

一、今朝卯刻雪江登城、永井殿へ逢對、申陳候は、昨日下坂之途中、伏見之火光を望見候而は、爭端已にひらけ、百端既往惣而無益に屬し候得共、下坂之旨趣も一應は申上、乍レ恐御機嫌をも奉レ伺、且即今此地之御様子も拜承仕度と及二登城一候段演二達之一、朔日已來京都之事情申述候處、永井殿も大息顰眉而已に而、扨々遺憾千萬なりとの挨拶にて、被二申聞一候は、此間老侯御下坂之節、御請之御席も有レ之、京地より之御左右次第、御上京之御積故、其節御人數多分被二召連一候も如何に付、御先供として二大隊、大久保主膳正引續出立被レ命、且瀧川播磨守を以、別紙御奏聞書被二差出一、右は三日朝條城へ着、御奏聞書御本紙は戸田大和守へ相渡、御奏上に相成、寫一通つゝ、尾越へ御渡之分は、則雪江呼出、播州より相渡積に有レ之、然る處同日細川右京大夫上着、二大隊之隨兵引連れ入洛に付、播州は夫に引續き罷越處、四ツ塚關門に而、細川勢は異儀なく通し候得共、播州は德川氏之家來故、通し難きとの事にて抑止に付、彼是及二懸合一候へ共、約る處爭論に相成より外は無レ之勢に付、無二是非一引取、大久保へ申談し、同人之兵隊に引副ひ、通行之積之所、大久保も指留に付、二三問答之内、早や彼方より打懸候故、此方よりも打懸、忽砲戰相始り候次第に而、誠に意外千萬之事共に相成、播磨も、今以淀表に滞留罷在候間、雪江彼地へ罷越、御奏聞書幷御直書も有レ之候間、播磨より受二取之一、直に上京いたし、御奏聞書は戸田和州へ指出し呉候義は相成間敷哉との頼談に付、御申聞之趣、不知は致候へ共、雪江輩御奏聞書持參と申も不體裁、且道路之障碍も難レ計、萬一德川氏之密使抔

と被レ怪候而は、此節柄主人迄も不都合相成候而は、迷惑仕候間、此儀は御免奉レ願度候、愚按を申試候へは、御用狀成共御仕立、肥後家老溝口孤雲罷出居候へは、此方へ御托し被レ成候而は、如何有レ之へき哉、外藩之方嫌疑も有レ之間敷と申談候處、如何様、其方も可レ然かと承引なり、雪江又申候は、扨ヶ様に事破れに相成候而之御策略は、如何候哉と詰り候處、誠に不意に出たる事故、更に術計無レ之、上様も殊之外御當惑、隨而何れも無策、如何相成可レ然哉との模様に付、乍レ恐夫に而は御濟被レ成間敷、萬一御人數等勢に乘し、陛下を驚かし候様之事には、相成申間敷歟と申候處、其處は念を入れ、毎々嚴敷申越候事故、決而其氣遣ひは有レ之間敷候へ共、ヶ様相成候に付ても、猶更御奏聞之筋、行届き候筋有レ之間敷哉と、頻に乖問有レ之に付、今日は申合せ、外藩四家之家老共、登城致候筈に候得は、猶又申合見可レ申と申達、退座せり、

一、即刻頃溝口孤雲、藤堂歸雲、十時攝津登城、控所におゐて對談之處、孰れも昨夜中に着坂、少々つゝ遲速は有レ之候へ共、途中に而砲聲火光を見聞し、不レ可レ救之勢と相成候を知り、愕然失レ措而已ならす、於二坂地一昨夜之御布告を拜見し、再度吃驚、駈馬難レ追次第と相成、挽回之道絶果たるは、四人同歎之至に而、猶此上にも、御名義之可二相立一條理可レ有レ之哉と、蹙額議論致試候へ共、更に開明之良策無レ之、當惑罷在内、三老之面々へ、追々閣老初諸有司對談は有レ之候得共、滿城拂レ地之無策に而、唯御奏聞之貫通、或は前途之意見垂問之外、一之定論も無レ之に付、三老も愈以慨歎を極め、即今と相成候而は、惣而一點之見込も無レ之趣申達、申刻頃より逐々に退去せり、孤雲へは、御奏聞書傳達之儀を、賴談有レ之候へ共、御家門之方可レ然趣申立、不レ及二御請一由、

一如レ形兵端已に開之上は、四人歸路之通塞難レ計に付、孤雲は今朝伏見邊之形勢爲二取調一、家來指遣したる故、歸報之次第により、歸京之見込を立候積之由、歸雲も同様、前路見分之者指出候由に候得共、雪江は十里外之消息坐待も焦思之至に付、いつれ之道にも、支度次第發船、淀邊迄遡り、其上に而進止可二相決一と、其段永井殿へ及二申談一處、左候はゝ、是非共御奏聞狀幷御直書共持參致呉候様との事に而、酒井雅樂頭殿、板倉伊賀守殿より、戸田大和守殿迄之御用狀

に仕立、被二相渡一に付受二取之一、退出せしは申半刻頃なり、此節淀川船留に而、通船無レ之に付、御目付板本殿指圖に而、四藩之分は、舟會所より印鑑を出されたり、雪江は昨夜留置たる船に而、酉半刻頃發船せしかと、乗棄たる大船なる故、船脚疾からす、五日曉寅半刻比、漸くにして枚方に至れり、

一、雪江退出之節、御城中の口に而、土老深尾鼎に逢ひ、引入對談するに、印鑑を持たさりし故、御門所に而手間取、及二延刻一たる由、城中之情狀物語、共に大息して空敷退出せり、

○同月五日、一昨日已來之形勢爲二報知一、奈良元作急飛に而、御國表へ被レ遣、今曉出立す、元作へ御渡に相成候、御國表へ申上之御趣意御直書如レ左、

舊臘九日已來、從二朝廷一內府公へ御內沙汰之儀に付、不レ及なから輕レ生、不二容易一盡力いたし、尙御下坂に付而も、粉骨碎身、其後從二朝廷一御沙汰被レ爲レ在に付、廿五日下濕、華城へ罷出、內府公へ言上、御請相成故、晦日歸京、直に復命も致、其上追々骨折、何卒御上洛御參朝迄も盡力、次第に順境相運、朝廷向も御都合宜相成樣子之處、去る廿五日江戶表騷亂之儀相聞へ、華城麾下之士生二大沸騰一候樣子に而、俄に御上洛之風聞、會桑等先鋒に而、伏見迄上り來り、就レ是も一昨より十分之盡力致し、雪江も下坂申付候位之處、昨三日夕より、伏水兵火起り、遂に干戈動き候形勢に而、不二容易一御大事、已に喪亂に及ひ申候、右に付、昨夕參朝いたし、帥宮御始、議定參與列席へ罷出、是迄不レ及なから、以二不肖一盡力仕候處、遂に今日之喪亂に相成候、全く慶永盡力之不行屆故と、奉二恐入一候に付而は、議定職奉レ辭、其上如何樣之御譴責相蒙候共、奉二甘受一候旨、御直に言上仕候、書付も差出候、右之趣意に而、何分にも辭職勅許奉二懇願一候旨、此上願出候事に而、最早世人へも面目無レ之、迚も相勤候所存毛頭無レ之、事に寄候得は、所勢にも有レ之、旁樣子見計、御暇も願出候積りに候、此段國許へ早々罷歸、越前守へ可二申聞一事、

正月四日　御諱

一、今朝六ツ時前、雪江枚方發船、橋本砲臺之邊に至るに、朝霧之內に、稀に小砲聲を遙聞す、砲臺に旗を建、人數を配り、形勢異常なり、怪みなから進レ船、橋本を過き、科手村邊に至るに、砲聲大小交も聞へて、霧晴れ、戰の漸く始りたるを覺ゆ、堤上を奔走往返之兵士あり、馬を馳せて歸り來る斥候あり、前途の砲聲漸く盛んなれは、舟子恐れ舟を進る事を肯んせす、依レ之村端に上陸し、兵士に問ふて、道を八幡山の麓に取り、八幡丁を過て、數丁にして會濱之大野英馬か、今一人と馬を並へて出陣せるに逢ふ、彼云、淀より以北砲戰尤盛んにして、伏見堤上亦爾り、勝敗未レ決、唯願くは一刻も早く歸京して、盡力せん事を庶幾する由を言棄て過行きたり、此頃に而は、淀川以北之大小砲戰猛烈を極め、轟然地を動かし、烟天に漲る、八幡山に會兵砲臺を築て屯集せり、放生川邊には、宮津藩守衞之關門あり、是を過候、堤上を行く、東軍之二大隊に逢ふ、未刻過き木津川を渡り新田村に至る、途中淀邊之放火を望む、此頃に至つて砲聲漸く稀なり、未半刻頃新田村之民屋を憑み午飯を吃し、夫より宇治川を渡り、小栗栖より栗栖野を經て、汁谷越より清水へ出、暮時過着邸せり、直に御前へ出、坂地之事情申上、御直書指二上之一御拜披之處左の如し、

奏聞之次第は有レ之候へとも、鐘轂之下におゐて、干戈を動かさゝる樣、兼而兵隊之者ともへ、申諭置候得共、彼より已に砲發之上は、此之上形勢心配致候間、吳々も鳳輦守護被レ致候義、厚く御賴申候、已上、

御諱

尾州　藝州
越前　宇和島　殿
土州　細川

正月四日八字認

御老中より戶田殿へ之御封物は、鹿之介を以、戶田殿へ指出處、御同人被レ申候は、御奏聞狀は、淵川播州大垣之藩士に托し、今朝相達せし故、封之儘直に朝廷へ被二指上一由、仍レ之雪江持參せしは、重復に相成に付、戶田殿手元に被二預置一段被二申聞一たり、右內府公御直書尾侯へ御廻し、御拜見之上、御連名之御方々へ御廻達之義、御直書を以被二仰進一、外諸侯へも、御直書を以御寫被レ遣處、豫老侯より之御返書如レ左、

拜讀云々、扨雪江第六時歸着仕候由、永玄より內府公之御直書相渡持參に付、御拜見之上、尾へ御廻し故、何れ尾より追々順達可二相成一候へ共、事急に

付、右寫御内々被レ遣旨、御厚情奉二感謝一候、即拜見仕候處、内府公御胸中、御互に奉二遙察一候通に而、泣血感動仕候、彌以昨朝總裁宮御發向之義、僕參謀に居候而不行屆、容レ身に無レ地奉レ存候、乍レ併かくて有へきに無二御座一故、尚明日八時より九時比迄に參上、御相談可二申上一、雪江へも逢、可レ承と奉レ存候、只今歸宅、匆々如レ此御座候、頓首、

正月初五第八時　　宗城

越老明公

○同月六日、今曉於二御所一、九門外公卿方、穴門有レ之分、警衛之儀被二仰付一旨、久世中納言殿御達之處、御人數少に而、三十四家不レ殘は御持被レ成兼候に付、下立賣御門より寺町御門迄之間、十四家分御持に相成、

一、此日於二邸内一御評議有レ之候は、前内府公いまた橋府御在第之比より、王事に御賢勞あつて、先朝にも御依賴思召されし事は、舉世之所レ知に有レ之、大統御繼承已來は、猶更聖下御滯在に而、專ら可レ被レ爲レ安二宸衷一と、被レ盡二御忠貞一、當朝と被レ爲レ成候而は、別而御幼冲にも被レ爲レ在候へは、殊更都下之安穩にして、皇國之泰平ならん事を、御一身に御引受、日夜御焦思之事に候ひしかと、宗家御衰運之秋とも可レ申歟、尊王攘夷を名として鬱懷を暢へ、私憤を快くせんとする過激不逞之徒、逐レ年而滋蔓に及ひ、縉紳を慫慂して、官武之不和を煽き、騷亂を醸成し、勢不レ可レ治に立至りしにより、前内府公多年含蓄之大謀大英斷を以、時機に投し、政權を御奉還有レ之、政令一途之全策を建議し給ふ處、廟堂之暴論是を時とし、降官削地之事を以て、大に德川氏を窘迫せしむといへとも、前内府公強忍恭順之盛意、暗に其施謀を折き、吾老公、尾土兩老侯と共に之を輔贊し給ひ、諸藩之有志附尾して、翼戴周旋之力を盡し、扶持顚復之時、已に來るに垂として、舊幕吏淺慮失策、會桑之頑愚强暴、頓に安動を發し、功を一簣に缺き、今日之形勢に至つては、前内府公を亂臣賊子として、朝敵追討之錦旗を飜す、此時に當つて、内府公之汚名を雪き、多年勤王之盛意を眞實にする事能はす、徒らに虛名を負ふて、華城に敗死し給ふを座視せんとす、悲憤慘痛、牙折れ拳摧く、嗚呼二百餘年幕府之親眥に誇て、威を天下に振ひ給ひし御當家に於て、休を供にして成を異にし、宗家

困難之極、赴湯蹈沛之際に至れるを、手を袖にして傍觀す、其信其義何れ之地にある、何之面目あつて、德川氏之君臣に見ゆへき、何等之鐵面皮あつて、世間之義人に對すへき、正議如レ此は候得共、即今御手出し之被レ成方も無レ之候へは、御國家を被二指上一、高野御登山も御至當なるへき歟抔、公を奉レ初、要路之面々、心膓を吐き、御評議有レ之候へ共、前途に判然たる御定見も立兼候に付、當前之救レ急、朝敵之汚名を被レ除候樣、尾侯被二仰談一、朝廷へ雪冤之御强願可レ然との御決議に而、御出來に相成御書取、幷御家來共より之歎願書如レ左、

德川〇〇、今般之擧、朝敵たるの故を以、征討將軍をも被レ命候に立至候義、支族たる〇〇におゐても、誠以不レ堪二恐悚悲歎之至一奉レ存候處、昨夜戸田大和守より、別紙之通り、今朝奏聞に相成候旨に而、爲二一通相廻し一、且右建言之趣、幷無レ程上京に付、爲二先供一二大隊之兵士、二條城迄爲二指登置一候段、去る三日朝、瀧川播磨守を以、被レ及二奏聞一候處、右播磨守、於二四ツ塚一薩藩之衞兵に被二指留一、建言上達難レ仕、空敷引返し候而已ならす、仇視之向より、追々兵端相開らき候に付、不レ得二止事一爭闘には相成候へ共、奉レ對二朝家一、一點逆意之念頭無二御座一段は、建白之表に而も分明に御座候、然る處事情行違ひ、趣意徹底仕兼候より、不レ圖不臣之罪名を蒙候而は、祖宗以來之寸忠も、今日に至つて烏有に屬候義、支族之身上に取候而も、罔極之痛歎に御座候へは、何卒右等之次第共御憐察之上、至仁至公之御憐恕を以、朝敵之惡名御除削被二成下置一候樣、偏以奉二歎願一候、是等之趣、朝廷へ宜御執奏之程、所二仰冀一御座候、以上、

月　日

德川殿今般之擧動、朝敵たる之故を以、錦旗を以御征討に被レ爲レ及候御場合と相成候義、德川臣子に至る迄、恐懼錯愕不レ知レ所レ措罷在候處、戸田大和守方より、今朝奏聞に相成候由に而、德川殿建白、幷不日上京之先供二大隊、條城迄被二指上せ一被レ置候段、去る三日瀧川播磨守を以、被レ及二奏聞一候に付、品々掛合有レ之候へ共、約る處爭論に及候外に無レ之、左候而は、建白哀訴之趣意にも相

背候故、無二是非一引戻し、兩條共上達難レ仕、彼是痛心罷在候内、仇視之向より追々兵端を開き候に付、不レ得二止事一戰爭之次第には相成候へ共、被レ對二朝廷一候而は皇國之爲、忠勤之旨趣は有レ之候得共、聊叛逆之意志無レ之儀は、建白書面に而、現然昭著之事に御座候處、建白難レ達、事機及二錯亂一候より、不レ圖朝敵之汚名を被二相蒙一候義、德川支族之臣子に取り、何共殘念至極之次第に而、憤歎難レ忍仕合に御座候、尤朝廷におかせられ候而は、干戈暴發之形迹を以、速に御征討之御手配、被レ爲レ在候御儀は、乍レ恐御至當千萬之御儀に而、今日迄は實に恐入縮入、屏息仕居候義に御座候處、前書建白奏上にも相成、德川殿用兵之始末も分明に相成候上は、手元に於て一段之過失は、今更可二取返一方策も無二御座一、恐入候次第には御座候へ共、是迚も德川氏より兵端を開き候筋にも無レ之、事不レ得レ止に出候より、起り候趣にも候へは、何卒此儀は、祖宗已來聖化を輔賛し、皇國之生靈、二百餘年干戈之患を忘れ候勤功に思召被レ爲レ換、朝敵之罪名御除き被二下置一、王政御一新、惣而正大公明之御所置被レ爲レ在候御折柄にも候へは、雪冤之御公議相立、支族主從之歎訴、御聞屆に相成候樣、武門之意地、臣子之情懷、深く御憐察被二成下一、可レ然御奏達被二成下一候樣、偏に以願上候事に御座候、已上、

月　日　　家來共

右書面を以、尾侯へ御談之御評議之處、靑山小三郎退朝に而致二出勤一、此義を承り申出候は、今日朝廷之御模樣、德川氏之黨類は勿論、惣而佐幕之二字を唱ふる者は、不レ論二是非一朝敵々々と號し、可レ及二壓倒一勢に而、已に明日は惣參内に而、朝敵追討之大號令も、可レ被レ發御樣子に有レ之、左樣之最中へ、かゝる御書面出候而は、御趣意之可否は指置、朝敵御荷擔とか申事に相成、如何樣之御災難も難レ計候得は、今暫時勢御見合せ、御强願等に相成候はゝ、必定朝敵之部類に可レ被二加入一と、御諫止申上に付、今日之處御猶豫に相成、

一、今日御國表へ飛脚被二指立一、御表樣へ被レ進御直書左之如し、

方今之形勢不二容易一、干戈頻動、皇國之安危は勿論、宗家之存亡此秋に迫り、實に苦心難レ堪、日夜令レ惱慮候、昨朝奈良元作を以、三日已來之景況申達候後、浪華より中根雪江書狀到來、且從二内府公一御奏聞書、幷列藩之御布告相廻り、拜見いたし候、右は乍レ恐御尤御趣意之樣には候得共、全體從二公邊一兵隊御指登せ、其外御不都合之廉々も不レ少、間然なしと難レ申、從二朝廷一之御所置御命令も、可レ議なきに非す、臣子之身分恐多き事なから、憤思に堪兼候義も不レ少、唯今之形勢に而は、如何とも不レ可レ爲、矢張元作を以申達候所存に而、幾重にも、盡力不行屆之所を以辭職、御譴責奉二懇願一之外無レ之覺悟候間、於二國許一公邊御布告等之義に付、萬一議論鼎沸致候共、此地之景況不レ詳惑より、畢竟事起り候故、我等之所存如レ此候へは、足下之進退も亦天下之公論を被レ待、至當之所置有レ之度、只今之處萬一不都合に而は、千載之笑と存候、此趣、議論申出候者有レ之は、、直諭鎭定尤に候、右之趣及二陳啓一候也、

正月六日　　御名

越前守殿

一、此日於二坂地一佛國公使登城、御應接有レ之、相濟退城之後、伊賀守殿公使館◎術カ旅館へ被二罷越一、夫より

無レ程内府公佛國火船へ被レ召、御東下被レ遊候由、

○同月七日、今日議定、參與、在京諸侯等、申刻揃惣參内被二仰出一、公御所勢に付、爲二御名代一本多修理被二指出一候處、於二小御所一一同揃之上、帥宮御讀渡之御書面如レ左、

德川慶喜、天下之形勢不レ得レ止を察し、大政返上、將軍職辭退相願に付、朝議之上、斷然被二聞食一候處、只大政返上と申而已に而、於二朝廷一土地人民御保ち不レ被レ遊候而は、御聖業難レ被レ爲レ立候に付、尾越二藩を以、其實効御訊問被レ遊候節、於二慶喜一は奉二畏入一候得共、慶下幷會桑之者共承服不レ仕、萬一暴擧可レ仕哉も難レ計に付、只管鎭定に盡力仕居候旨、尾越より及二言上一候間、朝廷には、慶喜眞に恭順を盡候樣被二思食一、既往之罪不レ被レ爲レ問、寬大之御所置被二仰付一へき之處、豈圖らんや、大坂城へ引取候は素より之詐謀に而、去る三日慶下之者を引率し、剩前に御暇被レ遣候會桑を先鋒とし、闕下を奉レ犯候勢、現在彼より兵端を開候上は、慶喜反狀明白、始終奉レ欺二朝廷一候段、大逆無道、最早於二朝廷一御宥恕之道も絶果、不レ被レ爲レ得レ止

追討被二仰付一候、兵端已に相開候上は、速に賊徒御平治、萬民塗炭之苦を被レ爲レ救度叡慮候間、今般仁和寺宮征討將軍被レ任候に付而は、是迄偸安怠惰に打過き、或は兩端を抱候者は勿論、假令賊徒に隨ひ、譜代臣下之者たり共、悔悟憤發、爲二國家一盡レ忠候志有レ之輩は、寛大之思食に而、御採用可レ被レ爲レ在候、依二戰功一、此行末德川家之儀に付、歎願之儀も候へは、其筋により御許容可レ有レ之候、然るに此御時節に至り、不レ辨二大義一賊徒と謀を通し、或は潛居爲レ致者は、朝敵同樣、嚴刑に可レ被レ處候間、心得違無レ之樣可レ致事、

但征討將軍を被レ置候上は、即時前件號令可レ被レ發は勿論に候得共、猶旗下粗暴之徒、塗炭炙に至り候事哉と、彼是深重之思召を以、御遲延之處、三日より今七日に至り、坂兵日々雖二敗走一益出兵、吳々不レ被レ爲レ得レ止、斷然本文之通被二仰出一候、各藩陪臣吏卒に至る迄、方向を定め、爲二天下一奉公可レ有レ之事、

右相濟、岩倉殿御演說有レ之趣は、如レ斯被二仰出一候上に而、歸國致度向は歸國、大坂へ罷越度向は可二罷越一、又勤王追討之向は其通り、何も方向を定め、明日辰刻迄に、及二御請一候樣御申渡有レ之、畢而又被レ申候は、是迄は朝廷之御爲、何卒慶喜改心反正有レ之候樣にと存し、蔭なから種々及二周旋一候儀も有レ之所、今日之姿に立至候而は、朝廷へも無二申譯一、深く奉二畏入一候と、改而宮樣へ御演達有レ之、是よりは決然方向を定め、勵精可レ仕は勿論との事に而、又是は事已に去りたれともと御申に而、德川氏奏聞狀を、列坐之上席へ御渡有レ之、此時久我中納言殿被レ申候は、何も朝家之御爲早く可レ安二宸襟一、且は蒼生之塗炭に不レ陷樣との御配慮に出候事候へは、聊不レ及二御願念一儀、御念入候事に候、只今後之處は、御互に今日被二仰出一候御號令を奉し、共に盡力致候より外無レ之、是迄之儀は、御心配無レ之樣、御挨拶有レ之由、

一、今日之御次第、修理罷歸申上候付、被レ及二御評議一候處、御請之大體は、勤王之外別儀可レ有レ之樣も無レ之候へ共、尙紛々之議論も有レ之、公には、前日御辭表被二指上一候御趣意に而、今更と相成候而は、最早御方向御取失ひ、朝廷へは素より、世間へ御面目無レ之、迚も御在京は難レ被レ遊思召候へは、勤王は御表樣之

御當務、御十分に御盡し可レ被レ遊、公は素々御隱居之御身分に被レ爲レ在候へは、猶又御再願に而、被二聞食一之上は、御國元へ御引込、山林へ御退隱可レ被レ遊と思召候間、御請之儀は、被レ任二衆議一候段、被二仰出一たり、

一、坂地に被二指置一候荒川順之介、今朝大坂表出立、夜に入歸邸、右は昨夕前內府公華城御明退き、火船に而御東下被レ爲レ在たる由之注進なり、坂地寂然、無人境之如くなるよし、順之介は閒かり峠より奈良街道へ出、宇治より淸水を經て歸京す、道路障碍無レ之由申二達之一、

○同月八日、昨日之御請書、修理を以被二指上一、左之通、

昨七日所勞に付、爲二名代一家老本多修理參朝爲レ仕候處、御書付を以御達之趣奉二拜承一候、

正月八日　　松平大藏大輔

右御請書之儀、元より勤王一途之御方向之旨、可レ被二仰上一事に候へ共、當節柄、萬一坂地追討抔被レ命候節は、御名義上におゐて、御斷り不レ被二仰上一候而は不二相適一候得共、夫に而は、又御請之御趣意と齟齬之姿に而、被二仰譯一無レ之樣可二相成一、されはとて、御推察を以未然に被二仰置一儀も難レ被レ成、彼是御困窮之御譯合に而、唯何となく御承知と計、御請に相成候はゝ、御趣意不分明故、定而御尋も可レ有レ之候へは、其節に至り勤王一途は勿論に而、申上る迄も無レ之候へ共、御用之次第により、相願候義も可レ有レ之と、夫となく御答置に相成可レ然との御評議に而、御請書出來、修理持參罷出候處、非藏人を以、書付有レ之候はゝ指出候樣御沙汰に付、即指上候處、書面に付、申上候義は無レ之候へ共、書面に付御尋に付、書面に付申上候義は無レ之候へ之趣申上候處、左樣候はゝ、最早御用無レ之、萬里小路殿御落手之段、非藏人を以被二仰聞一候に付、其儘退散仕候趣、修理罷歸申上、

一、此日午後、坂地に罷在候岡本晉太郎、罷歸り申上候次第は、昨七日御城より申來り罷出候處、御目付妻木多宮殿逢對に而、昨六日上樣御城御明退きに付、尾越兩侯へ御托之御奏聞狀、幷御書有レ之に付、兩家之衆へ可二相渡一所、尾邸には一人も詰合無レ之に付、晉太郎へ被二相渡一由、且御城も引渡被レ申度との事に付、

晋太郎申候は、重き御奏聞状等、私式之者拝受仕候義は恐入御請難レ仕、且御城受取之儀は、猶以可レ及二口々様も無レ之候間、御免被レ下候様申達候処、御奏聞状は是非共致二持参一呉候様、御城之儀は早々受取人指出候様可レ致、薩長迫り来候へは、御城は元より、土地可レ及二放火一、左候へは諸民之難儀とも可二相成一儀に付、其處を思召、御開城にも相成事に候へは、此譯合も、歸路薩長陣處へ、罷越申説き、止戰之義申入候様との頼之由、肥後首藤某へも、止戰申通候義、頼有レ之趣に候へ共、首藤は戰地罷越候義懸念候得者、京都へ申遣し、京都より指留に相成候様、可二取計一との緩計に而、拵取申間敷様子故、晋太郎申達候は、ヶ様之時節候へは、成敗は難レ量候得共、何分指向ひ見可レ申候間、御奏聞状御寫一通御渡被レ下度、夫を以懸合可レ仕、尤御城之儀は、尾越より奏聞済、受取人指上候迄は、御受取申候とは難二申上一と相答へ、御奏聞状幷御寫共受取罷歸、夫より支度相整北上之處、途中案外に兵士等見受不レ申、枚方迄無二何事一到着、彼是深夜に相成候付、暫時休息罷在候處、長陣より之巡邏六人入來り、通行之趣意等相糺に付、有體申答へ、陣所へ致二案内一呉候様相二頼之一、同行して橋本驛之陣營に至り、隊長へ面會、御奏聞状寫爲レ見、多宮殿頼之趣申演候處、淀表仁和寺宮御本陣へ申上候様との事に付、同所へ罷出候處、參謀伊知地正治逢對に付、前條申述處、尤之次第候へは、宮へ相伺ひ、思召次第に可レ致との事に而、慇懃に慰勞之挨拶いたし相歸し候、右等之次第に而、彼是手間取之由申達、御奏聞書一封指出に付、伊藤友四郎受二取之一、御前へ指上、晋太郎口上之趣逐一申二上之一、一封は尾侯御連名に候へ共、先に御開封被レ遊處、左之通、

此度上京先供、途中偶然之行違より、近畿騒然に及候段、不レ得レ已場合に而、素奉レ對二天朝一他心無レ之段は、兼而御諒知之通に候、併聊たり共奉レ惱二宸襟一候段、恐入候儀に付、浪華城は尾張大納言、松平大藏大輔へ相托し、謹而東退仕候、已上、

正月　御諱

御副状

此度上京先供、途中偶然之行違より、近畿騒然に及候段不レ得レ已場合に而、素奉レ對二天朝一他心無レ之段は、兼而御諒知之通に候、併聊たり共奉レ惱二宸襟一候段、恐入候儀に付、浪華城各へ相預、退去歸東に及候間、右之趣可レ然御執成、御奏聞有レ之度頼存候、

正月七日　御諱

尾張大納言殿

松平大藏大輔殿

右に付御家老酒井與三左衛門を以、尾侯へ御指出に相成、尾侯御承知に而御談之上、尾より成瀬隼人正、御家より酒井與三左衛門夜に入參朝、公卿之議定衆迄被レ指二出之一、

一、昨日反状明白等之御發令も有レ之、最早御盡力之御筋道も絶果候事と相成、此儘御在京被レ遊候而は、被レ對二天下一御面皮も不レ被レ爲レ在御義に付、過日御辭表被二指出一置候御儀も被レ爲レ在、旁御直願之上、御歸國可レ被レ遊との思召に相決、今夕御參內可レ被レ遊哉、明朝之方御都合可レ宜哉抔、御評議中、前記晋太郎到著に付、右御奏聞状御持參に而御參內、御奏達之御跡に而、御願可レ被レ遊との思召も被レ爲レ在候へ共、尾侯へ御懸合に相成候は丶、彼是夜にも入可レ申次第に付、御參內は明朝に被レ決、御奏聞書は御家老中を以、被二指出一候事に相成、然る處夜に入、三岡八郎退朝より直に參上、申上候は、今朝參與役所へ出勤之處、岩倉殿御逢被レ成度との事に而御對面有レ之、御申聞之趣は、此間容堂殿迄申達置候次第、大藏大輔殿には爾後御參內無レ之に付、難二申上一に付、段々延引に相成候故、今日八郎迄御申聞有レ之由、抑舊臘已來之御忠實御盡力は、滿朝徹底感服之事に而、此上德川氏如何様之變故に及候共、尾越兩家へは、德川氏に向ひ戰を取らせ候様之義は決而無レ之候、其代り五畿內之政治、此比迄は、內府公御參內之運ひにも相成候は丶、是迄之振合も承知之事故、何とか可二相成一か、實は夫を憑み、等閑に致置候姿之處、今日と相成候而は、夫處之事にも無レ之、追々之世態、一撥抔起り候には、不取締之事にも候へは、何卒大藏殿、伊與守被二仰談一、御家來も御指支にも可レ有レ之候へ共、二十人なり十人なり御指出、此所之御政道御取締り之義、御頼被レ成度との御內評に有レ之、依レ之明日辰刻、御參內有レ之候様致度、左候へは、兼而御役御免之御內願は有レ之候へ共、御許容無レ之、更に議定に被レ命候御運ひなる由、御內話有レ之旨に而、前記之御落膽、御屈度被レ遊

候御見込とは、思召懸もなき朝廷之御評議有レ之趣相聞へ、左様之御折柄、御一人見に而、強而御勇退被レ遊候は丶、是迄御周旋御盡力御鑿枘齟齬、御行屆無レ之、遂に今日之世態に立至候を、御愛憐之餘り、最早風雲之世途を御嘉口被レ遊度との 御趣意は不二相貫一、却而德川氏之御爲に、何とか思召も有レ之、御歸國被二仰立一候樣、朝廷之御嫌疑を被レ爲レ受候而は、多年朝幕之爲に、御心力を被レ爲レ盡候御忠貞之御瑕瑾にも、被レ爲レ成候半歟と、今更御殘念にも思召、且は萬一御表樣迄之御不都合等に可レ被レ爲レ成候歟と、御心弱く被レ爲レ成、先つ明日之處は御參內に而、無二御異議一御奉命被レ遊候而、猶御深考も可レ被レ爲レ在との御事に被レ爲レ決たり、

○同月九日、今朝御重臣壹人被二指出一候樣、御所より御達に付、酒井與三左衞門方被二指出一候處、德大寺大納言殿より御達左之通、

尾張大納言
越前宰相

慶喜東歸に付、言上之趣被二聞召一候、將軍宮御進軍、華城を以可レ爲二本陣一被二仰出一候間、兩藩共に迅速下坂、城中點檢、可レ奉レ迎旨御沙汰候事、

但若々及二遲々一候而は、甚以御不都合に付、兎々速に下坂可レ致事、

一、同斷御參內被二仰出一候へ共、御所勞に付、御名代右同人相勤候處、德大寺大納言殿御達左之通、

越前宰相

先達而より所勞に付、議定職辭退歎願之儀不レ被二聞食一、今度更に被二仰付一候間、此段可二相心得一候、

但華城出張中、御役前相勤候義、御用捨相成候事、

右御奉命之御請、御家老代宇都宮勘解由を以被レ仰二上之一、

一、右華城之儀被二仰蒙一處、御所勞中に付、尾侯へ御示談之上、爲二御名代一酒井與三左衞門へ下坂被レ命、青山小三郎、小栗五郎太夫、御作事方引繩、早々下坂被二仰付一、小三郎は途中、將軍宮淀城御本陣へ、御使者相勤候樣被レ命、

但尾侯も御所勞に付、御名代御家老渡邊對馬守、幷大澤武五郎、中村修之進、梶川橘介等下坂被レ命由、

一、今朝巳刻過、千本彌三郎御國許より大早駈に而到着す、右は去る三日、於二御所一御沙汰有レ之、此地より之報告次第、御人數繰出候義、爲二取計一上京せり、方今之形勢に付、御國論は、最早御盡力之御廉も不レ被レ爲レ在、御宗家へ被レ對候而も、朝廷へ被レ對候而も、御濟不レ被レ成候得は、速に御勇退被レ遊候樣、御國表之御議、死を極め可レ及二主張一、當時之御時勢御觀察、其儘御心ならすも御在職之思召等、一切難レ及二落意一、固執強願、如何とも不レ可レ爲勢に付、御內許之上、眼前當り難きの銳氣を被レ避、假初に御勇退可レ被レ遊との御書取御渡し、彌三郎は御歸しに相成、追而此表委曲之實際は、御家老中に而可レ被レ遣に相決す、

同月十日於二御所一被二仰出一、

德川慶喜
與州會津
勢州桑名
讃州高松
豫州松山
備中松山
上總太田喜
永井玄蕃頭

平山圖書頭
竹中丹後守
塚原但馬守
戸川伊豆守
松平大隅守
新見相模守
設樂備中守
榎本對馬守
牧野土佐守
岡部肥前守
大久保主膳正
小栗下總守
星野豐後守
高力主計頭
小笠原河內守
大久保筑前守
同　能登守
戸田肥後守
室賀甲斐守

今度慶喜奉レ欺二天朝一、反狀明白、既に兵端を開候に

付、追討被二仰出一候、依レ之右之罪、隨二從于賊徒一、反逆顯然に付、被レ止二官位一候事、

奥州　會津
勢州　桑名
讃州　高松
豫州　松山
備中　松山
上總　太田喜

右慶喜同意、反逆顯然候間、悉屋敷被二召上一、殘兵追放被二仰出一候事、

但殘兵敵地迄可二相送一事、

若州　小濱
濃州　大垣
志州　鳥羽
丹後　宮津
日州　延岡

右御不審之次第有レ之に付、被レ止二入京一候事、

一、此日七道へ、鎭撫使發遣之被二仰出一有レ之、

北陸道　高倉殿
山陰道　西園寺殿
東山道　岩倉若殿
東海道
山陽道
南海道
西海道

右は未た御決定無レ之、

一、同時備中松山之城を藝州へ、伊豫松山之城を土州へ、各攻擊被レ命由、

一、同時三條大橋、幷荒神口大橋札の辻へ被レ揭高札如レ左、

德川慶喜、天下之形勢不レ得レ已を察し、大政返上、將軍職辭退相願に付、斷然被二聞召一、既往之罪不レ被レ爲レ問、列藩上座にも可レ被二仰付一之處、豈圖んや大坂へ引取候旨趣、素より詐謀に而、去る三日慶下之者を引率し、剩歸國被二仰付一候會桑等を先鋒として、闕下を奉レ犯候勢、現在彼より兵端を開候上は、慶喜反狀明白、始終奉レ欺二朝廷一候段、大逆無道、其罪不レ可レ逭、此上者於二朝廷一、御宥恕之道も絶果、不レ被レ得レ已御追討被二仰出一候、抑兵端既に相開候上は、速に賊徒誅戮、萬民塗炭之苦を被レ爲レ救

度叡慮候間、今般仁和寺宮征討將軍被レ任候に付而は、是迄偸安怠惰に打過、或は兩端を抱き、或は賊徒に從ひ居候者たりとも、眞に悔悟憤發、國家之爲盡忠之志有レ之輩は、寬大之思召に而、御採用可レ被レ爲レ在候、尤此御時節至、不レ辨二大義一、賊と謀を通し、或は潛居爲レ致候者は、朝敵同樣、嚴刑に可レ被レ處候間、心得違無レ之樣可レ致事、

辰正月

私云、此外に農商布告、外國諭告等有レ之、大同小異故略レ之、

一、今夕申刻後、大坂御藏屋敷に殘り居たる小使之者罷歸、昨朝六半時比、大坂御城大手前小屋より出火、御櫓御殿等追々御燒失之由、多分地雷火仕懸有レ之由注二進之一、一說に、會兵地雷火を仕掛置候とも、又薩藩の二小隊を以て、燒彈を發射せしとの風聞なる由、

私云、後日尾之渡邊對馬守、於二彼地一正敷地雷之處々より迸出して、御城中御殿御椽板等飛揚せしと、其言を實見せりといへる者に親聞せる由、對州雪江に語れり、

一、同時華城回祿之儀、朝廷へも相聞候に付、將軍宮陣替、何方に相成可レ然と御評議之上、四天王寺に相決し、尾越兩藩は、已に御待受人も指出候事候へは、唯今より急飛脚を以、天王寺御本陣に取計可レ申旨申越候樣、議定長谷三位殿御賴之趣、出勤罷在候酒井十之丞迄御申聞有レ之段、罷歸申上之一、尾州よりは詰合之者無レ之に付、右之趣伊藤友四郎を以、御相談被レ仰二遣之一、御小人目付坂地へ被レ遣候、然る處天王寺は御不便に付、本願寺掛所御宿陣に相成由、右御用相濟、酒井與三左衞門初、十二日夕歸京せり、尾州渡邊對馬守等も同斷之由、

○同月十一日、去る七日於二朝廷一、諸侯之方向御疑問有レ之已來、親藩御譜代藩之有志、往々御家へ罷出、御方向之御確定、將各藩方向之定方等、或は質問、或は探索、或は議論、或は教示を乞ふ抔、其淵底を推究すれは、悉く二百餘年之厚恩に報んとの赤心より發し、御家を標準として驥尾に繋り、佐幕之術計を咨詢するにあれは、其忠肝義膽、不レ可レ當二慷慨悲憤一、共に淚を洒くの勢にて、畢竟御國許と同論故、此節朝廷御推恕之思召御感戴、御心ともなく御奉職被レ爲レ在候因循說を以、可レ及二談論一次第にも無レ之、應接之面々甚

困窮し、公も亦昨日御宗家君臣解官、三條幷荒神口大橋之高札場に、御罪狀を掲示せられ、其他農商布告、外國諭告等、總而御周旋御不行屆に起原せる條々故、一々御忍ひ被レ遊兼候御始末に付、被レ廢二御寢食一、御熟慮被レ遊處、如何にしても、此儘に尸位を辱られ候而は、被レ對二朝廷一御不忠之至と申、被レ對二御宗家一被レ對二天下一、御傍觀は難レ被レ遊と、大御奮激を被レ發、此上は公然朝廷へ御願之上、王師に御代り御東下被レ遊、舊内府公に御勸諭有レ之、御伏罪に被レ爲及樣御盡力有レ之、天下兵氣を收めて、速に太平に歸候樣、皇國之爲に御一身を可レ被レ致と、大公至正之思召立之趣、御試に御書取に相成、御家老中始へ御開示有レ之、大御評議と相成處、御至當之尊慮、一言之異議可二申上一樣も無レ之、熟れも感服御同意申上奉れり、御趣意御書付如レ左、

臣伏て惟れは、抑此度王政復古、更始一新の叡念を被レ爲レ發、實に千載の大幸にして、臣感激して不レ堪二雀躍歡喜一、天下萬民瞻仰し、外國と雖も刮目新政を見る、皇國隆起の機會、朝家興復の樞要たれは、臣之か爲に日夜感憤恐懼して、陛下の盛業日月

とともに萬邦に輝き、恩露神洲に洋溢して、羣黎の安堵を期し、庸愚淺陋を忘れ、陛下の鴻業を贊翼せんことを祈願す、然るに德川〇〇會桑を先鋒とし、上京に托して伏水に到らしめ、且つ奏開狀を呈するか爲に、遂に兵端相啓け、一敗の後籌城を棄て東歸す、何ぞ形迹の異しくして且つ拙きや、臣謹に命を奉して〇〇か恭順を誘ひ、已にして此事あり、上惱二宸襟一下蒼生を困む、〇〇か罪最大にして、朝廷の赫怒素より至當なり、臣か無能不明も亦、斧鉞の誅を遁るゝに道なく、臣支族と雖も、憤懣徹レ骨切齒嚙レ氷、怨恨憂苦、實に廢二寢食一爾來諸侯を初、天下の人心兩端を持して疑惑す、臣謹て是を論せん、當年德川口口撥亂反正、上安二叡慮一、下生靈を撫て、聖化を輔翼し、昇平を開きて、于レ今二百餘年、諸侯臣事して恩露に浴し、太平を樂むの餘澤天下に洽治す、德川氏を思慕する者、天下半に過る所以なり、今王政復古の令出て數月を過す、舊臘九月已來縱に三旬餘、新政天下に布くの日なくして、萬姓未た其實効を覺えす、於レ是勤王の義を會せる者は、尙二百餘年の舊業を忘るゝこと能はさるも、亦誣

へからさるの人心なり、方今陛下宸怒の餘り、日日德川氏を譴責するの嚴令を下し玉ふ、理固より爾りと雖も、臣陛下の爲に窃に恐懼す、德川氏の存亡は臣舍て不レ論、今征討の勅を下し、諸侯を合せて是を伐つ、干戈大に動て稅怨の期を知らす、其勞費幾萬々なるや、生靈斬伐の慘怛、億兆の塗炭、諸侯の疲弊、悉く皇國の危難を釀成して、其巨害津涯を見す、臣前年先朝の勅を奉して政事總裁職を辱す、詔云、萬民を救ひ、叡慮を安んし、外夷の侮を禦けと、臣拳々服膺し、今日に至つて須臾も之を忘れす、嘗て窃に惟ふに、陛下新政の鴻基も亦此に外ならん、〇〇妄動不虞に發て、一時生民の殘害をなす、其罪討たすんはあるへからす、〇〇遁逃の後、朝議尙復兵を徵し役を課し、長驅大進せんとす、萬姓の愁苦始に倍す、是皆〇〇か致す所に出と雖も、即今陛下の命する所なるを以て、諸侯臣民動もすれは、今日の勞役を怨嗟して、却て德川氏盛時の舊政を慕ふの念頭を增益せんとす、是臣か日夜憂患恐懼する處なり、陛下今〇〇問罪の師を阻め、臣に問罪の責を任し玉ひ、早く天下の公議を盛んにし、

泰平の鴻業を興し、至仁至善、天授地載の新政、舊幕政に超越する萬々ならは、天下自ら朝廷の德澤に懷ひて欽仰し、誰か德川氏の舊を思ふへき、臣亦江府に趨つて、〇〇か罪を問ひ、過を糺して悔悟せしめ、干戈を動かさすして其罪に伏せしめ、陛下の爲に生靈の慘毒を掃除し、併て宗家に代つて、其罪戾の萬一を贖んことを希望す、〇〇若し皇上の德に懷かす、臣か言ふ處を可かす、始終惡逆を逞ふするに至つては、天下の共に討んと欲するを待つて、天誅を下し玉ふも、亦遲かるへからす、仰冀くは臣か言を納れ、臣か願を允し玉ひ、靜に內政を修めて、兵を弛へ、黎庶を息へ、厚生の澤を布き、干戈內に動くの冗費力役を省て、外寇禦侮の備を嚴にし、神州の沫凝に祖國たる所以の大勳業を創建し玉はん事を、

一、丸岡藩老有馬帶刀は、公にも御懇意に而、兼々深く御宗家之御爲を存し、頗る有識之者なれは、右之御大議內々申談、意見承見候樣との御沙汰に付、今夕雪江帶刀之旅宿往訪、前條及二內談一處、帶刀も過日來熱中に堪兼たる折柄なる由に而、大に御同意申上、御東

下にも相成候はゝ、是非御供に立、江府へ罷出、舊幕諸有司之内、幷諸藩にも同志數多有レ之候へは、申合せ、身命限り周旋可レ仕との事に而、社稷之臣易君之蹤迹も有レ之候へは、自然關東之御模樣により、廢立御取計ひ、宗社之儀存有レ之度抔申出、其他種々及二議論一、慷慨感泣に及ひ候次第に付、罷歸其段申上、公も御滿足に思召れたり、

○同月十二日、今日午半刻依二御召一、御衣冠にて御參內有レ之、於二小御所一被レ拜二龍顏一、於二御前一總裁宮御渡御書付左之通、

越前大藏大輔

國家多難之砌、應レ召登京、朝議之旨速に奉行、彼是周旋、遂に使二王道一復中前古上候段、叡感不レ斜候、愈以勵二忠志一可レ爲二皇室之維城一旨、御沙汰候事、

此日、尾、豫、土、薩、藝、肥之大諸侯、御同樣御參內に而、御賞典有レ之、其他在京諸侯參內、御褒詔有レ之、

一、此日左之通御布達有レ之、

一明日より太政官代九條家之事、

一連日巳刻參集、申の刻を限退出之事、

一各獨辨當持參之事、

一、頃日御評議に相成、御東下御盡力之一條、今朝に至り愈御決評に而、御願書御草稿御出來、如レ左、

德川慶喜反狀分明に付、御征討被二仰出一、支族之慶永におゐて、何共可二申上一樣無レ之奉二恐入一候、別而慶永儀は、德川家來共鎭撫之御內命を蒙候儀に而、種々談判も仕、鎭撫も漸行届き、慶喜も益恭順之趣申上居候處、卒然として一時及二暴發一候始末、是迄言上仕居候次第とは、雲泥之相違と相成、慶永も共に奉レ欺二朝廷一候歟之委に而、實に恐懼之至に堪へ不レ申、就而は唯今と相成、詮なき儀には御座候へ共、今一應江戶表へ罷越、妄動を初、罪狀之次第、一々篤と取糺し、夫々說得仕、悔悟之廉相立て、伏罪に及はせ、朝憲も相立候事と相成候はゝ、乍レ恐朝廷御苦念之御一と廉も相省け、且御追討に付而は、諸侯之勞費庶民之愁苦は勿論、自然戰鬪之譯にも相成候得者、慘毒を極候事にも御座候所、其邊之儀申出候、慶喜悔悟之運ひ次第に而、如何共可二相成一儀候へは、成敗は難レ期候得共、先達而之申譯旁東下仕、取計見申度奉レ存候間、何卒六十日之御暇被二下置一、其內は御弛兵被二成置一被レ下候樣、

右御草稿を、今夕出立御國許へ罷歸候御目付中根新左衛門へ御渡、此表御決評之趣、御表樣へも申上候樣被二仰付一、猶別に御渡御直書如レ左、

去る三日巳來、未曾有之喪亂より、於二國元一家老初下々に至迄、我等を案勞し、追々役人共差登せ候義、實に我等之幸福、感涙數行に及候、我等決死罷在候故、聊も無二障動一健食致候間、此趣家老始諸士へも可レ被二申傳一候、別而方今天下困難之秋候得者、家老初役人共、尙爲二國家一自愛候樣、可レ被二申聞一候、只希くは、何れも此上士氣憤興、偸安之風習一洗、信義之俗となり、倫常を守り、富强專一、疏れも勉勵可レ有レ之、此趣一同へも可レ被二申諭一也、

正月十二日　　御實名

越前少將殿

此趣、家老始へも一見可レ有レ之、尙心付之所は、不拘二貴賤一言上有レ之度候也、

一、右御東下之御一條、今日御參內之上、土州老侯、戶田大和守殿初、下院參與御同志之面々へも、御內談に相成候處、和州殿には大に感激に而、是非御東下御盡力被レ爲レ在度、不レ被レ得二止事一候はゝ、兵力を被レ用候而成共、御成功相成候樣御勸め被二申上一しかとも、土老侯は御不同意に而、御議論有レ之候は、如何樣御東下有レ之候はゝ、關東之御都合は、萬々可レ然と御同意候得共、京地之義を如何被レ成候哉、近況之形勢に而は、德川氏の爲に口を開けは、直に朝敵之與黨を被レ付候勢ひに候へは、誰あつてか德川氏之謝罪を口ふへき、德川氏罪に伏せすんは、天下は治るへからす、今關東に而御盡力御行屆、御謝罪之道相立候而も、朝廷之御聽受方によりては、罪は重もるとも、定まる期はあるへからす、されは此艱難の時に當つて、陛下におゐて不レ恐二嫌疑一、不レ憚二忌諱一、爲二天下一德川氏之謝罪を謀る者、公を舍て外には有へき事とも不レ被レ存候へは、此地之御盡力こそ、餘人之企及はぬ所に而、德川氏へ之御厚誼、朝廷へ之御忠勤、いつれにも御在京之方、朝廷宗家之御爲可レ然、土老侯も、公御在京候へは、被二仰談一、顯幽共に御盡力之御筋も可レ有レ之候得共、御不在に而は、朝廷之御爲と思召候而も、德川氏之事は、外藩之御立場、御手を可レ被出樣も無レ之と、當前之事理御陳述に而、御辯論有レ之、象次郎等も頻りに、關東よりも此地御大事に而、公御在京候へは、

關東之御不都合も、於二此地一御収直しの道も可レ有レ之候へ共、御東下に相成候へは、關東に而如何に至善を被レ盡候御筋道相立候而も、於二此地一御斡旋之筋絶果候而は、徒善と相成而已ならす、却而公迄も御不首尾之種とも可二相成一候へは、決而此地御動き無レ之、爲二天下一公議を盛にせられ候事に、御盡力有レ之候得者、朝廷之御爲而已ならす、德川氏におゐても、不足之儀は有レ之間敷候へは、何分御東下は不レ被レ爲レ在様にと、懇々御抑留申上、是亦時事至當之確論に付、公にも種々御顧慮被レ爲レ在候得は、御自身御東下之義は、御長策にも有レ之間敷歟と、御躊躇之御發念に而、御歸邸之上、尚又種々御評議被レ爲レ在、

一、今日於二宮中一公、岩倉殿へ御申入、御對面之上、德川氏之儀に付、追々被二仰出一候御次第も、御支族之御上に而は、深く御恐縮之御譯柄と申、畢竟御周旋御行届無レ之より起候事に而、共に朝廷を御欺き被レ遊候御姿に而、何分此儘御奉職御在京は難レ被レ遊御心底之趣、悃々御愁訴に及はれ候處、卿も無二御據一御情實は、如何にも御汲察有レ之候へとも、是迄之御忠誠、御實跡におゐては滿朝感服、聊嫌疑も無レ之事に候得は、かく相成候而は、德川氏之儀は不レ及二是非一、愈勤王之御忠誠御勉勵有レ之度と、懇諭之御挨拶に有レ之由、

一、京畿騒擾に付、御國表より御人數引續ひ及二上途一候大隊長北川口之介、半隊長林忠太夫は江州鳥居本驛より、兵隊之内笹倉廉平は同長濱驛より、既れも大早駈に而着邸、申達候は、道路之説を承候處、一度入京の人數は、關門に而指押へ、出京難二相成一由相聞、且千本彌三郎之傳達に而、京地は軍勢已に渙散、東征之説而已頻なる由、右に付而は、關東へ御加勢被二指出一事に相成節、入京之御人數難二罷歸一候而は、御國許御無勢に而、被レ成方有レ之間敷との議論、隊中に蜂起いたし、進退谷りたる勢ひと相成に付、御國許へも伺之者差出、口之介等は此表へ、進退伺之爲罷出候旨に付、其段達二御聽一候處、途中迄出勢之事にも候へは、一段上京致候樣被二仰出一候に付、其旨申聞、直樣折返し罷歸る、

○同月十三日、現今之世變に付、公御憂勞御痛心之御積にや、今曉第二字前より胃痙之御症御暴發に而、御胸部御塞塞、御精神御昏朦、八事御不省之御樣體に

付、一同驚愕周章不二大形一、御醫師共拜診御藥調上、種種御療治申上、漸く第四字比に至つて、御神氣は御開明被レ爲レ在候へ共、猶御臥褥、御加口被レ遊、

一、今朝有馬帶刀參邸、雪江逢對之處、帶刀申出候は、此間相伺候御東下之儀、愈御決議にも相成候哉、帶刀義は主人用向も有レ之、且御同意申上候からは、明後日出立、御先へ東着、夫々內調、御待受申上度、就而は一と通之説得等に而、可二行届一とも不レ被レ存候へは、確然たる兵力を被レ爲レ持御下りに相成、第一に會桑之君侯禁錮に御収計、不服之臣僚は斬伐、次に板倉始め禁錮、瀧川等は斬首、夫より舊大君を奉二幽閉一田安公御相續之義、和宮樣より御願ひと相成可レ然、援兵は藤堂彦根御誘引、御續合にも候へは、因備へも被二仰合一、御同道御東下に而、御所置被レ爲レ在候而は如何可レ有二御座一哉、御同意も候はゝ、其心得を以周旋可レ仕と、大議論を發し、至當之儀とは相聞へ候得共、御東下之義は、昨日土老侯之御意見も有レ之、將今曉より之御所勞、旁邸議整ひ兼候に付、何分不二容易一大議候へは、熟評之上、明夕可レ及二返答一段申聞歸す、

一、今日より九條家、太政官代被二仰出一、諸官出勤に相成、

一、此日尾老侯、御國許要地爲二御守衛一御歸國、爲二御代一當尾侯御上京被レ仰二出之一、

但十五日御發京有レ之、

○同月十四日、左之通御布達有レ之、

今般御制度御改正に付、諸藩幷其他、宮門警衛、及賊徒追伐被二仰付一候節は、旗幕幷挑灯等に至る迄、菊御紋相用候樣、御沙汰候事、

一德川慶喜叛逆追討被二仰出一候に付而は、是迄德川氏より授置候松平之苗字を稱し居候族は、朝廷へ奉レ對、可二相歸一儀候間、向後大小名共、速に其虚號を去り、本姓へ復候樣、御沙汰候事、

一、此度高倉四條之兩卿、北陸道鎭撫使として御發向に付、御家より參謀之者御差出に相成度御賴談有レ之、藝州よりは寺尾清十郎被二指出一に付、御家よりは、參謀之者は御斷に而、御國中爲二御案內一、酒井十之丞、大井彌十郎被二指添一事に相成、今日兩人共官代出勤、兩卿幷寺尾清十郎へ及二示談一、

一、今日に至り、公御所勞稍御愈りに付、即今之方向

御評議相成處、是迄は御宗家と共に、御勤王之御國是に而、御勤勞被レ爲レ在候へ共、御宗家方今之御形行に而は、共に可レ被レ盡二御忠勤一御體態にも無レ之而已ならす、事により御身上へも、御嫌疑を來すへき時勢と相成候へ共、尙此上傚迄御宗家之故を以、朝廷へ之御忠勤被レ遊度と、已に御東下之御詮議にも被レ及候へ共、同しく御宗家へ之被レ成方も、御宗家へ御打込被レ遊候而は、御盡し被レ成方は御東下之類、又御宗家を御離れ被レ遊候而も、御盡し被レ成方により、御宗家之御爲に可二相成一御條理有レ之儀は、一昨日土老侯之御說、象二郎之申上之通りに而、御進止いつれと、御計較被レ爲レ在處、御宗家へ御付き被レ成候得は、朝廷は御離れ被レ遊候而之御盡し方故、萬一朝廷に口々間言等行はれ、奇禍を生し候事に相成候者、玉石共に燬傷之勢にも立至候事に而、夫限之事に相成、御宗家之御爲は扨置、御身をも難レ被レ盡御次第にも可二相成一候得は、夫よりは御膝下に而、御公然と朝廷之御爲に、御宗家へ被レ爲レ盡候御主意に相成候方、勤王之御筋も現然に而、約る處、御宗家之御爲にも可レ然儀に付、愈御東下之義は御見合せ、御在京に而、差當り王政公論に出、候樣、御盡力被レ遊候方、條理御適當之御全策なるへきに御決議あり、

一、今日雪江歸路、有馬帶刀旅宿往訪、昨日申出たる、御東下に而御所置之一件、策略に於ては同意之至りに候へ共、何分不二容易一大手段に有レ之處、此地根元之王政上に更に行はれす、紀綱立兼候折柄故、縱令東方之施策圖に中り、悔謝之道宜を得るとも、當御時節、不レ避二嫌疑一宗家謝罪之筋執奏すへき者、弊藩之外に可レ有レ之とも不レ被レ存、よし又有レ之にもせよ、果して嫌疑に落つ間敷とも難レ申候へは、主人義は京地在留、御政體上に公議之道盡力致し候方、朝廷之御爲、天下之爲、即宗家之爲にも可二相成一候へは、盛下之勤王勿論に而、機に臨み宗家謝罪之筋周旋等、旁在京可レ然と、强而抑留候向も有レ之、是亦難レ辭至當之確論に付、東下之儀は及二延引一たる由を申聞しに、帶刀は甚不服に而、猶般々之議論有レ之候得共、結局に至り、何分帶刀は東下致し、成敗之景況見切之上、可レ及二報告一との事に決定せり、又第二等之策に而、德川氏之手内に而、會桑を初、首惡之者を所置し、謝罪之筋相立て候義に候はゝ、是は前橋侯へ依頼し、事成り可レ申義なれは、御東下には及間敷、左すれは會桑之國地へは不レ及二手指一舌三寸に而成功之見込之由、庄內へ可二入說一心算も有レ之趣も物語れり、且帶刀東下に付而は、彼地之事情報知參謀旁、御家よりも一人御指添に相成候樣賴談有レ之、

○同月十五日、此日皇上御元服之御大禮被レ爲レ行、右に付御布告如レ左、

今般朝政御一新之御場合、今十五日御元服之御大禮被レ爲レ行、御仁恤之聖慮を以、天下無罪之域に被レ遊度候間、是迄有罪不レ可レ容者と雖、朝敵を除之外、一切大赦被二仰出一候、於二國々一茂、不レ漏樣施行可レ有レ之候、尤向後彌以賞罰嚴明に被レ遊度候に付、厚御趣意を體認致し、行屆候樣可レ仕旨、御沙汰候事、

正月十五日

私云、此日、是迄御譴責被二仰付一置し公卿十九人、夫々寬典を以、御赦有之儀有レ之、

一同時御布告、

私云、此御布告、御家へは十七日穗波三位殿より、伊藤友四郎へ御直達、

外國之儀は、先帝多年之宸憂に被レ爲レ在候處、幕府失措により、因循今日に至候折柄、世態大に一變し、大勢誠に不レ被レ爲レ得レ止、此度朝議之上、斷然和親條約被レ爲レ結候、就而は上下一致、疑惑を不レ生、大に兵備を充實し、國威海外萬國に光耀せしめ、祖宗先帝之神靈に對答可レ被レ遊叡慮候間、天下列藩士民に至るまて、此旨を奉戴、心力を盡し、勉勵可レ有レ之候事、

但是迄於二幕府一取結候條約之內、弊害有レ之件件、利害得失公議之上、御改革可レ被レ爲レ在候、猶外國交際之儀は、宇內之公法を以、取扱可レ有レ之候間、此段相心得可レ申候事、

一、此日於二攝州兵庫港一、勅使東久世少將殿、在留六ケ國公使へ御布告如レ左、

日本國天皇、告二諸外國帝王、及其臣人一、嚮者、將軍德川慶喜請レ歸二政權一也、制允レ之、內外政事親二裁之一、乃曰、從前條約、雖レ用二大君名稱一、自今而後、當二換以一天皇稱一、而諸國交接之職、專命有司等、各國公使諒二知斯旨一、

慶應四年正月十日睦仁

一、此日有馬帶刀之頼談せし同行之儀、永田儀平可レ然との御評議に而、其段儀平へ被レ命、帶刀方へ被レ遣、前途之手續申二談之一、

○同月十六日、帶刀東行に付、關門通行印鑑御下ケ之儀、參與役所へ相願處、御指留に相成故、再願指出運ひ等に而、出立延引之由申來る、然る處儀平は、明日御徒目付高木文平、定府妻子引拂方爲二取計一出立に付、同道之筈に有レ之處、右之次第に付、是亦上途延引す、乍レ併江府之景況爲二探索一、林矢五郎、文平と一所に被レ遣レ之、

一、此頃中御厚評有レ之通り、是迄は御宗家と共に、御勤王之御趣意、御家中初、御國中一統相心得居候事に候處、世變に付、今後は於二朝廷上一、正大之公議を以、皇運御挽回之王道に御盡力可レ遊思召候段、御表樣へも被二仰進一、且御家中末々迄、御布告相成候樣爲二申上一、今夕村田巳三郎早駈に而御國表へ被レ遣レ之、御渡御趣意書左之通、

德川御家之儀は、異レ他之御由緒たる事は、何も承知之通に而、御休戚御一致被レ遊候は勿論之處、御衰運之秋にも候哉、今般一朝にして、御東下不レ可レ爲御時態に押移り候條、何共御痛歎至極思召候、是迄は報告(カ)國盡忠共に、御宗家を被レ推候儀、國家之定議候得共、方今と相成候而は、王政一新之御折柄と申、旁以直ちに東照宮之御遺志御奉戴、追々被二仰出一候大中至誠之公議を以、皇運御挽回之王道に盡力被レ爲レ在候思召候間、一統其旨を存し、御奉公可レ仕旨被二仰出一候、

一、此日若州小濱藩より廻達如レ左、

今般兩卿爲二勅使一、北陸道へ發向に付、前以別紙兩通被二相達一候間、七ケ國中國主、領主、地頭、其最寄を以、早々順達可レ有レ之、御請狀之儀は、兩卿出先へ指出候樣にとの事、

正月十五日

王政御復古に就而は、王事に勤勞可レ致は勿論之事候へ共、當今之驅擾に付、方向難レ定、人心疑惑可レ致折柄に候得者、尚存慮之次第尋問候旨、御沙汰候事、

別紙之趣に付、爲二勅使一可レ被二發向一候得共、積雪之時節、途中手間取候も難レ計に付、御趣意之次第、先以二書面一相達候間、一應之御請書早々指上可レ申

者也、

正月十五日　副惣督　四條大夫

鎭撫惣督　高倉三位

北陸道

國主領主地頭中

○同月十七日、今日辰刻依レ召御參內可レ有レ之處、御所勞に付、爲二御名代一伊藤友四郎被二指出一候處、議定長谷三位殿御直達御書付如レ左、

越前大藏大輔

內國事務惣督被二仰付一候事、

別段爲二御心得一、御渡之御書付左之通、

正親町三條

德大寺

越前宰相

土佐前少將

御治定に相成課目如レ左、

神祇事務總督

內國事務總督

掛り

辻將曹

大久保一藏

外國事務總督　三條中納言

東久世

宇和島

掛り

岩下佐次右衞門

後藤象二郎

刑法事務總督　細川

掛り

十時攝津

會計事務總督　淺野

掛り

三岡八郎

福岡藤治

小原二兵衞

制度事務總督

掛り

三岡八郎

福岡藤治

陸海軍務總督

議定 公卿諸侯は總督の名を口勅す、
上參與 公卿徹士は掛りを以て區別す、
下

一、今般有馬帶刀より、參與役所之印鑑相渡に付、又又出立可レ致旨、永田儀平迄案内有レ之處、儀平は已に延引之積に而、昨日林矢五郎江府へ被二指立一、儀平は不用之姿に相成に付、帶刀方へ儀平被レ遣、有體に及二物語一、於二江戸表一儀平同樣、矢五郎へ申談に相成候樣との儀を被レ命、帶刀は支度次第、今晩にも出立之由、

○同月十八日、今度内國事務總督之御職掌、土州老侯御同樣被二仰蒙一候に付、今日以來、御勤方之爲二御相談御使一、御側御用人被二指出之一、同人大佛御旅館へ參上、拜謁之上、今般御職掌被二仰蒙一候に付而は、何方より御手下しに可二相成一哉、御參内之上、御勤方御伺可レ被レ成哉にも思召候旨申上處、老侯にも唯今是と申御見込は無レ之候へ共、何分唯今迄之如く、何事も無二御相談一、御隨意に被二仰出一候樣之事に而は、御役前も御立不レ被レ成候間、此度更に御拜命に付而は、猶以其邊之御趣意、正三德大寺之兩卿へ、篤と御直談に而、御不體裁無レ之樣に、御取極被レ成度との御儀故、左候はゝ、明日にも御參内に相成候哉と相伺候處、御痔疾兎角に御勝れ不レ被レ成、今四五日は御六ケ敷との御儀故、申上候は、いつれに御一所ならては、難二相適一御筋合候得共、御出勤御見合せに而は、御口も明き候得は、大藏大輔樣には、明日にも御參内に而、御見込之通之儀は、此方樣と御一所に被二仰上一候御積之處、御所勞故暫く御延引之段被二仰上一、指向候事抔、少々御問合有レ之候樣之御儀に而は、如何可レ有二御座一哉と相伺處、夫に而至極可レ然候間、其趣に申上候樣との御答に付、罷歸其段申上處、公にも御同意思召、明日は御參内、夫より官代へ御出勤可レ被レ遊との御事なり、

一將軍宮、先達而浪華迄御進軍、今以御滯陣之處、今度北陸道鎭撫使御發向を機會とせられ、御歸京に相成候樣、下參與より及二建議一、朝議相決し、今日正親町三條殿爲二御迎一御下坂なり、

○同月十九日、午半刻御供揃に而御參内、御元服御歟、且御職掌被二仰蒙一御請御禮被二仰上一、且又土老侯へ御示談之通り、御見込筋之義は、近日土老侯と御一

所に可レ被二仰上一候得共、夫迄之處御猶豫之儀御談之處、德大寺卿御承引有レ之由、夫より議院へ御出勤之處、議事難レ決、夜子半刻御退出也、右議事は外國事務總督豫州老侯、同掛り後藤象二郎大坂より上京、外國應接之次第申上たるに就而也、右應接に相成起原は去る十一日、備前之人數兵庫に至る途中、神戸村に而英人と取合ひ出來、佛亞之人數も繰出救援及二砲戰一、互に少々之殺傷有レ之に付而也、外國公使共より此度時勢變革に付、外國へ御布告之義は致二承知一候由、乍レ併備前取合之一件、公正之御裁決に無レ之而は、和親之約は難レ致との趣に付、東久世殿より、裁決は如何樣にいたし、列國公使滿足なるやと被レ申處、返翰之要旨は、御門陛下十分に詫たる書面に而、今後之處、ケ樣成義は急度爲レ致間敷と、請合之段申來候はゝ、本國へ可二申遣一旨、又及二暴行一候樣、致二指圖一たる役人は、外國人之見る前に而、刑罪に行ひ候樣との二件なり、此返答廿二日迄に可レ有レ之趣を申越たり、此段於二議事席一豫老侯、象二郎より、總裁官へ申上、夫より公使より之來書飜譯せしを、上參與公卿之内に而、高聲に被二讀上一け、夫より下參與之面々一人つゝ列を進み、意見及二言上一處、何も大同小異に而、歸する處萬國之公法に被レ任より外無レ之との趣意なり、夫より公卿議定參與衆之評議に相成處、或は姑息、或は利害、或は蒙昧說等に而更に不二相決一、公は不レ拘二利害一皇國正大之論を御辯說有レ之候へ共、過半不レ得レ解、痴人之夢を聞たる如し、下參與は及二退席一、堂上方之論に時刻を經て不レ決に、下參與再出席及二催促一處、岩倉殿より堂上方一人つゝ質問に而、漸くにして決し、下參與へは、何れも建議之通り、萬國之公法に被レ任段被二申聞一、已に決議にて、片時も早く坂地へ可二申越一との事に相成處、公、帥之宮迄御申達有レ之は、外國交際に付日本人之刑戮、御親政後御手始之事候へは、御奏聞之上御取計ひに不二相成一候半而は、備藩之屈服如何可レ有レ之哉と御申入に付、子半刻比三條中納言殿、中御門中納言殿參朝に而御奏聞有レ之、叡哉之上、直樣外國事務總督より、外國公使希望之通御所決に相成段、兵庫出張之東久世殿迄、急飛脚を以被二申達一、此度之事は軍隊に起りし故、償金に而は難レ贖由なり、備前侯もし奉命無レ之候へは、御征討之御含に有レ之、且又朝裁之趣、日本全國へ御布告に可二相

成ㇾとの御評議なりき、翌廿日於ニ太政官一、備前重役御呼出、左之通御達に相成たり、

備前少將
家來へ

家老日置帶刀、攝州神戸村通行之砌、外國人と及ニ砲戰一候始末、公法を以朝廷より御所置可ㇾ有ㇾ之旨、御決定相成候間、其段心得可ㇾ申、御所置振之儀は、追而可ㇾ被ㇾ及ニ御沙汰一候、

一、此日酒井十之丞、北陸道勅使指添として、御國行き被ㇾ命に付、參與御役之儀、相願ひ被ㇾ免ㇾ之、勅使は明日御發途之由、

○同月廿一日、方今大政復古之運に向ひしかとも、天下多事多難なる上に、朝廷に金穀乏敷、民を賑し兵を出すに由なき而已ならす、殆今日之供給に迫れる勢故、數々濟時之議事あれとも、更に其術を得さりしに、會計掛り三岡八郎、日本全國之石高に應し楮幣を製し、一時之急を救ひ、十三年之後を待つて、楮幣すへて現金に復歸すへきの趣法を建議せり、此法取捨之衆議、疑懼紛々として、兩端更に決し難くして席を□□、翌廿二日も亦爾り、廿三日に至つて楮幣を製造

ある〻きに決し、其主宰全權を八郎へ被ㇾ命たり、

○同月廿三日、今日於ニ官代一、岩倉殿公へ御内談之儀有ㇾ之、其後雪江へ御逢に而、御申聞有ㇾ之候は、卿之御家從、去る十六日江戸を發足し、昨日歸京に而申出候趣は、於ニ江戸表一、前橋藩家老山田太郎右衛門、豆州韮山□附屬柏木總藏申合、大に奮發し、德川氏之廢立血食を謀り、麾下も七分は及ニ荷擔一候得共、前橋侯之方向定り兼、其事難ㇾ成趣なり、就而は公に而、此處を御周旋あつて、謝罪之道相立候へは、社稷之保存に於ては、岩倉殿死を誓つて御請合候間、生靈之爲、宗家之爲、此御周旋は公に限り候に付、其段公へ御申上之處、公は雪江へ御談に相成候樣との御挨拶に付、御示談有ㇾ之旨に付、雪江及ニ御答一候は、不ニ容易一大事候得は、主人存寄も篤と相伺ひ、熟考可ㇾ仕旨申上處、兎角早々決定無ㇾ之而は所詮無ㇾ之、薩は國を護る兵を除て三萬之兵あり、長は四十八大隊あり、是を以關東へ、海陸より討入る時は、大亂は不ㇾ及ㇾ申、死傷無數なるへけれは、此急を救はゝ大功□□過る者なし、井伊藤堂抔も相談可ㇾ然と、大に御勸誘有ㇾ之に付、何分篤と勘考可ㇾ仕と申上たり、御歸邸之上、執政初御呼出に而、右件御評議に相成處、調和之道も相開らけ可ㇾ申屈竟之好機會候得は、是非御周旋可ㇾ被ㇾ爲ㇾ在御儀候へ共、衆之方、於ニ關東一行はれ安く可ㇾ有ㇾ之、且岩倉卿、御諚代衆へ相談可ㇾ然との口氣も有ㇾ之候へは、旁在京五候御談に可ニ相成一との御決評に而、猶又明朝雪江、岩倉殿へ參上、今一應篤と相伺ひ候樣にと被ㇾ命たり、

私云、此岩倉殿家從、去る十六日迄、江戸事情探索書之由に而、依傳之書面、

一正月十一日夜半、○○濱御殿へ着、十二日五半時比、會、桑、板倉伊賀、酒井雅樂等と共に入城、

一會桑藩は、十五日に至る迄、尚戰爭說を確守して不ㇾ動事、

一十五日開成所を局として、關東士民に令を下し、急務筋之見込聞候に付、建白之徒市をなし候由、

一紀州藩も同所におゐて、同局を開き同樣之次第、大に德を助け力を盡し候、

一是迄勤王にもなく、又一概に佐幕にもなく、只皇國の委靡して振はさるを憤り、一豪傑を得て、共に國家之事を成さんとせしを以、○○の利口に惑溺し居る者は、今般○○浪華脫走によつて、彼の利口に欺かれしを憤り、朝廷の御所置を伺居候徒も多く有ㇾ之事、

一前橋松平大和守等、○○會桑等之失策を□□謝罪により、德川家之血食を謀候、前橋一藩は決議之模樣なれとも、十五日までには、いまた德川一同之大議論には不ㇾ渡、何れ十六七日中には、謝罪之說を於ニ城中一發すへしと云、

一即今德川一家中之情態に而は、悉く十方にくれ、未た今日迄防戰の策も不ㇾ立候得共、朝廷より嚴重之御沙汰有ㇾ之候はゝ、皆己之死又は飢餓を憂るよりして、一和するの機も相見へ候、何分關東人は、名分は更に不ㇾ辨候間、只々寬大を以恕取すれは、終には前橋等之謝罪說と、會桑之戰爭說と、必二た分れになり、又を用ひすして落着すへき歟、

一今般御國內之發動に付而は、蝦夷地之支配人金につまり、今年夏迄、右之金出來せすは、必

定魯夷之に代つて、蝦夷人を撫育すへし、左すれは蝦夷は全く彼れに歸すへしと大に憂へて、蝦夷の支配人四十餘人馬喰町に止宿し、日々評議之由、

一今日議事相決し、御布令に可二相成一御趣意御書面如レ左、

今度朝廷、與二天地一更始一新、公明正大に御政道被レ爲レ行候に付、費用金先つ三百萬兩被レ爲二積置一度御主意に候、仍レ之京大坂は不レ及レ申、無二遠邇一富饒之者共調達爲レ致、是を國債とし、爲國普通之公法を以可レ及二返辨一、決而後日之難澁不二相成一樣、可二取計一候間、無二懸念一早々調金之儀、會計事務裁判所へ可二申出一事、

何月　會計事務總督印

一、英人より肥後參與溝口孤雲へ之書翰、岩倉殿へ呈進如レ左、

溝口君へ呈す、

足下へ神速拜話を望候折柄、足下在坂之由傳聞し、喜悅不レ斜候、隨而足下に希望致度儀有レ之候、即今一橋君は多才多能、更に加害すへからさる人に有レ之、尤新政府之御設は、可レ有レ之候得共、諸侯より殺害無レ之樣、盡力有レ之度、此段薩摩長州幷土佐之家老へ傳說有レ之儀、深く祈願いたし候、

西洋千八百六十八年第二月九日

トーロマス、ビー、ゴロウル花押

○同月廿四日、於二會計裁判所一、御達左之通、

越前ゟ

思召有レ之、金壹萬五千兩被レ下候事、

私云、御一新之際、何歟と御失費有レ之趣を、御推察に而之被二仰出一之由、尾、薩、土、長、藝、宇和島も同斷也、

一、今朝雪江、岩倉殿へ參邸、拜謁之上、昨日御內談有レ之候一件、於二江戸表一御家從探索之出處相伺候處、（慥十郎は、雪江も知己に而頗有志也、傳聞之由、慶喜東歸に付而は、麾下一向に落合不レ申、不服甚敷事之由、和宮樣より御願之御直書、卿之手裡に有レ之、何時に而も公へは可レ有二呈覽一との事也、昭德院樣、和宮樣へ御遺言に而、橋公は誠に御好無レ之、御承統有レ之候而は、奪はれたる如く思召との御儀も有レ之、私云、御遺言云々不審之條なり、何分御內々之御手續は出來候事候へは、是非表向之御周旋有レ之樣被レ成度と、斷而御申聞有レ之に付、如レ此御時態、江戸表も混雜之折柄候へは、乍レ不レ及雪江罷下り、盡力可レ仕と申上候處、敢地へ無左と踏込候は無謀の至り、決而不レ可レ然候間、書面を以申越候樣との事に付、左候而は、往返手間取有レ之候へは、其內御出兵に相成候而は、所詮無レ之と申上候へは、此手段に取掛り候へは、其一左右有レ之迄は、大兵發向無レ之樣、心得居可レ申候間、成丈け早便に而指越候樣、御申聞有レ之に付、其段直に官代へ出勤、公へ申二上之一、

一、今日太政官に而、關東へ問罪之勅使御發遣之御評議有レ之由、右は過日外國公使へ、已に問罪之使を下したりと應接有レ之、實事無レ之而は、不信に可二相成一との事之由、問罪之次第未レ決議事にも御下け無レ之、一、此夜公より前橋公へ之御直書御認に相成、如レ左、密翰致二拜啓一候云々、此度宗家傾頽之一條、御同然恐縮血涙之至、朝廷之御赫怒も御當然之御事に御座候故、其際におゐて、可レ奉二救援一道路も無レ之、當惑心痛而已、心ならす在廷之處、昨日岩倉前中將より內談有レ之候は、中將家來昨日關東より罷歸り申達候趣に而は、錦地も殊之外御混亂に而、旗本も落合不レ申候、仍レ之貴兄大に御奮發に而、廢立謝罪之御主張有レ之由、方今爲二御征討一、遂々大兵被二指向一候御手配有レ之候へ共、自然右等之正議行はれ、謝罪之道相立候へは、國內は不レ及二兵亂一、生民之塗炭も無レ之、朝廷へ對せられ、大忠盛勳無二此上一候へは、何卒愈御主張に而、謝罪之筋御立候樣御盡力之程、拙子より及二陳啓一、御示合申候樣には相成間敷哉との事に候、尤何とか御謝罪之道相立候樣、內國之動亂相止候樣致度と申は、此表之輿論に而、於二拙子一も元より同論、別而慶喜には、無比之御懇命も相蒙候事故、宗家と申、御一身之儀も、晝夜案勞致居候得共、慥成儀及二發言一候而は、却而御爲に不二相成一時勢に付、胸をさすり默止罷在候處、中將より內談之趣に而は、先つ朝廷より無事を御好之御淵底と被レ奉レ察候得は、此秋に當り、貴兄にも一層御憤激有レ之、爲二皇國一爲二宗家一爲二生民一、干戈を止め、社稷を被レ存候樣御盡力之儀、於二拙子一も御依頼懇禱致候、此時におゐて、慶喜公御憤懣之御胸

中は、萬々拜察罷在候へ共、何分形迹上之御過失、今更可レ奉二彌縫一樣無レ之形勢候得者、唯今と相成候而は、乍レ恐何事も御一身に御引受被レ遊候而、天下生靈之爲に、御謝罪之御道を被レ爲レ立候樣、所二仰冀一御座候、方今天下治亂は、唯御一心之御所向により候事候處、其條理御辨へ無レ之、天下之動亂も、生靈之困苦も御貪着無レ之、只管無形之御前議御押張、御抗命之御姿に被レ成二御座一候而は、御暴逆と申上候ゟ外、無二御座一御次第に候得は、是等之御筋合、十分御會得被レ爲レ在、判然御悔悟に而、御反正之御所置も被レ行、御伏罪に而、朝廷之降命を被レ爲レ待候樣、無二御座一候半而は、被レ對二御祖宗一、御濟不レ被レ成御儀候へは、吳々此邊御徹底相成候樣、御鼎力之程所二希望一御座候、其上に而御社稷之儀は、和宮樣より御願之事に相成候はゝ、天下之公議も有レ之候へは、いつれに御不當之儀は無レ之道理候へは、其邊は猶更公議に被レ任、御未練ゟ間敷御願等は無二御座一方、御敬上之御趣意も相立、却而公議之爲にも可レ然歟と致二考察一候、尾紀初於二此表一成丈け申談、夫々之手續次第周旋、心力を盡し候筈に御

座候間、於二錦地一も、又夫々被二仰談一、御運ひにも可二相成一哉、何分兎も角も御興廢之御場合候得は、御精々之處、御盡力御座候樣、偏以御依賴申候、已に問罪之勅使御發遣之朝議も有レ之候へは、其已前に御運ひ付き候へは、重畳之御都合と存候事に御座候、尙家來中根雪江より、家老山田太郎右衞門迄申越候次第も御座候へは、御聞取御參考之上、惟々偏に爲二宗家一御粉骨之儀、千祈萬禱之至御座候、恐恐頓首、

正月廿四日

一、同時中根雪江より、山田太郎右衞門へ差越內書如レ左、

上略御宗家之御儀なから、此節被レ對二朝廷一御恐縮之御次第に付、是迄御默止之處、昨日岩倉卿より極御內談有レ之趣は、岩倉卿御家來、一昨日錦地より罷歸申達候趣は、御東下後都下殊之外混雜に而、旗下も更に落合不レ申、中々函碓兩關を鎖し、割據と申勢にも至り兼候形勢之處、尊藩幷江川家におゐて、元內府公を廢し、和宮樣御願も有レ之、旁田府公を立、社稷之保存を御謀り被レ成候に付、旗下も七

分通りは御左袒申上候事之由、就レ中賢兄隨而ロ◎柏カ木氏御奮發御主張之旨相聞候由、此表に而は、大坂城御明退き後、彼是旬餘に及ひ候得共、御謝罪之廉も不二相顯一候に付、追々追討使代り鎭撫使も被二差立一、猶薩兵三萬二千計、長兵四十八大隊、海陸より被二指向一御手筈にも相成由、右樣之御運ひに而、次第に時機切迫に及候へは、實に皇國之大亂とも相成、双方幾多之人命にも御拘り、且は生民之塗炭、無二申計一場合にも可二立到一運ひに有レ之、然る處錦地之御模樣、前書尊藩初之御議論に致二歸宿一候へは、治亂易レ地、皇國之幸福無二此上一御儀候へは、御同姓之御間柄、宗家之御爲、大和守樣へ、大藏大輔樣より、何分右等之御取計に相成候樣御申入、大和守樣も十分御盡力被レ爲レ在候樣被レ成度との、岩倉殿御內意に有レ之候、此地之輿論も、於二錦地一は如何樣之被二仰譯一有レ之にもいたせ、先何とか御謝罪之筋不二相立一候而は、益す〳〵朝敵之御汚名、御遁れ難レ被レ成、此御惡名有レ之內は、何等之御趣意も、難二相立一は、日本流之公法候へは、何卒其邊之御運ひに致度ものと申事は、有志之諸藩論も同

一に有レ之、大藏大輔樣にも、是非此御道筋被レ爲レ立候處よりして、追々公議之歸着も、照明に可二相成一事とは思召候へ共、唐突御發言も難レ被レ成、日夜御痛心被レ成二御座一候處、右樣之御沙汰は、渡頭之船候へは、何分にも於二錦地一、君侯樣御始、御鼎力御座候樣被レ成度、內府公之御胸中も、御深察は勿論之御儀候得共、方今治亂は、內府公御方寸之御決着に、致二歸着一候御場合に而、皇國厄難之起伏候へは、億萬之生靈之爲に、何事も御一身に御引受、御強忍被レ遊候而こそ、日比之不レ被レ爲レ渝、御恭順之御誠意も相顯れ、皇國之鎭定宸襟も御安着可レ被レ爲レ在御儀候へは、此處を能々御了解被レ爲レ在候樣、御周旋有二御座一度との、大藏大輔樣思召に御座候、大藏大輔樣にも、已に去暮已來、尾侯と御一所に御周旋之節も、御手違之義出來候哉否や、當今之形勢と可二相成一は、指掌先見之譯柄に付、啄々御恭順之御一筋に而、とこ迄も御忍被レ下候樣、必至と御盡力に而、朝廷之御首尾は、全く九分通りは御整ひに而、今五六日御鎭靜候得は、御上洛御入朝、御職掌被二仰蒙一、更始一新之御政令も、御平易に行は

れ可レ申儀に候ひしを、會桑之妄動よりして、御成功を一簣に缺候而、今日之時勢に立至候儀、大藏大輔樣は不レ及レ申、關西一同之憤激に而、實於二朝廷一も、甚御殘念思召候事に御座候、此度も右同樣に而、此一箇之忍の字を、御開悟無二御座一候へは、勢ひ兵亂に不二相成一事を得さる秋に相逢ひ候へは、夫より以往は、皇國之紛亂申迄も無レ之、遂に外國之呑噬と可二相成一には必定候へは、大藏大輔樣にも深く御辛勞被レ成、先達而は、既に御出府に而、可レ被二仰上一歟とも御斷決被レ成、御國表へも被二仰遣一候程之御儀候得共、又此表に無二御據一御次第有レ之、不レ被レ爲レ任二思召一、唯々夜白御案勞之處、御移りも有レ之事と相成候得は、御宗家之御開運、此期を御失ひ被レ遊候而は、乍レ恐最早御滅却之外は、有二御座一間敷と思召候間、繰返し〳〵皇國御宗家之爲に、無比絶倫之御盡忠被レ爲レ在度思召、御直書を以ても被二仰進一候得共、猶老夫より實契迄、委細可レ及二拜啓一旨被二仰付一候に付、御大任賢勞は萬々御推察被レ成候得共、偏に御依賴思召事に御座候、此段御含、可レ然樣御取成被二仰上一可レ被レ下候、

膽斷私說

岩倉卿御內意と申條、是非御同志之御方々御內談之上之儀と致レ察候、卿云、大藏大輔殿、定而宗家之儀候へは、案勞勿論なから、口外難レ致時勢故、不レ得レ止默止と相察居候處、家來より關東之模樣相聞へ、前橋之正論幸之儀故、此方より致二發言一候、何卒一ト盡力有レ之度、大藏殿より外に擔當すへき人無レ之と、殊之外乘懸り被レ申候、

一此件に付而は、大藏大輔樣老夫を錦地へ御指出之思召に付、今朝岩倉殿へ罷出及二御談一候處、家來一人之申口に而虛實も難レ計、且敵地之事に候得は、如何樣之次第に相成歟も難レ計候へは、罷下候義は決而不レ可レ然候間、早々以二書面一申越、返答之模樣により順境にも候はゝ、其節罷下り可レ然、唯今黑白不分明之處へ踏込は、無謀之至と被レ申に付、書面往復に相成候而は、彼是手間取も難レ計、北內遂に出兵等に相運ひ候而は、詮もなき事と相成候、其處如何可レ致と相答候處、唯今双方隔絕之勢故、是非共御征討より外は無レ之候へ共、如レ此是より手を附候事有レ之候へ

は、其一左右相分候迄は、大兵を發候事は無レ之樣心得居候間、其儀は不レ及二懸念一、何分早速之往返相成候樣被二申聞一候、是に而も、成丈ケ穩便に相濟候樣との朝議は、粗相分り候、

一昭德院樣御遺言に而、田安公御跡目之事は、兼而和宮樣にも御承知被レ爲レ在、此度御家御相續を和宮樣御願ひ御直書は、岩倉卿手元に有レ之由被レ申候、夫故御一人樣さへ御伏罪に相成候へは、御宗家之儀は、身命に換へても、御相續御取持可レ申と、被二申聞一事に御座候、此卿一亂前は、舊內府公之爲に、實に不二容易一盡力有レ之處、是は水泡と相成候へ共、此上は德川氏之爲に、又盡力致候も、矢張朝廷之御爲、皇國之爲と被二申居一候て、誠意御相違無レ之候、

一卿云、御伏罪之上は、割腹てもサセネバナルマイガ、夫を直きに云れた次第にも無レ之候得は、書面之方かヨイデハナイカとも被レ申候、實に恐入候口上には候得共、朝敵と見て、征討誅滅之御題號候へは、主將切腹して、士卒之命に代り候蹤跡も、數多有レ之事候へは、其邊を暴論有レ之事と

被レ存候、此儀は御伏罪に而、天裁を被レ爲レ仰候事にさへ相成候得は、其上之筭典は、公議之歸する處に可レ有レ之事候得は、兎角之義、御自儘に御決定有レ之候而は、却而御不敬に相當り可レ申と奉レ存候、會桑之處十分之御筭典に而、君侯之生命を被レ保候迄之事、血食は迚も難レ計可レ有レ之候、此處へ御未練ケ間敷之所置有レ之而は、宗家之御故障とも可二相成一候へは、御深考被二成下一候樣仕度候、朝廷より夫ては足らぬ、是ては濟ぬと御いとり無レ之樣、事理至當之處、十分に御所置御座候而被二仰上一度、其上に而、たとひ彼是御注文有レ之候ても、夫はケ樣是はケ樣と條理分明に、如何樣マと御聞入れ有レ之樣に、有二御座一度奉レ存候、

一御謝罪之御次第、此地之輿論は、舊內府公之忠召より出、會桑始、閣老諸有司之內、暴發候事に關り候向、夫々に御罰殛有レ之、御自身にも御恐縮御謹愼に而御伏罪、斧鉞を被レ爲レ待候御手續と相成候へは上等也、○舊內府公御悔悟無レ之に付、他より先つ內府公を禁錮し、指次きたる會桑

始を誅罰し而後、德川氏社稷之爲に嗣を乞ふは第二等也、○德川氏臣子に關る者、各自刑して罪を顯はし、內府公之御罪に代り御惡名を雪め可レ申は、臣子之當然なるへし、閣老參政、其他事に關る諸有司割腹し、瀧川等之首惡は刑戮すへし、○會桑君侯、たとひ事に關はらさるも、其家來よりして宗家の傾覆を釀成し、天下之大亂を引起したり、先つ家來を誅して、自らも割腹して罪を謝すへし、會桑之家來自刑して、其主の罪を贖ふ事もあるへし、○會桑頑然として、其罪を知らすんは、德川氏、或は其親族、又譜代よりして是を討伐して、朝廷天下に謝すへし、○御上洛御先供より事起りしは鳥羽之方也、伏見方は如何、始より實に御先供計ならは、事爰に及はさるへし、晦日巳來會桑兵戎裝に而北上する故、反形顯然と稱して、關を鎖し伏を設るに至れり、○反を以て誣らるゝ程成形迹あるか上に、無形之除姦討伐を口實とせられ候ても、其實を不レ被レ遂故、只飽レ非之造言と相成、愈逆罪を重ねられ候勢に候事、

一卿又、此謝罪之道相立候樣、大藏大輔樣より、尾紀始、何方へ成共被二仰談一精々御行屆に相成候樣、御周旋有二御座一度との御申聞に而、大藏大輔樣にも、何卒此筋御成就、少も早く御宗家之御先途も御定り、御安堵に相成候樣との御懇願故、少も尊藩之御盡力にも相成候樣之思召に而、岩倉卿御內意旁、今夕は尾紀之御家老被二仰遣一右之御次第御相談に相成、猶彦根、藤堂、其他外藩之御方々へも被二仰談一所々より御申入に相成候樣之御積に御座候間、此義も御心得置、被二仰上一可レ被レ下候、

一錦地之御模樣如何有レ之哉、實に難レ計候得は、調不調之御見込は、一日も早く御報告相願候、成敗は後日之事、先つ御調和之方へ、御取懸り可レ被レ遊御儀候はゝ、其御心組と申儀を、朝廷へ申上候へは、夫より先之御運ひ方は、御順序も可レ有之事故、左樣に御急きにも不レ及候へ共、向背兩途之分別は、精々早急不二相分一候而は、此地は已に御征討御手下しにも相成候上之御儀故、何れとも不二相分一、因循日を經候而は、朝廷之方も甚御不都合に相成候得は、無レ據又出兵之運ひにも可二相成一、左候而は、挽回甚六ヶ敷事と相成候、此處を篤と御推量に而、指向之御見込、和戰いつれの方と申儀を、吳々御報知相願候、實に此度は治亂之境界、亂に成候而は相濟不レ申、大亂を救ふへき期に至つて、救はす候而は、千載之遺憾に御座候、

一社稷御保存之大小輕重によつて、御謝罪之輕重有無之論に及はれ候樣之事に而は、利害を先とせられ、御誠意には無レ之候へは、迚も社稷之御保存難レ被レ遊候、已に先達而も、御官稱之事、御雙方より御直切りに而、大藏大輔樣も其間に御立被レ成、所謂上下交征利之勢ひ故、殊之外御苦心被レ成、漸く御折り合に相成候處、御暴發によつて、御直切り之事は扨置、御官稱共に御無に被レ遊候御次第に相成候、夫か指見へ有レ之候故、左樣に不二相成一樣との御周旋に而御座候ひしかとも、既往之事は不レ及二是非一、此度之事も亦其通りにて候、此御場合に相成候へは、御十分御罪を御引受被レ遊、社稷と共に御一身も御投け出し、天

裁を御仰き被レ遊候へは、其上之儀は、天下之公議有レ之候得者、決して御不當之事には相成不レ申候は、道理と申物有レ之、其場に相成候而は、御愛惜之御政道は行はれ難き事と相成候は必然に而、其儀は大藏大輔にも、萬々思召込れ候御次第も御座候へ共、唯今夫を彼是と御申出に相成候而は、前轍之如く相成、却而御爲に相成り不レ申候、先つ臣子の道を御盡被レ成候へは、自から君臨之御仁惠行はれ可レ申は、倫理之當然に而、御疑は有レ之間敷事と存候、

一昨日問罪之勅使發遣之朝議有レ之候、其御次第、如何と申儀は御治定無レ之候得共、何分御糺問之筋には相違無レ之候へは、右勅使御東下已前に、御謝罪狀御持出し之御運ひと相成候得は重疊之儀、夫迄には御行屆不レ被レ成候はゝ、問罪之節御指出に而も宜候、唯勅使御指付けに御罪を御問はれ被レ遊、御狼狽と申樣成御次第と相成候而は、最早夫限に而、遂に御割腹之御場へも可レ被レ爲レ運候、

一先遂而大藏大輔樣、御出府も可レ被レ成哉之御內

評有レ之折柄、越前丸岡藩之家老有馬帶刀（御而識之様に も承候、致二出府一候事故、大藏大輔様御出府に相成候 はゝ、是非御下タ働き可レ致と、御謝罪論相立候 て、大に意氣込み居候處、御出府御止めに相成、 甚力落には有レ之候へ共、何分此時ならては盡忠 之時節も無レ之と存詰、出府之上は、是非尊藩へ 御手寄申上度と申居候、罷出候哉如何、弊藩之見 込等は、此者へ厚申談置候事に御座候、是迄に罷 出居候はゝ、此度之一儀も被二仰聞一可レ被レ下候、 いまた不二罷出一候はゝ、御呼出し、御手先きへ 被二召使一候はゝ、閣老初廣く立廻り候者に而、隨 分御問にも合ひ可レ申、小藩には中々感心なる者 御座候、乍レ序及二内啓一候、（下略）

正月廿四日　中根雪江

山田太左衛門様

一、同日夕尾ノ渡邊對馬守、紀ノ久能丹波守被二召呼一 候處、對州は痔痛に而御斷り申上、丹州計參邸に付、 於二御前一宗家廢立周旋之義、御談に相成候處、何分厚 可二申談一旨、且於二江戸表一は、水府侯御盡力有レ之御 都合にも可二相成一義候はゝ、御同處へは安藤飛驒守、

御懇意之譯有レ之候へは、此件同人より爲二申上一候而 も可レ然歟、飛州今日上着仕候へは、猶申談之上、御請 可二申上一段申二上之一、

○同月廿五日、尾藩渡邊對馬守參邸、於二御前一關東一 條御談之處、乍レ恐御一人樣之御上に而御事濟に相 成、御宗家御立被レ成候御事候へは、誠以重疊之御儀、 御跡目田安公を、和宮樣より御願に相成候得は、無二 此上一御都合と奉レ存候旨、幸明日は、尾州へ罷越候 へは、老侯へも委細可二申上一と、欣然として及二御請一 たり、

一、今朝前橋侯へ御直書被レ進に付、飛脚指立手筈之 處、此節柄嫌疑も多き世態候へは、今一應岩倉卿へ、公 正之御談に相成候樣、相伺ひ可レ然との郎議指起り候 に付、於二官代一鹿之介より岩倉殿へ、此件公然之御手 續に相成候樣、仕度と由入候處、卿内談とは申條、何 方へ發露致し候而も聊不レ苦、少も差支無レ之との事候 へ共、於二郎中一家老共不服之譯申立、御内談之趣、御 書面に而御渡被レ下候樣申達候處、御承知には相成候 得共、良久不レ被二相渡一候に付、及二催促一候處、御用多 に而、今日認出來兼候間、明朝罷出候はゝ、御渡可レ有

レ之との御事也、

一同日後藤象二郎より青山小三郎迄申出候は、元内 府公より容堂樣へ御直書來り、御先供より事起り、御 恐縮之御次第、宜御周旋御賴之旨、五藩へも御同樣と の御趣意に付、容堂樣にも御取計方、不レ被レ成二御座一 候に付、今日朝廷へ御差出に相成候段、公へも爲二御 知一申上呉候樣賴談之由、小三郎申二上之一、

私云、此御直書公へ被レ遣しは、御國表を經て廿 六日に達せし也、

一、此日岩倉殿より御廻しに相成、大久保一藏建白如 レ左、

今日の如き大變態、開闢以來未曾て聞かさる處な り、然るに尋常定格を以て、豈是に應せらるへき や、今一戰官軍勝利と成り、巨賊東走すと雖とも、 巢穴鎭定にいたらす、各國交際永續の法立たす、列 藩離叛し、方向定らす、人心恟々、百事紛紜として、 復古の鴻業未た其事に至らす、總に其端を開たる ものと言へし、然し朝廷上に於て一時の勝利を恃 み、永久治安の思をされ候ては、則北條の跡に足利 を生し、前轍去つて後轍來るの覆轍を踏せられ候

は必然たるへし、依て深く皇國を注目し、觸視する 所の形迹に拘らす、廣く宇内を洞察し玉ひ、數百年 來一塊したる、因循の腐臭を一新し、宮武の別を放 棄し、國内同心合體、一天の主と申來るものは、かく 迄有難きもの、下蒼生といへるは、斯く迄賴もしき ものと、上下一貫、天下萬人感動涕泣いたし候程の 御實行擧り候事、今日急務の最急なるへし、是迄之 通り、主上と申奉るものは玉簾の内に在し、人間に 替らせ玉ふ樣に、總に限りある公卿方の外、拜し奉 る事のできぬ樣なる御さまにては、民の父母たる 天賦の御職掌には、大に乖戻したる譯なれは、此御 根本、道理適當の御職掌定つて、初て内國事務の法 起るへし、右の根本推究して、大變革せらるへきは 遷都の典を擧けらるゝにあるへし、如何んとなれ は、弊習といへるは、理にあらすして勢にあり、勢 は觸視する所の形迹に歸すへし、今其形之上の一 二を論せんに、主上の在す處を雲上といひ、公卿方 を雲上人と唱へ、龍顔は拜しかたきものと思ひ、玉 體は寸地を踏み玉はさるものと、餘りに推尊奉り て、自ら外に尊大高貴なるもの、樣に思召させら

れ、終に上下隔絶して、其形今日の弊習となりしものなり、敬レ上愛レ下は、人倫の大綱にして、論なき事なから、過れは君道を失はしむるの害あるへし、仁徳帝の時を、天下萬世稱賛し奉るは外ならす、即今外國に於ても、帝王從者一二を率して、國中を歩き、萬民を撫育するは、實に君道を行ふものと謂へし、然れは更始一新、王政復古の今日に當り、本朝の聖時に則らせ、外國の美政を歷するの大英斷を以て、擧け玉ふへきは遷都にあるへし、是を一新の機會にして、易簡輕便を本にし、數種の大弊を拔き、民の父母たる天賦の君道を履行せられ、命令一たひ下りて、天下慄動する所の大基礎を立、推及し玉ふにあらされは、皇威を海外に輝し、萬國に御對立あらせられ候事叶ふへからす、遷都の地は浪華に如くへからす、暫く行在を被レ定、治亂の體を一途に居へ、大に爲す事有へし、外國交際の道、富國強兵の術、攻守の大權を取り、海軍を起す等の事に於て、地形適當なるへし、尚其局の論あるへけれは贅せす、

右內國事務の大根本にして、今日寸刻も置くへからさる急務と奉レ存候、此儀行はれて內政の軸立ち、百目の基本始て擧るへし、若眼前些少の故障を顧念し、他日に讓り玉はヽ、行はるへきの機を失し、皇國の大事去ると云へし、仰願くは、大活眼を以て、一斷して、卒急御施行あらん事を、千祈萬禱奉り候、死罪、

正月　　大久保一藏

右別紙、大久保一藏より、手元迄差出候事候得共、爲二御參考一入二御一覽一候、御廻覽可二返給一候也、

正月廿五日　　具視

越前宰相殿

○同月廿六日、今朝岩倉殿へ、御書面爲二受取一、伊藤友四郎被二指出一處、御用多に而、いまた御出來無レ之候間、後刻爲レ持可レ遣との御挨拶に而罷歸處、晚來に相成、爲二御持一越に相成、御直書如レ左、

愈御安康珍重不レ斜候、然者今度德川慶喜進退、實に不レ可レ言次第、百事去候儀には候得共、尚今日に至り、爲二宗家一御苦心之條令二推量一候、若條理上におゐて、齟齬する事なく、其道相立候樣有レ之候はは、豈血食之事懸念有レ之間敷歟、聊見込之旨も有レ之候間、足下內々周旋之儀、後難なかるへし、乍レ併素より廟議と申儀には無レ之、已之見込之儘、申進候迄に候也、

正月廿六日　　具視

越前宰相殿

右御書一條に付、飛脚延引之段、山田氏へ之追口相認、夜戌刻早飛脚指二立之一、

一、同日、去る十七日於二江戶表一、西丸へ重役御呼出に付、飯田主稅罷出候處、大目付戶川伊豆守殿を以、御直書御渡有レ之に付、同十八日晚立飛脚御徒高木要助御國表へ相廻り今日着、於二江戶表一御渡に相成、舊內府公御直書指二出之一、御拜見之處如レ左、

此程、別紙之通被二仰出一候趣承及、驚愕之至、素より途中行違より、不レ料先供之者爭鬪致候迄之儀に候處、斯之通之御沙汰に而は、甚以心外之至に候、殊に靜寬院宮樣にも、深御心配被レ爲レ在候儀に付、積年徹誠御諒察之上、御周旋有レ之樣致二懇希一候、不二一一一、

正月望　　內府

大藏大輔殿

右之通之御書面に而、更に御悔悟之御樣子不レ被レ爲レ在、御周旋可レ被レ遊樣も無レ之に付、唯此儘に、明日太政官へ御出に可二相成一と之思召なり、

一、今日御布達左之通、

一太政官代、是迄被レ用二九條家一候得共、從二明廿七日一、以二二條城一太政官に被レ用候事、

一參與役所、同城內に被レ設候間、惣而是迄之通取扱候事、

正月廿六日

○同月廿七日、昨日相達候慶喜公御直書に、御書翰被レ副、酒井與三左衞門を以、德大寺殿迄被レ指二出之一、

◎脫字カ左之通、

一翰令二啓達一候、春寒難レ退御座候所、御兩卿愈御安泰、珍重奉レ存候、抑去る十七日、江戶表西丸城へ、重役呼出に付罷出候處、戶川伊豆より慶喜直書渡有レ之に付、右直書國許へ差遣し、夫より昨日以二急飛脚一差越候に付、右慶喜直書、別紙共、御兩卿迄差上候間、總裁宮迄御呈達奉二希上一候、此段申入候也、

正月廿七日　　御實名

正親町三條前大納言殿
德大寺中納言殿

二白、時下御自愛奉二懇祈一候、下官聊風邪、今日之處太政官へ參勤御斷申候、明日何れ罷出、萬々可二申入一候也、

別紙

慶喜直書中、上包前內府と有レ之、書中內府と有レ之、右は從二朝廷一慶喜官位被レ止候得共、是は從二朝廷一列藩へ布告有レ之迄に而、德川慶喜へ、官位被レ止候御沙汰書等は、いまた出不レ申故、本文之通、內府と認有レ之儀と相考申候、此邊も可レ然被二仰入一被レ下度候也、

一、今日より二條城太政官代に相成、諸官出勤有レ之、

一、此日於二官代一晚景に相成、下參與不レ殘御呼出に而、岩倉殿被二申聞一候は、仁和寺宮も、今晚は浪華より御歸陣に可二相成一筈、右に付而は、愈關東征伐之大兵を被レ擧候御決評なり、三道之鎭撫使抔に而は、迚も行き足り不レ申に付、海陸より大兵進發之庶算也、右に付、熟考之上、見込通りも有レ之候はゝ、明朝申達候樣、御演達有レ之、

一、此日御國表廿五日立飛脚着、江戶表より相廻る大久保一翁呈書如レ左、

十二日付之節は、私云、十二日付は、二月に相成、還御御一條、未二心得一內之事、還御は御良策には有レ之間敷候得共、却而皇居へ御忠意相含居候よりの御事、且右に付、幕府一統目覺、既小栗等御退、舊習御一洗、大好機と奉レ存候、今日より眞に□候はゝ、皇國之御爲にも無二此上一奉レ存候、□之差向錦旗下候は、御全國御失體、大亂之原に而、夷中奸悅候計之事に候間、幾重にも御工夫、尾土兩侯等被二仰合一、御止御急務に候、是は德川氏之爲、申レ私には毛頭無レ之候、夷中奸に、鼻下のはされぬ樣にと奉レ祈候事に候、將還御後、種々御歎息に而、御隱居之御內含も、御口氣に被レ伺元道侯（御□にも被レ伺候）候間、今此大難に至、聊にても御動之思召に而は、決而不二相濟一德川家之御不爲のみならず、全國之御不爲、其上僞に唱候朝敵々々之言艸、却而實に可二相聞一、旁不レ宜、御手打に相成候迄は、御止可レ申と泣出し、死を決候心中は、身分にも不レ寄候間、明候にも此段御察、御周旋御精力奉レ祈候、今は何と申候共、朝敵之御趣意無レ之は、不レ久相顯れ可レ申候、乍レ敵も長人は近頃開候故、此位之事は可レ分と奉レ存候、當今異說唱候者は、夢中歟と奉レ存候、歎息に不レ堪候、吳々も夷中奸に、鼻下のはされぬ御策、御工夫希候、且幕府より出候君側奸御退と申も、御良策に無レ之に付、是又御取消御工夫希候、幕府は關東丈之御備調、夷人之侮相防、彌皇朝へ御忠節之外、他事無レ之御見込に奉レ伺候、此度は實に皇國御大事に候、御勉精奉レ祈候、九拜頓首、

正月十五日　　忠寬

大藏大輔樣

一、前記十二日付呈書如レ左、

益御勇健、御加齡被レ爲レ在候段、爲二國家一奉二敬賀一候得共、新春之御祝詞も申上兼候世態、恐入居候外無レ之、遠方且隱居之耳には、何事も慥には不二相分一、風說而已にて、遠察歎息仕居候、昨今風說に而は、御歸國被レ爲レ在候哉にも承候、彌御歸候はゝ、乍レ憚御良策と奉レ存候、當今全國之御大事は、申迄も無レ之候得共、いまた大公至正之場には至兼可レ申哉に付、先々當國御安全御備向、御十分に御貯有レ之方、却而御忠節と奉レ存候、今日に相成候而は、此地之有司等着眼更に解兼候、今之處、是も彼も都而百に五十哉と被レ察候、乍レ憚御當主樣御當前之御勤方は、世之並と可レ被レ遊御事に奉レ存候得共、尊公には御隱居後之御事故、百に五十の內へは、御加り無レ之樣奉レ祈候、兎角今二三段高着に無レ之而は、眞之場には無二覺束一哉に奉レ存候、此地芝邊一條も、意外之事に候、尤諸町家等押入亂妨は、過半芝屋敷に居候哉之由、是は實事と相見へ、其後市中は至極靜に相成候、只々町人共迄、上納一條云々多く候、此後一揆如き之事不レ始樣にと、是亦祈居候、一近舶竹製筆手に入候、毫之樣には無レ之候得共、診敷に付、入二尊覽一候、唐墨相副、御一笑可レ被レ下候、恐惶謹言、

正月十一日　　忠寬

榮井君玉几之邊

二白、時令御自愛專一奉レ存候、何歟不レ隱候故吟情薄し、

世の人のこゝろに花の咲ぬ間は

春とてはるのひかりやはある
うくひすの聲をもまたて此春は
たゝ千代〳〵となくほとそなき

歲暮

身老年徂涙自流、人生默數等雲口、
天下賴有レ催二春意一、一朵梅花消二百憂一、

御一笑々々々　一翁寬九拜

右同時、雪江へも投書有レ之、其槩略は、粗呈書と大同小異にして、錦旗を被レ止候樣、朝敵之御汚名被レ除度等之主意也、本紙失二所在一、探索して重而可レ記レ之、

○同月廿八日、今日於二官代一、關東御征伐御決定之議事有レ之、下參與之面々意見御尋に付、出席之上座中根雪江より、及二御答一候は、關東今日に至り、更に悔悟之體不二相聞一候へは、早々御征伐御當然之御儀たるへきと奉レ存候、御軍略に至つては、唯今申上候程之見込無レ之段申達、衆議大同小異に而、遂に御決評と相成、

一、此日江戸表廿二日立之飛脚御徒橋本兵吉着、去る十九日重役一人、西丸へ罷出候樣、御觸達有レ之に付、飯田主稅罷出候處、御座之間へ、御同席方重役一同被レ爲レ召、御直に上意有レ之由、相廻る寫如レ左、

今般皇國之御爲を以、政權奉レ歸候次第は、何之懸念も無レ之、誠忠可レ盡存念、一統も盡力致奧候儀に有レ之、登京之節奏聞之次第も、承知之通之儀に候、然るに京坂戰爭も行違之儀に而、追々承候へは、朝敵抔との風聞も有レ之由、兼而之素願も不二相立一、殘念に存候、併此上誠忠相盡候存意に候、就而は朝敵等無レ之趣は、申立度存候得共、貫徹致問敷に付、右之處、一統より盡力致し、京地へ申立奧候樣賴存候、

一、同飛脚に而、去る廿一日戶川伊豆守殿より御呼出に付、御留守居罷出候處、平山圖書頭殿御渡之御直書相廻る、如レ左、

一翰拜誦、然者去る三日先供之兵隊、鳥羽伏見兩道より入京候處、薩藩士指留應接中、伏兵一時に起り、發砲に及候に付、兩所共無レ據應砲、怪我人も多人數有レ之、實に意外之次第に而、不レ料奉レ驚二宸襟一、人民を損傷致し、兼而之素意にも相背候間、斷然大坂城を御兩家へ託し、兵隊を爲二引揚一候、全く一時供先之爭鬪附會して、或は朝敵之惡名を負しむる哉にも承り、實に意外恐歎之至に而、畢竟華城

を棄て、赤心を表候得共、何分近來事々素心に背候事とのみに而、遂に病魔に被レ侵、事務取扱兼候間、退隱いたし、跡式之儀は、相撰申付候積、何卒是迄之御厚誼、不二相變一御盡力被レ下、朝廷を初、外藩へも御說諭、前文意外之汚名相雪候樣、此上にも御鼎力、千萬拜囑する處に御座候、書不レ盡レ言、萬面罄、

正月　　御諱

大藏大輔殿

一、同時勝安房殿より呈書如レ左、

邦內之事、今日に到り、亦何をか陳可レ申、閣下當節之御動靜如何候哉、深御案申上候、小生唯分を守り、今一死ある而已、付而は別紙之旨趣、其御筋へ被二仰立一度偏に奉レ希候、東都別に說も無レ之、定論紛紛たる而已、何卒區々たる微忠、可レ然御採用御座候樣奉レ願候、別に申上度は海山御座候へ共、非レ所レ盡二筆紙一、宜御高推を奉レ仰候、謹言、

正月十八日　　安　房

越前老侯机下

近々官軍問罪之御擧ありと、臣子之分唯一死ある而已、何そ患とするに足らん、其曲直是非に至つては、強而今分別を論せす、暫く空漠に附し、百歲公議之人を待而已、昨今米利堅之報告に云、官軍兵庫之居館を襲ふゆへに、壘を築き兵士を分ち、其地を固守し、猶軍艦を呼と、英佛亦然り、長崎地方之如き、いまた其確示を不レ得といへとも、恐らくは同轍に過ささるへし、臣愚、聞レ之痛哭悲歎に不レ堪、遂に印度之破れ、近くは、支那之地、長毛官兵、其是非曲直を鳴らして同轍相喰、西洋諸國其虛に乘す、今哉皇國殆と同轍に陷らんとす、口に勤王と唱ふといへとも、其形勢今日に及へり、公平を唱へて大私を挾、皇國土崩、萬民塗炭に陷るを不レ察、是を何とかいはむ、臣上途して微衷を愬訴せむとすれとも、今は有罪之小臣、我主と一死を待而已、然共此千載之遺恨を如何にせむ、臣か斬首前に遁れとも、默止するを不レ得、希くは此微志を以て、參與閣下に代訴せむことを、誠恐謹言、

正月十八日　　德川陪臣

勝　安房

一、同時大久保一翁老呈書如レ左、

去る十五日後も、多分日々登城候得共、諸士逆上強に而、眞之道理更に不二相分一、然るに小栗上退役、其一連少々鎭辭等之說、少くは耳に入候者も出來、今日は閣壹州一人皆引に而、都而靜に相成、御前へも緩々罷出、種々伺候處、彌以御恭順之外、更に御他念不レ被レ爲レ在、其處は安心仕候得共、是非御隱居可レ被レ遊との御沙汰、此儀實に困難極候、皇國御爲に相成候はゝ、聊御留も不レ仕候得共、考候處に而は、又一亂之本にも可レ到と心痛極候、漸々諸司血氣も少々鎭、今翁も爲レ差言分も無レ之、只々柔弱之誹受候計に候、其は更に不レ願、萬一御恭順之御趣意不レ通節迄之御預物と覺悟に候、夫は兎角扱置、此地に而は、御恭順被レ爲レ盡候思召に而も、尊地に而御覽被レ遊候而は、如何と御心付之廉々も候はゝ、一寸被二仰下一候樣希申候、其外眞に心得に可二相成一事、思召付被レ爲レ在候はゝ、雪江より一寸示呉候樣、被二仰付一伏希候、此地眞相談は、勝房之外不レ過二二三人一、其餘は强事計申居候、何分御敎示可レ被レ下候、頓首、

正月廿一日

二白、兩部彦助着、委細一馬より承知、一安心仕候間、直に一馬同道、登城相談、閣も被レ逢、安心と申居候、松岡等には實に血氣計、あきれ候、乍レ去此邊は一度に申散候得共、下々多勢紛々には困極候、猶御精忠奉レ祈候、口口出候由、遙に承知、同人一筆敎示懇願に候、謹言再拜、

夜中退出、宅へは論人不レ絕、勞極候、早朝より紀人三人正午迄論、漸々爲レ服返候、心中は可レ愛事に而候得共、道理不レ解人々多々、三拜、

榮井君　一翁　寬

一、右慶喜公御直書之儀、在京諸侯へも御同樣被レ進候御樣子に而、薩侯よりは、今日惣裁宮へ御指出に相成由也、右に付種々御評議之處、兎角君臣とも此表之事情承知無レ之故、關東之悔謝に而は、更に此表へは徹底不レ致次第に付、右御書御請之代り、朝廷へ御達之上、可レ然人物關東より御呼寄せに而、御口上に而、御曉諭に相成可レ然と被レ決、猶此地之輿論は、雪江より一翁老迄申遣し可レ然との御沙汰有レ之、

一、此日將軍宮御歸洛有レ之、

○同月廿九日、公午刻より官代へ御出參被レ爲レ在、今日被レ議事、浪華行幸には御決に相成候得共、御趣意柄兎や角と御居り兼に付、公被レ仰候は、御親征、又は外國御交際、或は遷都抔、多端曖昧之御趣意に而は不レ可レ然、御交際ならは御交際に而、公然と臨幸被レ爲レ在可レ然、遷都之事は、諸侯會議之上に而御治定可レ然、御親征之儀は、將軍宮へ御委任も御當然たるへくとの御議論之義、又議院臨御も不レ被レ爲レ在候而、外國御交際之臨幸は、御順序無レ之、御不都合たるへき旨、三條岩倉之二卿へ被二仰達一、御嘉納有レ之由、

一、今日御出參之節、昨日御到來之慶喜公御直書、幷一翁老呈書、勝安房殿書狀等御持參に而、岩倉殿迄御披露、右に付、御見込之趣も御物語置之由、

一、此日木戶準一郎、後藤象二郎、大久保一藏、總裁宮顧問に被二仰付一、

一、昨日之飛脚に申來候、去る十七日御同席重役へ、上樣御直書御賴之一條、何共可レ被レ成樣も無レ之御筋候へは、矢張御汚名御免れ之儀は、御謝罪之外は被レ爲レ在間敷と、一統より申上、可レ然歟との御評議に而、土、藝、紀は、明日於二官代一打合せ、津、彥根、小濱等は、御家老中より重役◎へ脫カ被二申越一、相談に可二相成一と相決す、

○二月朔日、今朝御布令如レ左、

今般御一新に付、明後三日、二條城太政官代ね、御親臨被レ爲レ在候旨、被二仰出一候事、

但行幸之儀、惣而御輕便を主と被レ遊、月中數ケ度御親臨之思召候間、猥りに供奉不二相願一樣、兼而申達候事、

於二武臣一も、供、堂上同樣、侍二人、僕兩人可レ被二召連一候事、

一、今日於二官代一、昨日邸議有レ之候、上樣御直御賴一條、鹿之介より藝辻將曹へ申談處、申立盡力と申儀は、見込付兼候段御斷り申上、重役之心得に而、京地之時勢申立而已に而は、御筋立兼候形勢候へは、御悔悟御謝罪之道、御立に相成候樣、申上候積之由、肥後も同樣、明日にも壹人指立候而、申上積之由、土州之方、象二郎は當時已に蕃瀋へは關係無レ之殊に嫌疑甚敷旨に而、不レ及二申談一由、鹿之介申達、其段申上に相成、申遣候三藩へも、右之趣に可二申談一と相決す、午後藤堂歸雲、彥根新野口口、田中三郎左衛門へ、御

家老中より申越に相成處、歸雲說は、翌紀◎屍同樣、何分御謝罪之儀申上度と申合せに而は、御悔悟之筋には相成間敷由申に付、各々之申上方に相決す、彦根にはいまた不二承知一候得共、申來候はゝ、同樣に可二相心得一との申談に相成、小濱よりは、重役耳遠に付、用人之內名代罷出に付、同樣申談處、大晦日立之飛脚着之後は便宜無レ之、右件は元より承知不レ仕、漸く之事に而、如レ此勅勘御免に而、また參內も出來不レ申爲體故、たとひ承知仕候而も、何共可レ致樣無レ之趣申二出之一、

一、此日、過日舊內府公より御直書御到來に付、御請可レ被二仰含一人物、關東より御呼寄之儀、却而朝廷御嫌疑も可レ有レ之哉に付、今日早飛脚御徒高木要介を以、御請之御書被レ指二立之一、此御書不二相見一、

一、同時大久保一翁老へ御返書代り、中根雪江より指遣す書面如レ左、

去る廿一日御認、大藏大輔へ之御呈書拜見仕候、段々貴勞之御樣子拜承奉レ存、爲二宗家皇國一降心大慶仕候、御紙表之趣、且大藏大輔へ被レ遣候御直書を奉二拜見一候而も、此表之事情と、錦地之御

見込とは、實に反對之事と相成候は、此地之義、委敷御承知不レ被レ爲レ在御儀故と想察仕候、右に付、既往之事より略々陳述仕候、抑此度之御一條、最初より聊に而も御妄動被レ爲レ在候而も、忽朝敵之惡名を可レ被レ爲レ負事は、必然指見へ候儀故、老臣より御直にも再三言上も仕、閣老參政等へ、御恭順御鎭撫之儀は、反覆丁寧、幾百回及二懇請一候得共、不肯之者共之申上方、徹底も仕兼候哉、御採用にも相成不レ申事、遂に今日に至候儀、千歲之遺憾に御座候、其子細と申は、兎角朝廷に而は、最初に一發致候降官削地之餘論、消滅致兼候而、種々御難題出て、又二條に而は、降削之所レ謂無レ之との御趣意故、尾越其中に立、周旋困苦を極め、漸々にして朝議を口め、寬宥之御趣意之御書面、尾越へ御渡に相成候義に付、夫を御承知にさへ相成候へは、直に御參內、引續き御職掌迄も、可レ被二仰出一歟之所迄、相運ひ候に付、則寡君右御書面持參、尾老公と一同下坂に及ひ、言上被レ仕候處、一々御承知に而、御請書も御渡に相成、猶又御上京之御模樣思召相伺候

處、何時に而も御上京可レ被レ遊間、朝廷之向篤と取調らへ、御上京直樣御參內等之御都合、宜見込を立、御懸念無レ之處に而、御案內可二申上一との御直約被二申上一、廿九日夕乘船に而、歸京被レ仕候事に御座候處、翌晦日瀧川播州御地より上坂に而、煽動有レ之由、坂地俄に兵事之議蜂起、在坂之諸藩へは、出兵御催促有レ之事に相成候、是より先き、何故か不レ存候得共、淀、伏水、橋本、枚方等に御配り置之兵隊、此比朝廷に而は、類り に坂兵北上之由を風聞す、如何々々と御不審有レ之、も、朔日以來北に向ふて追々御繰出、會桑等も戎裝に而動き出候風聞、二日夕京地へ相聞候に付、夫に而は益す々々朝敵と可レ被レ爲レ成勢故、何分早々御鎭定相成候樣爲二言上一、老生へ下坂被レ命候へ共、微力に而は迚も行屆き申間敷と、細川家老溝口孤雲、津家老藤堂歸雲、土州家老深尾鼎、柳川家老十時攝津等へ、老寡君より、老生と共に下坂、唯々御妄動有レ之而は、忽朝敵之惡名を被レ爲レ負候間、速に御鎭撫相成候樣、可二申上一旨被二申談一候處、何れも決然として、下坂可レ仕と致二承引一、二三日曉より逐々下坂、

老生は猶又朝廷之御模樣如何と存し、三日朝下坂前、岩倉前中將殿迄罷出候處、使者の間は、薩の內田仲之介、幷長人罷出居候、何も暫時對談に而引取、其跡に而老生拜謁候處、岩倉殿御申聞候は、薩長より伺ひ、昨夜より唯今迄三度に而候、其子細は、坂兵甲冑に而次第に指迫り候勢、反狀相違無レ之、打拂ひ可レ申哉、如何可レ致との事なれとも、唯今一發致候哉否大事敗れ、朝廷之厚き思召も、內府公之恭順も、尾越之周旋も、乍レ不レ及拙者之盡力も、悉く水の泡と相成而已ならす、今後之見込も付兼候に付、御沙汰有レ之迄は、決して手出し不レ可レ致と、三度共に申聞、唯今も相返し申候、是より愈參內、御大議に可二相成一候間、大藏大輔殿にも、早々參內候樣、可二申聞一との事に付、老生申達候は、如レ此危急之場合に相運ひ候得共、猶一ト盡力仕度に付、唯今より致二下坂一候、ケ程迄之形勢には立到り候へ共、何とか鎭撫之道相立、內府公上京相成候はゝ、過日來及二御談一候通り、直樣參內等之運ひは、相違有レ之間敷哉、今一應相伺度、下

坂之上折角鎭定致し、上京に相成候而も、此度之過失により、參內も不レ被レ命と申樣成事に而は、再度及二動亂一候故、念を入れ候と、ケ條書を以相伺候處、上京之運ひにさへ相成候へは、兼而申談候趣は、萬々請合ふとの事に付、夫より歸邸之上、猶又差當り伏見表鎭撫之儀、尾州申合せ等を申談、爾後發程、四ツ塚關門邊へ罷越候處、薩兵處々屯集、莫氣を蓄へ、敵を相待候勢ひ、夫より鳥羽村へ入候處、坂地之第一大隊勢揃へ最中に御座候、是は大抵未の半刻比に可レ有レ之、此景況に而は、無事に鎭定は無二覺束一に付、一驚を吃し、殆落胆仕候得共、強而精神を勵し、南下仕候處、伏見幷鳥羽之方へ繰出候坂兵、陸續として蟻行之如くに御座候故、胸中不レ穩候得共、道を急き罷越、橋本之關門を過て數町ならす、薄暮前八幡山を打越し、伏見之方に當り、火光天を焦し候故、大事了と大息仕候得共、今朝岩倉殿口上に而考候而も、朝廷より容易に御指圖は無レ之模樣と申、大藏大輔も參內、精々抑留之含み候故、たとひ兵端開らけ候而も、朝廷より御指圖さへ無レ之候へは、薩と坂兵との私鬪候得は、又取直し方も可レ有レ之、何分一應華城之御安否も相伺度と、枚方より船に乘り、四日曉七時比、中之島の弊邸へ着船仕候處、留守居之者より、先刻御達之由、於彼除姦之御發令を一見候處、軍隊に可二馳加一との御文段を拜見、是迄度々申上候事を御用ひなく、御私に兇器を動かされ候而は、正敵姦計之陷阱に御落入、朝敵之御名義御免れ難レ被レ遊相成たりと、長息虹霓を吐き、悶絕辟地仕候事に御座候、又此曉は、坂地薩邸を御攻擊之沙汰に而、御手配り御嚴重之由抔、物語居候內、地雷二發、中の島邊迄震動、薩邸忽燃上り申候、事之體以之外故、直樣登城、永井君へ拜謁、如何之御樣子と相伺候處、御奏聞狀上達致兼候內、御先供之行違より戰鬪と相成、只今之爲體、上樣始御當惑との口氣、今後之御策如何と相伺處、御無策之由に付、夫に而は猶以御大事と、誘引之諸藩老も御城中へ會し、種々申談、閣老衆御初よりも、御談し有レ之候へ共、思ひ込下坂致一條は、何れも途中に而戰爭相起り候故徒然と相成、今後之處も、

除姦に付軍隊へ可二馳加一との御布告有レ之候而は、御名義更に不二相立一、如何とも致樣無レ之と、顏を見合せ歎息致候而、今五六日御堪忍は難レ被レ成候ひしかと、既往を恨むる迄に而、惣而無策に歸し、孰れも致二退散一、老生は即夜乘船、橋本邊に而平明、淀邊に而大小砲聲動レ地之勢と相成故、上陸致し、間道を經て、五日暮時前京着、扨二日已來之模樣承候處、三日夕伏水鳥羽に而、一砲相發候哉否錦旗翩翻、將軍宮を被レ命、宮中より直樣御進發と相成、朝敵之名義を十分に揭け顯はし候事に候、戰爭手始め前後之論も、已に發砲と相成候而者、其前後は更に論せす、晦日已來之儀を初、會桑戎裝等を以、惣而反狀に歸候故、如何とも申釋之道無レ之、頃來尾越土藩と及二密議一、如何程之難題も、惣而御恭順之二字を以取消し居候事に而、可レ惜其比と相成候而は、縉紳中にも、御上京希望之向も出來、晦日歸京、元日は休日二日には已に上樣御上京之御運ひに付而之朝議にも相成候處、即夕に前營相認候通り、何そ料らん大藏大輔は、前內府公御請濟復命之途中に罷在候、晦日來坂地に而は、最早兵事御催しの聞へ有レ之事に相成候は、御運之末とも可レ申哉、尾越之二藩も、是迄恐らく二心なく、盡力之積には候得共、猶御嫌疑も候ひしやらん、一應之御談もなく、坂地は坂地之御仕出と相成候故、此表之手筈悉く齟齬、朝廷へ對し候而も申譯無レ之、諸藩へ向ひ候而も、宗家之無算不體裁、實に面目を失ひ申候、華城御明け退きも、御誠意を被レ表候思召之由候へ共、是以餘り成御不體裁、閣老監察位は御居殘り、御城附之御武器錢穀等も、御目錄に而、御立派成御托しに相成候へは、ムザ〳〵と御建物は燒却、器械金穀も分捕には相成間敷候を、多宮唯一人居殘りにて、兩藩之者なれは、壹人に而もつらまへ、口先きにて相渡し、逆支度而已之爲體に御座候故、火之元吟味も不二行屆一候哉、彼是申內、出火に相成、誠以埒もなき御事共故、御誠意も何も相立候事には無レ之、華城之御退去は、天下之笑ひ物に御座候、有體に申候へは、此表之事情は、右樣之次第に御座候故、中中御先供之御行違ひ抔を、被二仰立一候而も、其

已前に戰爭之御趣向有レ之候事を、致二承知一居候故、實に御先供に而も、決而左樣には請取り不レ申、ホンノ御遁辭之樣に、冷笑致居候勢ひに而候、

實に御意外に候はゝ、御承知被レ爲レ在候哉否、閣老に而も被レ遣、早々御引揚に可二相成一處、御承知之上に而も、尙交戰之儘被二指置一候而は、被レ對二錦旗一朝敵に相違無レ之、六日に至り大坂城を御托し、兵隊御引揚に相成候而も、御赤心之被二仰譯一には相立不レ申候故、世上に而は、狼狽と唱へ、手を拍て笑ひ居申候、

又前にも相記候通り、御上京之御一途には無レ之、會桑も取付き居り、除姦之御目論見と、相混し候而已ならす、御奏聞已前之御發令等、御手違ひとは乍レ申、御形迹におゐて、御恭順之道は更に相立不レ申候故、別紙に相認候通り、何事も反形と取成され候而、申開らき無レ之候、且朝敵之御惡名御殘念思召候も、乍レ恐御尤至極に而、一つ御手違に相成候へは、其御殘念に思召候御惡名を被レ爲レ負候は、眼前指掌に御座候故、不レ被レ爲レ負樣にと、大藏大輔初、乍レ不レ及周旋力を盡し、九分は仕課ふせ候處、一分之際に而、御堪忍曩切れ、果して御惡名を被レ爲レ負候御義に而、唯今此地之名分名義上に而は、負せ奉りしには無レ之、御負ひ被レ遊候と申か正議に御座候、御心術上に◎之御誠赤も、御形迹上におゐて、貫徹可レ仕樣も無レ之次第に相成居申候、此處を能く御洞察無二御座一而は、偏に御恭順と御誠意をのみ、御主張御座候而も、無形之儀故、於二此表一大藏大輔初、口外仕候義は難二相成一候へは、此上は唯此度之御始末、何とも御恐入被レ遊、御一言之被二仰譯一も不レ被レ爲レ在候へは、如何體之御沙汰御座候而も、兎角被二仰上一候義は不レ被レ爲レ在と、御悔悟御謝罪之御筋道不二相立一候而は、朝廷におかせられ候而も、御聞屆被レ遊度候而も、難レ被レ遊御次第に御座候、右樣にさへ被二仰上一候へは、御恭順も御誠意も、御貫徹之御道も相立可レ申歟、彼是と慥成被二仰譯一には、却て御名分上之御障りに相成候へは、只管御悔悟御謝罪之外に、御條理は相立不レ申候、此御筋さへ相立候へは、

又朝廷に而も、夫々御寬宥之御廷議も相立可レ申は、自然之道理に奉レ存候、尤御悔謝も、乍レ恐御口上計に而は相濟不レ申、其實跡を可レ被二相立一事に御座候、第一會桑之二藩、心術上之忠赤は可レ憐可レ感歟に候得共、朝廷にそむき（蛇蝎之如く御嫌ひ被レ遊候故、歸國被レ命候而も、其儀滯在のみならす、兎角北上、官軍に向ふて戰ふ、此亂二藩より起れり、）宗家を倒す、（所謂暴虐之引倒しなり、）罪惡必誅不レ可レ免は、關西之輿論に御座候、且坂地におゐて事に關りし諸有司は、夫々御罰殛無レ之候而は、御實跡相顯はれ不レ申候、此處迄十分に御落入、御悔謝と相成候へは、二年來之御誠忠も、御逆心可レ被レ爲レ在樣も無レ之御儀も、無二御據一譯に而、御反形と相成候事も、是亦天下萬人之知る所候へは、必雪寃之議起り可レ申も、必然之勢に而候へ共、即今之處に而は、御形迹上におゐては、御遁れ難レ被レ遊御名義故、一人として口を開く者無レ之候、書は不レ盡レ言、難レ及二禿筆一而已ならす、甚以不敬多罪に亘り、恐入候得共、心付候義は、申上候樣との御書面に付、大藏大輔申付、旁此地之見込を申上候、何分方今之長策は、兎も角も千戈之動かぬ樣、人心之安着する樣に、御鎭定被レ遊候而、天定之時を被レ爲レ待候より外は無二御座一候、是皆乍レ恐上樣御一心より外に、出る所無二御座一候、唯々奉二恐入一候、何たる御形行に相成候哉覽、長生き仕候而、如レ此憂目を見候事歟と、皆に臨んて落涙止兼候、

一昨日朝議に、愈謝罪之體も無レ之上は、海陸之大兵を發せられ、御征伐可レ被レ遊と、御決定相成候、

一右に反し、和宮樣へ、何か御和平御取計之儀、被二仰進一とも相聞へ申候、又和宮樣より、田安樣御相續、御願ひ被レ成とも相聞へ申候、

一廿七日より、二條城を太政官代りに相成、宮公卿始、御出勤有レ之、罷出候而も、黎離之有樣、不レ堪二感慨之至一候、

一當月三日以前迄は、諸藩幷縉紳中之有志、上樣御參內之御運ひにさへ相成候へは、天下は靜謐成るへし、夫より後は、王政一途に力を盡せは濟事と、一同に是を目的依頼とし、其事に而已力を用ひ候處、世態一變して、算外之事と相成候に

付、王政も名計にて、實は望洋なり、嗚呼御謝罪之筋たに立候はゝ罪はなし、人材は棄へからす、朝堂に立てんといへる論も、朝野に聞候處あり、

一岩倉殿より內意有レ之、同姓大和守迄申越候義も有レ之、定而御承知相成候半と奉レ存候、

一有馬遠州家來有馬帶刀に、囑候儀も有レ之候、是も定而御承知に相成候半と奉レ存候、是等之諸說も、御參考被レ下、何分にも爲二皇國一爲二宗家一、御鼎力偏以奉二仰望一候、勝君より老寡君へ御呈書有レ之、老生へも御投書候得共、拜答之儀は、前書之趣申上候より外は無二御座一候へは、乍レ恐宜御傳聲可レ被レ下候、下略

私云、先月廿六日着之飛脚に、內府公御直書御到來之處、一向に御悔悟之御樣子不レ被レ爲レ在、又廿七日着一翁老呈書、同人より雪江へ之投書等之趣に而も、內府公御始、御恭順と計に而、御謝罪等之儀は、更に御心附無レ之御模樣に付、雪江より之返書に、此表之實況委敷申越可レ然との御沙汰に付、廿八日一書相認、紀藩

東行之一士人へ相托し候處、一同人東行延引之都合に相成に付、取戻し、日附其儘、今便一所に相達、背面如レ左、

正月十五日御認之御書面拜見仕候、何事も浩歎に附し、血涙より外無二御座一候、錦地之形勢、御見込之御次第も、此地之事情御承知無二御座一候而は、一應尤に奉二拜承一候得共、京地之輿論は、別紙之通に而、如何とも可レ仕樣無二御座一候、乍レ恐重疊之御不都合に而、言語道斷に御座候、唯一日も早く、御謝罪之御條理相立候方、御家之御爲、御一身之御爲、元より皇國へ之御爲は、不レ及レ申事に御座候へは、御熟考之上、御盡力被レ下候樣、天地へ對し奉二懇願一候、今日は御征討之爲、海陸之大兵、可レ被レ發御決議に相成候御樣子に御座候、御東下已來も、御一言御悔謝も御報告も無二御座一故、右等之御運ひも無二御據一譯に而、於二此表一は何共可レ致樣無レ之候、如レ此皇國之大變動之起るも起らぬも、御一身に止り候世態と相成候は、扨々不レ及二是非事に御座候、餘は御諒察に讓り申候、要文之外は、嫌疑世界故、及二省文一候、尤御悔謝之御條理相立候上は、自ら御

開明之道も可レ有レ之歟之輿論も有レ之候へ共、此等之儀は、利害に亘り候に付、態々不レ及二詳悉一候、伏見淀之一戰より、追々御敗衂、且華城御落去等之御手際、兼而恐れ居候名義を御毀り被レ遊候事故、何とも致方無レ之候、一日も早く、先つ天下之平穩に相成候御策は、御悔謝之外は無レ之候、其上ならては、正論も公議も行はれ不レ申候、御心外之御胸中は、萬々奉二恐察一候得共、別紙之通之御形迹を被レ爲レ取候上は、無形之筋は、誠赤も眞實も、皆虛妄に屬し、難レ及二口外一勢に御座候、今五六日坂城之御暴擧無レ之候はゝと、天を怨み人を咎め候凡心、とも消却仕兼、慷慨之悲涙、血を灑て申上候事に御何座候、恐々謹言、

正月廿八日午時　　無名氏

別紙

抑此度之御一擧に至つては、御不臣之御形迹不二一方一に付、唯御先供之行違よりとの、御申開らき而已に而は、中々以貫徹可レ仕樣も無レ之、不レ顧二忌諱一、其條件を數へ候へは、「第一には、朝廷に而殊更御嫌惡被レ成候會桑、已に御暇に而、海路歸國を被

レ命候と迄、被二仰上一設一候處、夫を御上京之御沙汰已前、追々伏見淀邊迄御指出に相成、且步兵も伏見、淀、橋本、枚方等へ御繰出に相成候は、何等之御趣意歟、更に難二相辨一事故、事敗に歸候後は、廷議反逆之企と名付候而も、申開くへき道無レ之、「第二には、晦日には追々兵事御手配り有レ之候は、除姦之御下た樣へには可レ有レ之候得共、除姦之御奏可無レ之程之事候へは、是以叛逆之御企と名付け候ても、更に申釋へき道無レ之、「第三には、朔日已來、會桑甲冑に而北上致し、兵隊も追々御繰出に相成候爲體、御上京之御先供とは相見へ不レ申故、是亦反逆之御企と申而も申解くへき樣無レ之候、「第四、御奏可は勿論、御奏聞に相成候哉否も御貪着なく、於二坂地一は除姦之號令を被レ發、可二馳集一との御布告は、御不都合之尤甚敷ものにて、事を除姦に托し、闕下に迫らんとする叛形顯然と指斥されても、更に申解くへき樣無レ之候、「第五、除姦之實不レ被レ遂上は、皆托言にして、闕下に逼つて、別に姦謀ありといふとも、申釋くへき樣無レ之、「第六、鳥羽伏水之戰鬪は、御先供之行違と申にもいたせ、淀わたり

之戰爭は何事候哉、除姦之擧候はゝ、進戰勇闘、御立派に其實を被レ遂候へは、朝廷へ被レ對、御異心無レ之義も現然可レ致候へ共、會桑、死戰之坂兵も頻りに被レ進候得共、悉く及二敗走一候得は、除姦は口實に而、謀反敗れたりと稱するも、更に申解くへき樣無レ之、「第七、四ッ塚鳥羽畷之一戰、御先供行違候はゝ、一戰之後は、速に兵隊御引揚にて、早々御悔謝被二仰譯一も可レ有レ之處、其儀無レ之而已ならす、將軍宮御進發後も、猶兵隊を被レ進候は、叛形にあらすして何事なるへき、如レ此反狀と名付へき形迹現然候上は、無形之口舌を以、申譯すへき樣は無レ之、頻に御恭順御鎭撫を、朝廷へ申上候拙生迄も、奉レ對二朝廷一恐入申譯も無レ之次第にて、年來之御誠忠は、心を以心を知り候上之儀に而、知らさる者に至つては、形迹を認めて、其心を察候外は無レ之、朝廷之御赫怒、御至當之御儀にて、今日と相成候而は、御誠忠も御恭順も、王莽之謙恭同樣御委に相成候而、愁訴之道も絶果候、如レ斯反狀明白之上は、不日に征討之大兵を被レ爲レ發候半而は、朝憲も相立不レ申候は、當然之事に候、左樣に相速ひ候へ

は、祖宗二百餘年之御盛業も水泡に相成、朝敵之汚名、千歲之靑史を穢され、且は生民之塗炭、生靈戰闘之慘毒を受け、剩へ外夷其虛に乘るに至候はゝ、其罪惡は、實に天地間不レ可レ容事と相成可レ申と、不レ堪二恐悚悲歎之至一候、今之時に當つて、御誠忠も御恭順も、朝廷は元より、天下萬人見て信すへき證據を、形迹之上に顯はされ候而、御謝罪有レ之、千戈を慰め、天下を穩にし、宸襟を被レ爲レ安、罪戾之萬一を御償ひ被レ成候はゝ、御祖宗之御遺業も今後に及ひ、德川氏之祉稷も、御後昆に御傳へ可レ被レ遊御條理も相立可レ申候、即今天下之治亂も、宸襟之御安不も、悉く御一身之御方寸に相迫り候事と相成候、此處御深考、御熟思之程、皇國之爲、御宗家之爲、御身上之爲、千祈萬禱、泣血頓首、

正月廿八日

○二日、御布達如レ左、

東征御進軍可レ被レ爲レ在候に付、大御軍議被二仰出一候、依レ之去る廿八日、將軍宮御歸洛被レ爲レ在候、此段申達候事、

二月二日

一、今日公より、諸侯へ御廻達如レ左、

德川慶喜御追伐之爲、御親征被二仰出一候段、昨朔日御決定、尙明三日太政官へ臨幸、巨細被二仰出一候、此趣申入候樣、德大寺大納言殿被二申聞一候、廻覽濟早々可二返給一候也、

二月二日　御實名

御連名

○三日、主上今日巳刻後、太政官へ行幸被レ爲レ在、御親征之儀被レ仰二出之一、御垂簾に而群議被レ爲レ聽、下參與之向へも、御下問有レ之、何も奉レ畏候段、御請申二上之一、

○四日、北陸道鎭撫使福井御着之上、北陸道先鋒之出兵可レ被レ命哉之內意、相聞ゆる趣、指添罷出候酒井十之丞より、昨日報知有レ之に付、御評議之上、德大寺殿迄、御指出相成御願書左之通、

今度北陸道鎭撫使、其領々へ御參着之上、爲二御先鋒一領地相應之人數差出候樣、御達可二相成一旨、差懸り候而は、不都合にも可二相成一に付、前以御內達有レ之段、若州小濱表におゐて、差出置候家來へ、御達御座候旨、越前守より申越候、然る處、私義昨年

來上京仕居、別而當春闕下不二容易一騷擾に立至候儀故、禁闕御警衛御沙汰之次第も有レ之、追々人數差登候處、御固場も被二仰付一、其上御役被二仰付一候に付、日勤等に而、彼是多人數滯京爲レ致候事に御座候、元來不肖之私、過分之御役儀を蒙り、不レ堪二其任一は勿論に御座候へ共、專ら御役筋へ、擧國之力を盡し、御奉公仕候心底之處、又々御先鋒へ出兵致候而者下々地國許薄地小人數之處、藩屛之任立兼候樣相成、兩樣之御奉公相勤兼、殆當惑仕候、兼而殊遇之寵命を蒙候上、彼是奉レ願候は奉二恐入一候得共、右無レ據次第御汲察被二成下一、何卒御厚評之上、何れとか一途に、盡力仕候義出來候樣、宜御沙汰被二成下一候樣奉二願上一候、以上、

二月四日　越前宰相

右に付、岩倉殿へも雪江被二差出一、御書面之御趣意、尙又御申立に相成候處、右樣之筋は決而無レ之筈に而、夫か爲に御出勤無レ之樣之御次第と相成候而は、以之外成儀に付、出兵不レ及二沙汰一樣、勅使之方へ早々御申遣し、御願書に付而も、先鋒は御免に可二相成一御內評之旨、御申聞有レ之、

一、今朝江戸表去月廿六日立に而、南部彦助到着、去る廿五日、西丸へ重役御呼出に付、林彌五郎罷出候處、板倉殿御逢に而、別紙御奏聞書、幷御直書御渡有レ之、可レ然御周旋相成候樣御賴、且朝敵には不レ被レ爲レ在段、吳々御申開きに相成候樣、且又御相續、紀侯と御願には候得共、是は朝廷之 思召に被レ任候樣合之段、御演說有レ之由申二達之一、

御封書寫

慶喜相續已來、乍レ不レ及勤王之道、心を盡し罷在候へ共、事々不行屆、恐悚之至に付退隱仕、相續之儀は、紀伊中納言へ被二仰付一被レ下候樣仕度奉レ存候、此段御奏聞被レ下候樣、御賴申候、以上、

正月廿五日　慶喜

松平大藏大輔殿

被二相副一候御直書如レ左、

一翰拜ロ(カ)◎晉然は相續之義、紀伊中納言へ差極相願候而は、朝廷へ奉レ對、恭順に不二相當一麥に付、三家三卿之內、朝廷之思召を以、被二仰付一候樣致度存意之處、家來之者共、遮而紀伊中納言へ相願候樣申立候に付、別紙之通相願候へ共、右は甚以恐入候儀に付、何れにも三家三卿之內、朝廷之思召次第、被二仰付一候樣致度、右等之次第被二差含一、早々御周旋有レ之樣御賴申候、夫々手續も有レ之に付、否早々御模樣御申越有レ之樣存候、早々不一、

正月　慶喜

松平大藏大輔殿

尙々事務多端、代筆申付候段、御仁海所レ希候、

右に付、直に朝廷へ御指出可レ被レ遊歟とも思召候へ共、事之體、此地之形勢とは、餘りに御輕易之御次第に而、御披露相成候はゝ、却而御爲にも相成間敷とも思召、且此間被二差上一候御請之御陳書も、御覽に相成候はゝ、御了解之御儀も可レ被レ爲レ在候へは、旁此御奏聞書は、御手前に御扣置に而、今一應、尙又御謝罪之御趣意相立候樣、可レ被二仰上一との御儀に而、御奏聞之儀無レ之、

一、此日公、大藏大輔御辭退被二聞召一、坊城殿より御達如レ左、

被レ辭二大藏大輔之事、被二聞召一候、仍而早々申入候也、恐惶謹言、

二月四日　俊政

越前宰相殿

○五日、昨日德大寺殿迄被二指出一候御願書、御附紙を以御指圖左之通り、

京師御警衛人數差出有レ之、且越前宰相上京之義にも候間、北陸道鎭撫使爲二先鋒一人數指出に不レ及候事、

右に付、即刻態飛脚を以、敦賀表出張酒井十之丞迄申二達之一、

一、昨日御到來相成候德川公御奏聞狀之義、猶又御熟考被レ爲レ在、御評議にも相成候處、東西之事情、如レ形齟齬相成居候而は、德川公而已ならす、往々皇國之紊亂に立到り可レ申儀に付、何分朝廷幷上國之形勢情狀、熟〻舊幕府へ貫徹不レ致候而は、不二相適一儀に付、御恐惶なから、御奏聞狀は御返上、今一ト際御謝罪之御條理分明に相立候樣との思召通り被二仰含一、本多修理出府被二仰付一可レ然との御決議に相成、其段修理へ御直命有レ之、依レ之一應御直書之御請、今晚御徒飛脚橋本兵吉被二指立一、御請如レ左、

謹而奉二言上一候、益御機嫌能被レ爲レ入、先般海上無二御恙一御東歸、奉二恐悅一候、抑先達而より、每々尊書頂戴被二仰付一、難レ有仕合奉レ存候、殊に正月廿五日御渡之尊書、幷御相續御願書、昨四日京着拜見仕、難レ有奉レ畏、直に太政官代總裁宮迄可二指出一之處、恐入候得共、愚存之義も有レ之、態と不二差出一候、右に付而は、言上仕度、旁一兩日之內、家老本多修理、其御地へ差上申候間、板倉伊賀より面會委敷聞取候樣、乍レ恐奉二願上一候、中々筆頭につくさる品に無レ之、何分にも微忠御亮察被二成下一、至當之御所置、爲二皇國一爲二御家一奉二懇願一候、書餘萬々之心緖は家老へ申含候、誠恐誠惶頓首謹言、昧死百拜、

二月四◎(カ)五日　御實名上

○六日、今朝太政官代へ、御家來御呼出に而、軍務掛より御達左之通、

今般御親征被二仰出一候に付、北陸道先鋒被二仰付一候條、國力相當人數指出、諸事總督之御指圖を受、令二勉勵一候樣、御沙汰候事、

但二月十五日迄に、總督本陣へ相揃候樣、被二仰付一候事、

右之通被二仰出一候得共、已に昨日、不レ及二出兵一段御

指圖濟に而、又々今日如レ此朝議之御次第、如何にも不審之至に而、御目的も付兼に付、猶明朝岩倉殿へ、御評議之御模様、可レ被レ及二御内調一との御決評也、

一、今日修理出府之義、表向被二仰付一、伊藤友四郎被二指添一、明日出立に付、於二彼地一周旋之次第等、御講究有レ之、

一、同人へ持參被二仰付一、大久保一翁老へ之御直書如レ左、

密呈、春寒峭峭、先以德川公益御機嫌能被レ爲レ入、奉二恐悦一候、隨而足下愈御清安、會計惣裁被レ命候由、御苦勞之儀、乍レ去爲二御家一幷賀、慶永迄も遥に安堵之次第に候、下官碌々瓦全罷在、且舊冬於二朝廷一議定職被二仰付一、其後固辭、更に被レ命、先般又々内國事務總督被レ命、如二下官一不肖之者を御登用、恐入候は勿論に而、宗家之御恥辱、朝廷之御失體、無二此上一奉レ存候、乍レ併奉命之上は、何分にも決死盡忠罷在候心底に御座候間、寸心之處は御承知希上候、公御東下後は、實に德川支族之身分に而は、片身狹く、太政官へ參勤致し、親征或は出兵等之評議之節は、實に殘念無レ限、ハラワタ斷チキラレ候心地に而候、不肖之心、御恕察偏に希上候、今日迄太政官出仕、朝廷御用取扱候も、一ツには宗家之御爲、御謝罪相立、御家御開運之盡力仕度と、存込候計に而、如二不肖下官一は一日も在職は出來兼申候、扨今度從レ公御直書被レ下候に付、所存言上仕度儀も有レ之、此地之景況申上旁、家老本多修理差出申候、表向は伊賀へ申上候事と存候、尚事柄により候而は、御前へ被二召出一、御直に京師之模様、太政官之景況、下官之愚存、御聞取奉レ願度候、留守居伊藤友四郎と申者差添下し候、修理義御前へ被二召出一候節は、友四郎も同樣奉レ願度候、修理近頃サラジンボに御座候間、上意之趣、伺取も六ケ敷哉と被レ察申候、且又足下にも、何卒修理、友四郎御逢ひ被レ下、下官所存、委曲御聞取被レ下候而、何分にも爲二宗家一至當之御所置奉二懇願一候、偏に御盡力奉二依賴一候、此御謝罪之道不二相立一候へは、京師におゐて盡力之道も無レ之、當惑之次第に而候、所存之趣は、修理へ委細に申含候間、同人より御聞取被レ下度候、先日より每々御投翰忝、殊に墨筆御惠賜辱、每々御懇切之事致二多謝一候、一々返答不レ盡レ之候、室賀甲

要も在京中、段々相談いたし申候、何卒萬事此邊御相談被レ下、甲斐へも盡力之儀被二仰下一度候、何そ呈上と存候へ共、今便取込、後信可二指出一候、用事拜答旁如レ此、意外之心緒は、修理へ申含候也、

二月六日於二京師邸一　　御實名

會計事務總裁大久保君

尙々時下御自愛專一存候、下官宰相大藏大輔兩人之樣に相聞、朝廷向不都合之廉有レ之候故、奉レ辭二大藏大輔一候間、此邊も御序之節、被二仰上一可レ被レ下候、

○七日、今朝岩倉殿へ、雪江被二指出一、此間出願之上、先鋒之義、一昨日御沙汰止に相成、粗安心仕居候處、又々昨日之降命、如何樣之御趣意と御伺之處、卿被二申聞一候は、則其處へも心付候へ共、惣體之諸侯へ被レ命候は、御親征之故也、其先鋒に外れ候而は、却而武門之恥辱に而、正に加州抔へは、何とも不レ被レ命は不首尾之姿に而、其御家抔は、首尾宜故也との事に付、御親征之先鋒に候へは、決而不レ奉レ辭候得共、夫によつて兩途之御奉公と相成候而は、於二國力一勤まり不レ申候へは、大藏大輔は當地引拂ひ候より外は無レ之候得共、此節左樣に申立候も、恐入候次第故、被レ及二御内談一候と申述候處、卿被レ申候は、當地を去候事は、決而不二相成一候間、人數計歸候而は如何との事に付、主人在京に而、家來歸れと申候而も、主人を案し、中々歸り不レ申候間、其儀は難二出來一と申候處、さらは拜借金を願候而は如何、五萬位に而手も合可レ申哉と被レ申に付、疲弊之事丈は承知居候へ共、私義會計には掛り居不レ申故、如何程に而都合可レ仕哉難レ計と申候處、夫は誠に困難之事也、則昨日も、何とか願出候事も可レ有レ之と申合たる事也と被レ申に付、唯今之行形に而は、當地引取候より外、手段無レ之候得共、其儀難二相適一候は丶、當座即按には御座候へ共、當時有合之人數に而、御親軍之御用相勤候樣には、相成申間敷哉、其儀を相願候而は如何と申出候處、夫は至極可レ然、願出候事に相成候は丶、心得居可レ申との御挨拶に而退座、歸邸之上前條申上處、御評議之上、親軍御用御勤め、御先鋒と御振替之御願書、酒井與三左衞門を以被二指出一、左之通、

今般御親征に付、同氏越前守へ、北陸道先鋒被二仰付一、難レ有仕合奉レ存候、然る處私義、去年來上京仕、

御役相蒙り、人數も召呼置候儀に付、肇而申上置候薄地疲弊之國柄、父子兩途之御奉公、相勤候程之國力兵數、何分にも引足り不レ申候、尤國許へも申遣候得共、越前守におゐても、當惑之外は有二御座一間敷と奉レ存候に付、幸私在京之儀にも御座候間、指向此表詰合之人數を以、御親征之御用相勤候樣、仕度奉レ存候間、北陸道御先鋒と御引替被二成下一候樣奉二願上一候、當今之御時體、右樣奉レ願候義、恐入候得共、何卒厚御諒察之上、宜御沙汰被二成下一候樣奉二內願一候、

二月七日　　御名

一、此日於二太政官一五藩御申合せ、總裁宮へ御建白如レ左、

臣等謹而按するに、古の能く天下の大事を定め候者は、必先天下の大勢を觀て、緩急機に隨ひ、所置宜を得候故に、唯功德の一時に光被するのみならす、萬世不拔の業、是に於て相立候、今哉皇上始て大統を繼かせ玉ひ、御政權又一に歸し、凡百の宿弊も更始一新し、天下萬姓目を拭ひ、治を望むの秋也、即在朝の百官自ら奮發し、內は皇上の御德化を輔け奉、外は皇威を萬國に偃へ、臣子の分を盡さん事を欲す、就中今日の急務は、皇國と外國との交際を講明せすして不レ叶義に奉レ存候、近比朝廷始て外國事務の官職を設けられ、其人を御選擧被レ遊、專ら御力を被レ盡候は、天下の人をして、方向する處を知らしめ玉はんの御趣意に而、皇威を萬國に赫耀せしめ候は、此時に可レ有レ之と、不レ堪二感銘一奉レ存候、乍レ併古語にも、人心同しからさること面の如しと申候而、在上在下の人、未た各々區々の議を執て、疑念なきこと能はす、又或は漢土の人の如く、自ら尊大にして、外國を禽獸の如く蔑視せしかとも、終に彼に打負け、却て驅使せられ候樣に成行候覆轍を踏むに至るへき歟と、甚憂慮仕候、依て熟考仕候處、今日の先務は、上下協同一和して、宇內の形勢を辨し、皇國一大革して、開業すへき所以の方向を確定すへき義第一と奉レ存候、是迄皇國は一方に孤立し、世界の事情に達せす、只偸安を志とし、荏苒衰微を致し、彼か爲に制せらるへき次第に立至り候と、外國の他邦に航行し、衆善を包取、氣運日々に開け、政治文明兵食充滿し、天下に縱橫致し候と、比較致見候得は、盛衰の原由も、判然相分り可レ申哉に奉レ存候、元より膺懲の重典もなくて、不レ叶儀には候へ共、控御の術其方を得候得へは、遠人も懷き服し候道理にて、尤無罪の人を膺懲致し候譯には無レ之候、中古朝廷にも玄蕃の官を立置かせ玉ひ、鴻臚館を建させられ、遠人を御綏服なされ候ことも相見え居、其後天正慶長の間には、蠻夷共屢西國へ渡來交易致し候、若も來港不レ致節は、大將軍より書簡を遣し催促し、猶も遲緩に及候時には、此方より大軍を發し、攻擊に可レ及なと申越候儀も有レ之處、島原の一亂已來、始て幕府より鎖國の令有レ之候、乍レ併漢土和蘭に於ては、猶交易差許候へは、一切に外國人は攘ひ斥け候と申譯には更に無レ之處、近年攘夷の論盛に相起り、諸侯の內、偶據斥致し候もこれあり候へとも、素より一國の力を以て不レ可レ爲は論するに足らす、且先年幕府より、十年を期して成功を奏し可レ申なと申上候は、陽に其名を假り、陰に其私を行ひ候詐術にて、先帝日夜御苦慮被レ爲レ遊御義とは、同年の論に無レ之と奉レ存候、然れは今日皇國の衰運を挽回し、皇威を海外に耀し奉る儀は、萬々一刀兩斷の朝裁を以て、井蛙管見の僻論を去り、先つ在廷樞要の御方方より、豁眼に被レ爲レ成上下同心して、交際の道無二一念一開せられ、彼か長を取り、我短を補ひ、萬世の大基礎相据へられ候樣奉二專祷一候、仰き願はくは、皇上の御英斷、能く天下の大勢を御觀察被レ爲レ遊、是迄犬羊戎狄と相唱候愚論を去り、漢土と齊しく視させられ、朝典を一定せられ、萬國普通の公法を以、參朝をも被レ命候樣、御贊成被レ爲レ在、其旨海外へ布告して、永く億兆の人民をして、方向を知らしめ玉ひ度儀候（◎候字、岩倉公實記ト作ル）偏に奉二懇願一候、誠恐誠惶頓首々々、

越前宰相
土佐少將
薩摩少將
安藝少將
細川右京大夫

二月七日

○八日、今日御重役被二指出一候樣御達に付、酒井與三左衛門參朝之處、佛國軍艦四隻、歸海へ渡來、今度王政復古に付、條約之改正、且御親征は全國の爲に不

利なる故、可レ被レ止との建議、且又隔東講和之内意も有レ之に付、外國掛小松帶刀於二兵庫一可レ及二應接一に付、其節列藩之重役も指加候樣、三條殿に木戸準一郎差加り、與三左衞門へ御申渡有レ之由、尤彼より、御親征御止め申上候共、決然御止り無レ之、又公平之王政を行はるゝ際に當り、外國より彼是指綺候儀は、決而爲レ致不レ申筈之含に而、應接に相成候趣も、演達有レ之由、直樣與三左衞門へ下坂被レ命、夜中及二發船一、一、此日彦根藩横川源藏、去る廿三日江戸表出立、昨日京着之趣、毛受鹿之介迄申出候に付、今朝鹿之介より申遣し、參邸之上、室賀甲斐殿より之呈書持參指二出之一、且相含越候口上も有レ之趣に付、拜謁被レ命、御聞取に相成處、專ら御謝罪之一條に而、甲州見込も頗至當之儀に被二思召一に付、猶御心付之條々被二仰聞一、直樣引返し、御返書幷御返答之次第、源藏より甲州へ相達候樣、御直に被レ仰二含之一、甲州より之呈書如レ左、

奉二謹啓一候、未た春寒去兼候、先以益御勇健被レ遊二御座一、奉二恐壽一候、然者今般之御事柄に付、畿臣儀も朝譴蒙、官位被二召上一候段傳承仕、奉二恐入一候、右樣之身分に而、書簡等指出候も、不レ憚之至恐入候得共、臣子之分默止難レ仕、且君上御恭順之御底意は、今日に至候而も、聊御替は不レ被レ爲レ在候處、彼是談論之擁塞に寄、不レ計も朝敵之御名被レ爲レ蒙候場へ立至候段、君上にも深御痛心被レ爲レ在、御側近勤居候畿臣、實に泣血悲歎之至奉レ存候、然る處、此間尊公樣より、何國迄も御恭順被レ遊候樣との趣承知仕、不二相替一御厚陰、不レ堪二銘肝一、奉二感荷一候、舊冬於二坂地一蒙レ仰候已來、病氣に而不レ任二心底一罷過候次第、就而は、此上御恭順御底意貫徹仕候樣、御盡力被二成下一度、至願に御座候、只々御恭順と可レ申候迚、御運籌被レ成方も有二御座一間敷奉レ存候、別紙件々を以、御實考被二成下一候樣奉レ願候、畿臣儀、從來知過も蒙居に付、微行拜謁仕、心肝吐露仕度奉レ存候得共、御嫌疑にふれ候而は恐入候得は、不レ得二止事一、書中を以奉レ願候、委細之情實難レ奉レ盡、且途中懸念にも奉レ存候へは、兼々面晤も致候に付、井家臣横川源藏へ密々申含置候間、御直に、別紙ケ條之趣、御聽上可レ被二成下一、時宜に寄、不レ苦候はゝ、御近臣之内壹人御指越、途中迄潛

行、拜晤仕度懇願に御座候、潛蟄中執筆、別而錯亂、御推見奉二願上一候、先は奉二申上一度、略文御免可レ被二成下一候、匆々頓首、

正月廿三日認　　甲斐

大藏大輔樣

別紙

靜寬院宮樣より、御歎願之次第も可レ被レ爲レ在と奉レ存候に付、尊公樣厚御盡力之段、奉二願上一度候、將臣子よりも、追々歎願可レ奉レ願候間、宜御含奉二願上一候、

一、於二臣子一、申上候迄之儀も無二御座一候へ共、御家柄之御義にも被レ爲レ在、一際御盡力奉二願上一候、且兵御差向御延日之段奉レ願度、夫々盡度懇意有レ之候間、何分にも一端破れに相成候而は、吳吳も皇國之御爲に不二相成一候、能々御熟慮可レ被二成下一候、中々筆談難二申上一御座候間、極密御聽取奉レ願候、密々御家臣一寸御差下し之段、奉二願上一度候、

右御返書如レ左、

正月廿三日之懇翰、二月八日朝、彦藩横川源藏參邸差出、忙手披閱、春寒嶙峋之處、先以我宗家德川公、御東下後之御安全を詳に被二垂示一、歡天喜地、初而安堵之至奉レ存候、隨而足下愈御多祥御勤務、不二相替一爲二御家一御盡力、扑賀令二降嵐一候事に候、我宗家德川公を、日々存上、夜々魂江戸夢は夫計に候、下官正月中旬、於二太政官一、內國事務惣督之勅命降下、如レ臣昧愚にして奉職、却而宗家之恥辱、朝廷之失體、速可レ奉二固辭一之處、我宗家德川公、謝罪之道相立候迄と存し、固辭奉らず、因循奉職罷在候儀に而、下官之微忠仰二亮察一候、扨足下も朝譴、被レ止二官位一候儀不レ得二止事一、下官は誠御心中嘸々と、落涙推察申候、德川公之御恭順之御底意は、今日に至り候而も、聊御替り無レ之との事被二仰下一、何より以難レ有、先日より大久保一翁よりは申越、於二下官一は、江戸より御恭順之儀、不レ被二仰越一候とも、下官壹人は、德川公之御恭順丈けは、衆而思召相同居候事故、能々心得、常々感服致居申候、乍レ去御心はいか程御恭順候とも、其姿に至り、御恭順之實効無レ之而は、天下承知いたし不レ申は明白之事に而候、過去之事に候得共、御上京御先供之行違云

云と、被二仰立一候とも、第一歸國せしめんと、朝廷へ被二仰立一候會桑、御先ゟ被レ遣、會桑具足着用に而伏見へ上候、先供に具足着用は如何、是一ッ也、於二坂城一薩藩之罪を被レ揚、君側之姦を除く爲、軍列に可二馳加一御軍令、諸藩へ布告、尚朝廷へも被二仰立一書付、以二尾越一被レ出、君側之姦を除く軍列に可二馳加一との義、進軍之形アラハレタリ、上京先供と被二仰立一相違す、是二ッ也、徳川公捨二華城一御東下後、城中地雷起り、終に炎上、是三ッ也、小事色々有レ之候得共、一ッも御恭順之形ちなく見へ、天下返二逆朝廷一を稱し候而も、下官ごとき支族之末座に居り、夫ても恭順之心て御座りマストハ、とふも申開き難二出來一、不レ可レ言苦心、實に御察し可レ被レ下候、下官は別而御懇命蒙候者故、まけても御ひるき申度候得共、とふ考候而も、御恭順之御心の申ひらき、口に出しかたく、只今と相成候而は、乍二内内一土、藝、細川にても、人心日に離れ候姿に而、殘念徹骨申候、段々御申越之儀、誠以感服、別而御側近く御出之身分に而は、泣血悲歎、御察申候、於二下官一も同然候、右之通故、御恭順之御心は難レ有候へ共、此上御恭順之御實効顯然願は敷奉レ存候、第一歸國せしめんと、朝廷へ被二仰立一候會桑、御先ゟ被レ遣、會桑具足着用に而伏見へ上候、先供に具足着用は如何、是一ッ也、於二坂城一薩藩之罪を被レ揚、君側之姦を除く爲、軍列に可二馳加一御軍令、諸藩へ布告、尚朝廷へも被二仰立一書付、以二尾越一被レ出、君側之姦を除く軍列に可二馳加一との義、進軍之形アラハレタリ、上京先供と被二仰立一相違す、是二ッ也、徳川公捨二華城一御東下後、城中地雷起り、終に炎上、是三ッ也、小事色々有レ之候得共、一ッも御恭順之形ちなく見へ、天下返二逆朝廷一を稱し候而も、下官ごとき支族之末座に居り、夫ても恭順之心て御座りマストハ、とふも申開き難二出來一、不レ可レ言苦心、實に御察し可レ被レ下候、下官は別而御懇命蒙候者故、まけても御ひるき申度候得共、とふ考候而も、御恭順之御心の申ひらき、口に出しかたく、只今と相成候而は、乍二内内一土、藝、細川にても、人心日に離れ候姿に而、殘念徹骨申候、段々御申越之儀、誠以感服、別而御側近く御出之身分に而は、泣血悲歎、御察申候、於二下官一も同然候、右之通故、御恭順之御心は難レ有候

新宰相より承り申候、何分事柄により、盡力も可レ致候得共、とふも只御隱居計りに而は、下官も周旋六ケ敷哉と存候、先日條城へ參り、太政官代、御本丸御殿へ上り拜見申候、城春草木深、感慨無量、長局、小姓局、御膳所等其儘にして、亂雜不レ可レ言、机鏡、立紙德利諸道具之儘、見るに不レ可レ忍、堂上抔も被レ參候而恥ケ敷、穴へても入度心中、御察可レ被レ下候、色々申入度海山に候得共、書不レ盡レ言、大略報答如レ此、書外源藏へ申含候、時下爲二御家一御自重專一存候、下官之苦心、此返報をかくに臨み、落涙數行、嗚呼之二字に付し候也、

二月八日　　御一字

知甲州室氏座下

朝夕も夜も涙にかきくれて

君か御うへのしたはるゝ哉

○九日、御布告如レ左、

御親征行幸、可レ爲二當月下旬一被二仰出一候事、

追而日限、更御沙汰候事、

一、一昨七日被二差出一候御願に付、御指圖左之通、

越前宰相

北陸道先鋒出兵之儀に付、願之趣被二聞召一候間、不レ及二出兵一候、尚追而可レ被二仰付一義も可レ有レ之旨、御沙汰候事、

二月九日、

一、此日丸岡藩知邸より、江戸表之報告有レ之、帶刀盡力粗行屆、前橋候今九日御發途に而、廿八日御上京相成筈之趣、帶刀より申來候段申二達之一、

○十日、來る十四日太政官代へ行幸之儀、被二仰出一、但十三日に至り、御風氣に付、御延引被二仰出一、

一、此日紀藩伊達五郎來邸、此度江戸表爲二周旋一紀侯より小出和泉、草野錠之助被レ遣に付、朝廷へ御指出之御書取、爲二御相談一持參いたし、入二御覽一、思召相伺候處、御立派成被二仰立一候得共、其通り御行屆に不二相成一候而は、却而御不都合に候へは、御口達之方、御適宜に可レ有レ之歟との御挨拶に相成、

○十一日、今日前橋御家老竹田市郎兵衛被二召呼一、江戸表之模樣御尋有レ之處、去る朔日御登城有レ之、夜半に御退出、直に御上京之義被二仰出一候由、二日立之飛脚に申來候而、事情之義は、思召通り御行屆に相成候段、傳語有レ之而已に而、委敷事は更に相分り兼候

由、七日には山田太郎左衛門爲ニ上京一出立之段申上候處、太郎左衛門は、一刻も早く致ニ上着一候樣、急便を以申遣し、大和守樣にも、成丈け御差急き、御上京被レ成候樣可ニ申上一旨、御直に被レ仰ニ含之一、

○十三日、去る五日江戸西丸へ、御留守居御呼出にて而、慶喜公御直書御渡相成に付、同七日林矢五郎持參、御徒高木文平指添、今朝京都着に付、御直書御拜見之處、謝罪狀如レ左、

慶喜相續以來、乍レ不レ及勤王之道、心を盡し罷在候得共、菲才薄德、事々不行屆、加レ之近日之事端、奉レ驚ニ宸襟一候次第に立至り、深奉ニ恐入一候に付、謹愼罷在、伏而奉レ仰ニ朝裁一候、此段御奏聞被ニ成下一候樣奉レ賴候、以上、

二月　　御實名

副啓、今般鎭撫使東下之由相聞、自然關內江戶市中迄、相越候樣に而は、兼々鎭靜方は厚申付置候得共、人心動搖、過激之輩、如何樣之義可ニ相生一哉も難レ計、深く謹愼罷在候旨意を失ひ候樣、成行候而は、深奉ニ恐悚一候間、可ニ相成一には、右鎭撫使東下之儀無レ之樣、御含之程、御賴申候、以上、

二月　　御實名

大藏大輔殿

別紙

先般憚ニ朝憲一、退隱仕、相續之義差極、相願候儀は、家來共申立、其外無レ據事情有レ之故、相願候得共、猶熟考致候へは、右樣之儀相願候而は、深く恐入候儀に付、改而別紙之通相願候間、可レ然御周旋之程、偏に御賴申候、以上、

二月　　御實名

大藏大輔殿

今日太政官御出勤無レ之、御調之處、日比望覺之思召に而被レ爲レ待候、右御謝罪狀到來に付、御感悅不レ斜、即刻御供揃に而、御麻上下を召、太政官へ御出仕有レ之、先つ岩倉殿へ御內談之處、至極御聞入も御宜、猶關東之事情も御承知被レ成度候間、明朝矢五郎を、卿之御宅迄御指出に相成候樣被レ成度との御事之由、夫より三條殿、岩倉殿御揃之席に而、表向御達に相成候處、惣裁宮へ御指出相成旨に而、御落手相成由、

一、同時矢五郎より指出、前橋侯御返書如レ左、

正月廿五日御日附之尊翰相達、難レ有奉ニ拜見一候、

先以天朝御安寧、次に尊兄愈御勇榮、被レ成ニ御在京一奉ニ大賀一候、就而は縷々之御書中、具に奉ニ感承一候、既往之御苦情、實に深察仕候、猶此上とも、御精精之程奉ニ伏願一候、誠に小生には、心底之萬一手屆兼、只々心痛之仕合、兎角小生には蒙ニ朝命一候に付、近々所勞中なから、押而上京之筈に付、其上は萬事御示敎之程、厚奉ニ願置一候、委細は御家來へ申含置候間、當地之模樣は、是より御承知可レ被レ下候、發足前大繁雜之上、御家來發足に差懸り、先は大略御請迄に、如レ此御座候、謹言、

二月六日　　大和守

大藏大輔樣

一、同大久保一翁老より呈書如レ左、

益御勇往奉レ賀候、然者於ニ尊地一も、千萬御苦心奉ニ遙察一候、矢五郎幷有馬帶刀より、御模樣委曲承知仕候、帶刀は人傑と見受候に付申上、御愼被レ爲レ在候御居間へ召出之儀申上、昨夜も一時計出居候、毎日々々登城、退出は多分夜半過、朝は明候と、正論家海陸軍士柔に過候と相咎、其辯解に食事之間も無レ之、勝房にも同樣之由、忍兼、兩三日同人引候位之事に候、乍レ去上御一人確然故、諸侯右御賴申上、盡ニ死力一激論を說破仕居候、前後之一戰同樣に而、以レ身爲レ的罷在候、此四五日は、小人は一吹候得共、平生愛居候志士に手餘居候、御一笑々々、閣唐津一人に相成、疲勞甚敷、眞病、是にもこまり入候、扨御趣意之處、此度貴家へ御賴之御謝表に、神以無ニ相違一事に候、其段は御休意、爲ニ皇國一御盡力伏希候、熊本侯、容堂侯、厚被ニ仰合一小林も出京候哉之由、乍レ憚御一聲可レ被レ下候、萬事此度之御謝表、御貫之御信意故、委曲は不ニ申上一候、謹言、九拜、

二月六日　　虛堂寬

築井君

二白、未レ知ニ眞僞一候得共、勅使何之小路殿とか相唱、信州邊迄被レ成、◎此間脫字あるへし家每に金米等爲レ出候趣に而、其注進來候每に、激論家馳出たかり、甚難澁相極候間、相考候處、眞之勅使には無レ之とは存候得共、堂上方之御名故、此方に而留方差支候故、昨夜一策相考、肥藪始之、尊地御役被レ命候參豫等、大侯之此之地に罷在候留守居へ相談、各家より兩三人つゝ出、穩に爲候積に相成候、此段も御心得に

申上置候、再拜、

私云、有馬帶刀は大久保殿へ罷出候節、沙汰有レ之、四日夕登城之處、夜に入於二御居間一、上樣御逢有レ之、御謝罪狀拜見被二仰付一に付、心付之義申上候處、平山圖書殿執筆に而、大久保殿御相談、所々御直し有レ之、夫より圖書殿清書之爲退坐に付、帶刀より、大久保殿へ暫時避席被レ命候樣相願ひ、帶刀一人御縁元へ相進み、公之御才識に被レ爲レ長候故、御德誼は御短なる姿に而、有司に御任用なく惣而御自任被レ遊候故、御罪御一人に歸候條理を、諄々言上、仍レ之御謝罪之義は、御一身に御引受不レ被レ遊候而は、難二相濟一次第、關西之事情を推て、十分に申上候處、流石之御英才に而、逐條分明に御會得被レ爲レ在由、夫より再度之御謝罪狀御草稿に御取掛り被レ遊候由、

一、同勝安房殿より呈書如レ左、

小臣之を海外之一知己に聞く、近日魯西亞首として、同盟諸國に報告ありと、其趣旨に云、東洋日本之定約は、德川氏幕府之職たりし時結ひし處、今日に至つて、政權朝廷に歸納せりといへとも、其國之太身會議、一定之事ありしを不レ聞、一二之侯伯倉卒に出つるものは、尤以可レ疑、其條理を究問し、其情實を盡し、其可レ討は討ち、其可レ助は助くるものは、大國小國を保護し、其國之生靈塗炭を救ふ、各國條約之大信公義之至れる所なり、同志同約之諸國は、共に軍艦を整、東洋に向ふて、其是非を問はむと、其實否に至つては、未た如何を不レ知といへとも、必其事發らん必せり、從レ古東洋諸國、西洋各國之爲に蹂躙內附する者、比々として皆同レ屬、其邦內々に是非、人相喰、終に其國家を失ふを不レ察、私を逞くして、其極其國を破るに不レ出なり、今哉英吉利は兵庫にあり、佛良察、米利堅は橫濱に据て、英之下風を不レ好、魯國豈此二國之下に附むや、大信を唱て、以て我皇國を內附せんとす、誠に其眞意之ある所、是を掌上に視るか如く、然るを思はす、侯伯默して唯其領國を固守せんとするは、是を其任といはんや、且勤王之眞意、またいづれに在るや、百歲にして公義定る、如レ斯成る者是を報國といはん歟、印度支那之轍不レ遠、朝廷を汚辱し、皇國を內破す、其責何人に哉、況や今百年を不レ待して、

小臣其詳解を問はむとす、希くは私を去、公平至當を以て、小臣か疑惑を解かむ事を、恐惶謹言、

二月五日　　勝安房

一、同時矢五郎より申上、東狀之大略、

先般御隱居之被二仰出一に而、一同稍鎭靜之處、紀州より歸東之殘兵榎本等より、再紛亂を生し、激烈輩君前へ詰切り居り、何事も難二出來一次第之由、○有志之諸役も、激烈輩に迫られ、不快引多く、廟議愈決兼候由、○會も退隱歸國之運ひに相成由、○山里へ御蟄居之御設も有レ之候へ共、一日たり共御引籠相成候へは、直樣惑亂之次第に付、無二是非一御聞政之御運ひ之由、○前橋侯十三日御登城、御謝罪之儀被二仰上一、御聞入而已に而、御採用無レ之、十八日も同斷之處、當月朔日御登城、尙又被二仰上一、粗御採用に相成、夜半御退出、夫より御上京御運ひに相成由、○老公より前橋侯へ之御直書相達候し已來、御謝罪之御筋、大に御果敢取に相成由、○有馬帶刀は、着府已來所々遊說、四日には御前へも被二召出一、御相談も被レ爲レ在由、矢五郎も同道、或は相談に而、大久保殿初所々奔走之由、○御謝罪狀は、疾よ

り、御出來相成居候得共、御披露難レ被レ成、段々御手延に相成候處、御指出後御披露相成候はゝ、不レ得二止事一覺悟も定り可レ申との御內決に而、先つ御奏上之御運ひに相成、夫より追々御發表に相成事之由、

一、右御謝罪狀御到來に而、御奏達に相成義、御國表へ被二仰進一御直書如レ左、

急々一筆申入候、春寒難レ去候處、愈御淸全珍重存候、抑去る五日、留守居西丸呼出に相成、罷出候處、德川公御直書御渡に相成、林矢五郎去る七日立、今十三日朝京着、御直書披見、右は御謝罪狀に付、直に今夕太政官へ罷出、（麻上下、三條大納言殿、岩倉右兵衛督殿へ差出、西鄕御落手被レ致候、右御謝罪狀別紙之通に候、此段念之爲可二申入一、如レ此候也、

二月十三日　　御實名

越前少將殿

尙々御謝罪狀二通、幷此書狀、與之輔、家老、中老、側用人、中老、見習、田內源介、十藏、彌十郎、執口計へ可二示給一、其餘は禁二漏達一候也、

一、容堂君へも、御相談旁可レ被レ爲レ入御耳之處、御不

快御爾々無レ之趣に付、象二郎を以被二仰遣一、滞口孤雲へは鹿之介より申聞、藤堂歸雲、新野眞拙、三浦帶刀等は、先日御家老より及二内談一候哉も有レ之に付、御家老より以二手紙一申通、田宮如雲、久野丹波守へは、雪江より手紙を以及レ通二達之一、

一、此日丸岡藩有馬帶刀より、雪江へ之來帖、同藩新名與太夫より差二出之一、如レ左、

去月廿九日夜御認之御細書、今日尊邸草野生より私云草尾之誤早速御廻しに相成、謹閱仕候、餘寒退衆候處、先以益御壯健、被レ成二御奉職一、奉二拜賀一候、然は其表之御模樣、縷々御申越、又一翁先生にも、尊書之趣萬々辱奉レ存候、當方之事も殊之外御掛念、御尤至極、僕着前後形勢一變、昨日迄之處は、林氏承知に而歸京候得は、少は御安心と奉レ存候、今朝厩橋邸へ參上、公始、山田、四王天之兩生にも面會、猶又同公御發駕前、御證跡御目擊有レ之度旨、夫是申上、殊之外御落意、愈十日御發程之筈、今夕一便取計候に付、御參申上候、明早朝一翁公へ參謁之積、兎も角も此方丈けは、精力相盡し可レ申、寡君も快に付、明日押而登營、十三日には發途、僕も從駕又又再上、御苦勞可二罷成一、尚又御指揮を得、周旋盡力可レ仕候、錦地兩端之義如何哉、何分御盡力有レ之、征伐之儀は御延期肝要所レ祈候、尚又追々成行、可レ得二貴意一、如レ此御座候、頓首、

二月七日夜　　帶　刀

雪江樣

一、此日紀藩久野丹波守參邸、雪江及二應對一候處、申聞候は、去月廿五日、於二江戸表一、紀州家へ御相續之義被二仰出一段、飛船に而申來候へ共、決然御固辭之恩召に付、關東へは其段被二仰上一、朝廷へも御辭退相成候段、今朝安藤水野を以、太政官へ御達に相成趣、爲二申上一參上之由に而、書取等指出に付、雪江申答候は、右御隱居御相續等之御奏聞書、先達而此方樣迄御廻しに相成候得共、此節柄被レ對二朝廷一、以之外成御不都合に付、不レ被レ及二御奏聞一、此方樣より江戸表へ御返上相成事候へは、此御書面御達等は、關東之御不埒を御顯はし被レ成候樣成物に而、弊藩よりは不二申上一、世話は兎も角も、表立上達之儀は無レ之候得は、御書取御指出之儀も、可二相成一は御控に致度と申談候處、丹波守も、如何にも然なりと速に同意し、上達已前候はゝ、

早速引留可レ申と、伊達五郎同道、太政官へ出頭せり、

○十四日、今日公太政官へ御出仕之處、俄に御參內相成候樣、岩倉殿より御達有レ之、下參與之面々も同樣、未半刻比參朝之處、右は外國公使參朝之儀、彼より不二申出一已前、此より被二仰出一度段、浪華東久世殿より御申越、小松よりも後藤迄申來に付而なり、申刻比與御廊下におゐて、總裁宮、岩倉、中山、正三、德大寺等之諸卿、公弁下參與迄、御一席之大御評議なり、拜禮之節、握手或は屈膝等に而之俗論甚敷、更に不二相決一して夜に入、遂に叡慮伺と申事に相成、戌半刻比迄御手間取、亥刻前に至り、漸く京師へ被レ召、參朝可レ被レ命、御決議有レ之、其段早々浪華へ御返事有レ之由、拜禮之實際に至つては、極內狀は未決之由、岩倉殿歎話せられたり、御場所は南殿條城兩議有レ之、遂に南殿に被レ決たり、

一、今朝藤堂歸雲、新野眞拙參邸、雪江對接之所、昨夜之通達に付、猶江戸表之御模樣同度との事に付、彼地之事情及二物語一候處、何分追々相伺、精々盡力可レ仕、歸雲儀は一兩日中拜謁相願度由、眞拙は万端御指圖に隨ひ可レ申との趣なり、

一、於二江戸表一、御謝罪狀被二指上一候御運ひには相成候得共、去月廿九日板倉侯隱居、嫡子萬之進へ家督被二仰付一等、此節御不都合候由、於二江戸表一風評も有レ之趣、矢五郎申出候義も有レ之に付、猶其邊之御不體裁有レ之候而は、御大事之義に付、態と御人にても御指下し、御周旋有レ之樣、御談被レ成度と、今晩薄暮比より罷出候樣、尾之田宮如雲、紀之久野丹波守は不快に付、伊達五郎へ申遣す處、如雲は其刻罷出候へ共、御退朝御運延可二相成一御樣子相聞候付、相返し、五郎は相考御歸殿後に罷出に付、鹿之介應對、御趣意申聞、領承罷歸る、

○十五日、御謝罪一條に付、今朝德大寺殿へ御直書幷御建白書被レ遣、如レ左、

一筆令二啓上一候、愈御安全珍重存候、抑昨夜は不二容易一御配慮、實に感服仕候、別紙之通差出候間、何分にも今日は、早急朝議被レ爲レ在度奉二懇願一候、尊卿御同意候へは、岩倉迄御出し奉レ希候、下官追付參朝可レ仕候間、尙委細期二其節之面晤一候、仍而此段申入候也、

二月十五日　　御實名

德大寺殿

御別紙

一德川慶喜謝罪狀指上候上は、此段速に天下へ御布告有レ之、早々諸道之追討使、幷諸藩之進軍を阻め、蒼生之塗炭を被レ爲レ救候義、今日之大御急務と奉レ存候、此儀一日相後候得者、天下一日之勞費難二算レ數名狀二儀と奉レ存候、仰冀くは、今日大總督之御進發を被レ止候はゝ、是亦生民之安堵、如何計に可レ有二御座一哉、無上之御仁政と奉レ存候、外國之御交際におゐては、昨夕已に御決定に而、御安心之御儀と相成候得は、今日は、內國におゐて差向候大議を建言仕候、幸に今日諸侯も參集之儀候得は、右止兵之大令を被レ發、好生之御仁惠を、天下諸侯之民心へ浴くせられ、御一新之御折柄、是迄兇器を被レ爲レ動候は、實に不レ被レ爲レ得レ止之御趣意たる事を、御諭告御座候はゝ、騷然たる人心一定に歸し、沛然たる御德澤皇國に充溢仕、萬生至公之御新政を奉二感戴一轉レ凶爲レ吉之好機會と奉レ存候得は、當職におゐて、至大至願奉レ存候、早急之御評議被レ爲レ在候樣仕度、此段謹而奏聞仕候、恐惶謹言、

二月十五日　　臣　御實名

一、今日在京諸侯惣參內被レ命、外國交際之義御布告有レ之、下參與之面々も參集を被レ命たり、此時外國人へ御對面之儀、後宮之物議等有レ之、未決に而、當路之公卿殊之外苦惱せらる、暮時前公、岩倉殿と御一處に天前へ被レ爲レ候、更に交際之事情、詳悉極言御明辨有レ之、御退出之後、岩卿猶滯座に而、御諫諍被二申上一、漸くにして拜禮も可レ被レ命に御決定有レ之由、今日御散朝及二夜隱一カに付、御歸邸之上、御內儀より御膳部御酒御拜領被レ遊、

一、今日征討總督宮御參內、直に東海道へ御進發有レ之、

一、關東御謝罪之筋相立候に付而は、已に御建白も被レ爲レ在、猶又右御進發御抑阻之儀も、岩倉殿迄種々御懇告有レ之候へ共、眼前に相迫り候儀と申、是迄紛々風聞も有レ之義故、今日遏旅之儀には至り兼候御次第に付、尾紀被二仰談一、御周旋之義を被レ及二御內談一候處、是は御指圖之廉には無レ之候へ共、宗家之爲に盡力は勿論之事に而、夫か爲に御嫌疑等可レ有レ之譯は無レ之との御挨拶に付、今日參朝致居候田宮如雲、安藤飛驒守へ、御直談に相成處、各家老東下周旋盡力之義を及二御請一たり、○雪江如雲は反覆論談に及ひ、關東君臣十分伏罪、謹而待二斧鉞一之場に至り、面縛して軍門に御悔謝、其上に而朝裁を被レ爲レ仰候樣御儀、公論至當なるへきに決し、其筋を以夫々御談に相成、又御謝罪之筋、和宮樣を御賴に而、總督之軍門へ御歎訴之二路も可レ有レ之と示談せり、雲州侯も幸ひ御參內に付、右御相談に御加はり可レ然との思召に而、大旨を內臣妹尾右衞門迄、雪江より申二談之一、尙明朝參邸、相伺ふ筈也、

一、田宮如雲執筆に而、尾紀被二仰合一之御趣意書如レ左、

御本家より之御伏罪書を、越老侯より御指上に相成候得共、御親征御延引と申御手順にも不二相成一、既今十五日大總督之宮御出陣と相成、越老侯にも深く御苦勞被レ爲レ在、方今之御模樣、段々御回護之上、紀侯等之重職急行東下之上、盡力之致方を、御內々被レ爲レ示候趣如レ左、猶委細は口授に附す、

一先般京坂間之一件は、猶御本家而已之御罪のみならす、第一會桑を始、執參幷旗下之士共にも有レ之事に付、罪之ある處之者夫々深く奉二恐入一、悔悟伏罪、誰一人抗命之者も無レ之、如何樣之御沙汰も謹而奉レ待二朝裁一候樣相成事、

一右樣行屆之上、田安御隱居、一橋大納言樣、右之趣之謝罪狀を御持參、大總督御軍門へ御出御捧に而、右樣一同伏罪、朝裁次第に相成候上は、何卒最早錦旗は御止りに相成候樣、御哀訴之事、

一靜寬院宮樣より御同◎內カ使を以、大總督へ御寬大之御歎之事、

一朝廷へは、輪王寺宮之御役方を以、是は強而是に限り候譯に非す、急行に而、前顯之通謝罪狀を爲二御持一、錦旗御止り方之御歎訴之事、

○十六日、今日於二太政官一左之通被二仰蒙一、

越前宰相

今度外國人上京參內、右御用掛被二仰付一候事、

右同樣、中根雪江へも被レ命たり、

一、今日中山殿、正親町三條殿へ被レ遣御書如レ左、

一筆令二啓上一候、先以至尊益御機嫌能被レ爲レ入、

奉ニ恐悦一候、抑昨十五日被レ爲レ召に付、天前へ罷出、巨慶永不レ顧ニ恐惶一干ニ冒威殿一、充分愚衷之趣奏聞仕、誠以戰寒之至、實に斧鉞之誅難レ遁、奉ニ恐入一候、乍レ去臣子之愚意言上、實に謹畏本懐奉レ存候、御禮之儀、天前宜御執成之程希上候也、恐惶謹言、

二月十六日　　御實名

中山殿

正親町三條殿

一、昨日於ニ官代一尾紀へ御談之上、各重役被ニ指出一候事に相成候上は、御家よりも御指出可ニ相成一處、當時本多修理出府中に付、此表之御運ひ、修理迄被ニ仰遣一、於ニ彼地一各家申談、致ニ周旋一可レ然との思召に而、右御使林矢五郎へ被レ命候而、今晩直樣出立に付、上樣へ之御呈書も持參被ニ仰付一、且又途中に而修理之歸京に出逢候はゝ、東北へ引返し候樣、御沙汰之趣も申ニ含之一、御呈書如レ左、

謹而奉ニ言上一候、去る五日家來之者被ニ召出一、御渡相成候御奏聞狀、十三日朝上着、即夕直に太政官へ罷出、總裁府へ執奏仕、且御別紙之趣も、具に三條大納言、岩倉右兵衛督迄申入候、此段奉ニ言上一候、尙委細之義は、家老本多修理より、奉ニ言上一筈に御座候也、誠恐誠惶頓首々々謹言、

二月十六日（第十二時）　　御實名

一、此日於ニ太政官一紀州安藤飛驒守、久能丹波守拜謁、關東御謝罪一條に付、東都へ御人被ニ指出一義、紀國より家老之內早々爲ニ呼上一、示談之上東下之積之由、御趣意之儀は、如雲書取之通に而、別意無レ之候得共、田一兩公之御動作如何可レ有レ之哉、甚無ニ覺束一に付、自然御談調兼候節は、溜詰之內に而も可レ然候半歟之見込之趣申上たり、晩方に相成、伊達五郎出頭、雪江對接之處、今朝申上たる次第、猶又及ニ熟評一處、安藤、水野、久能、何も於ニ江戶表一少々故障有レ之に付、昨冬迄在府いたし、事情も解居候へは、山高石見守指出候事に再決之由、爲ニ申譯一參上之趣申ニ陳之一、

一、昨十五日泉州堺表に而、土州兵隊佛人砲殺之趣飛報有レ之段、土州知邸より屆書指出、事情不ニ詳細一候へ共、土州重役調旁、早々堺表出張候樣被レ命由也、

○十七日、今日外國御交際之儀に付被ニ仰出一如レ左、

先般外國御交際之儀、叡慮之旨被ニ仰出一候に付而は、萬國普通之次第を以、各國公使等御取扱被レ爲レ在候、然る處此度御親征被ニ仰出一、不日御出輦被レ爲レ遊候に付而は、御除日も無レ之御事に付、各國の公使急々參朝被ニ仰付一候に付、此段可ニ相達一被ニ仰出一候事、

二月

右に付、太政官代三職之御方々より御布告如レ左、

外國御應接之儀は、上代崇神仲哀御兩朝之頃より、年を逐而盛に成來り、遠邇之各國歸化貢獻有レ之、其後唐國とは、常に使節相往來、或は居留し、其交一際も亦自ら親しく候、此時に當り船艦之利未開けす、故に三韓四近と唐國而已、西洋各國の事は暫く差置、印度地方尙明確ならす候、然るに近代に至りては、萬民所レ知の如く、船艦の利航海の術其妙を窮、萬里の波濤比隣の如く相往來し、一時幕府の失錯とは乍レ申、皇國の政府に於て誓約有レ之候事は、時の得失に因て、其條目は可レ被レ改候得共、其大體に至り候ては、妄に不レ可レ動事、萬國普通の公法にして、今更於ニ朝廷一是を變革せらる時は、却而信義を海外各國に失せられ、實以不ニ容易一大事に付、不レ被レ爲レ得レ止、於ニ幕府一相定置候條約を以、御和親御取結に相成候、既に先般御布令被レ爲レ在候上は、皇國固有之御國體と、萬國の公法とを御斟酌、御採用に相成候は、是又不レ被レ爲レ得レ止御事に候、依て越前宰相始建白の旨趣に基き、廣く百官諸侯之公議に依り、古今の得失と、萬國交際之宜を折衷せられ、今般外國公使入京參朝被ニ仰付一候、元來膺懲之擧は、萬古不朽の公道にして、假令和親を講する共、其曲直によつて、各國不レ得レ止之師相起候其例し不レ少、付ては攻守の覺悟勿論の事に候得共、和親之事は、先朝既に開港被ニ差許一候に付、皇國と各國との和親、爰に相始り居候處、其節は幕府へ御委任の儀に付、諸事交際之儀、於ニ幕府一取扱來候、然る處、此度王政一新、萬機從ニ朝廷一被ニ仰出一候に付ては、各國交際之義、直に於ニ朝廷一御取扱に可ニ相成一には元よりの御事に候、今也御初政之御時、總ての事件は全く總裁始當職の責に有レ之候、何分某等不肖の身を以大任を負荷し、非常多難の時に逢候上は、深く恐懼思慮を加へ、天下の公論を以て及ニ奏聞一、今般の事件御決定被レ爲レ在候、且國內未レ定、

海外萬國交際之大事有レ之候得は、普天率濱協心戮力、共に王事に勤勞し、萬國交際を始め、萬機悉く既往將來を不レ論、無二忌憚一詳論極諫有レ之度、只急務とする處は、時勢に應し活眼を開、從前の弊習を脫し、聖德を萬國に光耀し、天下を富嶽の安に置、列聖在天の神靈を可レ奉レ慰、上下擧而此御旨趣を可レ奉二謹承一候事、

太政官代

二月十七日　三　職

一、今曉亞剌後、在坂小松帶刀より飛札を以、土州兵隊佛人を殺傷之事件、佛公使忿怒甚敷、嚴重に懸合に相成候樣申來り、公卿方も御參朝御引上け御出仕に而、官代以之外騷動せり、且帶刀より在地內外事務多端手廻り不レ申に付、內國參與之內より二兩人、早々下坂之義申來に付、雪江幷木戶準一郎へ下坂被レ命、佛公使華港引拂之儀は、以二勅使一御抑留可レ有レ之との御決評に而、勅書裁制有レ之、其趣飛報を以坂地へ發する等、混雜を極めたり、大久保二藏は今朝より下坂、雪江は暮時下坂せり、此件々遂に勅使等御發遣應接之上、廿三日に至り、佛人を殺したる數に應し、土州人十一人を外國人の目前に而令二割腹一、事落着に及ふと雖とも、朝廷之か爲に數日之紛擾を生したり、

○十八日、今朝五時頃、萬里小路中納言殿御來邸に而、御對面之上、岩倉殿より外國一條に付、公御下坂可レ被レ下哉之旨、御相談有レ之、

一、去る十二日、江城二の丸へ御留守居御呼出に而、御目付妻木多宮殿より御渡に相成御直書、御徒田村鐘太郎持參、即日出立、此日夜に入到着し指出す、御直書如レ左、

此度御追討使御差向可レ被レ爲レ在哉之趣、遙に拜二承知一、誠に以慙入、奉二恐入一候次第に御座候、右は全臣慶喜一身之不束より生候義に而、天怒に觸候段、一言之可二申上一樣無二御座一次第に付、此上何樣之御沙汰御座候共、聊無二遺憾一奉レ畏候所在に而、東叡山へ謹愼罷在、其段下々迄へも厚申諭し、假令官軍御差向御座候共、不敬之義等毫末も不レ爲レ仕心得に御座候得共、弊國之義は、四方之士民輻湊之土地にも御座候へは、多人數中には、萬一心得違之者無レ之とも難レ申、右邊より悲願之意を不二相辨一、不慮之儀等有レ之節は、猶更奉二恐入一候而已ならす、億萬之生靈、塗炭之苦を蒙候樣に而は、實以不レ忍次第、何卒官軍御指向之義は、暫時御猶豫被二成下一、臣慶喜之一身を被レ罰、無罪之生民塗炭を免れ候樣仕度、臣慶喜今日之懇願此事に御座候、右之趣厚御諒察被二成下一、前文之次第、御聞屆被レ爲レ在候樣、奉二歎願一候、此段御奏聞被二成下一候樣奉レ頼候、以上、

二月　慶喜

御謝罪狀御添翰如レ左、

本紙奉二申上一候京攝事件御節、詰合居候松平肥後、幷要路之役々、同樣奉二恐入一候に付、御處置奉レ伺候心得に而、爲二愼置一候間、夫々御沙汰被二成下一候樣奉レ願候、已上、

二月　德川慶喜

御家臣衆謝罪狀如レ左、

德川慶喜家來共、昧死恐惶奉レ哀二訴閾下一候、主人事、兼々奉レ蒙二非常之朝恩一、奉二感戴一候に付は、別而皇國之御爲、日夜心力を盡し、既に祖宗傳來之政權奉レ歸、引續將軍職を辭退仕、彌以勉勵仕罷在候處、先般京攝之事件、遂に奉レ惱二宸襟一、次第に立至り、於二主人一深奉二恐入一、東下以來只管恭順謹愼、御沙汰奉レ窺候心得に而、上野寺中に退蟄罷在、其節詰合候要路之者共は、爲二愼置一、御所置奉レ待候事に御座候、抑京攝之事件、主人に於ては深奉二恐入一居候得共、右は全鎭撫方不行屆より相生候義に而、其胸中を推察仕候へは、臣子之分、實以悲泣之至、片時も不レ安次第に御座候、主人事、元來皇國之御爲、一點之私をも不レ挾、忠誠之外二念無レ之段は、厚御諒察被二成下一、且祖先之勳勞を被レ爲二思召出一、格外寬大之御沙汰、幾重にも奉二歎願一候、

德川慶喜

家來中

二月

一、同時尾張老侯へ之御封物も、御一所に御渡之由にて而指出候に付、即日左之通◎三字衍カ御直書を以、尾張當侯元千代君へ左之通被レ仰二進之一、

一筆致二啓上一候、春寒難レ去候處、先以愈御安泰、珍重奉レ存候、陳者二月十二日、二丸へ留守居御呼出、罷出候處、御目付妻木多宮を以、尾張大納言樣、幷私へ之御封物、一つゝ御渡有レ之、大納言樣へ之御封物、其御家來へ御渡可二相成一由候處、貴國御混雜之御譯も御承知被レ爲レ在、私家來へ御渡に而、私よ

り大納言様へ、御届申上候様にとの御事に御座候、仍之貴君迄御封物差出候間、至急之儀御座候故、貴君御開封被レ成、尚如雲等被二仰談一、朝廷へ御差出之方と奉レ考候、江戸表に而は、大納言様御在京之思召と奉レ存候、尚御勘考、宜御取計可レ被二成下一奉レ希候也、恐惶謹言、

二月十八日　　御實名

尾張公

一、同時大久保一翁老より呈書如レ左、

益御勇健奉二敬賀一候、陳は御裁順之處、幾重にも御請合申上候、只々若手勇士云々、御城宅早朝深夜、激論御請太刀、眞に勞切候得共、上之確然御居故、夫而已御賴母敷相勤居候、昨夜會計總裁御免相成、若年寄事務取扱被二仰付一、愈以赤面慚愧之至候得共、此御時節、強而御斷申上候も却而恐入、敷論家說解等に出居候、殿中に而認、早々頓首、

二月九日

二白、別紙之通、官位被レ爲二召放一と申沙汰之者、皆御免相成候、此中には惜可レ惜人も兩三人は有レ之候、會桑も尚御安心之方に、追々御手順可二相成一御樣子に候、右等に而も、

御恭順之御趣意は、御察可レ被レ下候、再拜、不レ得二寸暇一、認掛け數度放筆、三拜、

大藏大輔樣　　一翁覧

御役御免、如二前々一應之問詰被二仰付一、差扣可二罷在一候、御役御免、柳之間席被二仰付一、差扣可二罷在一候、

御役御免被レ成候、

御役御免、差扣被レ仰付之、

松平豐前守
竹中丹後守
塚原但馬守
永井玄蕃頭
平山圖書頭

御役御免被レ成候、

御側
室賀甲斐守

大目付
思召有レ之、御役御免被レ成候、
瀧川播磨守

陸軍奉行兼
大久保主膳正

大目付
戶川伊豆守

御勘定奉行
松平河内守

奥詰銃隊頭
大久保能登守

御勘定奉行並
星野豐後守

歩兵奉行兼
牧野土佐守

御目付
設樂備中守
同
新見河内守
同
榎本對馬守

歸府之上申渡筈

一、同時江戸表より相廻る書附之內、

二月十一日慥出仕被二仰出一、

上意之寫、

此度御追討使御差向可レ被レ遊段、被二仰出一候哉之趣、遙に奉二承知一、誠に以慈入奉二恐入一候、右は全予か一身之不束より生候事に而、天怒に觸候段、一言之申上樣無レ之儀に而、何樣之御沙汰有レ之候とも、無二遺憾一奉命致候心得に而、別紙之通、奏聞狀差出候、依レ之東叡山へ退き、謹愼罷在、罪を一身に引受、只管朝廷へ御詫申上、億萬之生靈、塗炭之苦を免候樣致度と、至願此事に候、就而は何れも予か意を體認し、心得違無レ之、恭順之道取失はさる樣可レ被レ致候、御別紙御奏聞狀略レ之、

御譜代衆萬石已上へ御達、

東叡山へ御謹愼中、西城之儀は田安殿、松平確堂へ御賴被レ成旨、被二仰出一候間、是迄之通、相勤候樣、可レ被レ致候事、

同萬石已下、

此度上意之趣、御恭順とは乍レ申、御不束之御罪を、御一身に被レ爲二引受一、御謹愼可レ被レ爲レ在段、臣子之分に而は、實以奉二恐入一候御儀に付、御趣意柄厚相辨、心得違無レ之樣、可レ被レ致候事、

松平確堂ゟ

東叡山へ御謹愼中、西城之儀は、田安殿御自分へ御賴被レ成候間、御政治向諸事取扱候樣、可レ被レ致候、

一、同時會藩小野權之丞、於二江戸表一草尾一馬迄持參、雪江迄相廻歎願書如レ左、

歎願書、

謹而言上仕候、老寡君容保儀、去戊年守護職被レ命候處、弊邑之儀は、東奥之藩鎭、且帝都を離るゝ事二百餘里、應援達響之道も無二覺束一、力を計り分を計て、其任に勝さらん事を恐れ、辭退申候得共、其節之御事體御艱難、皇國之安危に拘り候御場合故、強而可二相勤一旨被レ命候に付、數百年已來之隆恩奉レ報度、國藩決議、京都を以墳墓之地に心得罷上り、大樹尊王之趣意致二遵奉一、周旋奉職、然る處、不レ圖も先帝無限之寵眷、御賞譽之宸翰を下し賜り、其外度々御宸筆被二下置一、恩賜之品々も幾度となく拜戴仕候、元來容保儀、誠實一片に勵精致、毛髮も私意無二御座一に付、先朝已來格別之御依賴を蒙り、大病之折は、無二勿體一も至尊之御身を以、於二內侍所一御祈禱被二遊下一、君臣水魚之情態、宸翰之表にも御顯はし被レ下、當朝に至候而も、先帝以來叡慮遵奉、守護職相勵候譯を以、叡感思召被レ下、參議推任、前後天恩之難レ有、主從感戴、泣謝罷在候、隨而大樹よりも度々之褒賞有レ之、彼是重々之隆恩、闔國千胆に銘し、冥加至極、難レ有奉レ存候、前件之通、兩朝歷然たる厚眷、容保之誠實、前後相替候儀分寸も無レ之候、伏見戰爭之儀は、德川內府上洛先供、一同登京之途中發砲被レ致、武門之習、不レ得レ止應兵、及二一戰一候儀に而、敢而闕下を犯候義、毛頭無レ之候は、萬人所二共知一に御座候、然るに今日におゐて、不レ料も不レ慮之汚名を蒙候段、臣子之至情、日夜慟哭、不レ雪二君冤一、死すとも不レ止と、闔國決心仕居、頑固之習風、何共諭撫之道無レ之、於二私共一は、至々極々苦心仕候間、此上は寸時も早く雲霧快晴、二藩之人民安堵仕候樣、幾重にも奉二懇願一候、別紙宸翰之義は、先帝御深意被レ爲レ入、被二下置一候儀故、深嚴底に藏置候得共、國事危急之今日に差迫候に付、御內內奉レ入二御覽一候間、此段御垂憐被二成下一、乍レ恐御奏聞之儀、伏而奉二歎願一候、恐惶敬白、

松平若狹守家老
田中土佐
神保內藏助
梶原平馬
辰二月
上田與大輔
內藤助右衛門
諏訪伊助

孝明天皇より肥後守へ賜る宸翰寫、

堂上以下、疎暴論、不正之所置增長に付、痛心難堪、內命之處、速に領掌、憂患掃攘、朕存意貫徹之段、全其方忠誠、深感悅之餘、右壹箱遣候者也、

文久三年十月九日

右御壹箱御詠之寫、

たやすからさる世に武士の忠誠のこゝろを
よろこひてよめる

和らくもたけき心も相生の
まつの落葉のあらす榮へむ

武士とこゝろあはしていはほをも
つらぬきてまし世々のおもひて

一、同時有馬帶刀より、雪江へ之來書如レ左、

前略、然は、今日は林生着京、當地之景況、縷々御承知御座候義と奉レ存候、前橋侯も十日御發駕相成申候、過日尊公御細書に而、尙更一翁君にも、厚配有レ之候樣に伺申候、昨十一日惣出仕に而、御布告相成、乍レ恐今早天東叡山へ被レ爲レ成、愈嚴重之御恭順、御謹愼之趣に伺申候、則御奏聞書も、別段御改に相成申候、定而尊邸より御指出と奉レ存候、此兩三日御延引に而、草尾氏にも殊之外御配慮有レ之事と奉レ存候、就而は寡君も十五日發足、愚生も從レ爾無レ程上京、又々萬々御厄介に可二相成一、餘は拜晤に讓り、及二閒筆一候、頓首拜上、

二月十二日　帶刀

雪江樣

一、此頃一應之御謝罪狀、御指出に相成候得共、旣と御實効相立候と申御廉も不二相顯一に付、御奏達之上、精々御盡力被レ爲レ在候得共、御徹底之處、如何可レ被レ爲レ在と、深く御勞神被レ遊候御折柄、右再度之御奏聞狀、其外之御次第共に而、御閉塞之御實蹟も顯然に付、夫に御力を被レ爲レ得、何分明日御奏聞可レ被レ遊候へ共、其已前一應、御內見御賴被二仰入一置度と、毛受鹿之介、靑山小三郎同道に而、三條殿、岩倉殿へ、御使被レ指二出之一、岩倉殿に而は、卿之御心付に而、中山、正三、德大寺之諸卿へも、被二仰入一置可レ然段、御示諭有レ之由、

○十九日、今早朝中山、正三兩殿へは鹿之介、德大寺殿へは小三郎被二指出一、御內見、且御依賴之儀被二仰入一、

一、今朝酒井與三左衛門方より、御謝罪狀御奏聞之儀、別紙諸家へ、以二手紙一及二通達一、御奏聞狀も寫相廻候、左之通、

去る十二日江戸出立之家來、昨十八日上着、別紙之奏聞狀、宰相より被二執奏一候樣申來に付、今朝參朝、奏達に及候筈御座候、右に就而は、尙從二是御相談申上候儀も可レ有レ之、何分其御許樣におゐても、御盡力之儀御依賴被レ成度、先此段早々得二御意一候樣、被二申付一候に付、如レ是御座候、以上、

二月十九日

尾州　紀州　作州

田宮如雲　久能丹波守

前橋　雲州　肥後

竹田市郎兵衛　朝日仙助　溝口孤雲

土州　彥根　津

深尾鼎　新野眞拙　藤堂歸雲

藝州　若州

辻將曹　國五郎兵衛

一、今日四時御供揃、御衣冠にて御參內、中山殿へ御逢、御奏聞狀幷御添狀共（私云、御家臣御卽狀は御指出之處、御落手之趣に付、猶又別段御逢に而、御實効も相立候上は、只管御寬典之御歎達、且內國御職掌之上よりも、一日も早く御進軍御指留、天下萬民之疾苦を被レ救、諸侯之勞費も御減殺有レ之樣被二仰立一、且又御親征之儀も、御止りに被レ爲レ成候樣之御趣意も御含蓄に而、縷々被二仰立一候處、一段之御嘉納、御領口有レ之、早々御伺にも可二相成一御模樣之由、夫より如レ例官代へ御出勤、御同處に而、御卽席御認に而御建白有レ之、如レ左、

臣慶永謹而奉二言上一候、今般慶喜伏罪之上、東叡山へ閉居謹愼罷在、會桑始、夫々所置申付、奉レ仰二勅裁一候謝罪狀は、既に今朝慶永參內、中山前大納言へ奏達仕候事に御座候、抑於二慶喜一は、實に謹愼之實効著然いたし、此上は於二朝廷一速に征東之進軍被レ爲レ止、行幸も被レ爲レ止候而、以二天下公議一、慶喜へ之御所置、幷會桑始之被二仰付一、至當不レ可レ動之朝裁、早早被レ爲レ在度奉レ存候、慶喜伏罪謹愼、夫々所置仕候而も、矢張御進軍、行幸等も依然御施行被レ爲レ在候而は、天下之人心生二疑懼一候、於二朝廷一被レ爲レ好レ事候樣に相當り、且爲二朝廷一國々費弊を極め、恐

蹉之聲滿二行路一、遂には乍レ恐奉レ恐二朝廷一候樣之形勢に立至可レ申は、必然と奉レ存候、慶喜伏罪謹愼無レ之候得は、天下國弊候とも、決而朝廷之御無理と一も不レ奉レ存、各藩進軍、實に干城勤王之誠赤可レ顯候、利害を以言上仕候へは、慶喜如レ此閉蟄謹愼罷在候に、尙御進軍被レ爲レ在候へは、慶喜家來過激之者、萬一悉怒に堪兼候所より、幾千人一心と相成、前日よりは必死之兵に相成可レ申、乍レ恐官軍に而は、諸藩入交りの之兵隊に而、百人百心、千人千心之景況、此者共慶喜伏罪謹愼承知仕候得は、猶以銳氣滅却可レ仕、勝敗之上に至り候而も、乍レ恐如何可レ有レ之○哉、其上客戰主戰之勢も有レ之□◎（カ）は必然と奉レ存候、王師實に萬一勝利なき時は、天下是限りと奉二憂慮一候、何分早々被レ爲レ止二御進軍一、公平之御所置に出候へは、皇德天下に輝き、朝威率濱に光被し、億萬之生靈不二啻免一塗炭一、諸侯も亦感二戴聖恩一、治安、再太平之天日を觀可レ申と奉二謹畏一候、外國人も顏皇政一新之公法を以、被レ爲二口裁一儀候は丶、海外之賞譽勿論と奉レ存候、臣慶永忘二狂瞽僭越二干冒尊嚴一、以レ身奉二言上一候、臣當二死罪一、謹而待二斧鉞一、萬一御採用被二成下一候得は、天下幸甚之至奉レ存候、臣慶永誠恐誠惶頓首々々再拜謹上、

二月十九日　臣御實名

右等之御誠心貫徹せしにや、無レ程明日諸卿愨參內之儀を被二仰出一しかは、定而此件之朝議にも可レ有レ之と、公之御威激は不レ及レ申、御家臣共におゐても、一同蘇息之思ひをなせり、

一、此日於二太政官代一、總裁宮より左之通御直達有レ之、

越前宰相

議定職内國事務局輔被二仰出一候事、

慶應四辰年二月　　總裁　囘

一、行幸奉行坊城殿より御達左之通、

爲二御親征一大坂行幸供奉先陣被二仰出一候事、

日時幷御道筋等、追而可二申入一候事、

二月　　行幸奉行徇政

越前宰相殿

○二十日、今朝江戸表へ之御呈書被二指立一、左之通、

謹而奉二言上一候、去る十二日家來之者、西御丸へ御呼出に而、妻木多宮より御渡相成候御封物、以二急飛一差越、去る十八日晩到着、右は◎衍カ東叡山へ御謹愼被レ爲レ成候御謝罪狀、昨十九日要永參朝、議定中山大納言迄奏達仕候處、落手之旨申聞候、依レ之此段謹而奉二言上一候、誠惶誠恐頓首々々百拜謹言、

二月廿日　　御實名

一、同時大久保一翁老へ被レ遣御内書如レ左、

二月九日御認之御懇書、一昨十八日到着、奉寒去衆候處、先以德川公益御機嫌能、別而方今無二御障一哉と、日々御案し申上候、隨而老丈愈御清安、爲二皇國一御盡力御勤仕、珍重奉レ存候、抑今般之御謝罪に而は、實に御恭順御實効著然致難レ有、愚不肖之小生、大に盡力も出來、欣然之至奉レ存候、昨日朝衣冠着參内仕、御奏聞狀、議定中山前大納言へ差出申候處、落手に付、猶能々賴置候、御内々之儀には候得共、主上にも殊之外御心配に而、今般之儀は、實に被レ爲レ對二德川家一、御氣之毒に被二思召一御樣子、ひそかに相伺ひ申候、乍レ去いまた御若年之儀、殊に朝廷役人も夫々有レ之、叡慮も中々まけつけられ候樣望梅に而、誠御苦心之御樣子に御座候、今朝は岩倉殿初被レ爲レ召候而、朝議被二仰出一有レ之候に承知仕候、且昨日心付に而、小生以二當職一言上仕候へは宜かと存し、別紙之書面、草卒於二内國局一認、副總裁迄出置申候、御内々此書面、德川公へも被レ入二御覽一候へは、幸甚之仕合御座候、扨又何分口囘儀は、心配可レ仕候間、御降口希候、小生十五日參内仕候處、被レ爲レ召◎候脫カに付常御殿へ罷出、少々御風氣被レ爲レ在候故、御床之儘に而御對面、外國事情十分、御直に奏聞仕候處、外國人上京參内、於二紫宸殿外國人へ御對面被二仰出一候、尤此節士人暴擧により、

彼人之怨怒有レ之、申立候義、一大困難、此義片付候は、、上京參内之手筈に可二相成一候、小生過日より風邪罷在候へ共、押而參二官代一、熱氣も有レ之、甚以迷惑仕候、一寸事情拜答迄如レ此候也、亂筆仰二御海恕一候也、

二月廿日　　御實名

大久保一翁殿

御々小生上書は、德川公限りと御心得可レ被レ下候、被二仰越一候儀は、一々致二承知一候也、

一、此日御親征に付、被二仰出一左之通、

今度御親征之儀は、先達而被二仰出一候通、萬民塗炭之苦を被レ爲レ救度、以二叡斷一御決定有レ之候上、王政復古之爲二最第一之儀一候間、萬端慈憐之御趣意貫徹候は而は、忽悖二人望一、自ら兵威緩怠にも至候間、不法亂行は勿論、聊之難レ爲二失錯一、堅被レ立二法令一候、右等之御趣意、篤と相辨、至二小民一迄厚被レ加二敎諭一、心得違無レ之樣肝要に候、實に今度之義は、重大之事に候間、公武之差別更無レ之候得共、殊更王公以下、諸有司之家僕共、嚴重謹愼無レ之候は而は不二相成一候、自然違背之張於レ有レ之は、以二制

今二可レ被レ及二御沙汰一旨に候、此段爲二御心得一申入置候事、

二月

○廿一日、今日依レ召御參内被レ遊候處、於二虎之間一、中山、德大寺御兩卿へ御對面に而、左之通勅答御渡有レ之、

慶喜謝罪之狀、東征大總督を被レ置候上は、右手を經して言上候儀は、難レ被二聞召一筋に付、宜く其順序を以、執奏有レ之候は、、思召之旨可レ被二仰出一候事、

右勅答之御趣意、已に御奏聞後、追々御内々御承知被レ遊候御模樣とは、御案外之儀に而、御當惑至極思召候得共、此期に相成候而は、何共被レ成方も無レ之に付、先つ急飛脚御徒田村鐵太郎を以、田安中納言樣迄、如レ左被レ仰二遣之一、

以二急飛一啓上仕候、春暖相催候處、先以德川公御謹愼中、何等之御障動も不レ被レ爲レ在候哉、不レ堪二案勞一奉レ存候、隨而貴卿愈御清安、珍重奉レ存候、抑口召により、今廿一日午後慶永參朝之處、中山前大納言、德大寺中納言兩卿御對面に而、別紙之通り之勅